

慮する。こゝは(一)。

【華奢】 キャシャ (一)よわ／＼しく姿のよいこと。様子のよいこと。かほそくしなやかなこと。(二)器物のよわ／＼しくがんじょうでないこと。(三)風流。みやび。こゝは(一)。

【眞珠】 シンジュ 貝類に生ずる一種の結成物で、主に炭酸石灰から成り、これに有機物を交へた層狀の球體。貝殻と外套膜の間に砂粒・泥粒等の雜物が入つた場合、外套膜から一種の液(眞珠液)が分泌され、雜物の周圍を貝殻内面と同一の層(眞珠層)を以て圓く取巻くことによつて生ずる。色彩・光澤はこれを採取し得る貝(母貝)の貝殻内面の眞珠層と殆ど同一で、銀白色のものを最上とし、桃色・紫色・紅色・緑色等種々。

母貝としては、一枚貝(斧足類)に「あこやがひ」「くろてふがひ」「まべ」「いがひ」「からすがひ」「どぶがひ」「かはしんじゅがひ」「しろてふがひ」及びその近似種が知られ、巻貝(腹足類)には「あはび」「たうかむり」等が知られるが、その中「あこやがひ」一名「しんじゅがひ」(眞珠貝、巻貝、あ)が最も著名な眞珠の母貝で、現在ではこれ等を用ゐて人工的に眞珠を養殖することが行はれ、各種の裝飾に用ゐて貴重される。その他、貝殻を多くあるが、いづれも眞珠を養殖にはなれないものが多い。

稲粟は餅・菓子・焼酎・アルコール原料などに用ゐられる。栽培起原は明らかでないが、支那・東印度諸島及び我が國では上古すでに常食とされた。現在の主産地は支那・印度・日本等。

「おほあは」は、稈莖の高さ一米乃至一・二米位で、「たうもろこし」に似た狭小な葉を互生し、九月頃莖頂に多数の小緑花の密集した大なる圓筒形の穂を傾出する。果粒は小粒狀で黄色。

「こあは」は、高さ〇・六米乃至一米。葉は細長くて先端殊に尖鋭。八月頃圓柱狀の穂を直出する。果粒は平滑で黄色。

【餌壺】 エツボ 鳥の餌を入れる器。

【無暗】 ムヤミ 前後を考へないこと。理非を分別しないこと。むちや。

【あてがつて】

「あてがふ」 (一)わりあてて物を與へる。わたす。分與する。(二)他の要求に拘らず、己の考に隨つて與へる。(三)物を孔又は隙間等にあてはめておく。(四)一時の間にあはせに缺けた部分を補ふ。(五)物と物とがあふやうにあてはめる。あはせる。こゝは(三)。

【手の甲】 テのカフ 手の表。

【處置に窮した】 始末に困つた。やりばに困つた。

【手頃】 テゴロ 己の手又は力の程に適ふこと。

【目先が動いた】 目の前で物が動いた、の意。

【目先】 メサキ (一)目の前。眼前。(二)即座の事を取計らふ氣轉。めはし。

【持ち直して】 モチナホして

「持ち直す」 (一)持ちかへる。持ちあらためる。(二)再び以前のやうな状態とする。(三)回復する。こゝは(二)。

【心もち】 こゝは、ほんの少し、やゝ、の意。

【伸した】 のばした、のばして張つた、の意。

【ちらり】 (一)影・光などの瞬間にわづかに目に觸れるさま。ちらと。ちよつと。(二)噂のわづかに耳に入るさま。こゝは(一)。

【工合】 ゲアヒ 「具合」とも書く。(一)ありさま。かつかう。やうす。調子。(二)適合すること。あんばい。かげん。(三)健康状態。あんばい。かげん。こゝは(二)。

【粟】 アハ 禾本科、えのころぐさ屬の一年生草本。米・麥に次いで有用な穀類。「おほあは(大粟)」と「こあは(小粟)」との兩種があり、我が國で普通に栽培せられるのは大粟で、狭義にはこれを粟といふ。但し「粟」の字は本、粟小粟をさすといふ。又、兩種共に「稗粟」と「糯粟」とに分かれたれ、普通に食料若しくは小鳥や家畜の飼料に用ゐられるのは稗粟で、

【隙】 スキ こゝは、油斷、乗すべき機會、の意。

【羽搏き】 ハバタき 「羽撃」とも書く。鳥が翼をひろげてうつつことはたき。はぶき。はぶり。

【むく毛】 毳 柔らかで薄く短く生えた毛。にこげ。いもげ。

【茶の間】 チャのま (一)茶室。茶の會に用ゐる室。(二)家族が日常團樂し、又食事等に用ゐる室。こゝは(二)。

【伽藍】 ガラン 梵語「僧伽藍摩」(Sangharama)の略。衆僧の集合する園林の義であるが、後にはその建築をも含めていふに至つた。寺院。

【びたり】 こゝは、にはかに止るさま。

【硝子越しに】 ガラスゴしに 硝子戸を隔てて。硝子戸を通して。

【一應】 イチオウ ひととほり。大略。

【筆と紙が一緒にならない】 筆が下せない、想が文になつて來ない、の意。

【摺いて】 オいて

「摺(カク)は、さしおく。手に持つた物を下に置く。

【のめりさう】 前へ倒れさう。

【しやがんだ】 蹲んだ うづくまつた。かよんだ。

【ぼいと】 (一)急に立去るさまなどにいふ。ぶいと。(二)物を投げ

るさまなどにいふ。こゝは(一)。

【淡雪の精】 アハユキのセイ 淡雪の淡雪たる所が具體的な形となつて現れたもの。

【淡雪】 春などの消えやすい雪。うすい雪。やはらかい雪。

【精】 靈。精靈。精魂。すべて、ものたましひをさす語で、

森羅萬象は、その中に籠る靈力の顯れであると思ふ。原始的な思想に基づくものであるが、普通には、その靈が種々の姿に權化・化身して現れたものをさす場合が多く、随つてその姿は殆ど常にその物の性質を具象化してゐる。

【つと】 (一)動かす移らないさま。ちつと。づつと。そのまゝ。

(二)急に身を動かすさま。つつと。こゝは(二)。

【ならして】

【ならず】 均す (一)たひらかにする。高低・凹凸のないやうにする。(二)大小・多少を合してその中を取る。平均する。こ

こは(一)。

【咽喉】 ノド(風)

【細やか】 コマやか(風) ほそいさま。ほつそりしたさま。たをやかなさま。

【葦】 スミレ 「葦々菜」「紫花地丁」などとも書き、「相撲取草」

「二葉草」などともいふ。葦々菜科に屬する多年生草本の總稱。

我が國には、すみれ屬のものを産するのみであるが、種数は百數十を算へる。多くは一五種にみえない可憐な野草で、長橢圓形(或は卵形・心形)の葉を多く根際から叢生し、春夏の交、數梗又は一梗を抽いて紫色又は白色(高山性のものは白色)の優美な小花をつける。

【黄金の穂】 コガネのツチ

【槌】 物を叩くに用ゐる工具。頭は圓柱形で、その中央へ丁字形に柄をすげたもの。木製のものを木槌、鐵製のものを鐵槌といふ。

【瑪瑙】 メナウ 「馬瑙」「碼瑙」とも書く。潛晶質(各異品類が硬度)石英の變種である玉髓の一種で、特に種々の色彩を呈する美麗な縞模様或は雲形模様を示すもの。岩石の空所に時々珪酸溶液が來つて種々の不純物と共に珪酸を沈澱せしめて生じた二次性礦物で、樹脂光澤と玻璃光澤との中間の光澤を有し、地中から出たまゝのものは灰色であるが熱すれば赤色となり、且人爲的に任意の著色が出来ゝ。種々の裝飾品・細工物・彫刻などの材に供せられ、又硬度が高いので(六・五)硬質器具の材料となる。縞瑪瑙・蘆瑪瑙・條瑪瑙・城址瑪瑙・珊瑚瑪瑙・斑瑪瑙など種類が多い。佛教では七寶の一とせられる。

【碁石】 ゴイシ 圍碁に用ゐる黒と白の石。碁盤が地に象どつて四角く平面に作つてあるのに對し、天の圓いのに象どつて扁圓形に作られ、黒碁石は陰に、白碁石は陽に象どつてゐる。

白碁石には蛤の貝殻を用ゐ、日向産のものが第一とせられ、黒碁石には那智黒と稱する粘板岩を用ゐ、御濱(三)産のものが最も珍重せられる。

【洗れて】 こゝは、次第に淡くなつて、の意。

【象牙】 ザウゲ 象の上顎門齒。鼻の兩側に斜上方に向かつて突出し恰も牙(犬齒)に似てゐるのでこの名がある。斑理質なく、全部齒質即ち象牙質から成り、その質堅く、白色で内に文理があり、美麗である。細工物に用ゐて珍重する。

【半透明】 ハントウメイ 透明の程度の少いもの。透明と不透明との中間に位するもので、物體の色や明暗は透視出来るが、物の輪郭は判然と透視出来ない。

【寂然】 セキゼン しづかなさま。さびしいさま。寂々。

【直徑】 チョクケイ 圓又は球の中心を通つて、その圓周上又は球面上の二點を結ぶ有限直線。さしわたし。

【ことり】 固い物の觸れあたる聲。こゝは、極くわづかな物音の形容。

二 解釋

1 主題

文鳥の可憐さ、美しさ。

2 構想

(1) 朝起きて箱から出してやつた文鳥の眼と足。(初一六八ノ五)

(2) 顔を洗つた後で餌と水を入れてやつた時の文鳥の羽搏き。
(六八ノ六七〇ノ一)

(3) 執筆の合間に見た、粟をつゝく文鳥。(七〇ノ二一七二ノ二)

3 敘述

「目が覺めると硝子戸に日が差してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。」

—— 文鳥の籠が鈴木三重吉氏・小宮豊隆氏によつて運び込まれた翌朝のことである。いかにも無造作な、それでゐて眞を傳へる筆致の輕妙さが基調をなしてゐる。僅かな章句の間に、もつと寢てゐたい心と、文鳥を見なければならぬと思ふ心とのからみ合ひが、「忽ち」といふ一句を中心に、時の背景と共に、微妙に描かれてゐる。

「今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とう／＼八時過ぎ

になつた。仕方がないから顔を洗ふ序でを以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明るみへ出した。」——二つの氣持のからみ合ひが解けてゆく解け具合が「仕方がないから顔を洗ふ序でを以て」に示されてゐる。さういふことに馴れない人の儼劫さであると共に、何事にも向きにならない、都會人的な、教養のある人らしい餘裕が示されてゐる。何よりもさういふ作者の姿が浮かんで来る。

〔文鳥は眼をばちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた。〕——二つの氣持のからみ合ひが解けて、文鳥のことだけになりきつた、なり方が如實に描かれてゐる。「仕方がないから」といつた人が「氣の毒になつた」といふまでになつた轉化はいふまでもなく、「眼をばちつかせてゐる」文鳥の可憐さから來てゐる。一語一句照應の緊密さと發展の鮮さに驚かれる。

〔文鳥の眼は眞黒である。臉の周圍に細い淡紅色の絹糸を縫ひつけた様な筋が入つてゐる。眼をばちつかせる度に、絹糸が急に密つて一本になる。と思ふと又丸くなる。〕——前節の「文鳥は眼をばちつかせてゐる」の展開である。寫生の妙、觀照的確が眼を瞭らせる。

たり、生き動く畫として見てゐるかのやうである。再びちよと鳴き、作者の顔を見る動作で留めてゐる照應もいゝが、今度は「遠くから」といひ、「覗き込んだ」といふ變化にも用意が見える。

〔同時に左の手で明いた口をすく塞いだ。鳥は一寸振返つた。さうして、ちよと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。〕——小鳥に餌をやる時の心得を忘れずに、左手で出口を塞いだのであるが、この文鳥の可憐さは、この心得が間違つたことであるかのやうに感じさせたのである。「左手の處置に窮した」といふ言葉は、作者の感じてゐる文鳥がどんなに無心な美はしい存在であるかが、對照法で示されてゐると共に、そこに作者の道徳的美的深癖性が窺はれる。

〔自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や手を引込みました。〕——對比によつて益々文鳥のさよやかさ可憐さがはつきりして來る。

〔やがて一團の白い體が、ぼいと留り木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が、半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けても、すぐ引繰返りさうな餌壺は、釣鐘の様に靜かである。流石に文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精の様な氣がした。〕——「一團の白い體」といひ、「淡雪の精の様な」といつてゐる上に、作者

〔籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら、此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうしてちよと鳴いた。〕——その可憐な文鳥がその可憐さを作者に向けた瞬間がよく把握されてゐる。白い首を一寸傾けながら顔を見て、ちよと鳴いたのは、初對面の朝の挨拶にも適つてゐて微笑ましい。「此の黒い眼を」が、前の章句の描寫を承けてよく利いてゐることはいふまでもない。

〔其の一本を軽く踏まへた足を見ると、如何にも華奢に出來てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた様な爪がついて、手頃な留り木をうまく抱へ込んでゐる。〕——いよいよ文鳥の動く姿を描く前提として、留り木を踏まへた、軽く踏まへた足を寫生してゐるのであるが、それが一箇の生きた藝術品化されて來る。

〔すると、ひらりと目先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心もち前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた。ちよと鳴く。さうして、遠くから自分の顔を覗き込んだ。〕——文鳥の動きぶりの輕快さ、最後に留り木に留つたのを、「文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた」といふあ

の文鳥が髣髴せられる。更にそれが、「ぼいと……抜け出した」はよくその動作を生かしてゐる。「半分程……後へ出た」もよく見えてゐる。餌壺の重さを「釣鐘の様」といひ、文鳥の輕さを「淡雪の精の様な」といつてゐる對照的誇張法の適切さはいふまでもない。

〔文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した。〕——この「眞中に」といふ所が、何といふことなしに心を惹く。さすがに文鳥だとも言ひたい氣持だ。以下の粟の食べ方の寫生もつまい。譬喩も利いてゐて美しい。

〔嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅の様である。其の紅が次第に流れて、粟をつよく口さきの邊は白い。象牙を半透明にした白さである。〕——かういふ靜的な説明も前後の文に應じて生動してくる所がやはり巨匠の筆である。

〔それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。〕——餌壺の動揺しないことをかくまで念を入れていつてゐる所に、作者が如何に文鳥の輕快さに愛著の眼を向けてゐるかが示されてゐる。

三 批評

ありあまる心で一羽の文鳥に對してゐる。何か盛れ上り、充ち溢

れて来るものを感じさせられる。表現の俳句的な簡潔さと寫生的な的確さが新鮮な文致を成果してゐる。文鳥に深い愛着を寄せつゝ、

しかも文鳥をもその心をも冷靜な心で眺めてこの具體表現に達してゐる力量は感歎の外はない。

三 備考

一 指導の問題

讀みに於て、少し心を集中して讀み進めると、一語一句、皆新しい陰影をもつて生かされてゐることに感歎を禁じ得なくなる。しかも一語一句が互に結び合ひ、一章が他の一章へ展開してゆく緊密さには企及すべからざるものがある。さういふ點に心を潛めて讀み味ははせることが指導の根幹であらう。

解釋に於ては、敘述の問題としての寫生や譬喩のうまさを一々あげることに始つて、——恐らく全文どこもあげられてしまふのが當然の成行であらう。——更にその展開の全過程たる構構が統覺せられて來るかと思はれる。が構構は時間的・生動的發展で、しかも各段が靜止的觀察から活動的觀察へ、全體的直觀から部分的觀察へといふ方向を辿つてゐる。主題は一語一句の末々にまでよく浸透し、浸潤してゐるといつてよいであらう。

尙、本課は、文鳥を手に入れて翌日始めて餌をやる時のことであるから、解釋に際してはこの事を忘れてはなるまい。殊に籠の戸を

あけて左手で出口を塞いで、文鳥に對して氣の毒に思ひ、左手もてあます所は、教へられたまゝにやつた仕種であるだけに面はゆい感じを持たせられたのであつて、作者の人間の敏感さが働いてゐる。作者が受身で、餘所々々しい、いつもの態度から始つて、段々關心を深くし、全心を打込んでゆく過程も注意すべきであらう。

二 參考資料

原文の本課に先立つ部分を引用する。

十月早稲田に移る。伽藍の様な書齋に只一人、片附けた顔を頰杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥を御飼ひなさいと云ふ。飼つてもいゝと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て來る位だから綺麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと頼んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ様な事を繰り返してゐる。うむ買ふよ／＼と矢張り頰杖を突いた儘で、むにや／＼云つてゐるうちに三重吉は黙つて仕舞つ

た。大方頰杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。〔中略〕

何しろ言ひだしたものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云ふ。金は儘に出した。三重吉はどこで買ったか、七子の三つ折の紙入を懐中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五圓札を儘に此紙入の底に押し込んだのを目撃した。

斯様にして金は儘に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。〔中略〕

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片附けて見たり、取亂して見たり、頰杖を突いたり已めたりして暮してゐた。戸は二重に締め切つた。火鉢に炭ばかり繼いでゐる。文鳥は遂に忘れた。

所へ三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を露して、浮かぬ顔をわざとほてらして居たのが、急に陽氣になつた。三重吉は豊隆を従へてゐる。豊隆はいゝ迷惑である。二人が籠を一つ宛持つてゐる。其の上に三重吉が大きな箱を見き分に抱へてゐる。五圓札が文鳥と籠と箱になつたのは此の初冬の晩であつた。〔中略〕

二 夜叉王

岡本綺堂

一 解題

一 本文

「綺堂戯曲集」(全十)第一卷所収の「修禪寺物語」第一場の抄録である。(綺堂戯曲集第一卷 春陽堂發行)

「修禪寺物語」は明治四十二年三月に作られ、四十四年一月雑誌「文藝俱樂部」に發表された一幕三場の戯曲で、同年五月市川左團次を主役として明治座で初上演せられた。その後も屢々上演せられ、昭和三年同優のロシヤ行の際の演出目録にも加へられ、又、同年フランスの俳優によつてパリのオデオン座で上演せられた。作者の出世となつたのみでなく、又左團次の出世藝となり、歌舞伎劇に一新紀元を劃した。作の由來については、作者自ら篇初に「伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず、由來もしれず。木彫の假面にて、年を経たるさま面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懷してこの稿成る」と書いてゐる。「現代戯曲全集」「日本戯曲全集」等にも所収。

二 作者

岡本綺堂。本名は敬二。明治五年十月東京芝區車町高輪泉岳寺呼に、舊幕臣岡本純の長男として生まれた。少年時代から劇作家を志し、二十三年(十九)東京府立第一中學校卒業に先立つて東京日日新聞社に編輯見習として入社し、三十七年二月日露開戦に當つて同社の従軍記者として出征した。大正二年十二月やまと新聞社を退くまで多くの新聞の記者となり、その間主として劇評の筆を執つた。劇作家としては、明治三十五年處女作「金鯨尊高浪」(岡本純と合作)を發表したが、新劇勃興の機運の中に、若葉會文士劇に屬して史劇に筆を執つた。三十九年の「新羅三郎」、四十年の「阿新丸」、四十一年の「由井正雪」と次々に發表されたものは悉く識者の注目を惹き、四十四年明治座に於ける市川左團次一座の「修禪寺物語」が好評を受けてからは愈々名をあげ、左團次及び新興歌舞伎の爲に缺くことの出来ない存在となつた。大正二年記者をやめて専心劇作に従事し、

多い時は一年十二篇の戯曲を發表した。大正八年二月、帝國劇場の囑託を受けて大戦後の歐米劇界視察の途に上り、八月歸朝、直ちに「戦の後」を書いた。十年十月誕辰五十年に際しては劇作家協會より開拓者としての功をねぎらはれた。昭和以後は劇作の筆をとることも少くなつたが、斯界の重鎮として今日に及んでゐる。

初期には専ら史劇に筆を執つたが、それはことさら主題を説明し強調するの急だつた爲、時には會話の生硬露骨に過ぎたりするものもあつた。その後漸次喜劇及び世話物へ轉向すると同時に、従来の啓蒙的に過ぎた態度を捨て、徒らな主題の高唱を避け、作の底から流露する自らの詩情・持味をいつくしむやうになり、重厚に枯淡に各々の風格をもつに至つた。著作には、「修禪寺物語」「勿來の關」

二 教材としての研究

一 註解

【夜叉王】 ヤシャワウ 作者の作つた架空の人物。室町時代に夜叉といふ能面作師のあることなどから思ひついた名であらう。

【面作り師】 オモテツクリシ 假面を専門に製作する人。面打。面工。

【面】 メン・オモテ 「假面」に同じ。木・紙等を材料として、

一一 夜叉王

「貞任・宗任」「佐々木高綱」「鳥邊山心中」「尾上伊太八」「權三と助十」「番町皿屋敷」「幡隨院長兵衛」等百數十篇の戯曲の外、大衆的小説に「片絲」「うす雲」「半七捕物帳」「兩國の秋」等があり、「綺堂戯曲集」「綺堂讀物集」(全五)が刊行されてゐる。

三 採擇の趣旨

前數課が自然美の描寫であり、前課が更にそれを藝術美として生かした篇であつたのを承けて、藝術家の心境を主題とした戯曲の一例を本課とした。名匠の技の入神ぶりとその名匠氣質とを知らせ、且史上人物の運命を偲ばせると共に、戯曲形態の表現に親しませ、又その理解の仕方を學習させたい。文藝的教材であり、國民的教材である。

人物・動物等の面貌に摸して作つたもの。主として伎樂・雅樂・能樂・里神樂等に於て、樂曲中の人物に扮し、又その性格を表す爲に、舞人がその顔に著ける。

【師】 こゝは、技術を職業とする者。主として熟語にのみ用ゐられる。「佛師」「塗師」「彫刻師」

【源左金吾頼家】 ゲンサキソゴヨロイへ 鎌倉二代將軍源頼家。頼

一八一

朝の長子。母は北條時政の女政子。壽永元年(一八四二)八月鎌倉に生まれ、幼名を十萬、後に萬壽といつた。幼くして射藝をよくし、建久四年(一三)富士野の狩には自ら鹿を射て衆に賞せられた。六年父母に従ひ入朝して御劔を賜はり、八年右近衛少將に任じ、翌年讃岐權介を兼ね、正治元年正月頼朝の死を承けて家督を襲ぎ、左近衛中將に進んだ。が、母政子及び北條時政の掣肘を受け、政事を自らすること能はず(元年四月政子は時政と計り、大小の政事は時政・頼朝等の老臣の合議で決すこととした)、北條氏の威權を悪んで外舅比企氏と結び、動もすれば才氣英發の風があつて北條氏に忌憚せられた。二年諸將の訴狀を容れて梶原景時及びその一族を誅殺、同年從三位左衛門督に敘任したが、漸く諸政を専斷して老臣と合はず、又深く蹴鞠の技を好んで諸將の指彈を顧みなかつた。これより先平家時義の愛を愛し、これに業を失ふ。建仁二年征夷大將軍に補せられたが、翌年病を得て漸く重く、三年八月關東二十八箇國の地頭職及び總守護職を子一幡に、關西三十八箇國の地頭職を弟千幡(實朝)に譲らしめられた。よつて比企能員と謀つて北條氏追討を企てたが、政子の知る所となつて能員は誘殺せられ、その子宗貞は一幡を擁して滅されたので、更に和田義盛・仁田忠常を招いて成らず(義盛は時義の弟、忠常は時義の弟)、九月遂に將軍職を實朝に譲つて出家せしめられ、次いで伊豆の修禪

寺に幽屏、翌元久元年(一八六四)七月、北條氏の手によつて浴室に襲殺された。享年二十三。

吾妻鏡等に據れば、頼家は、徒らに遊戯を好んで驕恣・昏惰であつたやうに傳へられてゐるけれども、襲職の初め算數に長じた源性を用ひて諸國の訴訟を決せしめた如き、宿將・老臣の所領を減じてその權を殺がうとした如き、屢々伊豆・駿河に狩して武を練つた如き、必ずしも凡庸の資ではなく、その爲に却つて身を失つたものであらうといふ。

〔左金吾〕 左衛門督の唐名。「金吾」は左衛門府の唐名で、右衛門府は右金吾と呼ばれた。頼家は正治二年この職に任ぜられたので「源左金吾」と呼ばれたのである。

〔左衛門督〕 は、左衛門府の長官。從四位下相當の官職で、多くは中納言・參議がこれに任ぜられた。左衛門府は左右に分かれ、元來中納言の官職で、實權に關するものではない。

〔下田五郎景安〕 シモダゴラウカゲヤス 傳未詳。

〔修禪寺〕 シュゼンジ 現靜岡縣田方郡修善寺町に在る古刹。弘法大師留錫修法の跡で、大同中大師若しくはその弟子某の建立にかゝると傳へ、初は修善寺又は桂谷山寺と稱せられる眞言宗の寺であつたが、降つて建長中宋僧蘭溪禪師(道隆)が來住して臨濟宗

となし寺名を修禪寺と改め、且支那の廬山に準へて肖廬山の山號を興へ、正安年間には元の使僧一山(一寧)も來住した。後戰禍のため廢滅したが、延徳中隆溪禪師(繁紹)が北條早雲の外護を得て再興、曹洞宗に改めて近世に至つた。文久三年大火のため焼亡、明治以後次第に復興して本堂・講堂・方丈等が再建された。頗る寺寶に富むと共に、源頼朝・同頼家終焉の地として名高い。頼朝は兄頼朝の嫌疑を蒙つて建久四年八月寺内の信功院に幽せられ、次いで梶原景時に襲はれて自刃。頼家も亦、外祖父北條時政の爲にこゝに幽せられて非業に死した。頼家は今の頼朝の所望の所、ある所で幽禁されたと傳へる。今、寺南の山腹にある指月殿は、頼家の母政子が頼家の冥福を祈る爲に宋板の一切經を藏めて建立した經堂で、その堂側に頼家の墓があり、これと川を隔てた戸田街道の小山には、頼朝の墓と傳へられるものが残つてゐる。

【伊豆國狩野庄修善寺村】 イヅノクニカノノシヤウシュゼンジムラ 現靜岡縣田方郡修善寺町。古くは桂谷といつたが、後時院の名に因んで、修善寺又は修禪寺と稱せられるに至つた。名高い修善寺温泉を中心に、桂川の溪谷に沿つて發達した温泉町で、駿豆鐵道の終點修善寺驛の西方一・七軒。達磨火山の東麓に當り、山水變美の温泉境をなしてゐる。大同中弘法大師がこの地に靈泉(今の新井の湯と傳へる)を發見して里人に教へたのが開拓の初と傳へられ、修禪

寺建立以來次第に著聞、鎌倉時代にはその名が大いに著れた。修禪寺、指月殿、頼家の墓、頼朝の墓、十三人塚(頼朝の侍臣の墓と傳へる)等の遺蹟は今も猶當時の哀史を物語つてゐる。

〔伊豆國〕 東海道十五國の一。現靜岡縣の一部の地。

〔狩野庄〕 伊豆國田方郡(現靜岡縣)の中、ほとんどの田中村・北狩野村・修善寺町・下狩野村・中狩野村・上狩野村等の地に互る山谷に在つた中世の庄園。もと院の御料地であつたが、鎌倉の初その地頭である藤原(工藤)狩野介茂光が頼朝に従つて以來、子孫累世この地に據つて武功があつた。狩野氏は、後北條早雲に擧げられた遠江・相模の四州に繁榮して東海道の名家であつた。

〔庄〕は「莊」とも書き、「莊園(庄園)」であつた地をいふ。

〔庄園〕は、もと田莊(上古の皇族及び臣・達)・賜田(政府・功勞・才藝ありて人に賜はつた田)・功田(國家に大功ある人に賜はつた田)・梨田(實業の地を開墾した田)・神寺田(社寺に奉納した田)などが、次第に發達して純然たる私有地となつたもので、中古以後、多くは官權の外に立ち、權門・社寺跋扈の基礎をなした。そして、歴代の制禁にも拘らず、平安朝末期には全國殆ど莊園化せんとするに至つたが、鎌倉幕府が地頭を置くに至つて次第に減少し、豊臣秀吉の檢地以來全く跡を絶つた。

〔桂川〕 カツラガハ「修善寺川」ともいふ。達磨山東麓の輻射谷

に發源し、東流して修善寺町を貫ぬき、下田街道附近で狩野川に合流する。長さ約二軒。河床に露出する角閃安山岩の大岩脈に沿つて數箇所温泉(無色・無味)が涌出し、浴槽軒を列ねて櫛比してゐる。主なる共同浴場には獨站の湯を始め、河原湯・箱湯・稚兒の湯・杉の湯・白糸の湯などがある。

【畔】 ホトリ 水のほとり。岸。

【住家】 スミカ

【元久元年七月十八日】 源頼家の弑せられた當日。

【元久元年】 ゲンキウグワンネン 一八六四年。土御門天皇の御代。

【二重屋體】 ニヂュウヤタイ 舞臺装置上の用語。二重の上に組立てられた屋體。床が平舞臺より一段高くなつてゐる屋體。

【二重】 芝居の道具の一。舞臺を一平面に局限せず、高低をつける場合に用ゐる、舞臺の上に更に床を構へて、一段高くしたものを。定式物の高さは高足又は高(二重)・中足(三)・常足(四)で單位が七寸づつであるが、この寸法も絶対的のものではない。二重屋體の外、山や岩石等の骨組にも用ゐられる。

【屋體】 (一)持ち運ぶやうに作つた屋根のある臺。物を載せて賣り歩き、又は祭禮の練物に用ゐる。(二)「踊屋臺」の略。(三)

【紺暖簾】 コンノレン 紺で染めた暖簾。

【紺】 藍の濃いもの。黒色に少し紫味又は青味を帯びた色。

【暖簾】 (一)人家の出入口に張つて日除にする張。横暖簾・長暖簾・内暖簾・日除暖簾・花暖簾・繩暖簾等の種類がある。後には、専ら商家の店頭に用ゐられるやうになり、多くは紺地に白く屋號・記號などを染め抜いた。(二)「暖簾名」の略。暖簾に記した商號。こゝは(一)。

暖簾はもと「ナンレン」「ノウレン」と訓んで、禪家で、綿布で簾面を覆うて風氣を防いだもので、鎌倉時代頃から用ゐられ、室町末期頃には一般民家にも行はれたが、商家一般に用ゐられるに至つたのは徳川初期のやうで、これに屋號や商標を染め抜いて店先に掲げるやうになつたのは元祿時代かららしい。かくて遂には、その店の信用又は權利を意味するに至り、所謂「暖簾分け」が行はれるやうになつた。そして明治時代までは猶盛に用ゐられたが、歐米商店風の移入と共に漸く減少した。

【下手】 シモテ 舞臺の向かつて左の方。

【素焼】 スヤキ 施釉陶磁器を本焼にする前に施釉に耐へるやうに軽く焼き固めること。又、その焼かれた氣孔性素地をいひ、白・褐・灰色等を呈する。

【塔峯】 タフノミネ 修善寺町温泉場の中央南側に位し、巨剎修禪

能樂・演劇・舞踊等で家に摸して用ゐる道具。こゝは(三)。

【舞樂の面】 ブガクのメン 舞樂を演ずる際に用ゐる假面。普通の假面と造面(又は雜面・藏面)との二種類がある。普通の假面は木製に彩色を施したもので、人間・龍面・獸面・鳥面等があり、人間でも男女老幼の別、或は怒り或は笑ひ或は奇異の容貌をなしてゐるもの等がある。更に形の上から大面・中面・小面の三種に區別される。造面は四角な白紙(近來は紙)の表面に墨で象形的の顔面を描いたもので、眼の所に三角形を描きその中を切り抜いてある。尙、舞樂には假面を用ゐるものと用ゐないものがある。

【舞樂】 廣義には、一般に舞を主として音楽を伴なつたものをいふが、普通には、雅樂(平安朝時代に宮廷を中心として貴族社會に行はれた音樂)の中に於て舞を伴なつたものをいふ。この意味の舞樂は更に二大別される。一つは我が國の古樂中、舞のあるもので、普通歌を伴なひ、他の一つは朝鮮・支那・印度・渤海等から輸入された樂舞を平安朝時代の初期に改造・整理し、又これに做つて我が國で作曲したもので、主として外國樂器を用ゐて合奏を行ひ、これに合はせて舞踊をなすもので、普通には歌を伴はない。今日では最も狹義に、この後者を舞樂と呼んでゐる。

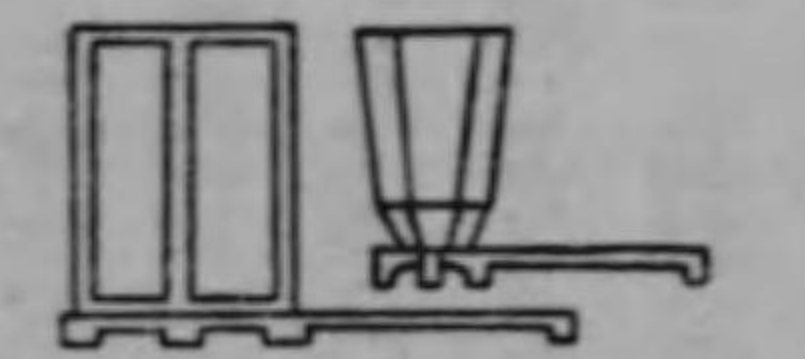
寺と桂川を挟んで對峙してゐる。山腹の指月ヶ岡(頼家の死後、母政子がこの名があるといふ)に頼家の墓があり、その側に指月殿がある。

【上手】 カミテ 舞臺の向かつて右の方。

【蒲簾】 ガマズダレ 蒲の葉や莖で作つた簾。

【蒲】 「香蒲」とも書く。香蒲科、がま屬の淡水産多年生草本。高さ二米内外。肥厚した線形葉を叢生し、葉の下部は長葉鞘をなして抱合する。雌雄同株で、夏日一・五米位の圓莖を抽出し、莖頂に圓柱狀の肉穗花序をなして無花被の雌花及び雄花をつける。雄穂は黄色で上部に位し、雌穂はその下に接續して蠟燭形をなし、熟すれば褐色を呈する。北海道・本州中部等の池沼に自生。その莖を編んで蓆に製し、花穂は藥用に供する。

【雪洞】 ボンボリ (一)茶爐又は手燭などの紙張りの火おほひ。



(二)紙張りのおほひのある手燭。雪洞手燭。(三)行燈の一種。火おほひの部分を下のやゝつぽまつた六角形(方形など)につくり、それに通常一本の長い柄があつて、その下端に臺座を取りつけた小形の行燈。かさぼんぼり。こゝは(二)。

【將軍家】 シヤウゲンケ 征夷大將軍の敬稱。(六七頁「將軍」參照)

【家】は、高貴な人の官名又は姓氏に添へて敬意を示す語。

【御微行】 貴人が人目を忍んで歩かれること。御間行。

【疎忽】 ソコツ (一)念の入らないこと。不注意なこと。そまつかしいこと。かるはずみ。輕率。輕忽。(二)過失。そそつ。しくじり。こゝは(一)で、禮を缺くやうな不注意、の意。

【平伏す】 身を平たくして伏す。

【設】 マウケ こゝは、準備。用意。支度。

【先づ】 マヅ (一)早く。最初に。まさに。(二)何はともあれ。ともかくも。まあ。(三)しばらく。かりに。暫時。こゝは(二)。

【あれ】 こゝは、あちら。あそこ。

【して】 こゝは、他人の返答を促す言葉。

【趣】 オモムキ こゝは、わけ。意味。次第。趣意。

【面儘】 メンテイ かほかたち。おもざし。顔面の相貌。面貌。面相。面容。容貌。

【形見】 カタミ (一)過去の事の思ひ出される種となるもの。(二)死んだ人又は別れた人の、生存中の又は共に在りし日の思ひ出される種となる遺物。こゝは(二)。

【曩に】 サキに まへに。以前に。かつて。

【其の方】 ソのハウ こゝは、目下に用ゐる對稱代名詞。なんぢ。

【繪姿】 エスガタ 繪にかいた人の姿。繪像。

【出来】 シユツタイ(シユツライの音便) (一)物事の出で来ること。事件の起ること。(二)物の出来上ること。なりとふこと。成就。こゝは(二)。

【延引】 エンイン・エンニン(連聲) 約束した時日の延び後れること。事ののび／＼になること。遲滯。

【申し立てて】 マウシタテ

【申し立てる】 (一)目上の人に對していふ。申し上げる。言上する。(二)とり上げていふ。強くいひ張る。こゝは(一)。

【多寡】 タクワ 多いと少いと。多少。但し、こゝは「たか」(高)の意に當てて用ゐたもので、ほど、かぎり、程度、分際、の意。

【丹精】 タンセイ 心をこめて物事をする事。念を入れて事をする事。丹誠。

【凝らす】 コラス (一)凝るやうにする。回める。(二)集注する。寄せあつめる。こゝは(二)。

【當春】 タウハル この年の春。

【當】 は、名詞に冠して、この、その、さしあたつての、等の意を表す。

【懈怠】 ケタイ おこたること。なまけ。なほざり。怠慢。

【猶豫】 イウヨ (一)ぐづ／＼して決しないこと。ためらふこと。

進退を決しないこと。躊躇。(二)時日を延ばすこと。遷延。延引。

(三)罪を宥して時日を延ばすこと。こゝは(二)。

【上様】 ウエサマ 高貴の人を呼ぶ尊稱。こゝは、將軍の尊稱。

【散々】 サンザン 残る所のないさま。極度に及んでゐるさま。甚だしいさま。(悪い意にいふ)。

【性急】 セイキフ 性質のゆつたりしないこと。氣短かなこと。せつち。短氣。

【待てど暮せど】 いかにも待ち暮しても。

【埒明かず】 ラチアカズ

【埒明く】 埒が明く。物事の運びがはかどる。仕事が滞なく進む。始末がつく。解決がつく。かたづく。

【埒】 (一)馬場の周囲の柵。(二)物事の限界。

【齒痒う】 ハガユウ もどかしく。じれつたく。

【直きく】 チキチキ 「直」を強めていふ語。他人を経ないで直接になすさま。直接。ぢか。

【おのれ】 (一)自稱代名詞。われ。(二)對者を卑しめ又は罵る時の對稱代名詞。汝。うぬ。こゝは(二)。

【物體なくも】 モツタイなくも 恐れ多くも。かしこくも。辱けなくも。

【征夷大將軍】 セイイタイシヤウグン こゝは、幕府の主宰者に授けられた職號。(六七頁「將軍」參照)

【源氏】 ゲンジ 弘仁中嵯峨天皇がその諸皇子に源の姓を賜はつて臣籍に列せられたのを濫觴とし、爾來、仁明、文德、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、村上、冷泉、花山、三條、後三條、順德、後嵯峨の諸朝にもこれに倣つて皇族に源姓を賜はることが行はれ、夫々仁明源氏・文德源氏などと呼ばれるが、中古の末から中世にかけて平氏(桓武平氏)と併び稱せられたのは清和源氏で、後世一般に源氏といへば多くこれをさす。こゝもその意。

清和源氏は、清和天皇の諸皇子又はその子孫が夫々源姓を名告られたのに始るが、その中貞純親王の子孫のみが繁榮した爲、後世普通には、同親王の長子六孫王經基(天徳中源姓を賜はる)を以て清和源氏の祖とする。經基の子滿仲、滿仲の子頼光は共に鎮守府將軍となり、藤原氏と結んで朝廷に勢力を扶植したが、その武名は未だ平氏に如かなかつた。然るに頼光の弟頼信及びその子頼義が平忠常の亂を鎮め、次いで頼義・義家が奥羽を平定するに及び、源氏の武名は宇内に高く、東國はその根據地となつた。

義家の孫が爲義、爲義の子が義朝、義朝の子が頼朝である。

【棟梁】 トウリヤウ (一)棟と梁。(二)轉じて、一家又は一國を支

持する重任に當る人物。柱石。梁棟。(三)おもだつてゐるもの。かしら。首領。頭領。(四)大工のかしら。こゝは(三)。

【刻めとあるは】 刻めと仰せのあるのは。刻めとおつしやるのは。

【刻む】 キザむ こゝは、彫刻する。ほりつける。

【職の譽】 ショクノホマレ 面教師としての職の名譽。

【等閑】 ナホザリ 世の常として深く心をつけないこと。深く注意を拂はないこと。まめやかでないこと。かりそめ。おろそか。

【未熟】 ミジユク (一)果實のまだみのらないこと。(二)學問・技藝などのいまだ熟練しないこと。下手。拙劣。こゝは(二)。

【腕限り】 ウデカギリ うでまへのあらんかぎり。

【腕】 こゝは、てぎは、うでまへ、わざ、技倆、の意。

【根限り】 コンカギリ 根氣の續く限り。

【根】 こゝは、忍耐する氣力。倦まずに事を爲し續ける根氣。氣根。精魂。精力。

【打ちましても】

【打つ】 ウツ こゝは、面を作る、の意。木影の上に塗料を盛り上げ、これを叩いて形を作り上げる故にいふ。

【意に適ふ】 イにカナふ 氣に入る。心に合ふ。満足する。

【心ならず】 ココロならず (一)本意にたがつて。不本意に。心に

もあらず。(二)氣が氣でなく。心も心ならず。こゝは(一)。

【都度】 ッド その度毎に。毎々。毎度。毎回。

【相済むまい】 アヒスむまい 義理がたつまい。言譯があるまい。

【相済む】 こゝは、他人に對して言譯がたつ、の意。

【相】 は、動詞に冠して語調を整へる語。

【鑿】 ノミ 木材に孔を穿ち、溝を掘り、又は鉋の適用に困難な場所を削る等に用ゐる工具。その柄頭を槌で打ち、又手でおして、穿ち或は削る。種類が多く、刃先の形状によつて平鑿・丸鑿・鑿附鑿等がある。

【塔を組む】 タフをクム 塔を組みあげて造る。

【塔】 佛語。梵語「率塔婆」(stupa)の略。「塔婆」ともいふ。

(一)舍利即ち佛骨を藏する爲に設ける高層建築物。土石を積み、又は木材を構へて造る。三重・五重・七重・十三重等のものがあり、又形によつて、五輪塔・多寶塔・相輪塔・寶篋印塔等種々ある。(二)後世、供養として、墓の後に立てる上部の塔形をした細長い板で、梵字・經文の句などを記したのもの。そとば。たふば。こゝは(一)。

【組む】 こゝは、打違ひに結び合はせ、又は積み重ねる。くみあはせる。くみかさねる。(塔は土石を積み或は木材を組んで

造るのでいふ。)

【番匠】 バンジャウ (一)古昔、大和・飛騨等の諸國から京都へ上つて交代に勤番した大工。(二)轉じて、大工。こたくみ。こゝは(一)。

【なんど】 「など」等の音便。

【事變りて】 コトカハリて 事情が違つて。おもむきを異にして。

【事】 こゝは、物事のおもむき、事さま、事態、事情、の意。

【生無き粗木】 シヤウナキアラキ 生命のない粗木。

【粗木】 「荒木」とも書く。伐り出したまゝでまだ皮をとらない木。

【天人】 テンニン 佛語。(一)六趣の中の天趣と人趣。「人天」ともいふ。(二)十善や禪定を修した爲に天界に生まれ殊妙の果報を受けるものの稱。人間以上の境界で、しかもなほ迷の世界に屬するもの。こゝは(二)。

【夜叉】 ヤシヤ 佛語。梵語 Yaksas の音譯。「閻叉」「藥叉」「夜乞叉」等とも書き、「能噉鬼」「勇健」「輕捷」「威德」「暴惡」等と譯す。形醜醜怪で猛惡な鬼神であつたが、後、佛に歸依し、羅刹と共に昆沙門天の眷族となつて北方を守護し、福德殊勝であるといはれる。但し夜叉羅刹などといふ場合は多く惡鬼の意である。

【羅刹】 ラセツ 佛語。梵語 Rakshas の音譯。「羅刹婆」「落刹婆」

等とも書き、「暴惡」「可畏」「護者」「食人鬼」等と譯す。古代印度で惡者として取扱はれたものが、佛教中にとり入れられたもので、或は夜叉と共に昆沙門の眷族とせられ、或は地獄に於ける鬼の二類とせられ、法華經神力品には十羅刹女が釋迦の說法に感化せられ、外護者となつたことが述べられてゐる。但し、一般には惡鬼の總名とせられてゐる。

【ありとあらゆる】 ありとある限りの。總べての。あらゆる。

【善惡・邪正の魂を打込む】 善は善、惡は惡、邪は邪、正は正として、もとのものに本來具つてゐる精神を假面に持たせる。

【五體】 ゴタイ (一)筋・脈・肉・骨・毛皮の稱。頭・頸・胸・手足の稱。頭と兩手・兩足の稱。(二)全身。總身。(三)書體で、篆・隸・眞・行・草の稱。こゝは(二)。

【みなぎる】 漲る こゝは、溢れるばかりに満ちひろがる、はびこりわたる、ひろがりみちる、の意。

【精力】 セイリキ(原) (一)精を出して他人の爲にすること。ほねをり。盡力。(二)力。力量。こゝは(二)。

【兩の腕】 リヤウのカヒナ

【湊る】 アツマル

【確とは】 たしかには。固くは。

【確と】 「確と」とも書く。(一)はつきりと。分明に。(二)たしかに。かならず。かたく。(三)すきまなく。びつしりと。

【三島神社】 ミシマジンジャ 靜岡縣田方郡三島町に在る官幣大社。祭神は玉籙人彦殿之奉代主神。東海道の要衝箱根の西麓に當り、古來海道筋の名祠として知られる。創建年月は詳でなく、もと賀茂郡白濱村伊古奈比咩命神社と同一の社域に祀られ、後現地に遷され、伊豫の三島神を迎祀したものであらうといはれる。夙に奈良朝の昔から著れ、頻りに位階を進められて延喜の制名神大社に列し、降つて鎌倉時代には鶴岡八幡宮に次いで幕府の宗祠として待遇重く、毎年正月將軍家躬ら伊豆山・箱根の二所と共に本社に詣づるを恆例とした。爾來武門の信仰極めて厚く、明治に入つて官幣社に列した。例祭は八月十六日。

【放し鰻】 ハナシウナギ こゝは、恐らく放生會で放たれる鰻をいつたのであらう。

「放生會」は、佛教の殺生戒に基づき、生類を特設の場所に放して生を完うせしめる儀式。神社・佛寺等で行はれる。

【ぬらりくらり】 ぬら／＼としてとりとめのないさま。のらくら。ぬらくら。

【取留の無い】 トリトメのない。しまりのない。まとまりのない。不得要領な。

「取留」(一)とりとめること。(二)しまり。まとまり。

【疝癩】 カンベキ 癩が重つて怒り易いこと。神経質で激怒し易いこと。癩症。癩癩。

「疝」は「癩」とも書く。物事に昂奮し激怒すること。又、昂奮し激怒し易い性質。

【募らう程に】 ひどくなるだらうから。

「募る」 ツノる (自動、四) いよ／＼烈しくなる。増長する。かうずる。ひどくなる。

【こなた】 こゝは、敬意を含んだ對稱代名詞。そなた。あなた。

【職人冥利】 ショクニンミヤウリ 職人としての冥利にかなふやうに。職人の責任として必ず。職人らしくきつと。

「冥利」(一)冥加の利益。神佛の、冥々の裡に加被する利益。冥助。冥加。(二)轉じて、「冥加」と同じく、人の身分・職業などの下に添へその人の自誓の詞として用ゐられる。こゝは(二)で、それを他人に對して用ゐたもの。

【ちやとて】 であるといつても。だといつても。しかし。

【出来ぬものはなう】 下に「どうも仕方がない」といふやうな語のぬらくら。

略されたもの。

「なう」 念を推していふ時や餘情を含めてものをいひかけるに用ゐる口語の助詞。

【なんの】 こゝは、意に介せず、又他を否定する意を表す。どうしてか。なんでふ。

【聞えた者ぢやに】 廣く知られた者であるのに。評判の者なのに。

【心に染まぬ】 ヨコロにソまぬ 氣に入らない。「心に染む」(一)心にしみこむ。深く思ひこんで忘れない。身にしみる。(二)氣に入る。心になふ。

【無念】 ムネン (一)佛語。妄念のないこと。正念。(二)悔い恨むこと。口惜しく思ふこと。残念。こゝは(一)。

【祟】 タタリ たゞること。罰のあたること。神佛又は怨靈などの禍すること。報いが來ること。こゝは、頼家の激怒にふれることの報い。

【早急】 サツキフ・サウキフ 極めて急ぐこと。さしせまること。にはか。大急ぎ。至急。

【あはや】 咄嗟の間に事の起らうとするとき驚いて發する語。又、事の危きに近づいた時にいふ語。あれ。すはや。

【父様】 トトサマ(風)

【前後不揃】 ゼンゴフゾロヒ 前後の食ひちがつてゐること。辻褄のあはないこと。こゝは、夜又王と桂との詞の矛盾してゐることをいつたもの。

【あざむかうでな】 だまさうとしてゐるのだな。

【ほんに】 まことに。じつに。ほんたうに。げに。

【凡夫】 ボンブ・ボンブ (一)なみ／＼の男。たゞびと。尋常の人。普通の人。凡人。(二)佛語。迷妄に終始して、未だ眞理を證驗するに至らないもの。悟の智慧が開けないで煩惱に支配されてゐるもの。衆生。「聖者」の對。

【御慈悲を願ふ】 お情を請ふ。お赦しを願ふ。

【慈悲】 ジヒ (一)佛語。他に樂しみを與へる心と、他の苦を抜く心。消極的・積極的に他を憐れむこと。(二)あはれみ。なげ。

【上分別】 ジャウフンベツ 上乘の分別。最もよい考。

【こなた家】 あなた方。あなた達。

「家」(シユ・シユウ)は、名詞に添へて一群の人数を表す。

【黙つておるやれ】 黙つてゐなさい。

「やる」 接尾語のやうに、主として他人の動作を表す動詞に添へて、軽い敬意を表す。

【娘御】 ムスメゴ 娘さん。

「御」は、「御前」の略で、名詞に添へて敬意を表す。「親御」
「姉御」

【木彫】 キボリ 木を材料とした彫刻物。

【心少しく解けたる體】 心が少しやはらいだ様子。少し機謙がなほ
つた様子。

【體】 テイ かたち。ありさま。すがた。様子。

【生寫し】 イキウツシ (一)生きてゐる姿をそのままに寫しとること。
寫生。(二)繪畫・彫刻等の眞に通つて巧妙なこと。生きてゐ
るまゝのすがたに髣髴してゐること。(三)見わけのつかないほど
よく類似してゐること。こゝは(二)。

【打ちまもる】 見まもる。目を放たないで見守る。見詰める。

【まもる】 「目守る」の義かといふ。(一)目を放たずに見る。

(二)注意してうかがふ。

【さればこそいはぬ事か】 だからこそ前にはいはずのことではない。だ
から前もつて注意して置いたのだ。それ見たことか。

【か】は、反語を表す。

【とかう】 「とかく」の音便。(一)かれこれ。なにやかや。いろいろ。
ろ。あちこち。(二)やゝもすれば。ともすれば。こゝは(一)。

【遊つて】 シブつて

【遊る】 (一)滑かでない。障があつて通じない。すら／＼と通
らない。圓滑に抄取らない。滞る。(二)不得心で進んでしない。
いなむ心がある。心が進まない。こゝは(二)。

【容を改める】 カタチをアラタめる 居ずまひを正す。

【何分】 ナニブン (一)如何なる點からしても。どうしても。いづ
れにしても。どうも。(二)ひたすら。なにとぞ。どうか。ぜひ。
こゝは(一)。

【方々】 カタガタ こゝは、敬意を含んだ複数の對稱代名詞。おの
おのがた。あなたがた。皆様方。

【憚りながら】 (一)おそれながら。恐縮ではあるが。(二)憚るべき
ことではあるが。言ひ又はなすべきことではないが。(三)身分不
相應な言ひ分のやうではあるが。口ひろいことではあるが。なま
いきな言ひ分ではあらうが。身不肖ながら。こゝは(一)。

【鑑識^{カニシ}】 品物又は人物等の善惡・良否を見分けこなふこと。め
ちがひ。めききちがひ。

【鑑識】 鑑定する眼の力。めきき。かんしき。

【年來】 トシゴロ 「年頃」とも書く。數年この方。多年。

【我も許して】 自分もさう思つて。

【許す】 ユルす こゝは、適當と認める。認容する。

【生きたる色】 生きてゐる様子。生色。

【相】 サウ (一)すがた。ありさま。外見。形状。(二)人の顔面等
に現れた吉凶又は運命。こゝは(一)。

【世にある】 こゝは、世に生きてゐる、生存してゐる、の意。

【呪ふ】 ノロふ (一)怨みや憎みなどのある者に禍あるやうにと神
佛に祈願する。呪詛する。(二)憎い人の不幸を冀望する。こゝ
は(一)。

【怨靈】 ヲンリヤウ 怨を報いようとして祟をする死者の靈。

【怪異】 アヤカシ(風) (一)海上にゐるといふ一種の妖怪。俗に船
が強風・怒濤に遭つて難破する前兆として、忽然船側に出現する
と傳へられる。(二)怪しいこと。怪しいもの。こゝは(二)。

【不吉】 フキツ めでたくないこと。前兆のよくないこと。先例の
悪いこと。凶事。不詳。

【御意】 ギョイ (一)他人の心の敬語。おぼしめし。御心。貴意。

(二)おさしづ。おほせ。命令。指揮。こゝは(一)。

【重疊】 チョウデフ (一)かさなりたゞまること。幾重にも重なる
こと。いやが上に重なること。(二)この上もないこと。至極好都合
なこと。何より結構なこと。大満足。こゝは(二)。

【たつて】 強ひて。押しして。是非とも。切に。

【所望】 シヨマウ 望み願ふ所。希望。のぞみ。好み。註文。

【愚僧】 グソウ 僧の自己をさす謙稱。

【愚】は、自己の物事に冠して謙遜の意を表す。「愚弟」

【安堵】 アンド こゝは、心の落著くこと。安心。

【置く】 ツマヅク

【思案】 シアン (一)おもひ。かんがへ。分別。(二)ものおもひ。
心配。こゝは(二)。

【沙汰】 サタ (一)政務を裁斷・處分すること。その職にある人を
沙汰人といふ。(二)官府の指令。命令。(三)君の命。御諒。(四)
處置。(五)知らせ。おとづれ。左右。通知。(六)うはさ。風説。
評判。こゝは(五)で、とりきめて知らせる、といふほどの意。

【お前】 おマへ (一)對稱代名詞。もとは敬稱であつたが、現今は
同輩以下に用ゐる。(二)敬意を含んだ他稱代名詞。こゝは(一)で
敬稱。

【物に狂はれたか】 氣が狂はれてもしたのか。

【物】 狂つた理由を漠然といつたもの。

【せつば詰りて】 さしつまつて。仕方がなくなつて。處置に窮して。

【せつば】 切羽 (一)刀劍の鐔の両面の、柄と鞘とに當る部分

につける金具。(二)さしせまること。のつびきならなくなること。窮すること。又、その場合。

【寶物帳】 ハウモツチャウ 所有の寶物を記載する帳面。

【笑を貽さば】 後々まで物笑の種にされたら。

【貽す】 ノコす 遺す。あとにとどめる。

【名折れ】 ナヲれ 名譽を毀損すること。名譽を傷つけること。不名譽。又、その事柄。なをり。

【名は廢つた】 名譽は臺なしになつた。面目は失はれた。

【廢る】 スター (一)行はれない。不用になる。(二)衰へる。

(三)流行しない。はやらない。

【時の運】 トキのウン その時の運命で、どうにもならない。

【雪いで】 ススイで

「雪」は、「刷」の轉音。(一)洗ひ清める。「足を雪ぐ」(二)汚名を清める。「恥を雪ぐ」こゝは(二)。

【思案の眼を瞑つ】 シアンのメをトづ 眼をつぶつて考へ込む。

挿圖「夜叉王」市川左團次の夜叉王。(昭和八年東京劇場)

挿圖「頼家と夜叉王」實川延若の頼家、市川左團次の夜叉王、

中村時藏の楓。(同上)

二 解釋

1 主題

面教師夜叉王の名匠氣質と、その作頼家の假面に現れた頼家の死相。

2 構想

(1) 夜叉王の住家へ將軍頼家の微行。(初七五ノ一〇)

(2) 頼家及びその従者の督促にあつた夜叉王の苦衷。(七五ノ一一一八〇ノ八)

(3) その場を見兼ねて娘の取出した頼家の假面。(八〇ノ九一八六ノ三)

イ おも、見事ぢやと感歎する頼家。

ロ 幾度打ち直しても生きた色なく、魂も無き死人の相であると歎息する夜叉王。

(4) 頼家が喜んで歸つた後の夜叉王の落膽と娘の慰め。(八六ノ四一終)

3 敘述

「間はずとも大方は察して居らう。云々」——怒氣に満ちた言ひぶりである。「大方は察して居らう」といふ言葉は、「して、御用の趣は」と改つた夜叉王の挨拶に接して、頼家の高貴の身分がいはいはせようとするのがこの僧である。次には「面教師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……」といつてゐる。

めた言葉である。烈しくいふべき所を、わざと穩にいつた皮肉がある。それだけに、凜然たる怒氣を感じさせる。
〔多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも百日とは費すまい。〕——かういふ立場から催促もすれば叱言もいふ。夜叉王の苦衷が理解せられる筈がない。
〔物體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。云々〕——五郎の督促と頼家直々の催促にあつた夜叉王の苦衷が披瀝せられてゐる。將軍家の立腹には恐縮の外ない。而も、より以上に苦しいのは、思ふやうな面が出来ないといふ事實である。その爲に骨身を削る思をしてゐるのが夜叉王の現在である。將軍家の威光を以てしてもどうすることも出来ない、靈の魂が嚴として彼を律してゐるのである。

〔これは生無き粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡・邪正の魂を打込む面作り師。五體にみなぎる精力が、兩の腕に自ら溲る時、我が魂は流るゝごとく彼に通ひて、始めて面も作られます。〕——面教師としての夜叉王の體驗であり、その自覺である。この實感が出ない以上、その成功はないのである。随つて期日が斷言出来ないのは當然である。

〔たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは、いかに無念ぢや。〕——將軍家の面詰に對して不遜とも聞える言葉である。しかも靈の道に對する執心の固さがこの言を敢へていはせる。

〔え、退け、退け。〕——徹な頼家の氣性、殺氣立つた場面が眼前に展開せられる。
〔先づお鎮まり下さりませ。面は只今獻上いたします。なう、父様。〕——既に對立が破れて血の雨をも降らせようとするこの際、夜叉王の娘が見るに堪へなくなつて現れたのである。夜叉王の苦衷は愈々深められる。

〔夜叉王は黙して答へず。〕——これは、「なう、父様」と呼びかけた桂の言葉をうけてゐるけれども、それだけではない。退くことも、

進むことも出来ない夜叉王の苦惱を沈黙の姿で表示してゐるのである。このト書によつて息づまる場面が現前して来る。

「命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。黙つておるやれ。」——いふまでもなく、夜叉王には既に覺悟が出来てゐた。それをかういふ言葉で表さねばならないやうな立場に、この僧の言葉によつて置かされたのである。

「天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違、それは夜叉王が一生の不出来。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。」——名匠らしい眞率さと、小氣味のいゝ直言ぶりである。

「不思議や、この度の面に限つて、幾度打ち直しても生きてる色なく、魂も無き死人の相……それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。」——名匠の作にはその人のまだ展開してゐない運命まで示現せられるとは驚くべきことである。しかも作者も自ら知らないでゐるのである。

「いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈・怪異などの類……」

——夜叉王は見る所をいはずにはゐられないといつた眞摯さでいつてゐる。しかもそれは頼家の境遇と運命を思ふ者にとつては、感慨が深い。名匠とはさういつたものかと考へさせられる。

「む、とにもかくにもこの面は頼家の意に適つた。持ち歸るぞ。」

——最初から頼家の感歎は深い。その感歎からであるのか、それとも自己の運命の暗示を感じてこの面に心を惹かれてゐるのか。「とにもかくにも」といつてゐるその内心を思ふものには感慨が深い。

「頼家行きかゝりて物に蹟く。頼家お、何時の間にか暗うなつた。」——夜叉王が「死人の相」と慨息した假面を喜んで持ち歸る頼家の言動である。作者がやはり来るべき頼家の運命の豫兆として描いてゐることはいふまでもない。

「所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。」——死を覺悟して守らうとしたものを失つた夜叉王の落膽は深い。手の跡を惜しむ名匠氣質が偲ばれる。

「一生の中に一度でも天晴名作が出来ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。」——この場の夜叉王の失望を慰める言葉はない。せめてもありとすれば、それは新しい希望を抱かせることであらう。娘の眞實心のみがそれを眞に言ひ得る。

三 批評

歌舞伎俳優としての新人左團次の爲に書かれた作である。傳統的な歌舞伎の世界に新しい空氣を齎した點で名を得た作である。これ

は修禪寺にある頼家の假面といふものを見、「觀來つて一種の詩趣をおほ」えて書いた作で、史實に捉はれず、想像の赴くに任かせた

三 備考

一 指導の問題

演劇に於ては、俳優の演技と科白とが相俟つて舞臺的效果をあげるものであるが、こゝではたゞ僅かなト書と科白だけでそれを想ひ浮かべなくてはならぬのであるから、ト書で場景人物を想起し、科白の蔭に動く仕種を想像し、舞臺面として、更に現實活動としてこれを味讀することが肝要である。

解釋に於ては、夜叉王の藝術家としての良心と自覺とに打たれることはいふまでもなく、頼家の運命にも新しく關心せられ、源氏の末路の暗示を覺えるであらう。それと共に、運命の不可思議を象徵する戯曲の特性も實感せられるであらう。

尙、天才的な職人氣質を高調するのに、將軍家を相手に持つて來たのは效果的である。その面教師としての良心と、將軍家の激怒との間に立つて、進退谷つてゐる夜叉王であるが、今困惑してゐるものは、いはば彼の對他的な「我」であつて、彼の面教師としての「我」は愈々その立場を確立し來つて、將軍家と雖もこれを如何と

ところに、その詩趣が具現せられてゐる。

もすることが出来ない。對他的な「我」が四苦八苦してゐる中に衷なる「我」は益々燦たる光を放つて來る。性格への集中と運命の發展との關係は戯曲解釋の主要公式であるといつてもよい。

尙、原作を讀み、少くも「參考資料」所載の梗概ははつきり頭に置いて指導することが必要な用意であることはいふまでもない。

二 參考資料

本文の理解を標準として、修禪寺物語の梗概を記述する。

〔第一場〕伊豆國狩野庄修善寺村桂川のほとりなる面教師夜叉王の住家。

本文に引かれてゐる前に、夜叉王の娘、かつらとかへでの二人に、かへでの婿春彦が登場して、姉のかつらは、關白・大臣・將軍家のおそばへ召されるやうな出世をしたいといひ、妹のかへではさうした名聞よりも今の面教師の職に満足したいといつて、紙碁を打ちつゝ互に言ひ争ふ。そこへ春彦も加つて、かへでの「職人風情」といつた言葉を咎める。細工場では夜叉王が將軍家下命の面打に苦

心してゐる。やがて姉妹は夕食の準備に立ち、春彦は大仁へ鑿と小刀を取りに行つた後へ、修禪寺の僧に案内させ、下田五郎景安を従へて頼家が催促に来る。(以下本文。但し、頼家が歸館に際し、かつらを一緒に連れ、かつらは望が叶つた喜についてゆく條が削除せられてゐる。)

〔第二場〕 桂川のほとり、虎溪橋の袂。

頼家はかつらを連れて橋を渡りながら、懸を語り、かつらは將軍家の側近く召出された身の冥加を喜ぶ。頼家は、かつらに「若狭の局」の名告りを許す。と、空の月が雲に隠れる。そこへ鎌倉から北條の討手として向かつた金窪兵衛尉が立現れると、頼家は早くもそれと察し、物の具に身を固めた夜中不法の参入を咎める。やむなく退下した兵衛尉は、あたりに待伏せた軍兵に、いよ／＼御座所に寄せかけるといふ旨を含め、大仁から春彦が歸る頃は既に容易ならぬ事態に陥る。

〔第三場〕 第一場と同じ夜又王の住家。修禪寺で撞く早鐘に交つて陣鐘の音が烈しく聞えて来る。

夜又王とかへでとがうろ／＼してゐる所へ、春彦が歸つて来て夜討の次第を語る。間もなくかつらが直垂を著、長巻をもち、頼家の

面を持ち、手負になつて出で来り、門口で倒れる。そして奉公はじめの奉公納めと、この假面をつけて頼家の身替りに立つたといふ。かへでがその淺ましい手負の姿を見て泣くと、たとへ半响一响でも若狭の局といふ名まで許されて出世の望のなかつた上は、死んでも恨はないといふ。その時、修禪寺の僧が逃れ來つて頼家の最期を語る。かつらの失神するのを見て、夜又王は、かつらも死んで本望だらう、自分もこれで本望だといふ。「幾たび打ち直してもこの面に、死相のあり／＼と見たるは、われ拙きにあらず、鈍きにあらず、源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめで覺つた。神ならでは知ろしめされぬ人の運命、まづわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ」といつて快げに笑ふ。

かつらは「わたしも天晴れお局様ぢや。死んでも思ひ置くことない。些とも早う上様のおあとを慕うて、冥土のおん供……」といふ。夜又王は、若い女の斷末魔の表情を後の手本に残して置きたいと、死んでゆくわが娘の顔を紙に寫しとるべく筆を執つて、「娘、顔を見せい」といひ、かつらは「あい」と答へ、春彦夫婦に扶けられて這ひよらうとする。

一三 誠

一 解題

一 本文

「梅園叢書」中巻の「誠といふの説」の全文である。

「梅園叢書」は教誨を主とした隨筆で、上・中・下の三巻からなり、倫理道德は勿論、學術・技藝・醫術・佛道五行説など多方面に互つて、論辨・説話四十九篇を収めてゐる。寛延三年の自跋があり、安政二年刊行された。「梅園全集」「有朋堂文庫」等に所収。

二 作者

三浦梅園。本名は菅。字は安貞、後、安鼎と改めた。梅園の外、洞山・攀山・季山・東川・二子山人・無事齋主人等の別號がある。享保八年(二三八三)八月豊後國杵築(現大分縣杵築市)に醫師三浦儀一の長男として生まれた。初め藩儒綾部綱齋に従つて學んだが、十七歳豊前中津に赴き、藤田貞一の門に遊び、俊才を以て稱せられた。天地造化の理に疑を抱き、まづ天文學に志し、年二十餘で自ら簡天儀を作り、天文に關してはほど了解したが、哲學上の疑問は未だ解決す

三 浦 梅 園

るに至らず、寢食を忘れて研鑽し、年三十に至つて、天地に條理のあることを發見し名づけて條理學と稱した。これより益々研學を積み、遂に梅園三語即ち「支語」「贅語」「敢語」を著した。「支語」は所謂條理學の支理をのべ、「贅語」は「支語」の所説を一層明瞭に論述し、「敢語」は彼の道德説をのべたものである。安永二年「價原」一卷を著し、貨幣及び物價の原理を論じた。名譽高まるに及んで、諸侯の招聘頻りに至つたが、皆辭して仕へなかつた。天明三年杵築侯松平親賢が新に立つに及び、召されて家老職の禮遇を受け、政事の諮問に應じ、大いに封内の福利を増進した。寛政元年(二四四九)三月歿、享年六十七。明治四十五年從四位を追贈せられた。

資性は純正にして氣節あるを以て知られ、學殖該博で、天文・物理・哲學・倫理の外、政事・經濟・醫學・博物・文學・語學の諸方面に至るまで通曉しないものはなかつた。著書は、「梅園叢書」「支語」「贅語」「敢語」「價原」の外、「通語」「寓語」「垂輪子」「元熙論」

「死生譚」「造物餘譚」「身生餘譚」「豐後跡考」「五月雨物語抄」「東遊草」等頗る多く、總べて「梅園全集」(卷三)に收められてゐる。

三 採擇の趣旨

その技神に通ずともいふべき面教師夜叉王を描いた戯曲の後を承

二 教材としての研究

一 註解

【妄】 バウ・マウ (一)みだりなこと。眞實又は誠實でないこと。不誠實。虚誕。虚妄。いつはり。うそ。(二)慎重でないこと。思慮のないこと。無分別。こゝは(一)。

【我にあらざるもの】 自分に關係のないこと。

【その辨をもとめずして可なり】 その區別を求めなくてもいふ。増したか増さないかはどうでもいふ。

【辨】 ベン (一)わかち。わかまへ。差別。識別。(二)つくなひ。辨償。辨濟。

【もとむ】 こゝは、探す。尋ねる。

【君子】 タンシ (一)高い官位に在る人。在位者。(二)才徳高い人。徳をそなへた人。(三)學者。ものしり。(四)婦が夫をさしていふ。こゝは(二)。

け、そこにも既に暗示せられてゐた「誠」の眞風光に關する思惟の文字を掲げた。思索の表現として文化的教材であり、古人の實行を敍した文として國民的教材である。

【心得たらんは】 心にさとつてゐるのは。會得してゐるのは。

「ん(む)」は未來の助動詞で、表現を和らげる爲に用ゐたもの。

【司馬溫】 シバランコウ 支那北宋の名臣。名は光、字は君實。

涑水先生と號した。世に司馬溫公・司馬宰相と稱する。陝州夏縣(現山西省河)の人。幼にして穎敏、嘗て水甕を割つてその中に陥つた小兒を救つたと傳へられる。長じて博學賢明、仁宗・英宗・神宗に歴仕し、仁宗の寶元の初め進士となり、神宗の時御史丞となつたが、王安石の新政に反對し、爲に去つて洛陽に歸り、力を「資

治通鑑」の撰述に用ゐた。元豐八年神宗歿し、哲宗即位して高太后政を攝するや、召されて尙書左僕射に拜し門下侍郎を兼ね、帝の樞機に參して遂に新法を罷め常平法を復したが、政に與ること八箇月にして元祐元年(皇紀一七四六)九月歿した。享年六十八。太師溫國公を贈られ、文正と諡された。爲人篤學、少より老に至

るまで妄語せず、忠信・恭儉・至誠を以て一貫した。その著「資治通鑑」(全二百九)は支那編年史の最良のものといはれる。

【方】 てだて。方法。手段。

【妄語】 (一)バウゴ みだりにものをいふこと。道理に合はないことをいふこと。あてにならないことをいふこと。又、その言葉。妄言。(二)マウゴ 佛語。十惡の一。眞實でない言をはくこと。うそをつくこと。うそ。いつはり。虚言。こゝは(一)。

【妄りに】 ミダりに むやみやたらに。規律なく。掟に従はずに。わけもなく。思慮もなく。

【信】 マコト 間違のない義。言詞の上で間違のないこと。信實。

【罌粟】 ケシ 「芥子」とも書く。罌粟科、けし屬の一年生草本。高さ約一米。葉は無柄で基部は莖を抱き、白綠色・長橢圓形で齒牙縁を有する。初夏莖頂に單立して大きい圓形の花を開く。花色は紅・紫・白等種々。果實は球形又は橢圓形の蒴果で、蒴中には無数の銀白色・美麗の細微な種子を藏する。未熟の果實の乳汁から阿片を製する。

【子】 山梔子・梧桐子等の草木の實。罌粟や菜種のやうに一囊の中に數多ある細かい實にもいふ。

【烟草】 タバコ 茄科、たばこ屬の一年生草本。高さ一・二—一・五

米。全株に粘毛を密布し、葉は大形で卵狀披針形を呈し、先端鋭く尖る。夏日莖頂に淡紅紫色の漏斗形五瓣花を圓錐花序に綴り、花後蒴果を結ぶ。蒴果は卵形で宿存萼をつけ、中に黃褐色の細小の種子を藏する。南米の原産で各地に栽植せられ、その葉を特定の方法で乾燥したものが、所謂烟草の原料である。

【實】 ミ こゝは、草木の種子や核をいふ。

【味ます】 クラます 暗くする。見えなくする。わからないやうにする。見つけられないやうにする。目を盗む。迷はす。

【尤】 トガ 「咎」「科」とも書く。こゝは、とがむべき行爲。非難すべき缺點。あやまち。きず。とがめ。難。

【實】 ジツ まこと。まごころ。

【痛みたるは】 イタみたるは そこなはれたのは。
【苗】 ナへ 農菜又は園藝に於て、植物の種子を本圃に直播することとが不利又は不可能な場合、まづ種を苗床に播き、こゝで發芽させて幼植物となし、後他に移植する。その幼植物を苗といふ。

【かじく】 (一)十分に發育しない。瘦せ衰へる。(二)手足がこゝえて自由を失ふ。冷えちやむ。かじかむ。こゝは(一)。

【昔、衛の靈公といひし君、云々】 (參考資料參照)
【衛の靈公】 エイのレイコウ 支那春秋時代の諸侯。皇紀二二

○乃至一七〇年頃の人。名は元。襄公の子。その三十八年孔子の來訪を受けて、大いにこれを重んじたが、長くは止め得なかつた。その後も孔子は屢々衛を訪れてゐる。深くその夫人南子を愛し、後南子の亂を生じた。その四十二年に歿した。

孔子が魯を去つて衛を訪れたのは、周の敬王の二十三年(皇紀一六四)で、靈公は大いに悦び、魯に於ける祿を問うて同じく六萬粟を給したが、居ること十箇月、讒する者があつて一たび去り、難に遭つてまた衛に歸つた。が、夫人南子の振舞、及びこれを溺愛する靈公の所行に嫌らず、「吾未見好徳如好色者」と歎じて陳に去つた。後三たび衛を訪れて建策する所があつたが靈公の用ゐざるを見て三たび去り、その後四たび訪れてまた久しからずして去つた。

【衛】 支那春秋・戰國時代の國名。殷の故地。周の武王の弟康叔の封ぜられた所で中原の地に當り、今の河北省濮陽縣(開縣)以西、河南省汲縣(衛輝)・沁陽縣(懷慶)に至る地である。戰國時代に至つて國勢衰へ、遂に君角の時(皇紀四五二)四十二世九百年で秦に滅された。

【夫人南子】 フジンナンシ 宋の人。頗る靈公に寵せられて勢力があつた。靈公の太子蒯聵は罪を南子に獲て安からず、これを殺

さうと計つて露れ、靈公の怒に觸れて出奔した。靈公卒するに及び、南子は公子郢を立てようとしたが、郢は蒯聵の子を推して肯んぜず、輒が立つて君となつた。これを出公といふ。然るに出公の十二年その父蒯聵は密かに衛の大夫孔悝と謀り、出公を逐つて位に即いた。これを莊公とする。この時孔子の門弟子路は孔悝の邑宰となつてゐたが、亂を知つて城に入り、悝の所刑を要めて遂に殺された。莊公は悝の弟に逐はれ、出公が再び即位した。世にこれを南子の亂といふ。

【夫人】 (一)古昔、支那に於て、天子の妃、又は諸侯の妻の稱。(二)古昔、我が國に於て、妃の次にあたる後宮。(三)貴人の妻。おくがた。(四)轉じて、他人の妻の敬稱。こゝは(一)。

【闕下】 ケツカ (一)宮門のもと。(二)轉じて、天子の御前。こゝは(一)。

【選伯玉】 キョハクギョク 名は瓊。伯玉は字。衛の大夫。賢徳を以て敬重せられ、孔子が衛に行く時は殆ど常にその家に宿した。老に至るまで進徳の工夫を積んで倦まず、年五十に至つて四十九年の非を知つたといはれる。

【禮】 レイ こゝは「禮記」をさす。五經(易・書・詩・禮・春秋)の一。周末から秦・漢時代の諸儒者の古禮に關する説を集めた書。大學・中庸・曲禮・内則・王制・月令・禮運・樂記・緇衣等、二十卷四十分を欺いても知つてゐるものが四つある、の意。
後漢書、楊震傳に次のやうにある。
(震)東萊ノ太守ニ遷サレ、之ニ當ル、郡道昌邑ヲ經グ。故舉ゲシ所ノ荆州ノ茂才王密、昌邑ノ令ト爲リ、謁見ス。金十片ヲ懷ニシテ以テ震ニ遺ル。震曰ク、故人君ヲ知ル、君故人ヲ知ラザルハ何ゾヤト。密曰ク、暮夜知ル者無シト。震曰ク、天知ル地知ル我知ル子知ル、何ゾ知ル無シト謂ハント。密愧ヂテ出ヅ。
【措かんとも】 そのまゝにおかうとも。
【措く】 オク (一)とりはからふ。用ゐる。(二)さしおく。やめる。(三)すゑおく。その場所におく。(四)そのまゝにしておく。用ゐぬ。

九篇から成る。
【公門に下り、路馬に式す】 君の門前を通る時は車を下りて徒歩し、君の馬に對しては車上の禮をする。
禮記曲禮に「士大夫下、公門、式路馬」とある。
【公門】 コウモン おほやけの門。君王の門。公家。
【路馬】 ロバ 天子又は諸侯の車馬。
【路】 は、大の意で、天子服御の物品に冠する。
【式す】 ショクす 「軾す」とも書く。車上の人が車上の横木(式・軾)によつて伏して行人に敬禮する。
【昭々の爲に節をのべず、冥々の爲に行を惰らず】 人の見てゐる明らかな所であるからといつて特別に自分の節操をのべひろげるやうなことをせず、又その反對に、人の見てゐない暗い所だからといつて徳行を怠り捨てるやうなことはない。(參考資料參照)
【昭々】 セウセウ あきらかなさま。
【節】 セツ 守るところのみさを。一定の主義を持して志行を堅固に保つこと。女の身だしなみの貞淑であること。
【のぶ】 信ぶ 物を引きのばす。伸べる。
【冥々】 メイメイ (一)くらいさま。(二)高遠で測り難いさま。深遠なさま。

【廢てじ】 スてじ やめることはあるまい。怠ることはあるまい。
【四知】 シチ 二人で密かに行ひ、誰も知らないと思つても、その實、天も神(又は地)も相手も自分も知つてゐること。こゝは、人を欺いても知つてゐるものが四つある、の意。
後漢書、楊震傳に次のやうにある。
(震)東萊ノ太守ニ遷サレ、之ニ當ル、郡道昌邑ヲ經グ。故舉ゲシ所ノ荆州ノ茂才王密、昌邑ノ令ト爲リ、謁見ス。金十片ヲ懷ニシテ以テ震ニ遺ル。震曰ク、故人君ヲ知ル、君故人ヲ知ラザルハ何ゾヤト。密曰ク、暮夜知ル者無シト。震曰ク、天知ル地知ル我知ル子知ル、何ゾ知ル無シト謂ハント。密愧ヂテ出ヅ。
【措かんとも】 そのまゝにおかうとも。
【措く】 オク (一)とりはからふ。用ゐる。(二)さしおく。やめる。(三)すゑおく。その場所におく。(四)そのまゝにしておく。用ゐぬ。
【さして】 (一)これぞと指していふ程に。さほど。別段に。格別に。
(二)さしあつて。さしむき。こゝは(一)。
【間斷】 カンダン 間のとぎれること。たえま。ひま。ときれ。
【蘭】 ラン 今では一般に、蘭科に屬する多年生草本(らんぐさ)を指す。

らん(しゆんらん)等)を總稱して蘭といふが、古くは蘭草即ち「ふちばかま」を蘭といひ、これに對して今日いふ蘭を蘭花などといつた。こゝも「ふちばかま」であらう。有朋堂文庫本では「ふちばかま」と誤記名を附してある。

「ふちばかま(藤袴)」は、菊科、ひよどりばな屬の多年生草本。高さ一米内外。葉は對生し、下部のものは通常三裂、梢葉は無裂で、いづれも縁邊に粗鋸齒を具へ、乾けば佳香を放つ。秋日梢頭に淡紫色の頭状花を密生房状花序に綴る。果實は瘦果。主として本州の河畔の地に生じ又庭園に栽培せられる。秋の七草の一。別名「しらん」。

【紅葉】 モミヂ 「かへで」に同じ。(一〇九頁「紅葉」参照)

楓科には約百三十種あつて、我が國の山野に自生するもの約五十種、その外栽植變種も極めて多いが、廣義にはこれ等を總稱して紅葉又は楓といひ、その大部分は秋期の紅葉又は黄葉を以て著名である。

【照ればこそ】 うつくしく光るからこそ。つやがよいからこそ。

【管にあふ】 「弓の弦が矢の管に合ふ」の義。物事の調子・都合がよく合ふ。適合する。ばつが合ふ。うまくゆく。

【管】 ハズ (一)弓の兩端にあつて弦輪を掛ける部分。弓の上方に位するのを末管、下方に位するのを本管といふ。ゆはず。

しられじといひ侍りければ」とある。

【なき名】 跡方もない評判。根もない噂。むじつの評判。

【ありなまし】 居られませう、の意。

【な】は、完了の助動詞「ぬ」の未然形で、確めを表す。

【まし】は、推量の助動詞。

【畠山重忠】 ハタケヤマシゲタダ 武藏國畠山庄(現埼玉縣大里郡)の庄司

重忠の第二子。畠山氏は河内平氏に屬する畠山氏の一支で、武藏の名族の一であった。幼名氏王、莊司次郎と

稱し、夙に武勇を以て聞えた。治承四年源頼朝の擧兵に際しては、父重忠が京師に在つて平氏に抑留せられた爲、その徴に應ぜず、却つて頼朝の將和田義盛・三浦義澄等と小坪・衣笠に戦つたが、後頼朝に歸服して先鋒を命ぜられた。壽永二年義仲追討の軍には、義經に屬して宇治川の渡渉に馳名を轟かし、更に義仲を追撃してこれを破り、一の谷の戦には、進んで義經と行を共にして鶴越の奇襲に従ひ、武名全軍に高かつた。義經の論を下るに義を採りてこれを爲す、則ち義經を助けたといふ。文治五年頼朝が奥羽に藤原泰衡を討つや、先鋒として勳功多く、葛岡郡を賞賜、頼朝の歿後はその遺託を受けて頼家保護の任に當り、創業武勳の名士として諸將の推重を受けると共に、漸く北條氏に畏憚せられた。元久二年(一八六五)六月その子重保が事を以て北條時政の女婿平賀朝雅と争ふに及び、時政はまづ重保を襲殺

(二)弓弦を受ける矢の頭。やはず。(三)管と弦と合ふ意から轉じて、事の當然なこと。すぢみち。道理。すぢ。わけ。

【掃除】 はききよめること。掃除。

【蜘蛛の網】 クモのい「蛛網」とも書き、單に「網」ともいふ。蜘蛛の絲。蜘蛛の巢。

【見紛ふ】 ミマガふ みまぎれる。見てとりちがへる。見誤る。

【たしなまずして】 つゝしまないで。

【たしなむ】 嗜む (一)好む。すく。たしむ。(二)豫て心掛け。常に用意する。不時に備へる。(三)つゝしま。節制する。

【期】 ゴ 時。折。

【文らんは】 カザらんは

【文る】 うはべをかざりつくるふ。過をおほふ。

【俄掃除】 ニハカサウヂ 平常は穢くしておいて何かある時に急に掃除をすること。

【なき名ぞとの歌】 そんな評判は跡方もない偽だと、人にはいつてすみしようが、若し自分の心が尋ねたら、どう答へたものであらう。眞實であるだけに何とも答へやうがない、の意。

欄外にある後撰集卷十一、讀人知らずの歌の誤傳であらう。この歌は題詞に「親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしは人に

し、更に重忠を計つて鎌倉に招き、子義時に大軍を授けて二股川にこれを擁護せしめた。重忠は百餘騎を以て奮戦したが、遂に矢に中つて斃れた。享年四十二と傳へられる。

【鎌倉殿の不審を蒙りし時、云々】

文治三年九月、伊勢國沼田に於ける畠山重忠の代官に狼藉の振舞がある由、伊勢大神宮の神官から訴訟があり、重忠は關知しないことであつたけれども、その罪に坐して四箇所の所領没收の上、千葉胤正に預けられた。重忠はこれを恥ぢ寢食を絶つこと七日に及んだので、胤正はこれを頼朝に告げた。頼朝は大いに驚き、十月罪を赦して伊勢以外の本領を安堵し、重忠また深く不明を謝して武藏に歸つた。然るに十一月に至り、梶原景時がこれを讒して、重忠は微罪にして囚れたのを志つて叛を企てつゝある旨を頼朝に告げたので、頼朝は小山朝政・下河邊行平・小山朝光・三浦義澄・和田義盛を召してこれを謀り、朝政の説を容れて行平をして狀を候はせた。重忠は憤懣して自殺せんとしたが、行平に宥められて鎌倉に同道、まづ景時について辯疏すると共に、景時が誓書を求めたのに對しては、武士に言背なき旨を答へてこれを拒絶した。頼朝はこれを聞いて重忠・行平を引見し、たゞ世上の雑事を語るのみで一言も事に及ば

ず、重忠は謝して退いた。(参考資料参照)

【鎌倉殿】 カマクラドノ 源頼朝。左馬頭義朝の第三子。久安三年(一八〇七)生。平治元年(一一三三)藏人に補せられ、同年十二月平治の亂の起ると共に右兵衛佐に任ぜられて父・兄と共に大内に據つた。軍敗れて後父に従つて東國へ向かふ途中、捕へられて六波羅に送られたが、特に釋されて伊豆國姪小島に配流、専ら北條時政の庇護を受けた。治承四年以仁王の令旨を受けて舉兵し、次第に關東諸氏の來附を得て勢大いに振るひ、壽永三年弟範頼・義經に命じて源義仲を討滅、更に二弟をして平家追討の軍に従はせ、同四年(文治元年)三月これを滅した。この月功を以て從二位に敘し、次いで義經と隙を生じてこれを逐ひ、十一月諸國に守護・地頭を置いて賦米を收め、悉く天下の權を掌握、五年正月正二位に進み、九月自ら藤原泰衡を征して奥羽を定め、建久元年上洛して權大納言兼右近衛大將に任じた。二年鎌倉に政所以下の政府を設けて幕府の制全く成り、三年征夷大將軍に補せられて、武門政治の端をこゝに開いた。正治元年(一一八九)正月歿、享年五十三。

【不審】 フシン (一)つまびらかでないこと。たしかにわからないこと。(二)疑はしいこと。あやしむべきこと。こゝは(二)。

【起請】 キンシャウ (一)事を發起して上に請ひ願ふこと。又、その文書。主として平安朝の末頃まで行はれた。(二)轉じて、神佛に誓を立てて、偽のない旨又は約に背かない旨を記すこと。又、その文書。起請文。誓狀。誓文。誓紙。誓詞。誓書。こゝは(二)。

起請文には、祈願的のもの即ち神佛に對する祈願の偽でないことを神佛に誓約するものと、信義的のもの、即ち人間同志の信義を神佛にかけて誓約するものとの二種あるが、後者の場合が多い。その形式は、誓約の内容事項を記した「前書」と、違犯した時に懲罰を蒙るべき神佛を勸請した「神文」或は「罰文」とから成り、日付・署名・花押があり、後世武士のものには更に血判を伴なつた。保元・平治の亂以後漸くその例多く、鎌倉時代以後に於て益々盛に行はれたが、徳川時代に至つては、殆ど定型化した殘骸として用ゐられるに過ぎなくなつた。

【この事に限りて起請をば書くまじ】 今度の事にかぎつて特に起請文を書くやうなことはしたくない。

【いみじきこえ侍れ】 立派に思はれます。

【いみじ】 (一)甚だしい。著しい。(二)すぐれてゐる。(三)かりそめにしまい。大切である。

【きこゆ】 聞ゆ こゝは、きかれる。思はれる。

【侍り】 ヘベリ こゝは、助動詞の如く用ゐて丁寧の意を表す。(六二頁参照)

【我意】 ガイ わが意のままにことをとげよとすること。わがまま。我。剛情。

【案じ當りても】 思ひあたつても。氣がついても。

【案ず】 アンズ (一)考へ思ふ。工夫する。(二)思ひわづらふ。きづかふ。苦慮する。

【是非に】 ゼヒに 「是非ともに」に同じ。理はどうあつても。是非何れでも。どうあつても。必ず。ぜひ。

【いひ募りて】 いよく烈しくいひはつて。いひあがつて。

【我を立つるものなり】

【我を立つ】 ガをタツ 意地をはり通す。わが主張を枉げない。我を張る。

【我】 (一)佛語。梵語 *Atman* の譯語で、常一主宰の義。人の身は五蘊(色・受・想・行・識)が假りに和合して生じたもので、我と稱すべき實體はないのに、誤つて常住の主宰を認めるにいふ。(二)思ふ所をいひ張つて人の言に従はないこと。きまゝ。我意。(三)私利を計ること。私慾。

【實といふもの】 マコトといふもの

【常式の者】 ツネシキのモノ 普通の者。身分の高くない者。こゝは、主人・奉行・頭人などでない者をさす。

【式】 は、のやうなもの、ほど、ばかり、ぐらゐ、等の意を表す。

【この意】 このココロ 我意。

【疎んぜられ】 いみきはれ。

【疎んず】 ウトんず 「疎みす」の音便轉。疎く思ふ。親しまない。いみきらふ。つれなくする。

【奉行】 ブギヤウ (四五頁参照)

【頭人】 トウニン (六二頁参照)

【北條泰時】 ホウデウヤストキ 義時の子。壽永二年(一一八四)生。幼名金剛、通稱江馬太郎。十三歳の時頼朝に召されて元服、頼時と名告り、後泰時と改めた。建仁中伊豆の窮民を賑恤して民心を獲、建保元年の和田合戦には將軍實朝を護つて和田義盛と戦ひ、承久元年駿河守を歴て武藏守に任じた。三年五月後鳥羽上皇の兵を催し給ふや、叔父時房と共に東海道軍の主將として西上、六月時房と部署を分かつてそれ／＼勢多及び宇治に向かひ、宇治川を渡つて官軍を走らせ、遂に京都を占領した。戦後は北六波羅に駐在して京畿を鎮めたが、元仁元年義時の計に接して歸東、時房と共に幕政を執つて、自らは三代執權となり、時房は連署と稱

した。後義時の後室伊賀氏の陰謀を鎮めて幕政を改革、評定衆を置いて衆議に聽き、嘉祿二年藤原頼經を將軍に册立、貞永元年御成敗式目五十一箇條(貞永式目)を定めて善政を布いた。仁治三年(二九〇二)六月歿、享年六十。世に常樂寺殿といはれた。

【政】 マツリゴト (一)君主又は主権者が國土・人民を統治すること。(二)各種の機關をして行はせる萬般の政務。こゝは(一)。

【知られる時】

「知る」「領る」とも書く。つかさどる。占める。領する。うしはく。治める。

【下總國】 シモフサノクニ 東海道十五國の一。現茨城・千葉二縣に分屬。

【地頭】 チトウ こゝは、鎌倉時代に於て、莊園(一八三)を管掌し、非違の檢察、盜賊の逮捕、京都及び鎌倉の警衛等を掌り、守護の命によつて軍役を勤めた職名。

もと莊園の事務を取る爲に領家(一八四)によつて補任された私官で、その職掌も庄官として現地を管理し、年貢を收納するに在つたが、文治二年源頼朝によつて全國に設置され、鎌倉幕府の補任を受けることになつてからは、その職掌も國家の公務としての性質を分有し、守護と同様に國家守護の任務を分擔するに

至つた。しかし一方、庄官時代の慣例もなほ保存され、事實上に於ては領家に對して庄務をも行つた。かくして地頭の庄官的職務ともいふべき年貢の收納と土地の管理中、年貢は毎年收穫を檢査し、慣習の率に従つてこれを徵收し、自己の得分を割取り、領家分は領家の代理人に引渡す義務をもつてゐた。

【領家の代官】 リヤウケのダイクワン 領家の代理人。

【領家】 「領主」ともいふ。莊園の土地所有主をいひ、三位以上の身分のものを特に領家と稱したやうである。自ら開墾して領主となつたものを開發領主又は根本領主といひ、賣買譲渡によつて領主となつたものを開發領主の餘流又は末流と稱した。年貢の徵收、莊内の秩序保全、庄民の民事・刑事の裁判を行ふ權利を有し、その莊園支配を當時、進退・進止・領知・領掌・知行と稱した。而して實際に於ては領主は庄司又は庄官(註)の別があつたが普通には下司を意味し、その名義は時代と場所により一定せず(田代・庄司・庄守・代官・檢校・別當・公文・地頭・總追捕使・田所等があつた)と稱する代理人を補任して莊園内の事務を掌らしめた。

【代官】 「代理の役人」の意で、主君若しくは本官に代つてその職掌を行ふものをいふ。本文の物語當時即ち鎌倉時代から室町時代にかけては、主君の名代を勤めるものを廣く代官と稱した。即ち、將軍に代つて政

務・軍務を見る執權・管領・追討使を始め、兩六波羅探題・九州探題等も代官であり、國司の目代(國守の代理を)や所司代(所司の代理)

も代官と呼ばれたが、室町中期以後は専ら守護代・地頭代(守護、地頭に代つて任地に赴きその職務を行ふ者)の稱となり、更に降つては、地頭代のみを代官といふに至つた。守護代は郡代又は大代官と稱して國の要所を總攝し、代官は専ら收税を掌つた。その後亂世に入つて一時紊亂したが、織豊時代に復し、諸國の年貢收納を掌るものを代官とした。徳川幕府も大體これに倣ひ、直轄領(天領)に代官を置いて收税・訴訟その他の民政を掌らしめた。

【相論】 サウロン 相互に論じあふこと。

地頭は領家方の爲に年貢を收納する義務を帯びてゐたが、正規にこれを渡すことは寧ろ稀で、多くは引渡の期限を遅滞するのみならず、屢々莫大な未納を作つて踏み倒し、又は納貢の額を著しく低下せしめることが尠くなかつた。貞永式目には遅延年貢の引渡を定め、違反者の罰則に所領沒收を規定してゐるが、實際に於ては年貢の未進は積りがちで、その結果領家から地頭を訴へること屢々であつた。但し訴訟の進行中に和解が成立し、讓歩の和與狀を取交して事済みになることも多かつた。

【對決】 タイケツ 法廷で原告・被告を向かひ合はせて行ふ審判。對審。

【尤も】 モットも 道理にかなふこと。道理至極なこと。

【はたと】 (一)物の相あたつて發する音。又、遽に發する聲。(二)ことさしあつたさまにいふ語。突然。(三)にらむさまにいふ語。はつたと。こゝは(一)。

【あら負けや】 あゝ(自分の)負けだ。

「や」は、感動の助詞。

【竝み居ける】 ナミキける ならんでゐた。列座してゐた。

【いみじくも負けけるものかな】 よくも負けただことであるなあ。すなほに負けただことそのことがいみじいとほめたのである。

【某】 ソレガシ こゝは、自稱代名詞。

【代官】 こゝは、執權職をさす。

「執權職」は、鎌倉幕府の職名。もと、政所別當の名で、實朝の頃は大江廣元と北條時政との二人であつたが、北條氏の權力が漸次盛となるに及んで、遂に北條氏によつて獨占・世襲され、幕政總理の職となつた。而して鎌倉幕府の政務中、守護・地頭の職權に關する問題と土地に關する問題とは、主要な部分を占め、幕府に提起される訴訟もそれに關するものが多く、隨つて裁判を行ふことは執權職の主なる職務の一であつた。

【成敗】 セイバイ (一)政事をとりあつかふこと。處置・命令する

こと。(二)裁決すること。さばき。(三)しおき。こらしめ。刑罰。

(四)斬り棄てること。斬罪に處すること。きりすて。(五)取計らふこと。工夫。計畫。こゝは(二)。

【あはれ、負けぬると聞ゆる人も】 あゝあの人の負けだと思はれる人でも。

【陳する習なるに】 チンずるナラヒなるに いひはるのが一般ならひであるのに。

【陳す】 (一)口上でのべる。申しのべる。(二)いひはる。主張する。こゝは(二)。

【前の一通りさもと聞ゆる所】 前の(地頭の)訴陳も、一應は尤であると思はれるにもかゝはらず。

【一通り】 ヒトトホリ (一)よのつね。なみ。尋常。普通。

(二)あらまし。ひとわたり。一應。

【所】 トコロ こゝは、上の語句の意味を反轉して下の語句に續ける語。

【領家の御代官申さるゝ所肝心と聞ゆるにつき】 領家の代官の申される所が事件の急所と思はれるので。

【肝心】 カンジン 「肝腎」とも書く。無くてならぬこと。必要なこと。大切なこと。かなめ。肝要。(肝と心、又は肝と腎と對しては、財産の幾分を没收する規定であつた。

は人體に無くてはならぬものであるからいふ)。

【何事なく】 こゝは、何もいはずに、すなほに、そのまゝ、といふほどの意。

【返すく】 カヘサガヘス (一)しばく。幾度も。再三再四。(二)かさねく。くれくも。實にく。こゝは(二)。

【ましましけり】 (七〇頁「まします」参照)

【苦り切りて】 極めてにがくしきうに。

【苦り切る】 ニガリキル 極めてにがくしく思ふ。甚だ不快さうな顔をする。

【是によつて、云々】

この物語の原據と思はれる沙石集卷三「美言有感事」によれば、

この文の主語は、領家の代官である。(参考資料参照)

【訴訟】 ソロン 訴へ争ふこと。

【僻事】 ヒガゴト (七五頁「ひがごと」参照)

【負け様を感じ】 マケヤウをカンジ 負けぶりに感じ入り。その素直な負け方に感心して。

【未進】 ミシン 納付すべき租税を、期限に至るも未だ進納しないこと。
鎌倉時代には、農民の納付した年貢を地頭等が抑留して未進す

ることが多かつたので、幕府は貞永式目・新式目等に地頭等の抑留に對する處分法を設け、未進の小なるものは直ちに辨濟せしめ、過分のものは三箇年中に辨濟せしめ、なほ皆濟しない場合には所職を改易し、又は所領を沒收した。又、農民の未進に對しては、財産の幾分を沒收する規定であつた。

二 解釋

1 主題

眞の誠。

2 構想

- (1) 誠をつくすは君子の道。(初一八八ノ四)
- (2) 偽をいはぬのみならず偽なきが眞の誠。(八八ノ五—八九ノ八)
- (3) 人を欺かぬのみならず、己の心を欺かぬが眞の誠。(八九ノ九—九二ノ四)
- (4) 我意を捨てて己の心を欺かぬが眞の誠。(九二ノ五—終)

3 敘述

「一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはんは愚かなり、増さすといふは妄なり。」——誰にも理解せられやすい譬喩を設けて、深い人生哲學を説かうとしてゐるのである。「我」と「我にあらざるもの」とを明らかに分析し、誠を盡くす眞風光を會得さ

せようとする用意は誠によく行届いてゐる。

【偽をいはぬに對する信は小さし。偽なきに對する誠は大なり。】

——「偽をいはぬ」と「偽なき」との関係は「信」と「誠」との関係に對比させたのである。そして「信」と「誠」と、随つて、「偽をいはぬ」と「偽なき」との距離が大であることをいはうとしてゐるのである。そして「偽なき」誠の意義を定位しようとしてゐることはいふまでもない。

【昔、衛の靈公といひし君、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く音しけるが、闕下にして音なく、闕下を過ぎてまた鳴りけり。】——奥床しい情景が浮かんで来る。この具體的情景の中から、「誠」の姿を見出し來るのである。

【人知るまじとて欺くは妄なり。】——この命題の理解は容易い。しかしその實行は如何に困難なものであるか。實踐に心を砕いたことのない者の窮知を許さぬ風光である。

【人の見ぬ間とて間斷あらば、草木もおもふまゝには伸びますまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、うつくしく照ればこそ、人至りたる時も香清く、色麗しけれ。】——誠の道の眞風光をかういふ事實の上に指摘して會得させようとしてゐるのである。

「我一生偽をいひしことなし。偽なしと申す上は、この事に限りて起請をば書くまじ」——「この事に限りて起請をば書くまじ」といつてゐる氣魄が面白い。

「人は我意のあるものゆゑに、一旦我がいひ出せし詞は、たとひ悪しと案じ當りても、是非にいひ募りて、我を立つるものなり。これ腐ちたる實のごとし。」——人性の弱點をよく見透してゐる。人は我意で誠を殺してゐるのである。我意のあるのを「腐ちたる實」に譬へる所以である。我意を捨てることによつて始めて己の心を欺かぬ誠が現れて来るのである。

「對決に及ぶ時、領家尤もなる道理申し立てける時、地頭手をはたと打ち、泰時の方に向かひ、「あら負けや」といひければ、竝み居ける人々一同に笑ひけり。」——誰でも我意を張る時に、この地

三 備考

一 指導の問題

讀みに於て、難解な文であると感じさせるであらう。しかし心を集中して文脈を辿つてゆけば、段々そのもつれが解けて来ることを體驗するであらう。分節し、部分を摘出して、何遍も讀ませ、讀みを十分ならしめて解釋の事に入る順序を辿らなくてはならない教材

である。

解釋に於ては、一つの章句から次の章句へ發展してゆくその關係が明瞭に跡づけにくい敘述ぶりである。さういふ箇所はその部分のみに囚はれてしまはず、前後の關係から推せば正しい理解に導くことが困難ではない。又論と譬喩及び事例との關係をよく吟味すれば、

ば、論旨の展開としての構想が見え来るであらう。今試みに、まづ論の方面のみに著眼すれば、最初に「愚」と「妄」とを戒めて「信」を提示し、更に「信」を破つて「誠」を指示してゐる。「誠」の定位と、「誠」の發現としての實踐問題についての考察である。又譬喩・事例の方面のみに著眼すれば、譬喩には海の水の増減とか、粟粟の子、煙草の實の誠とかいふやうな自然觀察から來たものもあれば、一升の米の増減とか、俄掃除とかいふやうな人事觀察に成る假設もある。事例は何れも史上人物の逸話で適切なのみではなく、偉れたもののみである。譬喩・事例と論との關聯に於て注意すべきことは、粟粟の子、煙草の實について「奪ふべからず、隠すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。その時いたるに及んでは、芽を出し葉を生じ、花を開き實を結ぶ」といつてゐる譬喩が、誠の積極性・實踐性に轉ずる基礎を成してゐることである。この消極的な誠から積極的な誠への移動は、うつかりすれば生徒は氣つかずに、又理解し得ずに終ることがないとは保し難い。靜寂といへば無音状態とも考へられるが、眞の靜寂はもつと積極的に身に迫るものを持つてゐるものであるやうに、誠も單なる「偽なき」状態から進んで人を動かす力となるものであることをよく理解せしめたい。

尙、事例に於て、重忠の話と地頭の話とは、一は誠を誠として操

頭は、尤なる道理を聴くや否や、はたと手を打つて「あら負けや」と我意を投げ出してしまつてゐる。天眞の誠の發現が羨ましくさへ感じられる。竝み居る人々は思はず笑つてしまつたほどな天眞ぶりである。そこにこの地頭の飾なき無我の心が鮮に發揮せられて来る。「あら負けや」の一語の、些の屈託もない明朗な譬は今も讀む人の心を明るくする。

三 批評

教誨の爲の文であるが、本質的なものを求めてやまぬ作者の態度の故に、又例話が清新で生きてゐる爲に、比較的教誨文らしい臭味がなく、讀者をして思索に導く力がある。眞の誠の實踐的定位が的確であつて、讀者をしてその實踐に向かはしめる原動力が感じられる點に於ても、この文の力が認められてよいであらう。

守した例であり、一は我意を捨てて誠を立てた例である。前者は我にある誠を誠として立て、後者は他にある誠を誠として立てたものである。誠が我にあれば我を立て、誠が他にあれば他を立てる。そこに誠と一體になつた我が、誠に動かされてゐる我が生きる。前者からは白熱の強さが感銘せられ、後者からは春日の和煦がしみじみと感じられる。又地頭の話ではそれを笑つた人々とそれを感心した泰時とに注目することも必要であらう。人々が笑つたのは勿論輕侮のそれではない。豫期の感情とあまりにも異なつた感情に接した不釣合によつて誘致せられた笑である。泰時は對決を裁く立場にあつた爲に、又人間性についてより深い理解をもつてゐた爲に、不釣合を笑ふよりもその誠の發現に心を射られたのである。それ故、「返す返すもいみじく聞え侍り。正直の人にてましましけり」といつて涙ぐまれたのである。笑つた人々がそこで苦り切つたのは、この泰時の言葉によつて、始めて笑の底にある眞剣なものに突き當つたのである。そして深い感動に導かれたのである。それと同時に、自分たちの笑を反省し、さういふ表情になつたものに違ひない。この複雑な経緯を解きほぐすことも忘れてならぬ解釋の一端であらう。

二 參考資料

本文中に引用の例話をその出典と思はれる書から抄出する。

衛、公與夫人一夜坐。聞車聲、趨至闕而止。過闕復有聲。公問夫人曰、知此爲誰。夫人曰、此蓬伯玉也。公曰、何以知之。夫人曰、妾聞禮下公門、式路馬。所以敬也。夫忠臣與孝子、不爲昭々、信也。不爲冥々、情也。行。蓬伯玉、賢大夫也。仁而有智。敬於事上。此其人必不以闇昧、廢也。是以知之。公使二人視之。果伯玉也。(小學內篇、稽古)

廿一日(文治三年)戊午。行平相具重忠。自武藏國歸參。重忠、景時。陳下申無逆心之由。景時云、無其企者。可進起請文。重忠云、如重忠之勇士者。慕武威、奪取人財寶等。爲二世渡計之由。若及虛名者。尤可爲恥辱。欲企謀叛之由。風聞者。還可謂眉目。但以源家當世。仰武將主之後更無貳。而今逢此。殊也。運之所縮也。且重忠。本自心與言不可異之間。難進起請。疑詞用起請給之條者。對奸者時之儀也。於重忠。不存低之事者。兼所知食也。速可披露此趣者。景時申其由二品。付是非。無御旨。則召重忠。行平於御前。談世上雜事等給。曾不被仰出此間事。小時令入給之後。以親家。賜御劍於行平。無爲相具重忠。爲大功之由云々。(吾妻鏡卷七)

下總國ノ或地頭領家代官ト相論ノ事アリテ、鎌倉ニテ對決ス。泰時ノ御代官ノ時ナリ。重々ノ訴陳ノ後、領家ノ方ニ肝心ノ道理ヲ申立タル時、地頭手ヲハタト打テ、泰時ノ方ヘ向テアラマケヤトイフ。時座席ノ人トモハトワラヒケル。時泰時ウチウナツキテ、イミシクマケ給ヌルモノカナ。泰時御代官トシテ年久ク成敗仕ニ、イマタカクノコトクノ事承ハラヌ。アハレマケヌルトキコユル人モ、カナハヌノユヘヒトコトハモ陳シ申ス習ナルニ、我トマケ給ヘル事メツラシク侍リ。前ノ重々ノ訴陳ハ一往サモトキコユ。今領家ノ御代官ノ披申トコロ肝心ト聞ルニシカヒテ、陳狀ナクマケ給ヘル事、返々イミシク聞エ侍リ。正直ノ人ニテ御坐ケリトテ、ウチナミタクミテ感申サレケレハ、ワラヒツル人々ミニカリテソ見エケル。サテ領家ノ代官モ、日來ハ事ノ子細キ、ホトキ給ハサリケリ。コトサラ僻事ハナカリケルニコソトテ、マケヤウラ感シテ六年ノ未進ノ物三年ハユルシテケリ。ワリナキナサケナリ。是コソマケタレハコソカチタレノ風情ニテ侍レ。サレハ人ハ道理ヲワキマヘ正直ナルヘキ者也。(下略)(沙石集卷三「美言有感事」)

一四 惜陰

貝原益軒

一 解題

一 本文

「大和俗訓」卷一「爲學上」の最後の小部分を省いたものである。「大和俗訓」は寶永五年七十九歳の作で、翌六年刊行された。益軒十訓中最も大冊で、爲學上・爲學下・心術上・心術下・衣服言語・躬行上・躬行下・應接の八卷から成り、爲學では、性・道・教・氣質・人欲・良知・儒學・立志・知行等を程朱學の見地から極めて平易に説き、學問の工夫、讀書の法を本邦の習俗に照らして親切に述べてゐる。「益軒全集」「有朋堂文庫」等に所収。

二 作者

貝原益軒。本名は篤信、字は子誠、通稱は久兵衛。損軒と號した。寛永七年(二二九〇)十一月筑前國福岡城内に生まれた。世々黒田侯に仕へ、父寛齋は醫を業とした。幼時醫書を讀み、藥方に通じ、また好んで佛書を讀んだが、兄元端に四書の句讀を受けるに及んで佛書を抛ち、儒學を以て世に立たうとした。明暦三年京師に學び、

山崎闇齋・松永尺五・木下順庵に従つて學ぶこと三年、業大いに進んだ。初め頗る陸王の學を喜んだが、後その非を悟り、専ら朱子の説を遵奉するに至つた。一時、京師に講筵を開いたが、寛文四年福岡に歸り、藩に仕へて三世に歴仕し、大いに禮遇を受けた。元祿十三年致仕して京都に隱居し、終生研究を怠らなかつた。晩年、朱子の學説に佛老を雜へるを悟り、正徳四年「大疑録」を著した。同年(二二七四)八月歿、享年八十五。性謙遜、博識を衒はず、常に著述を事とし、多く國文を以て草して知識の大衆化を計り、人を利し物を濟ふを以て要とした。又好んで奇勝名區を探り、足迹殆ど天下に遍く、皆行程勝迹を記して旅人に便した。著書頗る多く、修身・教育・養生・農藝・地理等にわたる。「慎思錄」「自娛集」「大疑録」及び「家訓」「君子訓」「大和俗訓」「樂訓」「和俗童訓」「五常訓」「家道訓」「養生訓」「文武訓」「初學訓」の所謂十訓その他、和文の書百餘種に及び、又本草學者として

「大和本草」「花譜」「茶譜」「日本釋名」等の著がある。

三 採擇の趣旨

前課と共に人間生活に關する思惟であり、教訓である。そして前

二 教材としての研究

一 註解

【惜陰】セキイン 光陰を惜しむこと。時間の空しく過ぎるのを惜しむこと。少しの間をも惜しんではげむこと。

【陰】は、ひかげ。日のうつりゆくかけ。時間。光陰。

【隙】ヒマ (一)すきま。(二)時の間。光陰。(三)折。機會。(四)事のない間。絶え間。てすき。閑暇。(五)暫時の休暇。(六)なかつたがひ。不和。こゝは(一)。

【古への禹王は云々】

晉書、陶侃傳に「大禹、聖者、乃惜寸陰、至于衆人、當惜三分陰」とある。

【禹王】ウワウ 支那古代の帝王。夏の始祖。皇紀前一六〇〇年頃の人といふ。傳説に據れば、姓は似、名は文命。顓頊の孫。鯀の子。堯の世大洪水があり、鯀を用ゐて治めしめたが九年にして功成らず、舜が政を攝するに及び、鯀の罪を斷じてその子

課のそれが思惟に集中するのに對して、本課のそれは教訓に傾く所にそれ／＼の特質がある。近世に於ける國民生活の有力な一指導者の言である點に於て國民的教材である。

禹を擧用した。禹は外に在ること八年、三たび家門を過ぎて入

らず、黄河を導き、濟水を治め、江・淮を疏し、拮据經營して遂に功を遂げ、更に天下を九州に分かつて貢賦の制を定めた。

【聖人】セイジン 智徳の圓滿な完成を得た理想的な人格者。支那では古代の堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子等をいふ。尙、伊尹・太公(呂尙)・顔子・曾子・孟子等を賢人とい

り、支那に於ける王位世襲の端を開いた。

【四民】シミン (一)人民の四つの階級。即ち、士・農・工・商。(二)人民。庶民。民衆。こゝは(一)。

ひ、これに亞ぐものとする。

【寸陰】スンイン 極く僅かの時間。

【凡人】ボンジン なみ／＼の者。常人。

【いたづらに】徒らに 空しく。無益に。無用に。むだに。

【悠々】イウイウ (一)遙かなさま。遠いさま。(二)はてのないさま。無限に遠いさま。(三)ひまのあるさま。ゆつくりするさま。ゆつたり。こゝは(三)。

【空しく】ムナしく 無益に。かひなく。

【空し】(一)中に物のない。内容のない。からな。(二)事實のない。あとかたのない。無根な。(三)効果のない。無益な。かひのない。(四)はかない。かりそめな。(五)この世に存在しない。(六)欲心のない。心の淡泊な。

【光陰箭のごとく】歳月は矢のすぎゆくやうに速で。

李益の遊子吟に「君看白日馳、何異弦上箭」、又、黃庭堅の詩に「日月過、箭疾」とある。

【光陰】クワウイン ひま。とき。日月。年月。

【箭のごとし】ヤのごとし (一)急速なことの譬。(二)直くして曲らない譬。

【時節は流るゝが如く】時は水の流れるやうに速に、しかも再びか

へることなく過ぎ去つて。

顔氏家訓に「光陰可惜、譬諸逝水」とある。

【時節】ジセツ (一)ころ。時候。(二)とき。時世。(三)をり。時機。(四)よい時機。よい機會。

【頼んで】タノんで たのみにおもつて。

【四民】シミン (一)人民の四つの階級。即ち、士・農・工・商。

(二)人民。庶民。民衆。こゝは(一)。

【その家のごとわざ】自分の家業。

【ことわざ】事業 すること。しわざ。しごと。

【無益】ムヤク 利益のないこと。役に立たぬこと。むだ。むえき。【はかない】とりとめもなく。むだに。

【はかなし】果敢なし・憊し (一)長く保たない。頼みにならない。もろい。(二)深い考のない。ふとしたことである。かりそめである。(三)とるに足らない。とりとめのない。つまらぬさまである。

【時をわたる】時をすこす。時を経る。

【心を用ふ】ココロをモチふ 注意する。留意する。心がける。

【古人】コジン こゝは、説苑の著者劉向、並びに荀子をさす。

【劉向】は、支那前漢時代の學者。字は子政、本名は更生。皇

【粗學】 ソガク 學問の精密でないこと。學問に精通しないこと。學問に淺薄なこと。淺學。

【不才】 フサイ (一)才智・才能のないこと。又、それのとほしいこと。(二)自分の才の謙語。こゝは(一)。

【くすし】 醫師 醫者。

【賤工】 センコウ いやしい職人。但しこゝは、技術の未熟な人の意であらう。

【道々】 ミチミチ (一)あの道、この道。夫々の道。(二)道すがら。途中。(三)様々の藝能。諸種の職掌。諸道。こゝは(三)。

【たくみ】 工・巧 (一)物を作る業。又、それを職とする者。工匠。

(二)専ら「木匠」の稱。即ち木材で家・橋等を作るを業とする者。大工。番匠。木工。こゝは(一)の前者。

【つたなし】 拙し (一)下手である。(二)おろかである。にぶい。

(三)運がわるい。薄命である。(四)氣おくれがする。こゝは(一)。

【就中】 ナカンヅク 「中に就き」の音便轉。その中で取りわけて。【精力】 セイリョク 事をなすとげる力。心身の能力又は元氣。根氣。精根。エネルギー。

【功】 コウ こゝは、功力。きゝめ。

【氣力】 キリョク 事を行ふに久しく堪へ得る力。根氣。精力。

【やうく】 「漸々」の延といふ。(一)次第を追つて。だんく。次第に。漸次。おもむろに。そろく。おひく。(二)辛うじて。やつと。やうやく。こゝは(一)。

【覚え】 オボエ (一)覚えること。心にとめて忘れないこと。心當り。記憶。(二)技術等についての自信。(三)他人の己に對する感情。寵遇せられること。信用。(四)世の聞え。評判。こゝは(一)。

【淵明】 エンメイ 陶淵明。支那晉代の文豪。名は潛、淵明は字。晉の大司馬陶侃の曾孫。東晉哀帝の隆和元年(皇紀一〇二五)潯陽の柴桑(江蘇省の西)に生まれた。少時より高趣・超俗の風があつて讀書を好み詩文を善くした。はじめ州の祭酒となつたが、吏職に堪へずとしてこれを辭し、後また彭澤(江蘇省)の令に補せられて在官八十日、偶々郡の都郵の來るに當り、下吏より東帶してこれに見えんことを勧められ、「我豈能ク五斗米ノ爲ニ腰ヲ折ツテ郷里ノ小兒ニ向カハン耶」と即日印綬を解いて故郷に歸り、名高い「歸去來辭」を賦した。又門前に五柳樹を植えて自ら五柳先生と稱し、「五柳先生傳」を著した。宋の世となるに及び、徵されて應ぜず、菊を作り酒に親しみ琴を撫し詩を樂しんで、餘生を終へた。宋文帝の元嘉四年(皇紀一〇八七)歿、享年六十三。世に靖節先生といふ。

【詩】 シ こゝは、漢詩即ち支那固有の詩。からうた。

漢詩の起原は甚だ古く、周代に入つて大いに盛になり體裁も備り、更に唐代に入り絶句・律詩の體が起つた。これを近體詩といひ、古體詩と區別した。古體詩は短篇・長篇・短句・長句に制限はなく轉韻も自由で、文字の平仄にも拘らないのが、近體詩になると、字數・句數・平仄韻法に嚴格な法則が出来た。我が國にも早くから傳はつて廷臣の間に流行し、奈良朝及び平安朝初期には甚だ盛であつたが、後次第に衰へ、室町時代には總かに五山の僧によつて命脈を保たれた。徳川時代に入つて再び盛になつたが、明治以後西洋詩歌の影響等によつて衰へた。

【盛年不重來】の詩 氣力の盛な若い時代が二度と來ることはない、一日中に朝が二度あるといふことも決してない。故にその學ぶべき時に於て當に勉勵すべきである。歲月といふものは停つて人を待つことなく、どん／＼經過してゆくものである。

陶潛の雜詩に「人生無根蒂、飄如陌上塵、分散逐風轉、此已非常身、落地爲兄弟、何必骨肉親、得歡當作樂、斗酒聚比鄰、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人」とある。

【盛年】 セイネン 人の少壯の時。若いさかりの年頃。壯年。

【長】 アシタ あさ。よあけ。

【少壯不努力】の詩 年若く元氣盛な時代に努力しなければ、年老いてとりかへしのつかない時になつて、後悔し悲しむやうになるであらう。

沈約の長歌行に「青青園中葵、朝露待日晞、陽春布徳澤、萬物生光輝、常恐秋節至、焜黃華葉衰、百川東到海、何時復西歸、少壯不努力、老大徒傷悲」とある。

「沈約」は、支那南北朝時代の學者。字は休文。梁の武康(武康縣)の人。博く群書に通じ、よく文を屬した。宋・梁兩朝に仕へ、司徒左長史となつたが、梁武帝の受禪と共に、尙書僕射に擧げられ、次いで尙書令に遷つた。天監十二年(皇紀一一七三)歿、享年七十三。當時令名のあつた謝玄暉の詩、任彦章の書を兼ねるといはれ、殊に五言詩に秀れた。「晉書」「宋書」「齊紀」「梁武紀」の外、「通言」「謚例」「宋文章志」「文集」等の撰がある。

【少壯】 セウサウ 年若く血氣の盛であること。若くすこやかであること。としわか。

【老大】 ラウダイ 年をとること。若さを過ぎておとろへてゆくこと。

二 解釋

1 主題

年少の時の惜陰は一生の寶。

2 構想

(1) 幼時から暇を惜しめ。(初九四ノ五)

(2) 暇は人生の寶。(九四ノ六―九六ノ一二)

(3) 年少の時に暇を惜しむことの益。(九七ノ一―三)

3 敘述

〔古への禹王は聖人なりしに猶寸陰を惜しみ給ふ、いはんや今の凡人をや。〕——著筆の重みを感じる。大きな手でいきなり頭を叩へられた感がある。「古への禹王は」と、畏敬すべき人物を掲げ來つた所に、その重みがあるらしい。のみならず、それを、「聖人なりしに」と揚げ、「今の凡人をや」と抑へてゐるのだから、觀念する外はなくなるのである。

〔人の世にあるは、老幼の時と病する時は學びがたし。又、四民ともその家のことわざしげくして、もの學ぶ隙は少し。〕——今度は人間の生活状態を觀察して、寸陰の惜しむべき所以を述べてゐるのである。學ぶ隙の少い世人の生活を知悉してゐる讀者は多からう。しかしそれを生かす工夫を持つてゐる人は多くはない。

〔今年の今日、再び得がたきことを思ひて、かりにもいたづらに時をわたるべからず。是、一生の間心を用ふべきことなり。〕——

隙といひ光陰といった所で、過去と未來とはどうにもならぬ。現在のみが我々の生きた隙であり、光陰である。それをいたづらにしないことの外に惜陰は存しない。

〔たとへば農人・商人の、つとめて暇を惜しむ、朝夕田を作り、商ふ者は、必ず人にすぐれてその家富みて衣食乏しからず。〕——これは世上の觀察から、惜陰の肝要な所以をいふのである。農も商も成就の鍵は惜陰にある。そして惜陰は時間なるものを惜しむのではなく、農事なり商事なりにそれを生かすことをいふのである。即ち自己の生命の充實した具體的時間たらしめるのである。

〔人の寶は暇に過ぎたるはなし。〕——一語簡にして要核を盡くしてゐる。しかもそれは暇を生かして見て始めてその眞義が解せられる實踐的な智慧である。

〔隙を惜しまざる人は、學ぶこともつとむることもなければ、必ず才智も徳行も藝能もなきものなり。〕——具體的時間といふものを持つことが生の生たる所以であるのだから、人生の意義はそこに發揮せられるのである。

〔就中、年少の時は、事少く暇多し。精力強く、記憶強く、一たび

見開きて覚えしこと、身を終るまで忘れず。〕——作者はこの一

章を教へんが爲に説き來つたかの觀がある。「就中年少の時は、事少く、暇多し」といふ提言的確さを注意したい。そしてその効果もまた特に著しいことを指摘してゐるので、最後の「若き時これをよく考へ、後悔なからんことを思ひて、時日を惜しみてつとむべし」を、否でも應でも承服しなければならぬやうに出發してゆく力量が作者らしい強味であらう。

三 批評

作者の教訓には新しさといふほどのものも見出されなければ、深さといふほどのものも感じられない。それでゐて一種の滋味があ

る。これは一體何によるものであらうか。

作者は人を驚かさうとは思つてゐない。人を泣かさうとも考へてゐない。人を笑はさうとは猶更してゐない。作者は唯人を教へようとして厭くことを知らない。作者の教訓の滋味はこの人師として倦むことを知らない懇切に由るものらしい。平凡な、しかし肝要な實行簡條を、耳に入りやすいやうに、承服しやすいやうに、諄々として説き進めてゆくのが作者の教訓である。それが自ら信じ、自ら實踐し來つた眞理であるだけに、些の危げもなければ、少しの隙もない。目がつんでゐて、しかも煩雜さを感じさせない老熟さがある。それがこの作者の教訓の特質かと考へられる。

三 備考

一 指導の問題

益軒の文は平明である。前課の梅園の文に比して讀みが容易く行はれるであらう。唯、平明で論旨の發展が緩徐であるが爲に、讀みが急速に行はれる場合には、精緻な讀解が成立しない恐がある。刺激性や感傷性に乏しく、しかもその展開が緩徐であるから、注意を集中させ、それを持續させる用意が指導上肝要と思はれる。

解釋に於ては、古人の言を引用した箇所が多く、それを根據とし

て論旨を進める外、結果の豫想を基礎として教訓を立ててゆく方法を用ゐてゐる。そこに作者の實踐道德家たる風格が偲ばれる。かう

いふ態度の意義をも併せて理解させる指導が要せられるであらう。教訓には、眞理を眞理として闡明することによつて實踐に導くものと、眞理の實現によつて實踐に導くものと、眞理實踐の結果によつて實踐に導くものがある。勿論、多かれ少かれこの三契機を含まない場合はないけれども、その含む程度には厚薄があり、何れを

主要契機とするかには差異がある。この三者のうち、眞理の追求には敬仰を、眞理の體現には感激を、又眞理實踐の結果には功利を覚えさせられる。青少年が動かされるのは、感激を最とし、敬仰を次とし、功利を劣とする。青少年の健全さはそこに存するのであつて、これが固より當然のことである。「國語」の教訓的教材が主として前二者を採り、功利にはあまり及ばなかつた所以である。

しかし益軒の功利の如き、その動機は功利そのものではなく、眞理の實踐にある。唯、それを耳に入り易からしめんとして用ひた説得の方法に過ぎないものであるから、眼光紙背に徹する底の讀者に對しては、それは功利よりも實意を感じさせる。眞理の闡明によつて實踐に導くもの、眞理の實現によつて實踐に導くものが一は高く、一は華々しいのが常であるのに比して、これは實がその生命をなす所以である。生徒の理解を導く目標はこゝに置かれなくてはならないであらう。

二 參考資料

井上哲次郎博士の益軒評を「日本朱子學派の哲學」から引用する。惺高時中以來朱子學を崇奉して立つもの、果して其幾千萬人なるを知らず、然れども益軒の其間にある、實に孤鶴の群雛中にあるが如く、殊に卓絶せるものなり、若し徳行家として之を觀れば、優に

木下順庵及び室鳩巢と雁行するに足る、若し博識家として之を觀れば、優に林羅山及び新井白石と並立するに足る、然れども吾人は其他の點に於て益軒の豈然一頭地を群儒の間に抜くを觀る、何ぞや、他なし、彼が倫理に關する最も有益なる著書を最も多く世に公にせしこと、是れなり、固より朱子學派の手に成る所の著書、音に汗牛充棟のみならず、然れども多くは是れ經書の註解にあらざれば、朱子の學說の鸚鵡的の反復若くは閑文字たる詩文集の類のみ、若し強ひて倫理に關する一家の見解を敘述するものを擧ぐれば、僅に鳩巢の駿臺雜話、惕齋の講學筆記、尙齋の狼筵錄及び默識錄の類あるのみ、何ぞ其れ寥寥たるや、然るに益軒の如きは、其研究の事項、極めて多方面に涉れるに拘はらず、倫理に關しても、亦一家の見解を敘述する所少しとせず、即ち慎思錄あり、大疑錄あり、自娛集あり、其他初學知要、自警編、克明抄、家訓、五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、文武訓、家道訓、君子訓等、枚舉に遑あらず、何ぞ其れ豊富なるや、鳩巢、惕齋、尙齋等の一家の見解を敘述せる著書を悉皆合一するも、未だ以て益軒に比敵するに足らざるなり、且つ益軒の著書は、悉く躬行に裨益あるものにして、是れを千古不磨の價値ありといふも、未だ必ずしも否定するを得ざるべきなり、此點より之を言へば、益軒の如きは、朱子學派中において屹然挺拔せるも

のなり。

益軒は又我邦に於ける教育家の元祖ともいふべき人なり、王朝時代にありては菅原氏大江氏等力を教育に用ひ、徳川時代にありては惺高、羅山、順庵、開齋等の諸儒、亦皆教育に盡す所なしとせず、然れども是等の學者は、未だ曾て教育其物に就いて考察する所あらず、即ち教育の目的、方法、順序、範圍等に就いて未だ何等の定見を有するに至らず、然るに益軒は始めて教育其物に就いて考察し、教育學の端緒を開けり、殊に彼れが女子教育に著眼せしが如き、大に稱揚すべき所なりとなす、彼れ自身は京坂に江戸に福岡に往來頻繁なりしを以て家塾を開いて多く子弟を教育するの機會を得ざりしと見え、彼れが門人として數ふべきもの、僅々數人のみ、然れども彼れは其有益なる著書によりて廣く社會教育を施し、隱然一大勢力を及ぼしたるもの、如し、又彼れの教育説がヘルバルト氏のそれと殆んど同一轍に出づるものあるは、明治の教育家をして往々驚歎せしむる所なり、他の點は姑く之を置き、教育の目的に於て益軒とヘルバルト氏とは全然一致せり、ヘルバルト氏は教育の目的は徳性を涵養するにありとせり、(Herbart: Aphorismen zur Pädagogik) 然るに益軒も亦氏と同一の精神を懷き、大和俗訓の爲學篇に於て十分に徳性を涵養するの要を論じ、更に初學訓「卷之三」に於て

學問の道は他なし、只道をしりて、善惡を明かに分ち、善を行ひ、惡を去るにあり、
といひ、又慎思錄「卷之一」に
爲學之道、唯以爲善爲事而已矣、
といひ、又自娛集「卷之一」に
大凡學也者欲爲君子之道也、
といひ、分明に教育の目的の徳性を涵養するにあるの旨意を道破せり、東西の暗合、甚だ奇なるが如しと雖も、超實際的立脚點より教育を論じ來たれば、必然に此に到着せざるを得ず、ヘルバルト氏曰く、
プラトンよりフィヒテに至る迄教育に就いて多少思惟し、且書き著はせる偉人は、皆理想に向つて努力することを示せり、而して如何にして然らざることを得るか、(Aphorismen zur Pädagogik)
眞に然り、然るに益軒の如き東洋の教育家も、亦理想に向つて努力するの一人たることを忘るべからざるなり、此點より之を觀れば、尙ほ一層益軒の蠢々たる群儒の間に卓絶せる姿勢を想見するを得べきなり。

一五 湖畔の冬

島木 赤彦

一 解題

一 本文

「赤彦全集」(卷八)第六卷所収の「諏訪湖畔冬の生活」の殆ど全文を掲げた。(赤彦全集第六卷 昭和四年十二月、岩波書店發行)
 「諏訪湖畔冬の生活」は大正十二年一月、雑誌「新小説」に發表せられたものである。

二 作者

第二課「あづさの紅葉」作者参照。

二 教材としての研究

一 註解

【富士火山脈】 フジクワザンミヤク 所謂フォッサ・マグナ及びその南方延長線上に、北北西・南南東に走る火山帯。

フォッサ・マグナに沿うて最北には妙高火山群(妙高山・赤倉山・鶴山・雨山・平山等がこれに属する)が信越兩國に跨かつて發達し、その南方には諏訪地

三 採擇の趣旨

自然と人との關聯を描いた二課を、道徳的思索の文字であつた前二課の後に置いた。そのうち本課に描かれた生活は、眞に「誠」と「惜陰」とをよく實現した生活である點に於て、又眞に深く郷土の自然と人とを把握した描寫である點に於て、文藝的教材であり、國民的教材である。

薄の東方に當つて八ヶ嶽火山群(霧ヶ峯・穂科山・八ヶ嶽がこれに属する)が連なり、更にその南方には富士火山群(富士山・愛鷹山・南根山・天城山等がこれに属する)がある。それより南部は豆南諸島(三原山(大島)・雄山(三宅島)・御山(御嶽島)・硫黄列島等の新舊火山島から成り、南端はマリヤナ群島に達する。)「フォッサ・マグナ」(Fossa Magna)は、本州中部を横断しこれを

東西に分かつ地溝帯で、その西縁は静岡―糸魚川線と呼ばれ、東縁は甲府盆地から千曲川に延びる線によつて境される。

【火山脈】 「火山帯」ともいふ。地殻の弱線に沿うて火山の帶狀に分布したもの。

【信濃】 シナノ 東山道十三國の一。現長野縣の地。

【八ヶ嶽】 ヤツガタケ 長野縣諏訪・南佐久兩郡及び山梨縣北巨摩郡に跨がる富士火山脈中の高峯。南は日本南アルプスの駒ヶ嶽・鳳凰山の高峯と相對し、東南は千曲川上流の谷を隔てて關東山地・秩父連峯と相望んでゐる。外輪山・中央火口丘・寄生火山から成る消火山で海拔二八九九米。外輪山は成層圓錐火山の山頂部が著しい浸蝕を受けて開析・破壊せられたもので、北より順次峯ノ松目(二五六七米)・横嶽(二八三〇米)・赤嶽(二八九九米)・權現嶽(二七八六米)・編笠山(二五二四米)・西嶽(二三六四米)等が聳立し、半圓狀に竝んで西方に開くカルデラ狀破谷の周壁をなしてゐる。中央火口丘阿彌陀嶽(二八〇七米)はこれ等諸峯の略中央に位する成層火山で、寄生火山硫黄嶽(二七四二米)は外輪山の北東側に位して扁圓錐形を呈し、北方に噴火口址がある。裾野は外輪山の峯頭から次第に傾いて東西南西の三方に展げ、北方は蓼科火山に續いて東西の小分水嶺をなしてゐる。

【蓼科山】 タテシナヤマ 「立科山」とも書く。諏訪・北佐久兩郡界に跨がる富士火山脈中の一峯。海拔二五三〇米。山容は、舊火山體上に更に小火山が噴出して大圓錐形の上に小圓錐を戴き、外輪山・中央火口丘を缺いてゐる。南方には横岳・茶臼山・根石岳・八ヶ嶽が連なり、裾野は北東に延びて千曲川の畔に及び、西方は八子ヶ峯・車山・霧ヶ峯に續き、八ヶ嶽の裾野と相連なつて諏訪盆地をなしてゐる。

【霧ヶ峯】 キリガミネ 諏訪郡上諏訪町の北方に在り、車山(海拔一九二五米)を主峯とする扁平な楯狀火山の西腹の一部をなす高原性の山塊。
 作者の「女子霧ヶ峯登山記」に「霧ヶ峯は、八ヶ嶽火山彙中の北端にある休火山で、(中略) 高さはやつと二千米突内外で、その上に傾斜が極めて緩慢で、(中略) 山の面積の極めて廣大なるに比して、高さが前記の如くであるから、一寸見には、根からダラシの無い、不恰好な、何處に主峯があるかさへ分らぬ草山で、云はば火山中の老朽者と云ふ位置であるが、登つて見て、何處までも奥行の知れぬ廣さが、他の侷屈な少壯火山(形から見立て)と異なつたよい感じを與へる。云々」とある。

【丘陵】 キウリョウ (一六四頁参照)

【諏訪湖】 スハコ 長野縣諏訪盆地に在り、八ヶ嶽火山の噴出物により地溝の排水口が堰止められて生じた、斷層及び堰止の複合湖。海拔七五九・六米、湖岸線一八・一八軒、面積一四・四方軒、最深七米。水源を八ヶ嶽・蓼科山並びに山梨縣との境の富士見峠に發し、岡谷町の近傍から排水して天龍川となつて南流し、遠州灘に入る。湖の東邊には温泉列があり、又水中にも温泉の涌出する漏斗状坑があつて七ツ釜と稱せられる。多期は湖面氷結し、その際湖面の中部を横切つて幅一米餘の氷堤が出来る。これは氷殼の冷却に伴ふ收縮による裂罅と、その裂目に凍結した氷殼の膨脹による鞍狀隆起によつて生じた物理的現象で、古來これを御神渡みかみわたと稱して神聖視せられる。湖面結氷六〇種の厚さに達し、スケートが盛に行はれる。湖中には鯉・鮒・鰻・鰻・赤魚・鮫・鰻等の魚貝類を産し、漁獲高は山間の湖では我が國第一である。

【傾斜】 ケイシヤ (一)かたむいて斜になること。又、その程度。かたむき。(二)地質學上で、傾いた地層面が水平面となす角度。こゝは(一)。

【私の村落】 作者の郷里、諏訪郡下諏訪町高木をさす。

【高木】 は、上諏訪・下諏訪兩町の略中央、諏訪湖北畔の大見山(海拔一三六二米)中腹に在る純粹の農村。作者の「山中雜筆」

に「私の村は、諏訪湖から山に向つて數町上つた高所にあるから、庭に出ると足下に湖水が見え、目の上には山が續いてゐる。(中略) 村の道を通る人は日に一度来る郵便配り乾物魚類の行商等の外殆ど村の人ばかりである。村の人と言つても人口總計四百五人であつて、その人々が晝は大抵田や畠へ出てゐるのであるから、道を通る人は甚だ少い。云々」とある。

【村落】 ソンラク むらざと。村邑。

【落】 は、人の聚居するところ。むら。

【織かに】 ワヅかに こゝは、いさゝか、すこしばかり、の意。

【宅地】 タクチ 建物の敷地、又はその敷地に供せられるべき土地。屋敷地。家宅敷地。

【茅葺】 カヤブキ 茅で屋根を葺くこと。又、その屋根。

【板葺】 イタバキ 板で屋根を葺くこと。又、その屋根。

諏訪地方では、板葺といつても、小板と平石とを交互に葺いてある。

【落葉樹】 ラクエフジュ 「常緑樹」に對する語で、秋期全部の葉が短時日間に枝より離脱する樹木。例へば楓・櫻・栗・檜・樺・樺・梅等はこれで、落葉後は越年する芽を残したまゝ休眠の姿で春を待ち、時来れば一時に萌芽して葉を著ける。尙、この種の樹木で

は落葉に先立つて紅葉現象の見られるものが多く、又落葉現象は温帯地方に著しいもので、熱帯地方には落葉樹が少い。

【常緑樹】 は、一般に葉の壽命が落葉樹のそれよりも長くて數年を保ち、比較的長期間に亘つて少しづつ落葉するもので、その落葉は多く新葉を生じた後に始るが故に、全體としては常に綠葉を著けてゐる。松・杉・檜・椎・樺等はこれに屬する。

【あらは】 露は あらははれてあること。むきだし。

【結氷】 ケツビョウ 氷のはること。又、その氷。

絶えず寒氣に觸れる上層の水は冷えて重くなる爲内部に沈み、内部の水はこれに代つて上層に浮かび出て對流が行はれ、全部の水温が攝氏四度(水の密度は攝氏四度に於て最大で、凡そ一立方センチにつき一グラムである)となるまでこの現象は繼續する。上層が更に冷えると水の密度は再び小となつて最早對流が行はれず、攝氏零度に至つて漸次上層から結氷する。

【嚴冬】 ゲントウ 嚴しい寒さの冬。まふゆ。

【鬚の凍るのは】

外氣が非常に冷却してゐるので、吐き出す息が凍つて鬚に凝結するのである。

【鬚】 ヒゲ 元來は、あごひげ。おとがひのひげ。(「鬚」は口ひげ、「髯」はほゝひげ)。

一五 湖畔の冬

【睫毛】 マツゲ 眼瞼縁に並列してゐる毛で、過度の光線や塵埃等に對して眼球を保護する。

【凍著】 トウチャク こほりつくこと。

【蝨して】 チツして とちこもつて。籠居して。

「蝨(チフ・チツ)―(一)かくれる。蟲類が土中などにかくれる。(二)轉じて、とちこもる。外出せぬ。

【炬燵】 コタツ 部屋の内に爐を切り、その上に格子に組んだ木製の槽を置き、布團などをかけて暖をとるもの。

【暖をとつて】 身體を温めて。あたゝまつて。

【暖】 ダン あたゝかみ。あたゝまり。

【漁獵】 ギョレフ 魚を捕へることと鳥獸を捕へること。こゝは、主として魚を捕へること。

【たゞき】 多期諏訪湖で行はれる特殊な漁法。

多期に於て一定してゐる魚族の通路を選んで湖水を截り、四手網又は「うけ」を取付けた簀を下し、そこへ魚を追ひこむもので、その獲ものは、主として、むろ・鯉・鯉・小鮒等である。現在では漁業組合の規定によつて禁止せられてゐる。

【俯目】 フシメ うつむいて物を見ること。俯視。

【視線】 シセン (二六〇頁參照)

二二九

【揮ふ】 フルふ こゝは、動かし扱ふ、つかふ、使用する、の意。
【水を打つ槌先が云々】

光の速さは真空中に於て毎秒約三〇〇、〇〇〇軒、音の速さは温度攝氏零度の乾燥せる空氣中に於て毎秒約三三〇米（温度攝氏一
米づつ増す）であるから、眼で見える物の音が耳に聞えるまでには、距離が遠ければ遠いほど多くの時間を要する。

【視覚】 シカク 物の色と明るさを感じし、以て物の形・大きさ・位置・運動、及び物と物との關係等を識らしめる感覺。

視覚を掌る器官は視器即ち眼で、光を感じるはその網膜である。即ち寫眞器の絞りに類する虹彩によつてその量を調節されたる光は、鏡玉に相當する水晶體その他の作用によつて、乾板ともいふべき後壁の網膜に感じ、視神經を通じて腦の視覚中樞へ傳達されるのである。この眼球の最外部には眼瞼があつてほゞシャッターの役目をなし、又、網膜以外の眼球の壁は角膜・鞏膜・脈絡膜から成つて、眼球を完全な暗箱たらしめてゐる。

【聴覚】 チャウカク 物體の發する音響を感じし、以て距たつた場所の出來事を認知せしめる感覺。

聴覚を掌る器官は聽器即ち耳で、外耳から入り込んだ音響は、外耳と中耳との境にある鼓膜に達し、次いで中耳の聽小骨から

内耳中の淋巴液に傳はつて聽神經の末端を刺激する。

【交錯】 カウサク 入りまじること。かれこれ入り組むこと。

【徹して】 テツして こゝは、澄み通つて、の意。

【やつか】 (ヤッカと發音) 「屋塚」の義。冬期諏訪湖で行はれる特殊な漁獲の爲に水底に設けられる積石。又、それを用ゐる漁法。

「やつか」を築く地點は水深六尺乃至一丈の湖底に選ばれ、普通四十箇乃至六十箇の小石によつて作られる。これを揃ひ上げる道具には萬能鐵の外に、鐵板製の特種な鋤（すく）などが用ゐられる。又「やつか」の周圍に下される竹簧に取付けられる「うけ」は普通一箇(稀に二箇)である。この漁法による獲ものは、主として、大蝦・むろ・鯉・小鮒等である。

【藻草】 モグサ 俗に藻又は藻草といへば、植物學上の藻類（藻類・藻類）に屬する。大別される水産下等植物の類（水産下等植物の類）及び廣く水中に浮游又は沈在する植物（水産下等植物の類）の特殊の形態を有するもの（たけなも・ふさぎ・きんぎよ・むじなも・くろも・いばらも・ひるむしるも・さきも・あつちも・きんぎよ・むじなも・さきも・あつちも・きんぎよ・むじなも・さきも・あつちも・きんぎよ・むじなも）を一括していふ。諏訪湖に多いのは「ふさも」（ありの「いばらも」の類である）。

藻類は、殆ど全部が海産で、淡水産には肉眼的のもののは殆どない。諏訪湖では、夏には藍藻、冬には珪藻に屬する微小藻類が、所謂「水の華」をなして一面に浮游するけれども、こゝに

【藻草】とあるのは、もとよりそれをさすのではない。

【土用】 ドヨウ (一)曆の上で、四季を通じて、各々その終約十八日間の稱。春の土用は立夏(五月六日頃)の前約十八日。夏の土用は立秋(八月九日頃)の前約十八日。秋の土用は立冬(十一月八日頃)の前約十八日。冬の土用は立春(二月四日頃)の前約十八日。(二)俗間に、専ら、夏の土用十八日間の稱。

【寒中】 カンチュウ 曆の上で、二十四節氣中の小寒(一月六日頃)から立春(二月三日頃)に至る間をいふ。かんのうち。

【潜む】 ヒソむ 隠れてひっそりとしてゐる。かくれしのぶ。ひそまる。潜在する。潜伏する。

【交叉】 カウサ すちかひになること。たがひちがひに組合はせること。すちかひ。ぶつちがひ。うちちがひ。

【圓を畫して】 エンをクックして 圓形を描いて。
【畫する】 (一)かぎる。わかつ。區分する。(二)繪をかく。線を描く。(三)もくろむ。はかりごとを立てる。

【竹簧】 タケス 竹で作つた簧。竹のすのこ。たけすのこ。
【簧】 竹又は葦等を麻絲等で編み上げたもの。

【まんのんが】 「萬能鐵」の訛。鐵の一種。鐵（鐵）と柄から成り、鐵が數本に分かれてゐるもの。萬能。

【簇り】 ムラガリ
【簇る】 叢り聚る。密聚する。

【うけ】 魚を捕へる具。竹で圓く長く筒狀に編んで、一方を閉ぢ、口に細割の竹の表皮を編んだ漏斗形の蓋がはめてあり、一旦中に入つた魚は出ることが出来ないやうに作つたもの。

【魚籠】 獲つた魚を入れておくもの。以前は専ら竹で編んだものが使用されたが、近時は網や金屬等をも用ゐて、種々の形状のものが出てゐる。

【感覺】 カンカク 内外の刺激が我々の身體各部に分布する神經の末端に興奮を與へた場合、その興奮が神經纖維中に衝撃を起して神經中樞に傳はり、大腦皮質の神經細胞を興奮せしめることによつて生ずる意識現象を知覺といひ、この知覺といふ具體的な意識内容を内省的に抽象したものを感覺といふ。即ち、我々は見ること、聞くこと、痛みを感じることに等により、外界の事物を認め又身體の狀況を識るのであるが、この見ること、聞くこと、痛みを感じることに等の働きが知覺で、その中に含まれてゐる單なる感じ（例へば赤い感じ）が感覺である。しかし、感覺と知覺とは普通混同して用ゐられ、純粹に感覺のみを考へることは多く不可能である。感覺には、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・皮膚感覺（觸覚・痛覚等）等の

如く外部の刺激によるもの外、体内器官の作用・状態が刺激となつて生ずるものとして、筋肉・關節・臍等に起る位置・運動の感覺、内臓の状態又は變化に伴ふ有機感覺等がある。

【凍える】 ヨゴえる 甚だしい寒さの爲に感覺を失ふ。
【火鍋】 ヒナベ 手が普通よりも長く、物に吊るして火を焚くに用ゐられる鍋。

【楯木】 ホタギ (一)「楯」に同じ。焚物として用ゐる木の切端。そだ。(二)その皮部から椎茸を發生せしめる爲の木(櫛・櫟・椎・栗等の類)。こゝは(一)。

【交渉】 カウセウ (一)かけあふこと。かけあひ。談判。(二)かゝりあひ。關係。こゝは(二)。

【杜絶】 トゼツ ふさがり絶えること。ふさがたつこと。
「杜」は、ふさぐ。たつ。

【氷魚】 ヒヲ こゝは、寒中氷を割つて捕へた魚。氷づけの魚。
【脂が乗り】 アブラがノリ 脂肪分が多くなり。

【脂が乗る】 (一)脂肪に富んで身體が健全に發達する。(二)事をなすに調子づく。氣乗りがする。

【硬度】 カウド かたさの度合。
【勞作】 ラウサク (一)骨折り働くこと。ほねをりわざ。(二)勞力

ぎに急いで。しきりに。せはしく。せか／＼と。

【睡氣さまし】 ネムケさまし ねむけをさますこと。ねむけを防ぐこと。又、そのしわざ。ねむけさまし。ねむりさまし。

【連夜】 レンヤ 幾夜もつゞくこと。毎夜。毎晩。夜々。
【壘壁】 ルキヘキ とりで。城塞。壘砦。壘堡。

【壘】は、敵に備へる爲に兵士を置く小城又は櫓・障壁の類。
【筵】 ムシロ 「席」「席」とも書く。(一)藁・蒲・粟・竹等で編んだ敷物。(二)「わらむしろ」の略。こゝは(二)。

【白晝】 ハクチウ まひる。ひるなか。白日。

【海拔】 カイバツ 平均水準面からの土地の高さ。標高。平均水準面の高さは各地の海によつて多少の差がある爲、各國では便宜上それ／＼國內の或特定の地點に於ける平均水準面を基礎として所要點の海拔高度を測る。我が國の陸地測量部では東京灣の平均水準面を基準としてゐる。

【草鞋】 ワラヂ 「藁沓」の音便轉。

【機】 ハタ (一)經絲を渡し緯絲を通して布帛を織る機械。おりばた。たなばた。(二)「機物」の略。機で織つた布帛。こゝは(二)。

【機臺】 ハタダイ 布を織る機の臺。
諏訪地方の機は、木製で、皆組立式になつてをり、平常は解體

を費した藝術上の作品。こゝは(一)。

【宵の口】 ヨヒのクチ 日が暮れて間もないとき。宵のうち。

【宵】 (一)夜。夜間。(二)夜に入つて間もない時。初更。初夜。

【口】 こゝは、物事のはじめ、おこり、の意。
【雪沓】 ユキグツ 雪道に行くに履く深い藁製の沓。

【かつちき】 「かんじき」の訛。雪の深い時に、履物の下につけて、埋没・滑落等を防ぐもの。形態・種類多く、木枝を撓めて輪にして作つたもの、或は數本の爪を有する鐵製のものなど種々ある。

【著ぶくれ】 キぶくれ 重ね著してふくれあがること。

【扮装】 フンサウ いでたちよそほふこと。よそほひ。いでたち。

【鋸挽き】 ノコギリビキ 鋸で物を挽き切ること。

【水鉄】 コホリバサミ 水をはさむ用具。一般には、先端を尖らせ、執手をつけたもの。家庭用としては、先端を平たく幅廣にし、滑りを防ぐ爲にぎざ／＼をつけたピンセット状のもの。

【龜裂の音】 キレッツのオト こゝは、諏訪湖面の氷殻が龜裂して、所謂御神渡の生ずる際に發する音。(二一八頁「諏訪湖」参照)

【龜裂】 龜の甲のやうな割目。又、ひびが入つて裂けること。こゝは後者。

【せつせと】 「せつせつと」に同じ。急ぎ勵むさま。たえまなく。急

して藏つて置く。

【多枯】 フユガレ (一)冬になつて草木の葉の凋落すること。(二)冬の景色の寒くて淋しいさま。こゝは(一)。

【閑寂】 カンジャク (一)ものしづかなこと。心しづかなこと。淋しいこと。閑靜。(二)日本文學に於ける一つの美の理念。さび。こゝは(一)。

【隣保相依る心】 リンポアヒヨるココロ 隣近所の者が相互に深い親しみをもつて、たよりあふ心。

【隣保】 (一)互に近接して住む家々。又、その人々。(二)近隣の人々によつて組織せられた組合。こゝは(一)。

【同情的交流】 ドウジャウのカウリウ 同情の心がお互同士の間を交互に流れ通ふこと。

【交流】 電流が、ほゞ一定の時間毎に交互に逆の方向に流れること。又、その電流。轉じて、これに類する現象又は作用。

二 解釋

1 主題

冬の諏訪湖畔に於ける我が村落の自然と人。

2 構想

(1) 私の村落、諏訪湖畔の冬。(初一九九ノ二)

(2) 湖上に於ける水上の勞働。(九九ノ二—一〇八ノ七)

イ 漁獵——「たき」と「やつか」。

ロ 氷切り。

(3) 夜の槩細工と日中の機織。(一〇八ノ八—終)

3 敘述

〔最高所の家は丘陵の上であり、最低所の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜面に、百戸足らずの民家が散在してゐる。家は茅葺か板葺である。日用品小賣店が今年まで二戸あつたが、最近三戸に殖えた。その他は皆純粹の農家である。〕——村の概観を記述してゐるのであるが、小賣店の二戸が三戸に殖えたといふ敘事は、純農村を浮彫にする。

〔山から丘陵、丘陵から村落へつゞく木立が、多く落葉樹であるから、冬に入ると、傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から反射する夕日の光がこの村落を明るく寒くする。〕——地形的な記述から進んで、愈々村落の自然的性格の描寫にはひつて來た。簡潔な筆致で、視線を障げる何ものもない湖に傾いた村落の明るさと、その故の肌寒さがよく把握せられてゐる。「明るく寒く」といふ主體的な言表は一寸理解をまごつかせると共に、實感の出た語句で、曠落とした光景が眼前に浮かんで來る。更にそれが「寒

さがおひ／＼に」といひつゞけられて、觀察の中心が湖にうつつてゆく行き方も味はひ深い。

〔朝、戸外に出れば、鬚の凍るのは勿論であるが、時によると、上下睫毛の凍着を感じることもすらある。かやうな時は、顔の皮膚面に、響き且裂けるが如き寒さを感じる。〕——寒いといふよりも痛いといふに近いこの感覺は、寒國に生まれ育つた體験からでなくては理解せられないものであらう。

〔それ程の寒さにあつても、人々は家の内に蜷して、炬燵に暖をとつてゐることを許されない。〕——農家の生活狀態が、そして勤勉な生活態度が語られてゐると共に、以下の水上勞働の序説でもある。

〔この頃、私の村では、毎朝未明から、かあん／＼といふ響が湖水の方から聞えて來る。〕——一度それを耳にしたら、耳について離れないといつた音をあげ、それが「たき」なる漁獲法であることを明らかにしてゆくのである。

〔目に來るものも、耳に來るものも、微かに徹して明瞭である。單にそればかりではない、一列の人々の話し聲までも手に取るやうに聞える。〕——沈靜そのもの、透明そのものといふべき山上の湖畔である。湖面も作者の神經もそれを包む空氣も、萬象も皆

水晶のやうに澄み切つてゐるのである。

〔凍つた石が黒山を成して氷の上に積み上げられる頃は、「やつか」の底には青藻と共に揺れ動いてゐる魚族がある。〕——働いてゐる人の行動を敘するのに、その働いた結果だけを寫して人物を表さない爲に、如何にも黙々と立働いてゐる様が窺はれる。

〔湖面を吹く風は、障るものなき氷上を一押しに押し來る。「まんのんが」を持つ手は時々感覺を失はうとするまでに凍える。〕——たゞさへ寒い山上の、しかも氷の上に吹きさらしになつた人々の寒さをつく／＼思はせられる。全く命を賭けた勞働であることが思はせられる。

〔「たき」で捕つた魚も、「やつか」で捕つた魚も、所謂氷魚であつて、脂が乗り肉が締つて甚だ佳味である。併し、その佳味は、これら漁人の口に入ることは稀であつて、多くは隣の町へ運ばれて、多少の金と換へられるのである。〕——かういふ漁獲も道樂や遊山にやつてゐるのではない。全く「多少の金」と換へんが爲に外ならぬのである。

〔氷切りの作業は、快晴の夜を擇んで行はれる。温度が低下して氷の硬度が増すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。〕——こゝにも亦死線に立つ勞働であることが暗示

せられてゐる。寒國の農民はかくして生活してゐるのである。

〔水を挽く手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が馴れるのである。〕——一心不亂に立働いてゐる人々の様子が目のあたりに浮かんて來るやうな描寫である。

〔大凡一望平坦な氷原にあつて、空は手の届くやうに低く感ぜられ、星は降る如く光り満ちてゐる。星の光は、水にあつて水の明りとなり、水にあつて氷の明りとなり、その明りに全く馴れるに及んで、相隣する人の顔まで明瞭に見えるやうになる。〕——この世ならぬ世の美しさである。星明りの氷原の神秘さ、美しさがまざまざと描寫せられてゐる。

〔夜が漸く更けて、寒さが益々加ると、氷原の所々に龜裂の音が起る。その音は氷原を越えて四周の陸地・山地にまで響きわたる。〕——氷原の夜の寒氣と靜寂とが天地を領し、人の身に迫つて來る趣である。

〔ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、重く、鈍く、底のない響であり、聞いてゐればゐるほど物遠い感じがする。〕——夜晩く家に居て聞く音である。靜かな夜を益々靜かにする音、それを耳傾けて聞いてゐる作者。「重く、鈍く」といひ「底のない響」といふ。更に「物遠い感じ」といふに至つては、この槌の音が如實

に再生して来る農村生活の象徴とでもいひたい音である。

「どの家の機は今日で何日目であるとか、どの家の機は何日かよつて織り上つたといふやうなことを、女たちは音を聞いて皆知つてゐる。」——静けさはまた平和と同義語でもある。女達の心はそれぞれ機の音に於て交流し合つてゐる。そしてそこに勵ましも慰めも感じてゐるのである。これも亦冬の寒さの驚す恩恵の一つであらう。

三 備考

一 指導の問題

感傷や興奮の表現ではなく、實踐的意志的把握の表現であるだけに、讀みに於て興味で引込まれてゆくといつたやうな安易さを感じられないかも知れない。しかし少しく注意を集中して、その實況を想像に描きながら讀み進めて行けば、そこにはまた深い關心を抱かしめられるやうな事實に觸れ得るであらう。

都會生活といふものは、一般に理解に入り易く、誰の興味をも惹き易いが、村落生活といふものは、理解や興味の對象になり難いものである。その理由からも、讀みに入る入り方については何等かの指導があつて然るべきであるかも知れない。さういふ爲に挿圖が役

三 批評

歌人赤彦が己を育んでくれた湖畔の地を、またその生活を、その骨髄に於て寫生した文である。随つてそこには、旅行者としての興奮や感傷では企及することの出来ない實踐的把握の確さと意志的透徹の深さがある。郷土を描いた文學として、また生活を寫した文學として傑出してゐるとともに、冬の文學として特色のある篇である。

立てばよいと思ふ。註解の如き、地方特有な言葉が混入してゐる外は、事實的説明が主要なものと思はれる。

解釋の問題としては、嚴冬の威力の下に命がけで生きぬかうとしてゐる人々の生の姿を中心として、その背景を成す自然が克明に明徹に描かれてゐることが理解せられることに外ならない。長篇であるから、讀みに於て握られたものの三段落を見出すことから解釋に入るのが自然な順序かと思はれる。そして敘述問題を質疑應答によつて取上げてゆき、段落が構想として理解せられ、更にその中核としての主題が意識せられた時に、體系的な理解が成立するであらう。そして、いかにも淡々とした寫生の奥に、又いかにも冷靜な敘

説の底に、自然の威力の前に黙々と働いて倦むことを知らない人々の生に對する深い情熱が籠つてゐることが、そしてこの情熱の發展がこの一篇を成立せしめてゐることが會得せられ来るであらう。

かくの如きはその郷土の人のみ描き得る郷土文學であつて、卷五の一七「水郷」と相俟つて、郷土愛の深さに於て共通し、そこに示された作者の個性に於て對照をなす二篇であることが氣つかされる。

二 參考資料

(一) 原文のうち、本文の第九頁第一一行「寒さを感じる」の次に省略せられた部分を掲げる。

信濃南部の松本地方、諏訪地方、伊那木曾地方は、冬に入つて多く快晴がつづく。雪が少く、空氣が乾いて、空に透明に過ぎるほどの碧さを湛へる。皮膚に響くが如き寒さを感じるのは、空氣が乾いてゐるためである。殊に、諏訪地方は、信濃の他の諸地方に比して更に高所にあるから、寒さの響き方がひどいのである。寒さを形容するに響くといふ如き詞を用ひ得るは、空氣の乾燥する高地に限るであらう。南信濃、殊に私の住んでゐる諏訪地方などには、この詞が尤もよく當て嵌まるのである。

又、本文の結末に續いて左の省略がある。

寒地である諏訪は、天然物が豊かでない上に、舊藩時代には誅求

が可なり酷かつた。そのため、昔より人民に勤勉と質素と忍耐の習慣を造りあげた。信濃人は勤勉であると言はれてゐるが、その中で、諏訪人は殊に秀でて勤勉である。この習慣が今の生絲や寒心太の産業を生み且つ發達させた。私の住んでゐる寒村の人々が、嚴冬の湖上に於て、晝夜となく働いてゐるといふことは、その諏訪人の氣風の片鱗である。

(二) 作者の歌集「水魚」中から大正九年の作「水湖」と題する歌を引用する。

水湖 一

ここに於て坂の下なる湖の水うづめて雪積りをり
みづうみの水に立てる人の聲坂のうへまで響きて聞ゆ
遠き沖の水をたたく漁槌の音槌におくられて響き
つつあり
朝なあさな人ら曳きおろす材木の木の皮つけり
凍れる坂に
朝なあさなわれ馴れけらし戸をあけて顔にしひ
びく寒さをおぼゆ

この冬は母亡くなりて用少なし心さびしと妻の
いふなる

この村につひにかへり住む時あらむ立ちつぞ
見る水れる湖を

沖つ風ひた吹きあつる磯ばたの凍りばしやぎの
街道のほこり

其二

いく日もつづきて晴るる湖の水を切りて冬田に
積み

磯の田にいく日にならむ積みみてある氷の群れ
のとくることなし

田の中に爪もて我のたたき見る堅き氷に日のあ
たりをり

氷切りて漁りたる魚は生きてあり山の我が家に
くばりて持て來

山の田の清水に魚を放ち來し子どもの足は泥に
こごえつ

其三

ひた吹きに氷の湖に吹く風の暖くして曇りをお
くる

暖き風疾く吹きて日のあたる氷の湖は霽れいろ
になれり

氷の湖の沖に大きな穴あけり雲の動きのすみ
やかになりて

つきつきに氷をやぶる沖つ波濁りをあげてひろ
がりてあり

坂下の湖の水のやぶるるを嵐のなかに立ちて見
てをり

沖べより氷やぶるる湖の波のひびきのひろがり
聞ゆ

ひろき土間に巢箱ならべる舞し舞あらし一日を
静まりて居り

春の嵐吹きて小暗し庭のうへの胡桃の幹は揺す
れつつあり

一六 北國空

泉 鏡 花

一 解 題

一 本 文

「鏡花全集」(五十卷)第十五卷所収の「北國空」の全文である。(鏡花全集第十五卷、昭和二年七月、春陽堂發行)

「北國空」は明治三十八年十月の作で、作者の隨筆集「春宵讀本」にも收められてゐる。

二 作 者

泉鏡花。本名鏡太郎。明治六年十一月現金澤市下新町に生まれ
た。父は金屬の彫工、母は葛野流の鼓打中田氏の女で能樂師松本金
太郎の妹。少年時代を郷里に送り、金澤高等小學校・北陸英和學校
等に學んだ。少時から物語を好み、長ずるに及んで小説を耽讀し
た。二十二年尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」を讀んで大いに動か
され、翌年上京、約一年の放浪生活を経て紅葉の門に入り、その玄
關に机を据ゑて勉強した。二十六年「冠彌左衛門」を京都の「日出
新聞」に連載して文壇に出、二十八年には「夜行巡査」「外科室」

を雑誌「文藝俱樂部」に掲げて文壇の注目を惹き、新進作家として
の地歩を確保した。又この年博文館に入つて「日用百科全書」の編
輯に従事した。かくて廣津柳浪・川上眉山・江見水蔭・小栗風葉・
後藤宙外・樋口一葉等當時の新進に伍し、翌二十九年には「龍潭
譚」「照葉狂言」等に浪漫的藝術派たるの特色を明らかにして三十
年代に入り、「辰巳巷談」「通夜物語」「湯島詣」「高野聖」「風流線」
等に益々その本領を發揮した。その後自然主義文學の勃興期に會し
ても超然として自己の立場を守り、四十年代に於て「婦系圖」「白
鷺」「歌行燈」「三味線堀」「南地心中」等の傑作を残した。大正時
代に入つては既に文壇の大家を以て目せられ、「日本橋」「新つや物
語」「秋薄内證話」「鴛鴦帳」「伯爵の釵」「眉かくしの靈」等に感
圓熟の境地を示し、昭和時代に入つてからは餘り作を示さなくなつ
たが、依然藝術派の家の如き名聲を持ち、今日に及んでゐる。
常に文壇の動向に超然として浪漫的作風に終始し、寫實主義を主

流とする明治・大正・昭和の文學史に獨自の地歩を占めてゐる。その文章の如きも凝つた個性的色彩の濃厚な表現で、佳句・名辭を錯落せしめて變化の妙を極め、言外に餘韻を響かす獨自の風格を持つてゐる。單行本には、「照葉狂言」「通夜物語」「湯島詣」「錦帯記」「三枚續」「黒百合」「風流線」「婦系圖」「草迷宮」「白鷺」「鴛鴦帳」「芍薬の歌」「由縁の女」「伯爵の釵」「櫛笥集」「田毎かやみ」「昭和

二 教材としての研究

一 註解

【北國空】 ホクコクゾラ

【北國】 (一)北方の國。(二)北陸道の諸國、即ち若狹・越前(以上福井縣)・加賀・能登(以上石川縣)・越中(富山縣)・越後・佐渡(以上新潟縣)の七國。こゝは(一)。

【月令】 ゲツレイ・グワツレイ 一年間に行はれる定例の政事・儀式等を月々の順に記したものの。年中行事。

禮記卷六に「月令篇」(呂氏春秋の「十二月紀」を改めたもので、明の馮應京撰「月令廣義」は内容の詳しきを以て知られてゐる。我が國に於ても「改正月令博物筌」を始めとして、この類のものが少くない。

新集」等の小説、「愛火」「戀女房」等の戯曲、「七寶の柱」「番町夜講」等の小品集がある。

三 採擇の趣旨

前課が自然の脅威の下に刻苦する人間生活を描いた文であつた後を承け、本課には自然の威力の下に安息と親愛とを惠まれた人間生活の姿を描いた文を掲げた。文藝的教材であり、國民的教材である。

【雷】 イカヅチ・カミナリ・ライ 空中に於ける電氣の放電によつて生ずるもので、暗雲のうちに電光を閃かし、烈しき音響を發する現象。多くは突風を齎らし、豪雨を伴ふ。

放電の際に生じた火花は雲と雲、雲と地面の間に極めて高速度に飛び、その通路にあたる空氣は或は壓し除けられ或は熱せられて非常に稀薄になり、通過後は急激に元へ戻る爲、空氣中に波動が起り、音響を發するに至る。その股々と響くのは音波が重なり合つて干涉する爲である。雷は雲中に電氣が蓄積される爲に生ずる。故に春から夏にかけて日射強く、上昇氣流の盛な時に多く發生し、秋冬の候には少い。

【聲を收む】 (雷が) 鳴り止む。雷鳴がしなくなる。

【收む】 こゝは、やむ、とどめる、の意。

【雪雷】 ニキガミナリ(原) 十二月・一月の候、雪の將に降らんとするに當つて鳴る雷。時恰も鱒獲の盛になる期に當るので、この地方では「鱒起し」ともいふ。

【白きもの】 こゝは、雪をいふ。

【鱒獲】 ブリレフ 鱒を漁獲すること。

我が國沿岸一帯に行はれるが、神奈川・静岡・富山・福井・長崎・宮崎の諸縣に盛である。十二月・一月頃を盛期とし、多くは大敷網(魚網の形又は圓形の網)を用ひ、一時に數萬尾を漁獲することもある。

【鱒】 棘鱸目、鱒科、ぶり屬の海産魚。體はやゝ側扁した紡錘形をなし、老化したものは一米位に達する。口は割合に大きく、口内諸骨に絨毛齒帯がある。皮膚厚く鱗小さく、側線は直走し、他の鱒類の如き骨質板を有せず、第一背鱗は小さく、第二背鱗は大きい。色は背部青色、腹部銀白色で、側線に沿つて淡黄縦線がある。重要食用魚で、我が國沿岸に産し、寒鱒と稱して冬季のものが最も賞美せられる。

鱒は所謂出世魚で、生長順に名が異なり、「わかなぎ」「いなだ」「わらさ」「ぶり」或は「つばす」「はまち」「めじろ」「ぶり」

などと呼ばれる。富山県では、初め「つばす」次に「いなだ」などといふ。

地とし、他には多く鹽鱒として供給されたが、近年は太平洋方面にも漁場が擴張された。關西では、古來正月の食膳になくはならぬものとされてゐる。

【師走】 シハス 陰曆十二月の異稱。極月。臘月。窮月。

【中旬】 ナカバ(原) 一箇月の十一日から二十日までの十日間。月の中頃。

【旬】 (ジュン) (一)一ヶ月を十日づつに三分した稱。(二)十年を一期として年輪を示す語。

【股々】 インイン (四〇頁参照)

【添寝】 ソヒネ 人の側に添つて寝ること。添臥。

【さるほどに】 (一)然ある程に。さうしてゐるあひだに。(二)別段に意味がなく、たゞ發語のやうに用ゐる。こゝは(一)。

【寒威一層を加へ】 寒氣が一層はげしくなり。

【寒威】 カンキ 寒さのいきほひ。寒氣。

【明り窓】 アカリマド 室内に日光を取り入れる窓。明り取。

【暗雲】 アンウン 暗黒の雲。多く、雨雪を降らしつゝある雲か、又は今にも降らさうとする如く見える雲にいふ。特に陰慘な感じを伴ふ場合にいふ。

【黯】は、黒い。暗い。

【漢々】 バクバク (一)ひろくとして果のないさま。(二)布きならぶさま。こゝは(一)。

【灰色の布】 ハヒイロのヌノ 空を覆ふ黯雲の形容。

【果せる哉】 ハタせるカナ 豫想にたがはず。推量通りに。

【哉】 「かも」に同じ。感歎の意を表す助詞で、用言につく時はその連體形をうける。

【霏々】 ヒヒ (一)雨又は雪などの降りしきるさま。(二)物事の連続してたえないさま。(三)草のさかんに繁るさま。(四)雷光のひらめくさま。(五)雲の飛ぶさま。(六)霜のおくさま。(七)談話の細かに続くさま。こゝは(一)。

【霜月】 シモツキ 陰曆十一月の異稱。霜降月。雪見月。復月。

【散】 アラレ 寒冷の候に降る白色不透明の細かい雪塊様のもの。大きなものには直径三耗を越えるものさへある。成因については定説がないが、上層の雲を構成してゐる小さな氷の結晶が落下して来る途中、氷點に冷えた寒冷な水滴に遭ひ、氷結して出来るとする説が有力である。南國では二月に多く降り、寒國の海岸では十二月に多い。又一日の中では早朝と夕刻に多く、日中と夜間には少い。時雨のやうに驟に降つて忽ち止むのが普通であるが、日

本海岸ではかなり長時間に亘つて降り続くことがある。

【霽】 ミゾレ 雪がやゝ融けて水氣を含んで降るもの、又雨が雪に混じて降るものをいふ。初雪の頃或は春季終雪の頃に降ることが多い。

【眉を顰めて】 マユをヒソめて 好ましくなさうに顔をしかめて。

【眉を顰む】 心中に憂ひ危み、又は他人の忌まはしい行爲に對して顔をしかめるさまにいふ。

【昏昏】 コンボウ (一)くらいこと。(二)無智で事理にくらいこと。こゝは(一)。

【昏】 (一)日がぐれて明らかでない。(二)道理にくらい。

【黄昏】 タソガレ 「誰そ彼は」と、人のさまの見分け難い時刻の義。夕方のうすぐらい時。夕ぐれ。暮がた。

【精緻】 セイチ 「精細緻密」の略。極めてこまかいこと。

【緻】 は、こまか。

【碍げられざるはなし】

【碍ぐ】 サマタぐ 邪魔をする。

【碍】 は「礙」の俗字。

【杣】 ソマ (一)樹木を植ゑつけて材木を採る山。杣山。(二)杣山

から伐り採つた材木。杣木。(三)杣木を伐り採ることを業とする人。杣人。きこり。こゝは(三)。

【土工】 ドコウ (一)切取及び盛土・築堤・道普請等の、土地に関する工事。土木工事。又、その工事に従ふ労働者。(二)やきものし。陶器師。こゝは(一)の後者。

【日備取】 ヒヨウトリ ひやとひの人足。ひようかせぎ。

【日備】 (一)一日限りに雇はれること。ひやとひ。(運送・土木の賤工などにいふ。)(二)日備の賃錢。

【閑散】 カンサン ひまなこと。仕事がなく遊んでゐること。

【備荒貯蓄】 ビクワウチヨク 凶荒・災厄に對する準備の爲に平生貯蓄すること。又、その貯蓄した物。

【備荒】 豫め凶荒・災厄に備へること。凶年に對する準備をする事。

【坐食】 ザシヨク 勞働せずに徒食すること。みくひ。

【飢渴】 キカツ 食に飢ゑ水に渴くこと。飲食物の缺乏すること。

【安息日】 アンソクジツ・アンソクビ・アンソクニチ (一)ユダヤ教に於て最も重んじた日で、一週第七日(土曜日)をいふ。舊約聖書、出エジプト記第二十章に「汝六日の間、汝の業をなし七日に息むべし」といふ意のことがある。この日ユダヤ人は祈禱・禮拜・默想を實行し、神に對する隨順・恭敬の意を表した。(二)キリスト

教に於て「主の日」即ちキリスト復活の日として一週第一日(日曜日)をいふ。この日キリスト教徒は總ての仕事を休み、禮拜を行ふ。こゝは(一)の轉用で、安らかに休息する日、の意。

【雪垣】 エキガキ 積雪地方に於て、冬季雪を防ぐ爲に家の軒の邊に丸太材をたてかけ、それに簀を結びつけた垣。

【閑居】 カンキョ (一)閑靜な地の住居。又、そこに住むこと。

(二)ひまであること。(三)世事に携はらずに閑かにゐること。こゝは(一)。

【つれづれに】 なすこともなく、ひまで。

【つれづれ】 徒然 (一)獨り物を思ひつゞけて、ながめてゐること。(二)獨り事なくして淋しいこと。すべきことがなくてひまなこと。こゝは(二)。

【やがて來らんずる】 間もなく來ようとしてゐる。

【む(ん)ず】 助動詞「む」に助詞「と」及びサ變動詞「す」の添はつた「むとす」から生じたもの。或は「む」と「す」の連結であらうといふ説もある。「む」と同じく、未來・推量・決意・適當・當然の意に用ゐられる助動詞であるが、「む」より意味が強い。

【風に曝し、雪に撲たせて】 風や雪のあたるがまゝに任かせて。

【曝す】 サラす (一)日光にあてる。日光・風雨のあたるまゝにしておく。(二)布・木綿などを洗ひ、外氣にあてて漂泊する。(三)衆人の見物とする。(四)晒の刑に行ふ。こゝは(一)。

【撲つ】 ウツ ぼとくと打ち當る。

【あどけなき聲々】 無邪氣な聲々。

【あどけなし】 をさない。無邪氣である。わるきがない。

【手拍子】 テビヤウシ 手を打つて拍子を取ること。又その拍子。

【雪投げ】 ユキナゲ 雪を丸めて投げ、相手に打ちつける遊戯。雪打ち。雪合戦。雪戦。

【雪達磨】 ユキダルマ 雪を固めて作った達磨の像。

【荒坊主】 アラバウズ こゝは「雪達磨」の異稱。その姿のあらあらしく怪偉なところからいつたものであらう。

【大入道】 オホニフダウ こゝは、坊主頭の大男の姿をした妖怪。

【入道】 (一)佛道に歸依すること。(二)在家のまゝで剃髪・染衣したもの。(三)往昔、佛道に入つた三位以上の人の稱。(四)坊主頭のもの。稱。(五)坊主頭の妖怪。

【突飛】 トツビ 飛びはなれて普通と變つてゐること。行爲の並はずれて奇抜なこと。冒險なしわぎ。

【茶合】 煎茶用具の一。普通は竹の節をかけて截り、これを二つ割

【夷】 (一)たひらか。(二)たひらく。

【屈竟】 クツキヤウ 「究竟」の俗字。どんづまりの義。極めてすぐれてゐること。最も適當してゐること。あつらへむきなこと。

【玉盤】 ギョクパン (一)玉で造つた盤。又、盤の美稱。(二)月の異名。玉輪。こゝは、玉の如く輝く滑かな平面の意であらう。

【達者】 タツシャ (一)學術・技藝などに達した人。達人。(二)専ら歩行に勝れてゐること。健脚。(三)轉じて、身のすこやかなこと。壯健。(四)物事を速く巧みなこと。こゝは(三)。

【呼吸】 コキフ こゝは、調子、工合、の意。

【踰限】 サウラウ 足許のたしかでないさま。よろめくさま。よろよろ。

【踰】 は、ふらくくと動くさま。よろよく。

【踰】 は、よろめく。

【庭下駄】 ニハゲタ 庭を歩くに用ゐる下駄。多くは材の中央部を削りあげた粗製のものである。

【後齒】 ウシロバ(裏)・アトバ 下駄の二枚の齒の中の後のもの。

【足懸り】 アシガカリ 「足掛り」とも書く。(一)高處へのぼつたり、危い場所へ臨むに用ゐる足のふみかけ。あしば。(二)事に著手するいとぐち。こゝは(一)。

にしたものが多い。近來は節のないものも用ゐる。六寸乃至七寸を度とし、背に書畫等を彫刻して裝飾したものもある。茶を入れる時に直接茶に手を觸れるのを嫌ひ、先づ茶をこれに移し量の多少をみはからふ。

【一息】 ヒトイキ こゝは、一度の息つき。一呼吸の間。

【瞬間】 シュンカン 瞬をする間。極めてわづかな時間の稱。

【一齒にして】 イツバにして(原) 一足で。

【齒】 こゝは、下駄の齒。

【口を酸くして】 何遍もく繰返して。

【口を酸くする】 口がたゆくくなる。屢々同じ言葉を繰返す。

【兒輩】 ジハイ(原) 子供たち。

【身體髮膚】 シンタイハツプ 身體と髪と膚、即ち身體全部。

孝經、開宗明義章に「身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也」とある。

【普請】 フシン (一)佛語。禪寺で衆僧を請して勞役作務をすること。(二)轉じて、建築・土木・造營・作事などをすること。こゝは(二)。

【平夷】 ヘイイ (一)たひらかなこと。平坦なこと。たひらかにすること。(二)たひらげること。鎮定すること。こゝは(一)。

【燻灰】 ワラバヒ 燻を焼いて作つた灰。

【劔の山】 ツルギのヤマ 十六遊增地獄の一。「劔樹地獄」「劔林地獄」「刀双路」等ともいふ。刀劔を植ゑた山で、罪人が全身傷壞の苛責を受けるところ。

【御身等】 オンミラ おまへたち。

【御身】 やゝ敬意を含んだ對稱代名詞。おまへ。きみ。あなた。

【鹽齋の汁】 鹽齋を入れた粕汁。

【鹽齋】 シホブリ 鹽漬の齋。福井・石川兩縣産のものが最も美味とせられ、關西地方では新年用食品の必須のものとして、雑煮に用ゐる、又は煮染に盛り合はせて賞味される。普通には切身として焼き、「あら」(魚の鹽肉の附い)は粕汁・卵の花汁の煮汁に用ゐられる。

【多籠り】 フユゴモリ 冬の寒い間家にこもつてゐること。

【佳肴】 カカウ 「嘉肴」とも書く。うまい料理。よいさかな。

【烘りて】 アブリて

【烘る】 火にあてて焼く。

【取柄】 トリエ 「取得」とも書く。とるべきところ。とりどころ。長所。

【酒の糟】 サケのカス 「酒の粕」とも書き、「さけかす」「さけが

す」ともいふ。清酒醪から清酒を壓搾分取した殘滓。六〇%内外の酒精を含む。焼酎原料・食酢原料・漬物用とする他、直接食用にも供せられる。

【宛然】 サナガラ(裏) まるで。ちやうど。

【とろとろ】 薯蕷 「とろとろ汁」の略。薯蕷・佛掌薯・大和薯等を摺鉢でよく摺り、清汁又は味噌汁を少しづつ加へて伸ばし、とろとろした汁に作ったもの。

葱・採海苔等を薬味として椀に盛つて賞味し、或は温かい飯にかける。

【件の】 クダンの 上に記した。上述の。

【件】 クダン(タダリの替) (一)文章に記してある章・段・條の意で、「初の件」「上の件」などといったが、後には略して、たゞ「件」とのみ用ゐる。「如上件」とすべきを「如件」とするに至つた。(二)轉じて、上記の、の意。

【肉の殘物】 ニクのザンブツ こゝは、鹽麴の「あら」をいふのであらう。(前頁「鹽麴の汁」参照)

【膠々】 モウモウ こゝは、湯氣のたち籠めたさま。

【塗椀】 ヌリワン 漆塗の椀。

【装ひ出し】 ヨソヒダシ 盛り出し。

【装ふ】 (一)「よそほふ」に同じ。(二)飲食物を器に盛る。

【駁る】 ススル

【時ならぬ霞】 時期はづれの霞。

膝々と立つ湯氣を形容していつたのである。

【熱葉】 ネットカウ あつい吸物。

「葉」は、あつもの。肉や野菜をあたまかに煮た吸物。

【春風忽ち腸胃に入りて、一夜の春を占むるを得べく】 冬の夜ながら、暖かさが忽ち腹中に満ちて、さながら春の一夜の如き思ひをほしいまゝにすることが出来る、といふほどの意。

霞・朧月の縁から春風とつゞけたのである。

【炬燵にこそ】

下に「あれ」が省略された慣用形式。「神女にこそ」「二八ノ二」

【炬燵】 コタツ (二九頁参照)

【四角八面に】 シカクハチメンに 四角な炬燵の四方には勿論、その四隅にもはいつて八面になつて。

【隔意】 カクイ 心がうちとけないこと。へだて心。隔心。

【作法】 サハフ (一)しかた。(二)たちふるまひの正しい形と正しい順序方式。こゝは(二)。

【笑語】 セウゴ (一)笑ひながら話すこと。談笑。(二)をかしい

話。こゝは(一)。

【和氣藹々】 ワキアイアイ なごやかな氣分のみち溢れてゐるさま。(本文の「藹々」は誤)

【和氣】 (一)おだやかな氣分。やはらいだ心。(二)のどかな氣候。あたゝかい陽氣。こゝは(一)。

【藹々】 (一)盛に多いさま。(二)草木の盛なさま。(三)力を盡くすさま。(四)月光のほんのりしたさま。(五)おだやかなさま。和氣のあるさま。こゝは(五)。

【闊けて】 タけて 深くなつて。

【闊く】 (一)盛りになる。十分になる。高くなる。(二)盛りがすぎる。

【押詰まりたる】 オシツまりたる 餘日が少くなつた。

【押詰まる】 (一)きはまる。つまる。(二)年の暮に近くなる。

【人跡】 ジンセキ 人のあしあと。人の往來。

【降りしきる】 しきりに降る。さかんに降る。たえまなく降る。降りに降る。

【しきる】 繁くなる。度重なる。續き至る。

【寔音】 アシオト(原)

【寔】は、足音。

【ほととぎす】 (一)戸を叩く音。(二)斧で木を伐る音などにいふ。こゝは(一)。

【應々との句】 雪にとざした門をトントンとたく音がする。「お」と内で答へても、聞えないのか、それとも降る雪にイミわびてか、又もせつかちにトントンと敲いてゐる。

向井去來の句で、元祿七年の作。「句兄弟」(寶井其角編)「有磯海」(藤化編)元「翁草」(元祿九年刊)「去來發句集」(安永三年刊)「去來抄」(安永四年刊)「俳諧寂寂」(加倉白蓮著)等に出てゐるが、「翁草」では上五が「あふくと」、「俳諧寂寂」では中七が「いふに叩くや」となつてゐる。尙、「去來抄」には次のやうな記事があり、

そのため特に名高くなつてゐる。

應々といへど敲くや雪の門 去來

文舞曰、此句不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰、いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰、たゞ先師の聞給はざるを恨るのみ。曲翠曰、句の善悪をいはず、當時作せん人を覺えずといへり。其角曰、眞の雪の門也。許六曰、尤佳句也、いまだ十分ならず。露川曰、五文字妙也。去來曰、人々の評亦おのゝ其位より出づ。此句は先師遷化の冬の句なり。其頃同門の人々も難しとおもへり。今は自他ともに此場にとゞまらず。

【應々】 オウオウ こゝは、答へる時の聲。(「おう」を重ねたもの。)

【雪の門】 ユキのモン 雪の降る日の門。季題は「雪」で多。

【向井去來】 は肥前長崎の人。名は兼時。字は元淵、又義焉子。

幼名慶千代。通稱は平次郎(又は平二郎)・次郎太夫。落柿舎・

蘭亭等と號した。長崎の醫師向井元外の二男。幼時叔父久米氏

に養はれたが、八歳の時父に従つて上洛。俳諧にたづさはつて

芭蕉に認められたのは、その妹千子との合作「伊勢紀行」であ

る。蕉門十哲の一人で、關西三十三國の俳諧奉行と稱せられ、

俳諧七部集中の最高峯たる「猿蓑」を凡兆と共に撰んだ。貞享

の頃から替んだ蟬蛾の落柿舎は、元禄末に毀つて、東山南禪寺

聖護院の邊に住み、専ら師風を守つた。篤實なる人格で、作風

は高雅清寂、能く蕉風の眞諦をとらへ、天才肌ではないが、努

力の到り得べき極致に達してゐる。又詩をよくし、陰陽の學に

通じ、畫も巧みで芭蕉翁半身像があり、畫痕清雅と稱せられて

ゐる。寶永元年(二二六四)九月歿、享年五十四。編著に「伊勢

紀行」「猿蓑」「柿晋問答(花實集)」「湖東問答(旅寢論)」「去來

抄」等がある。

【頭巾】 ツキン 布帛等で袋形に造り、寒さや害を防ぐ爲などに、

頭にかぶるもの。丸頭巾・角頭巾等種類が多い。

【合羽】 カッパ 衣服の上に蔽ひ著る雨具の一種。はじめポルトガ

ル人の外套に摸して製したものであるといはれ、紙で袖無し、

今のマントの如きものを作り、それに油を引いて用ゐたが、次第

に我が國在來の服装に適ふやうに改良せられて袖のあるものを生

じ、木綿・羅紗等で作られた。

【鷺】 サギ 鷺鷥目、鷺科に屬する涉禽の總稱。概して大形で、體

は細く頸は極めて長く、嘴は細長でほと眞直。眼の周圍には羽毛

を缺き、脚も趾も極めて長く、尾羽は短い。體色は種々で、生殖

時には頭や胸に美しい飾羽を生ずるものが多い。湖畔や海濱等に

棲息する。我が國には「あをさぎ」「こさぎ」「たいさぎ」「ちゅ

うさぎ」「あかがしらさぎ」「あまさぎ」「こゝろさぎ」「さざいこゝ

ろさぎ」「よしこゝろ」等、この類のものが頗る多いが、一般に

は「こゝろさぎ」類を除いたもの、特に所謂白鷺(「こゝろさぎ」を

鷺といふ。こゝもその意。

【團樂の筵】 ダンランのムシロ 楽しい集ひの席。

【團樂】 (一)相集つて車座に座を占めること。まどろ。(二)親

密な同志の楽しい集合。うちとけた會合。(三)月などの圓いこ

と。まろやか。まどか。

【樂】 は、まろらか。まどか。

【筵】 坐る場所。座席。

【咳一咳して】 ガイイチガイして 咳拂ひ一つして。

【躊ひたりしを知らん】 ぐづ／＼してゐたのを知つてゐるだらう。

【躊ふ】 タメラふ いづれにしようかと決しかねる。ぐづ／＼する。

【白無垢】 シロムク 上著・下著ともに全部白の衣服。

【無垢】 (一)まじりけのないこと。純粹。(二)けがれのないこ

と。心又は肉體等のけがれてゐないこと。きよいこと。(三)佛

教で、煩惱を離れて眞淨の境界に住すること。清淨で垢染のな

いこと。無漏。(四)表著から下著まで、表裏全部無地の同じ色

で仕立てた衣服。主として、白無垢にいふ。

【絡ひて】 マトひて 身につけて。著て。

【絡ふ】 まきつける。からみつける。

【同じ一色の被衣】 オナジヒトイロのカツギ 衣と同じく白無地の被衣。

【被衣】 「カツキ」の訛。江戸時代、婦人外出の際に面貌を隠

す爲に頭部からかついた衣服。平安朝の物語に「衣かつき」と

みえるのは、市女笠をかぶらないで白の單をかついてゐたもの

であつたが、徳川時代のもものは外出用につくられ、小袖の衿肩

を三寸ばかり前へ下げて裁ち、後に脱げず額へ深くかゝつて、

顔を隠すのに都合のよいやうにしてある。裏をつけたもの、染

色模様は種々意匠をこらしたのもあつた。江戸では明暦・萬

治(三三〇五)頃には既に廢れて塗笠や編笠をかぶつたが、京阪

地方では寛政(三四四九)頃まで行はれたといふ。

【女臈】 チョラフ 佛語の「上臈」の轉かといふ。婦人の稱。女の

尊稱。

【臈】 は僧侶の受戒後、安居(四月十五日から九月十五日の間、僧が

だ回数。僧の席次はその多少によつて定める。「上臈」は臈を

積んだ階級の上のものゝ總稱である。

【小兒】 コドモ(原)

【わらは】 妾 婦人の自稱代名詞。

【夜を籠めて】 ヨをコめて 夜の明けぬ間に。夜の深い間に。

【ひとり】 獨り こゝは、漢文及び漢文調の文章に用ゐられて、た

だその物事に限る意を表す語。たゞ。

【ひとと】 ゆるみなく。きびしく。つよく。

【ありやうつ】 (一)ありさま。やうす。(二)まこと。いつはり又は飾りのないさま。ありてい。(三)あるべきはず。あるべき理由。こは(二)。

【立所に】 タチドコロに。すぐさま。たごちに。すぐに。忽ちに。

【いととき】 愛しき。かはゆい。いとほしい。

【某】 ツレガシ。こゝは、自稱代名詞。

【見えつ】

「つ」は、完了の助動詞。こゝは確定的の意を表す。

【紛々】 フンブン (一)入りまじつてみだれるさま。みだれもつれるさま。(二)ごた／＼としてとゝのはぬさま。煩はしいさま。

(三)多くあるさま。さかんさま。こゝは(一)。

【悪戯明達】 ワルサトモダチ(原) いたづら仲間。

【朦朧】 モウロウ (一)おぼろに暗いさま。霧・霧などの爲に暗いさま。(二)物事の不明なさま。(三)意識の確でないさま。こゝは(二)。

【行きつ戻りつ】 行つたり戻つたり。

「つ」は、完了の助動詞。こゝは、助詞のやうに用ゐられて、動作の並列を表す。

【雪女騰】 ユキヂョラフ 雪國地方の傳説にある雪の精。名稱は地

方によつて異なり、「雪女」「雪女郎」「雪婆」「雪坊」「雪入道」などといひ、形態も種々である。

飛騨では一つ目・一本足の雪入道とし、紀伊では一本足の小童である「雪坊」とし、伊豫では雪夜に幼児を呪ふ「雪婆」とし、會津地方では産婦姿の「雪女御」等としてゐる。

宗祇が越後で見たといふ雪女は宗祇諸國物語卷之五に「ある曉便事のため枕にちかきやり戸押しあげ、東の方を見出でたれば、一たん計り向ふの竹藪の北の端に、怪しの女ひとりたてり。せいの高さ一丈もやあらん。かほより肌すきとほる計り白きに、しろきひとへの物を着たり。「中略」容貌のたんごんなるさま、王母が桃林にま見え、かくや姫の竹にあそびけんかくやあらん。面色によつて年の程をうかゞはゞ、二十歳はたらじと見ゆるに、髪の眞白に、四手を切りかけたるやうなるぞ異やうなる。いかなるものぞ名をとんと近づき寄れば、彼の女靜かに蘭生に歩む。いかにする事にや見届けてと思ふほどに、姿は消えてなく成りぬ。「中略」明けて此の事を人に語りければ、夫は雪の精靈、俗に雪女といふものなるべし。云々」とある。

【精靈】 セイレイ (一七四頁「精」参照)

【神女】 シンニョ。こゝは、女性の姿をした精靈をいふ。

【執成】 トリナシ とりなすこと。とりつくらふこと。よいやうにはからふこと。

【現象】 ゲンシャウ (一)あらはれて見えるかたち。(二)感官によつて受入れられた対象、五官を通じて吾人の経験し得る總べての事物の象。(理性によつて思惟せられた「本質」「本體」等に對していふ。こゝは(一)。

【巨蛇蜿蜒】 キョダエンエン。こゝは、巨大な蛇のうねる如く雪路の長くつゞくさま。

【蜿蜒】 (一)龍蛇などのうねりゆくさま。轉じて、山脈等の長くつゞくさま。(二)山勢などの屈曲するさま。こゝは(一)。

【傍目も觸らで】 よそ見もしないで一心に。

「で」は、「す」(打消の)と「て」(完了の助動詞「つ」の連用形が便)の約で、打消して上下を接続するに用ゐる。

【傍目】 ワキメ。よそを見ること。わきみ。

【銀沙】 ギンサ。銀色のすな。こゝは、雪をいふ。

【渺々】 ベウベウ。ひろ／＼としてはてのないさま。渺茫。

【物色】 ブツショク (一)もののいろ。(二)人相書又は容貌をあてとして、その人をさがすこと。(三)適當な人を多くの中から選び定めること。こゝは(一)。

【素白に眩せる】 雪の白さで目がくらんだ。

【素白】 ソハク。まつしろいこと。

【眩ず】 目がくらむ。

【視線】 シセン (二六〇頁参照)

【途端】 トタン。ちやうどその折。はずみ。

【眼球】 ガンキウ。眼窩内に存する球形の膜囊。視器の主部をなすもので、全體の構造は寫眞の暗箱に類する。その外部に顯れてゐるのは角膜(俗に上眼目。その膜)で、内に、水様液を隔てて虹彩(俗に相堂)及びこれに連なる毛様體があり、虹彩の中央には瞳孔が開き、その直後に兩凸レンズ状をなす水晶體(俗に相堂)が存し、それより奥は透明・膠様の硝子體に占められ、網膜(俗に相堂)がその壁をなしてゐる。いづれも光の屈折に關する。

【髣髴】 ハウフツ。「彷彿」とも書く。(一)さも似てゐるさま。さながら。(二)見て分明でないさま。はつきりしないさま。ほか。ほんやり。

【髣】 は、「彷彿」と通ずる。ほか。さも似てゐる。

【髴】 は、「佛」に同じ。さも似てゐる。

【幻影】 ゲンエイ。思想または感覺の錯誤から實在でないものを實在のやうに認める現象。まぼろし。

二 解釋

1 主題

雪の脅威の下に生きる北國人の冬の生活気分。

2 構想

- (1) 雪雷と雪降り。(初—二—四)
- (2) 雪の月の大人と兒童。(二—二—五—二—四—七)
- (3) 雪の夜の趣。(二—四—八—終)

イ 晩食の鹽鱈汁。

ロ 炬燵の團樂と雪女麩の話。

3 敘述

〔北國にては雪雷と稱へて、白きものの降らんとするに方りては、例年必ず雷鳴のあらざることなし。〕——北國の冬を描かうとして先づ雪雷を點出したのである。北國特有な奇現象として何人も關心をもたせられるであらう。

〔師走中旬、一夜極めて肩寒く足の凍ゆる時、股々として雷の轟くを聞けば、「もうお正月の音がするよ」と、母は添寢の兒を慰むるなり。〕——底冷えを感じるやうな歳末の夜氣、そこに轟く雷鳴の恐怖、それを又新春の兆としての慰めごとにする生活態度など、如實に描き出されてゐる。

〔さるほどに寒威一層を加へ、夜は明くれども日光を見ず、淡墨に染まれる明り窓の障子を開けば、靄雲漠々として、灰色の布は一を包めり。〕——大雪の前の陰鬱な氣象がよく寫されてゐる。

〔今更「珍しいものが降りました」といふ者無く、相見する人は眉を顰めて「お寒うございます」と挨拶するのみなり。〕——降雪頻頻たる北國の冬に於ける人々の生活気分が滲み出てゐる。

〔實に冬の日は、北國の住民が永き安息日といふも可ならんか。〕——冬の脅威は夏日の營々たる努力を生み、夏日の營々たる努力は又多を安息の期間たらしめてゐるのである。

〔彼等が、藁或は板を以て雪垣を結び繞らせる薄暗き家に閑居して、つれづれに其の目を暮す間に、兒童はやがて來らんずる「お正月」の希望に輝ける愛らしき顔を、風に曝し、雪に撲たせて、あとけなき聲々に、「雪は一升、霰は五合」と手拍子鳴らして囃しつゝ、兎の如く跳ね廻りて喜べり。〕——安息の冬に於ける大人・兒童の生活の姿である。

〔されども、多少の鍛錬を積まざれば、一齒にして踏みならし、二三間にして投げ飛ばされ、忽ち巖の如き氷に傷つき、時として其の危害いふべからざるものあり。〕——現代のスポーツなどと違つて、用具も有合せ、場所も大道であらうが、耕地であらうが、

手當り次第といふやり方であつた。随つて、危険率の大きいことは寒心すべきものがある。さういふ間に立つて、當時の少年達は勇敢に遊びまはつたのである。そして心身を鍛錬したのである。

〔親たちは口を酸くして此の危険の遊戯を禁ずれども、其の心を知らざる兒輩は、其の忘れざる愉快の爲に、身體髪膚を忘れざるはあらず。〕——當時の彼等の遊戯が危険を伴なへば伴なふ程、冒險的興味も加つて止めがたい。親の禁戒を破り、親の痛心を顧みずこれを敢行するのをその常とする。「身體髪膚を忘れざるはあらず」は雪江りの面白さが孝經氣分を吹き飛ばしたやうな少年の夢中な氣持をユーモラスに表現してゐるのである。

〔五尺・六尺と積れる雪の上に通せる唯一條の路は、頻繁なる往來の爲に、恰も普請後の道の踏まれ踏まれて平夷になりたる如くなれば、そのまゝ用ふるに屈竟なり。〕——唯一條の道路を江り場所にするところに、兒童の旺盛な遊戯本能が認められる。迷惑なのは通行人である。

〔噫危き哉北國の路、生きながら劍の山を越ゆるなりけり。〕——到る處、スケート場化した道路は、たしかにこの概きを抱かせるであらう。

〔晩食の一室には時ならぬ霞棚引きて朧月の趣あり。されば三椀の

熱燗に、春風忽ち腸胃に入りて、一夜の春を占むるを得べく、酒量なき婦女たちは、これにも酔ひて面を染むるをかし。〕——冬の食物として、鹽鱈とその残物を入れた粕汁をあげ、その粕汁に舌鼓を打つ一家團樂の狀を寫してよく北國の冬夜を忍ばせる。

〔こゝに最も愛すべきは、雪の夜の炬燵にこそ。〕——何でもないうな一句であるが、經驗ある者には無限の情趣を感じさせる。

〔親子・夫婦・兄弟・姉妹、四角八面に押並びて、隔意なく、作法なく、雑談・笑語、和氣藹々たる家の外に、夜もやゝ闌けて、押詰まりたる年の暮ながら人跡やう／＼絶えて、いと靜かに雪のみ獨り降りしきる時、重たげなる聲音來りて軒下に留りぬ。〕——冬の威力は家庭の人々の心を近づかせ、家の内を温かいものに感じさせる。さういふ夜の何といふこともない來訪者は又その楽しみを加へさせる。

〔やゝありて、下駄の雪を落さんとて、敷居に爪先を打ち當つる音聞ゆ。〕——誰であらうかといふ想像も楽しい。かういふ夜の來訪者は、疎遠な人はない。大抵の想像はつきながら、なほ半信半疑で想像してゐる氣持もさういふ夜の興趣に數へてよからう。ところが、この文では、これが後の話の伏線にさへなつてゐる。

〔子が門口に來りし時、白無垢の衣を絡ひて、同じ一色の被衣を被

れる、一個美しき女孺あり。」——雪女孺の姿である。いかにも大雪の夜に相應しい姿である。

〔わらはは大雪の夜を籠めて、何處にもあれ幼児ある家内をば窺ひ歩くをんななるが、〕——雪女孺の行動である。「幼児ある家内を」といふところに、詩があり道徳がある。かういふ一言一句が何ともいへぬ空想的魅力を以て兒童の心を襲ふのである。

〔女孺は蓋し白きものの美なる精靈にして、冬季小兒等の賞罰を司どり給ふ神女にこそ。〕——雪女孺の正體とその使命である。いかにも美しい存在であり、いかにも美しい使命である。

〔眼に遮るは唯銀沙渺々として他に物色を見ざるを以て、素白に眩せる視線のふと他に轉ずる途端、眼球に映ずる處の森・家・垣根など、何等かの物體の作用に因りて、橋の上、軒端、或は松の梢

三 備考

一 指導の問題

前課が多の刻苦を描いた文であつたとすれば、本課は冬の安息を描いた作である。前課が寫實的作風であつたとすれば、本課はロマンティックな作風である。そのいづれにも著しい迫真感が存するのは、その基底が、一朝一夕の觀察でない爲である。

などに、髣髴たる神女の姿を認む、蓋し一種異様の幻影なり。」——雪女孺現象の説明である。地方によつてはこれを「雪降り入道」ともいふらしい。女孺と入道では大變な相違であるが、現象は同一原因によるものであることはいふまでもなからう。

三 批評

雪國の冬の生活氣分が、鏡花一流の筆によつて描かれてゐる。殊に大雪の夜の一家の團樂とそこに訪ねて来た話上手の伯父さんの雪女孺の話は印象が深い。一體、自然の脅威の下に人間は親愛の情を深めるものであるらしい。さういふ人情の暖かみといったものが家庭生活の上によく捉へられてゐる。

北國に生まれ、北國に育つた作者の見聞が、ロマンティックな作者の空想を経て印象的な表現を得てゐる。

(一) 独自の風格を有つた文體であるから、最初とりつきにくいかと思はれる。そこを辛抱して讀みかへさせてゐるうちに、この文の滋味に觸れ来るであらう。何れにしても、著しい獨自性を有つた文であるから、それに觸れるまで讀みぬかせることが學習の基底にならなくてはならない。

註解も語句そのものとして、又事實としての知識を與へなくてはならないものがある。後者は北國の生徒と南國の生徒とで著しく違ふに相違ない。その邊の手心は、質問の有無の外、生徒の讀みぶりによつても洞察せられるであらう。

(二) 解釋の指導は、敘述の問題から入るのが順路であらうか。主題は比較の見出し易いかと思はれるが、構想には困難を覺えるであらう。先づ印象の深い箇處を擧げさせ、それを晝夜、又は大人と兒童といふ如き條件から定位させ、その對がどこに、如何に描かれてゐるかを辿らせることによつて、構想發見の端緒が得られるであらう。さういふ意味の構想美を特色とする文ではないけれども、その展開を見逃しては眞の理解は得られないやうに思はれる。

(三) 批評としては文體の獨自性、ロマンティックな作風を通して北國生活に見出される詩美を定位させると共に、現代のスポーツと前代の遊戯とを比較させることも、指導の發展として認められる。前課との比較、ひいては明治大正文壇に於ける作者の位置を知らせることも可能であらう。

二 參考資料

作者の文章觀の一端を窺ふ爲に、「鏡花全集」第十五卷所收「文章の音律」及びの全文を引用する。

近來の小説の文章は、餘程蕪雜になつたやうに考へられる。思想が大切であるのは言ふまでも無いが、粗笨な文章では思想が何んなに立派でも、讀者に通じはしまい、感じはしまいと思ふ。就中近頃の小説の文章に、音律といふことが忽にされてゐる、何うして忽せ處ではない、頭から文章の音律などは注意もしてゐないやうに思ふ。予が文章の音律と云ふのは、何も五七調とか七五調とか、馬琴流の文章や淨瑠璃の文章のやうなのをいふのでは無い。予は今の文章が眼にのみ訴へて、耳に聞かす文章でない、耳に聞かすなどいふ事を考へてもゐまいかと思ふ。此間も或新聞社の人に話したが、言文一致體の語尾の「だ」と「である」との事で、予は「だ」といふと強く當り過ぎると思ふ。文章であるから、對話とは違ふから好いが「だ」では、讀者に失禮なやうな心地がする。「である」ばかりを、使へもせぬが、此方が好い、予は何もさう窮屈に考へずとも、「なり」でも「けり」でも使つて可い、文の前後で不調和にならなければ可いと思つて居る。往々言文一致の文章では、莊嚴とか崇重とかいふ趣が出ないやうに言ふ人があるが予は強さうではないと思ふ。例へて見れば、例の「……皇國の興廢此一戰にあり」といふ文を、言文一致に解釋して、「此一戰にありだ」といへば言文一致體、「あり」では言文一致でないと言ふのは何うであるか、「……此一戰

にありだ」の「だ」を省いたと見ても可いではあるまいか、總て此處等を自由に行きたい。

前に言ひし文章の音律とは、今の小説では、十七八の娘だと地の文に書いてあるから、其會話が十七八だと思つて見るが、此れは眼に見せる文章で、十七八の娘とも何とも斷り書をしなくとも、讀んで十七八の娘だと聞えなければいけない。眼を閉いで會話を讀むのを聞くと、十七八の娘が六十幾歳の老婆か分らぬなどは心細い。當りさはあるから例は出さぬが、ひどいのは、口に出して讀んで見ると、男か女か分らぬのさへある。予は文章は見るべきものでなく、讀むべきものだと思ふ。口に出して分らぬやうなのは好く無い。會話のみを言ふのでは無い、例へば「雨が降る」と云つても、雨の音が聞えなければならぬ。文章でいかにも雨が降つてるなと感じさせねばならぬ。「雨が降る」といふ文章を見て、其の感の無いのは眼に訴へるので、書いてあるから、雨が降つてるのだなどは宜しく無い。ツマリ耳に聞かす注意がないからである。「ユツタリと……」とか「悠然として……」とか書いても、其文の音律が没却されてゐては、讀んで見ると悠然でも何でもない、文字には悠然として何とか書いてあるに拘らず、其悠然が駈つこしてゐるなどがある。音律といふことは、文章の一機能である。文章に音律を没却して

は苟も文章とは言へない。さうでせう。「いづれのおんときにかありけん」と源氏の書出しであるが「何時だつたかね」と云つては、源氏も何もあつたものぢやない。曉臺の句に

まくり手に踊くづして通りけり

といふのがある。此句に音律があるから、讀んで——見ただけではない、如何にも腕まくりした男が、盆踊か何かの踊の一團を崩して、悠々として通るのが表れてゐる。「まくり手して踊を崩して通つた」では其趣が出ない。白雉の句にも

夕月や柳がくれに魚わかっ

といふのでも「夕月に柳のかけで魚を分けてる」では矢張趣が出ないと云つたやうな譯である。

それで音律を忽せにして、眼にのみ見せようとするのは、文章ではないと思ふ。女房が借金取が来て仕様がなといふと、亭主が借金取が来て、泰然自若たりだといふと假定する。處で、此女房が眼に一丁字の無いもので、泰然自若の意味が分らなくても、其言葉で如何にも泰然自若たる處が表れてゐなければいけない。是が音律を忽すべからざる點だと思ふ。無學の者でも、文章を聞いて其趣を捉へることの出来るやうに書くのが、文である。其れは一にまた音律の如何に依るのであると思ふ。

一七 銀線を描く

浦松 佐美 太郎

一 解 題

一 本 文

「銀線を描く」の大部分を抄録したものである。
「銀線を描く」は昭和七年一月、雑誌「改造」に掲載せられた隨筆で、「スキーを語る」と副題せられてゐる。

二 作 者

浦松佐美太郎。明治三十四年十月大阪市西區江戶堀に生まれた。大正十四年東京商科大學卒業、同年經濟學研究のため英國に渡り、昭和四年歸朝、その間 스위スはじめ佛・伊・埃等の諸國の山嶽を

跋渉した。現在、太平洋問題調査會の仕事に従事してゐる。

著書に「Comparative Study of Boycott」(高橋賢三、譯著に「支那の農業と工業」(牛嶋友三)がある。

三 採 擇 の 趣 旨

前々課が氷上の勞働であり、前課が雪の下の安息悦樂であつたのに對してこれは雪上の運動である。前課が多に對する信順の表現であつたのに、本課は多に對する克服の表現である。文藝的教材であり、文化的教材である。

二 教材としての研究

一 註 解

【銀線】ギンセン こゝは、銀色のすぢ。雪の上に描かれたスキーの跡を形容した語。

【その刹那】その瞬間。

【刹那】セツナ 梵語 *ksana* で、「念」と譯す。佛教にいふ時の最小單位。巴利佛敎では十度彈指する間をいひ、北方佛敎には諸説があつて、俱舍論には壯士が一度彈指する間に六十五の刹那があるといひ、仁王經には、一念に九十の刹那があり、一

の刹那に九十の生滅があると説く。

【弓を満月に引きしほつて】 弓が満月のやうな形になるほど、弦を強く引き張つて。

【満月】 マンゲツ 月の黄経(天球の赤道に於て緯から天球を通り、黄経に下した大圓の足と赤道との角距離)が太陽の黄経より一八〇度大なる時即ち太陽・地球・月が一直線上にあつて、地球が太陽と月との間に在る時で、月は輝いた圓い面を地球に向ける。望まはろ。望月。十五夜の月。

【引きしほる】 弓に矢をつがへて弦を十分に引き張る。

【瞬間】 シュンカン またくひま。極めて僅少の間。瞬時。瞬刻。

【弓道】 キユウダウ 我が國武道の一。道として考へられ、精神修養と一致せしめられた弓術。弓を以て、身を守り敵を制する術を學び、併せて心身を鍛錬し人格を完成する道。

我が國では古く武藝のうち最も弓術を重んじ、武道を「弓矢の道」、武士を「弓取」といひ、朝廷に於ても種々の儀式が行はれた。源平時代には武士は特に強弓を誇り、次いで鎌倉時代には流鏑馬・犬追物・笠懸等が行はれて益々射術の發達を見、室町時代には射禮しやうらいに小笠原、射術に日置の二流が起つて、殊に後者からは後世多くの流派を生じた。やがて銃砲の渡來するに及び、漸く衰微の道を辿り、徳川時代には武藝としてはさのみ重

んぜられなかつたが、近年に至り、心身の鍛錬道として新しく復活しつゝある。

【醍醐味】 ダイゴミ (一)醍醐のやうな美味。最上無比の美味。(二)佛教では、如來の最上の教法に譬へる。(三)「醍醐」に同じ。こゝは(一)。

【醍醐】 牛乳を精煉して行つて最後に得る濃厚甘味の液。五味(牛乳又は羊乳を精製して頂次に得る)の第五で、食品としても薬用としても最上のものとせられる。天台宗の教相判釋に於ては、五時(五時五分に區分した概)の第五法華涅槃時に配せられる。

【斜面】 シヤメン (一)水平面に對して傾いた平面をいふ。(二)山の斜面。即ち、屋根と谷との間の部分をなす地表をいふ。スロープ (slope)。こゝは(一)。

【スキー】 スキ (英) 雪上滑走又は雪上登行を行ふ爲の木製の用具。又、これを使用する雪中運動。用具としては、橈體・縮具の二要部及び兩杖その他の附屬具から成る。

橈體の材は弾力性に富み、質が堅くて割合に軽く、吸水性が少く、乾濕に對して容易に歪みの來ないこと等を必要條件とし、一般に樺・いたや・櫻・樺・とねりこ・ヒッコリー・アッシュ等が使用され、就中米國産ヒッコリー、ノルウェー産アッシュ

が最上とせられる。形状・長さ・幅・厚さ・重さは用途(ジャンプ用・實用等)及び使用者の體格・技術に應じて決定されるが、一般

スキーの長さは、スキーと並んで直立しその先端が握れる程度を標準とする。型は丸型(山型)・平型の二種が最も普通で、接雪底面に一本の溝(軌道)がある。縮具には種々あるが、一般に使用されるのはフィットフェルト式縮具・ハウグ式縮具・ミリタリー式縮具等である。兩杖は兩手に一本づつ持つもので、石突・藤輪・編革・握り革・竹又は藤の五部分から成り、平地行進・登行などの際に前脚の如き働を爲し、又、滑降・廻轉等に於ても重要な助成をなす。

【一氣】 イッキ (一)一つの呼吸。(二)一つの氣力。ひといき。ひとおもひ。こゝは(二)。

【一切の味】 イツサイのアヂ あらゆる興趣。面白味といふ面白味は悉く。

【滑り落ちてゐる】 ずつと下の方へなだらかに續いてゐる、の意。

【瞳を凝らして】 ヒトミをこらして 瞳を一箇所に集中せしめて。じつと見つめて。凝視して。

【瞳】 眼球の角膜の後に於て、虹彩にかこまれた小孔。瞳孔。

光はこの小孔を通じて水晶體に達し、集結されて後壁の網膜に

像を結ぶ。(瞳孔は虹彩の伸縮に應じて擴大又は縮小する。)

【魅惑】 ミワク 魅力を以てひきつけまどはすこと。一種の不思議な力を以て人の心をひきつけること。

【魅】 (一)ばけもの。もののけ。へんげ。妖怪。(二)みいる。人をばかす。

【抑へて】 こゝは、捕へて、とりこにして、の意。

【スタート】 スタート(英) 競技等に於ける出發。又、その出發點と定められた地點。出發點。

【無我の境地】 ムガのキャウチ 他の一切を忘れ、一事に全我を没入してゐる状態。

【無我】 (一)佛語。梵語 Anātman の譯語。佛教の根本義で、人に於ても法に於ても常一主宰の我體のないこと。非我ともいふ。(二)我意のないこと。私心のないこと。無心なこと。

【境地】 心の位。心の状態。

【小氣味がよい】 氣持がよい。痛快である。

【小氣味】 コキミ 「氣味」に同じ。

【誇張】 コチャウ (一)事實よりも大きく言ひなすこと。誇大に述べること。(二)修辭上の用語。事物を實際より過度に大きく或は過度に小さくいふことをいふ。こゝは(一)。

【飾り氣】 カザリケ 虚飾のある様子。外觀を飾つた様子。取繕つた様子。

【曲線】 キョクセン (一)まがつたすぢ。(二)數學上で、いづれの部分も直線でない線。即ち、線の中で、直線又は線分の接續によつて成る線以外のもの(直線等直線では直線。こゝは(一))。

【スラローム】 slalom(英) 蛇行狀に曲線を描き出す滑り方。滑降と方向轉換を連続的に進ぶもので、クリスチアニア・スラロームとテレマーク・スラロームとがある。

【小面憎い程の美しさ】 小面憎くなるほどよくとゞのつた美しさ。一點非のうちどころもない美しさ。美し過ぎるほどの美しさ。

【小面憎い】 コツラニクイ おもにくい。見るも憎い。(「面憎い」よりも稍意味が強い。)

【加速度】 カソクド 時間に對する速度の變化の割合を表す量。

【飛沫】 ヒマツ とびちる沫。しぶき。とばしり。こゝは、細かく亂れ飛ぶ雪の粉末。

【なだらか】 (一)おだやか。平穩。(二)勾配がゆるいこと。かどだたずけはしくないこと。こゝは(二)。

【カーブ】 curve(英) (一)曲線。(二)彎曲。彎曲物。彎曲部。(三)

れた。東方にベルニナ峠(二三三〇米)がある。

作者は、サンモリッツ方面から、まづピッツ・ベルニナへ登り、ピッツ・パルニーニを経てパルニーニ氷河を降つたのである。

【氷河】 ヒョウガ 内陸又は山地に於て、地表を蔽つた氷塊が地表面上を移動するもの總稱。雪原として堆積した雪は表面が融けてその水が次第に下部に集つて凍り、又下底まで溶融點に達しない寒地では次第に下部から凍つて上表には更に雪が積つて厚くなる。かくして凍結した氷はその重みにより傾斜面を流下して氷河を形成するのである。

極地方で地表を蔽つた氷原が、その中央部から四方に向かつて放射狀に移動するものを内陸氷河といひ、山地に於て見られるものを山嶽氷河といふ。内陸氷河の更に大なるものを大陸氷河といひ、グリーンランド・南極地方、又第四紀に北ヨーロッパ、北アメリカを蔽つてゐたものはこれに屬する。これの末端が海面に達し破碎されたものは氷山となつて海上に漂ふ。山嶽氷河はまた、山麓型・樹枝型・アルプス型・馬蹄型等に分けられ、ヒマラヤ・天山等の氷河は多く樹枝型氷河に、アルプス・コーカサス等のそれはアルプス型氷河に屬する。氷河の流速は、アルプスに於ては一日平均三分の一米乃至三分の二米を普通とす

野球の用語。打撃を封ずる爲に投げる曲球。魔球。こゝは(一)。「刺り出された」刺つて作られた。

【刺る】 刺る 道具を用ゐて刺しながら穴をうがつ。悉ぐる。悉る。

【しなやか】 (一)しなふさま。しなつてたわむさま。(二)かどくしくなくやさしく見えるさま。なまめいてやさしいさま。なよまか。こゝは(一)。

【彈力】 ダンリョク (一)物體が外力を受けて歪む時、これに抗して舊に復しようとする力。(二)壓迫や困難を耐へ忍んではねかへさうとする力。伸縮力。屈伸力。こゝは(一)。

【粉雪】 コユキ 粉末の如く細かなさらさらした雪。こゝは、細かく飛び散る粉のやうな雪をいふ。

【經驗】 ケイケン (一)實際にためし試みたこと。又、實際に試みて得た知識・技能。(二)感官を通じて得た知覺。又、知覺によつて結合せられた知識。こゝは(一)。

【ピッツ・ベルニナ】 Piz Bernina スイスとイタリヤとの國境、イタリヤのコモ湖の北東に當るベルニナ山塊(レチア・アルプス(山嶽の西方の一區)中の最高峯。海拔四〇五二米。その頂上は西曆一八五〇年に征服さ

るが、アラスカ・グリーンランドの大氷河では一日一〇米乃至二〇米に達するものもある。

【山小屋】 ヤマゴヤ 山嶽地方で、登山者の休憩または宿泊に當てる爲に、登山路に沿つて建てた小屋。ヒュッテ(Hütte)。

【カンテラ】 オランダ語 Kandelare(燭台)又はポルトガル語 candeia(燭台)の轉訛。鐵葉・眞鍮又は銅などで油壺をつくり、中に石油を入れ、綿糸を心にし、火を點じて燈火として携へられるやうにしたもの。もと商家・劇場・露店などで多く用ゐた。

【流れ星】 ナガレボシ 流星。宇宙に浮游する小天體が地球の大氣中に突入し、大氣との摩擦によつて熱と光を發して望見せられるもの。

斯様な小天體が實際に地球の大氣中に達する數は一日に二千萬の程度に及ぶと推算される。これ等が燃盡消滅しないので、發光する高さは一〇〇軒以上(時にその數倍)で、速度も毎秒二〇一—一〇〇軒以上に及ぶことがあり、概ね長い光條を曳いてゐる。

【沙漠】 サバク 岩片・砂礫等から成り、流水・草木等のない廣大な高原又は平原。一年中の氣温差が大で、降雨が殆どない。

【錯覺】 サクカク 外界に存する對象をその本來の形(質的)にも量的にもと違つたものに知覺すること。

【思ふさま】 心に満足するほど十分に。おもふまゝ。存分に。
【酔ひながら】

【酔ふ】 エふ・ヨふ こゝは、一事に熱中して精神を奪はれる、恍惚となる、うつとりとなる、の意。

【反面】 ハンメン (一)顔の半分。かためん。(二)物の両面の一方。(三)かたかた。かたはう。一方。こゝは(三)。

【片時】 ヘンジ・カタトキ 一寸の間。ごくわずかな間。

【雪崩】 ナダレ 斜面に堆積した雪が崩れ落ちる現象。地表の状態・雪質・積雪量・温度・摩擦等の關係から突發的に發生する。

雪崩の種類には新雪雪崩(融雪中に起るもので、一定傾斜一定面積の雪層で、固く支へきれなくなつて滑り落ちる)・舊雪熱雪崩又は湿潤表層雪崩(雪先に多く支へきれなくなつて滑り落ちる)・板状雪崩(下層の雪層が漸次だれて次第に薄層になり、上層の積雪は、(下層の雪層がだれて現れる現象で、地表に接した積雪層が地熱の温に融け、雪が融けてくる結果、遂に空層が出来て滑り落ちる)・地こすり又は底雪崩(雪になつて現れる現象で、地表に接した積雪層が地熱の温に融け、雪が融けてくる結果、遂に空層が出来て滑り落ちる)・機械的雪崩(人・獸の歩に融けし始め、雪が出来る。更に空層が生じて滑り落ちる)等が考へられる。雪崩・岩石の落下等の機械力が加つて雪層を切り、雪が考へられる。雪崩の支持力を破り又は重力に更に力を加へる結果生ずる等が考へられる。

【暴虐】 バウギヤク 亂暴で人を虐げること。非理・非道で殘虐なこと。

【犠牲者】 ギセイシャ 自分の生命をいけにへとした者。他人の爲に身代りとなる者。こゝは、他の人々は無事ななかに、偶々遭難

した人をいふ。

【犠牲】 (一)天地・宗廟を祭る時に供へる生物。いけにへ。(二)ある目的又は他人の爲に己の生命・財産・自由・權利等を捧げること。

【目を睜らされた】 「目を睜る」メをミハル 怒り又は驚きなどして、目を特に大きく張り開く。

【欲求】 ヨクキウ ある物事を追ひもとめて、得ようと努力すること。ほしがり求めること。願ひ求めること。

【雪原】 セツゲン 雪線以上に横たはる雪の表面。

降雪量が融解量と蒸發量より大なる場合、雪は所謂萬年雪となつて一年中残る。この萬年雪のある土地の高度の下限を雪線といひ、極地方に於ては海面に達し、赤道直下では海拔約五〇〇〇米である。

【心ゆくまゝ】 心に願ふ通りの。思ふ存分の。

【心ゆく】 (一)氣が晴れる。氣がすむ。満足する。(二)氣をとられてうつとりする。(三)氣持よく思ふ。

【快心】 タツイシン よい心もち。よい氣持。心もちをよくすること。甘心。満足。

【緊張】 キンチャウ ひきしまつて勢づくこと。たるみなく張りきつてゐること。高潮に達すること。

【曲目】 キョクモク 音楽會などで、その演奏すべき曲の目録。又、音楽の曲の名目。

【ジャンプ】 jump(英) こゝは、スキージャンピングをいふ。(次頁「スキージャンピング」参照)

【審判員】 シンバンキン 競技の勝負を判定する役目の人。

【踏切臺】 フミキリダイ 跳躍競技に於て、強く踏んで身を跳らす臺。こゝは、ジャンプをいふ。(「ジャンプ」参照)

【唸】 ウナリ こゝは、うなるやうな音。即ち、規則的に高くなつたり弱くなつたりして続く音。

音響學的にいへば、少しく高さを異にする二樂音(原音)が近接した位置で同時に發せられるとき、その中間の高さを有つ一樂音と化し、それが一定時間を隔てて明滅を繰返す現象をいふ。

【弧を描いて】 ヨをエガいて 圓い曲線をなして。

【弧】 (一)木の弓。(二)圓周の一部。曲線の一部。

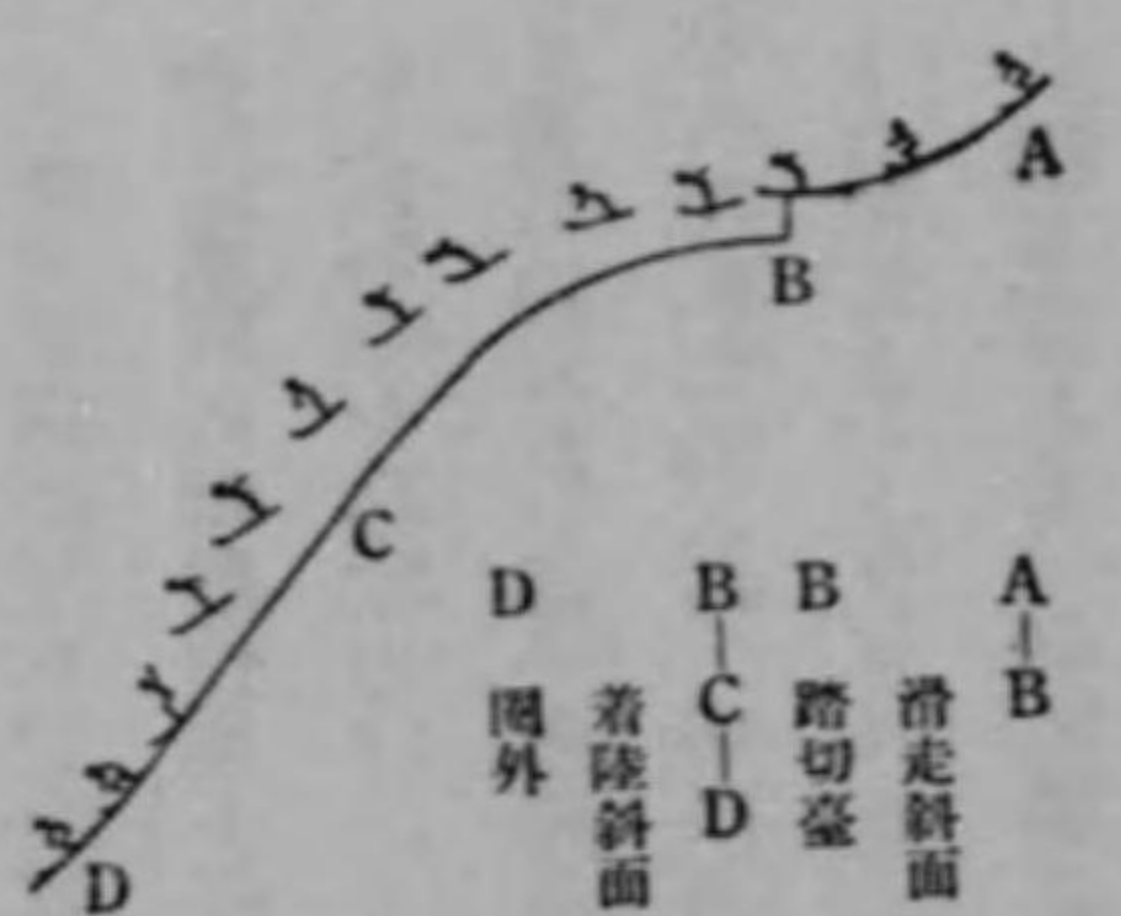
【急角度】 キフカクド 急な角度。

【角度】 「角」に同じ。相會する二直線のなす形。又、その形の空間の度數。圓の中心から圓を三百六十等分したものを單位としてはかる。

【均齊の取れた】 つりあひの整つた。

【均齊】 キンセイ (一)二つ以上の物事のひとしいこと。平衡。(二)繪畫・建築・裝飾・圖案等に於て、左右に同じ形の對立してゐること。シンメトリー(symmetry)。

【ジャンプ】 Schanze(獨) 「飛躍臺」と譯す。スキージャンピングを行ふ爲に特に設けられる設備で、



準備滑走斜面(飛躍の爲に速度を與へる圓錐形の斜面。スタート直後は四〇―三五度の急傾斜で、踏切臺に近づくと、傾斜は二―四度に緩つて、踏切臺となる)・踏切臺(飛躍を起す所)・著陸斜面(圓錐形の斜面で、飛躍距離を大にする爲に、四〇―三五度の急傾斜となす)・圏外(着陸時の速度を緩める爲に、四〇―三五度の急傾斜となす)の部分から成り、準備滑走斜面から踏切臺までは人工的に加工される。

【二瞬の間】 イツシユンのマ 一瞬間。一またゞきするほどの極めて短い時間。轉瞬の間。

【スピード】 speed(英) 速度。はやさ。

【スキージャンピング】 Ski jumping (英) 「飛躍競技」と譯す。ジャンプを利用して、出来るだけ長距離を、一定の正しい姿勢を保つて跳躍する競技で、スキー競技中の華といはれるもの。その飛躍記録はジャンプの大小、雪質等によつて著しく異なるが、現在の世界最長記録は九九・五米である。

【スポーツ】 Sport (英) (一)遊び。慰み。戯れ。娯樂。(二)遊戯。遊び事。勝負事。こゝは(二)。

廣義には、娯樂となり慰安となるすべての運動をいふが、現代文化の形式に適應するやうに規正された意味に於ては、娯樂となり、身體及び精神の修練並びに健康に効果ある競技運動をいふ。現在スポーツの中には約二百種を數へられ、身體のみで出来るもの(競走・相撲・相撲・レス、補助用具を用ゐるもの(テニス・野球・サッカー・ラグビー・アイスホッケー等)、競技用具を中心とするもの(ボウリング・ゴルフ・テニス・ボウリング・テニス・ボウリング等)、生物又は機械類を用ゐるもの(自動車・飛行機等)、精神的なもの(将棋・圍碁等)等に分けられる。

【スカンジナビヤ】 Scandinavia スカンジナビヤ半島。ヨーロッパ大陸の北西に横たはる一大半島。長さ約一八〇〇軒、幅員最大約八〇〇軒、面積約八〇萬方軒。フィンランドの西北端から

西南方に延びて、バルチック海と大西洋との間に挟まり、スカンジナビヤ山脈が半島の中軸から西部に偏して縦貫し、東側にスウェーデン、西側にノルウェーがある。東半は階段状になつてバルチック海に下り、南部海岸に低原をつくり、西半は急斜し、海岸は氷河の削磨作用を受けて出来た峡灣が發達して所謂フィヨルド式海岸を呈する。

【必要に迫られて】 必要上餘儀なく。どうしても必要になつて。

【待ち焦れてゐる】 切に慕ひ待つてゐる。待ちに待つてゐる。

【焦れる】 コガれる。こゝは、おもひにもえる、戀ひしたつて憤み悶える、切に慕ひ悩む、の意。

【レオナルド・ダ・ヴィンチ】 Leonardo da Vinci 西曆一四五二年イタリア、エンボリの近郊ダインチの小村に公證人の庶子として生まれ、青年時代ヴェロッキオに師事した。一四八二年多藝を誇る有名な自薦状を携へてミラノ侯スフォルツァを訪れ、爾來その宮廷技術家としてこの地に留つたが、一四九九年スフォルツァ家の没落と共にフィレンツェに移り、後ローマに滞在した。一五一六年フランス王フランソワ一世の聘に應じてパリに到り、晩年をアンボアーズの城中に送つた。一五一九年五月歿。その藝術上の活動はフィレンツェ・ミラノ時代で、豊かな感受性と繊細な感覚を

有してその事象の把握は雄大であつた。就中畫家として最もすぐれ、「聖晚餐」の壁畫は繪畫史上極めて重要な地位を占め、その外「モナリザ」「聖アンナ」「ヨハネ」等の名作がある。科學者としては、倦まざる研究心を以て自然の神祕をあばかうとつとめ、解剖學・天文學・光學・音響學・力學・地質學等に於て、幾多の重要な研究を遺した。

【彼の手帳】 西曆一九〇六年刊行の "Leonardo da Vinci's Note books" を訳す。

原文は次の如くである。

Snow taken from the high peaks of mountains might be carried to hot places and let to fall at festivals in open places at summer time.

【アルプス】 Alps イタリア・フランス・スイス・ドイツ・オーストリア等の諸國に跨がるヨーロッパの大褶曲山脈。イタリア半島の北部(の北境)を大きく弧を描いて走り、東にカルパチヤ、東南にチナルアルプ、西にジュラ、南にアペニンの諸山脈と相連なつて、一大山系を形づくつてゐる。通常これを西・中央・東の三群に分ち、中央アルプスを更に北部と南部とに分けるが、いづれ

も山勢峻峻を極め、最高峰モンブラン(海拔四八一〇米)を始め、モンテローザ(四六三八米)・マッテルホルン(四五〇五米)・ユングフラウ(四一六六米)等、四時雪を頂く高峯(標高三〇〇米)が限りなく相連なり、その間には、メーア・ド・グラーヌ・アレッチ・バステルツェ等幾多の氷河が今も猶存してゐる。又山麓は鬱蒼たる森林に蔽はれ、或は緑の牧場が開け、これを飾るに紺碧の湖を湛へて、ヨーロッパ第一の豪壯・雄大な風景を現出してゐる。

【藝術家】 ゲイジツカ 藝術的作品を創作若しくは再現して、その才能に應ずる美的効果を公衆に與へ、それを主要の任務として生活する人をいふ。故に嚴密にいへば、創作的藝術家(作家及び音樂家等)と再現的藝術家(俳優・音樂家等)とを區別すべきである。

【冬への革命】 冬といふ季節の性格に對する根本的な變革の意で、冬が、今までの暗鬱さの代りに、歡喜に満ちた明朗さに於て見出されるやうになつたことをいふ。

【革命】 カクメイ (一)「天命の革る」義。支那で、天子は天命を受けて天下を統治するといふ思想から、前の王統がくつがへつて他の王統が統治者となること。(二)非合法的に國家の基礎又は社會の組織を變革すること。(三)萬物の狀態或は作用等に関する根本的な急激な變化。

二 解釋

1 主題

スキーの運動美の数々と雪の魅惑。

2 構想

(1) 雪の魅惑。(初—二二〇九)

イ 雪の上に描き出される一線。

ロ スキーの両端から珠のやうに舞ひ上る粉雪。

(2) 氷河直滑降の豪壯美。(二二二〇—二二五〇七)

(3) 高山や大雪原に銀線を描く冒險美。(二二五〇八—二二八〇五)

(4) ジャンプの豪快美。(二二八〇六—三〇〇五)

(5) 雪の魅惑と冬への革命。(三〇〇六—終)

3 敘述

「雪の斜面の上にスキーの先を揃へて一気に滑り下らうとするその刹那、其處にスキーの一切の味がある。」——これは想像の快味よりは體驗の快味である。全心全力を罩め、スキーと自己とが一枚になり、天地と一丸にならうとしてゐる瞬間の味はどんなにか深く豊かなものであらう。

「風を捲き起して飛び下つてゆく快さは、見てゐても小氣味がいい。」——弓を離れた矢は唯無我の境をゆく。一語を著ける餘裕

もない。飛び下る者には飛び下る事實があるのみである。その妙趣を表すには「見てゐても」と、傍觀者の言葉を借りる外はないのである。又は「立止つて」回想の働に俟つ外はない。この天地一丸の無我境こそ、スキーの醍醐味でなければならぬ。

「たゞ一線、雪の上に眞すくに描き出されたスキーの跡は、幾度眺めても美しい。何の誇張もなく何の飾り氣もない一本の線ではあるが、力強い鮮かな美しさである。」——スキー美の象徴ともいふべき一線である。全心全力を傾けた無我の線が美しくない筈はない。

「胸に顔に、霧のやうにぶつかつて来る雪の飛沫。なだらかなカーヴで剥り出されたスキーの尖端は、こんな場合に一番美しく感じられる。」——顔に散りかゝる雪の美も、カーヴで剥り出されるスキーの尖端の美も、共に運動の美である。しかもそれは無我の境に於ける運動美の象徴に外ならぬ。

「猛烈な速度で飛び去つてゆく雪の斜面に、しなやかなスキーの尖端は見事な弾力で滑つてゆく。そして雪はその両端から煙のやうに飛び散つてゆく。」——簡素の美そのもののやうなスキーの尖端を中心として、その様子が見え、その音が聞えて来るやうだ。

「沙漠の上をスキーで歩いてゆく。カンテラで照らし出された雪は、

そんな不思議な錯覺をさへ與へた。」——花とまがふ粉雪の美しさとは全然かけ離れた別種な雪の美しさを讀者の眼前に浮かべせる巧みな言表である。「不思議な錯覺」は不思議な魅力となつて奥へ奥へと引張つて行く。

「たゞ遠くに見えてゐた山が、急に目の前にそゞり立つて来るのに驚かされるだけで、非常な勢で滑つてゐるといふ感じが少しもない。」——直滑降の豪壯味には作者もその表現に苦しんでゐる。速度の感覺を失つてしまふほど、その雄大な景色の中に吸収されてゐるのである。この速度感を亡失する無我の境こそ直滑降の醍醐味なのである。

「聲を立てれば、山が揃つてわめき出しさうだ。」——山と山との密合つて、今にも話を始めさうにしてゐる世界、人の世界から斷ち切られた山だけの世界の感銘が鮮かに出てゐる。

「多の山では、一切が雪の下に凍つてゐる。唯風だけが、氣の向くまゝに到る處に荒れてゐる。」——何といふ冷厳な天地であらう。そして又何といふ神祕な世界であらう。こゝに入つてゆく者に、

修行の僧が道場へゆく心と通ふものが見出されるといふことはよく言かれる。

「細かに雪の性質を分かち、その何れの一つをも見逃すまいとする彼等の努力は、驚歎する程である。」——雪を愛する者にとつては、雪の示す美しさと共に、又その暴力は重大な問題となる。そしてそれを避ける爲の雪質の檢分をして、あくまで雪の美しさに浸らうとするのである。

「スキーを著けて、愈々山を下らうとするその刹那の緊張は、これから始らうとする最後の曲目に耳を澄ます心持だ。」——餘情・餘韻を心ゆくまで味はひつゝ、最後の感興を満喫しようとする緊張が推想せられる。

「どの一つを取離しても美しい姿である。併し、その何れもが、僅か一瞬の間に過ぎ去つてゆく。」——瞬く間の複雑な運動を分解した後、それを速度化し、又系列化して、變化と統一とを有つた運動美に具體化してゐる。

「子供達は、夏の太陽の下にさへ雪を待ち焦れてゐる。」——雪の季節だけではなく、一年中絶えず子供等の心を奪つてゐる雪の魅力

の強さをいつたもので、嘗ては退屈な季節とせられ、室内遊戯の時季とせられた多であつた時代に比べると、確に「多への革命」であつた。

「多といふ言葉の響きへ、聞く者に依つては、異なつた氣持を與へつゝあるではないか。」——スキーを通じて雪の世界の喜を味はつた者と、それを體驗しないものとは、「多」といふ言葉に對する語感が異なつてゐるといふのである。こゝまで徹しなければス

三 備考

一 指導の問題

題材の魅力と文體の新鮮さは大多數の生徒を捉へ、その讀みを喜ばしめるに違ひない。しかしかういふ文の學習指導上の困難は、生徒が興味を以て就くだけに、興味を得て満足してしまひやすい點にある。それを導いて眞の理解に達せしめ、更に理解そのものの喜びを併せ味はしめる所に、指導の目的が存しなくてはならぬ。さういふ努力によつて、この文は單にスキーの運動美を列記してゐるのみではなく、スキーを通して雪の美を探り、冬の山の魅力を讀へてゐるものであることが、新に見出されるであらう。

構想に於ては、スキーの一般的な興趣(1)に出發して特殊な趣致(2)

スキーヤーとはいへないであらうと共に、言葉の性格をよく捉へてゐる考へ方である。

三 批評

鮮かな體験の表現を成し得てゐる。この種の文は、或は自己陶醉の美文に陥り、或は乾燥無味な説明文に墮し易いが、作者のスキー愛と自由な表現力とは、能くこの弊に陥ることなく、新鮮な文體を生み、潑刺たる文學的表現を成し得てゐる。

(3)(4)に及び、更に雪の魅惑の甞した冬の觀念の根本的な變革(5)に至つてゐるもので、それが自由に、自然に展開せられてゐる所に、却つて學習の困難がある。

主題に至つては、到る處に、その活き／＼とした發露があつて、さまざま把握に困難しないに違ひない。唯、それが言表の用語を適切にすることに、多少の苦心を要するであらう。

二 參考資料

日本に於けるスキー術の發達の大要を、河上壽雄・中川新・宮川恒夫三氏共著の「ゲレンデ・スキー」から抄記する。
北歐洲のスキーは古代に於てアジヤのアルタイ地方及びバイカル

湖附近より發生し、その發達は北方住民の移動により各地に流布したものであるとなすが、その説に就ては未だに詳かでない。

日本のスキー發祥地は時を同じくして全然獨立した二つの地より發達した歴史を持つてゐる。一つは越後高田に傳はつたツダルスキーのアルパイン式であり、他は北方札幌に於て發達を見たノールウエースキー術である。

明治四十二年夏頃、當時札幌農學校に獨逸語の教鞭をとつてゐたハンス・コーラー氏によつて瑞西チューリッヒから一臺のノールウエー式スキーが取寄せられ、氏はスキーを初めて見る若い生徒の前で「滑る爲めに穿くものである」と説明したと傳へられてゐる。そのスキーを眞似て數臺造つたのが我國で作られた初めてのスキーなのである。

翌四十三年瑞西公使の杉村虎一氏が我が陸軍省へ同國の軍隊スキーを二臺軍事研究の爲め送られたが、陸軍省ではこれが何にするものか解らず、その儘、物置室に忘れられてあつたが、その年の暮に高田師團に軍事研究で來朝した埃國の參謀少佐テオドル・フォン・レルヒ氏がスキーの教練をやつてもよい、と言ふ事で早速陸軍省から例の二臺のスキーが高田に廻送されて來た。そして當時の高田師團長、長岡外史將軍以下の將校がレルヒ氏に依り埃國式スキー術を

一冬猛烈に教へられたのである。そして明治四十四年第一回の講習會に於て將校のうち上達の速い者がレルヒ氏によるスキー術終了證書を授與された相である。恐らくこれが我國に於けるスキー術終了證書の初めであらう。

かやうに第一に軍隊に植ゑつけられたスキー熱は轉て一般民衆に傳播して、由來高田市はスキーの發祥地とし又スキー製作地として有名になつたのである。

明治四十五年にはレルヒ氏は旭川師團に招聘されてスキーの軍隊教練を同地に於て行つてゐる。

其の後大正二年の新春、高田師團の鶴見大尉以下六名の富士山頂行軍は當時としては實に冒險なスキーを敢てなし美事に成功して世人を驚歎させたのである。

大正五年に北大教授遠藤博士がノールウエーのスキー地を巡回され歸朝するや、北大の學生に指導を初めた。一方レルヒ氏のコーチの下に埃國式スキー術も傳播されつゝあつたが、遠藤博士の歸朝されるや非常な勢でノールウエースキー術がこれに變つて行はれた。既に當時より博士の講習を受けてジャンプの練習を初める者もゐたのである。

斯くして高田市を中心とするアルパイン・スキー術。小樽、札幌

を中心とする、ノールウェースキー術とが對立して大正十二年に到つたのである。而して其の間、兩スキー術の可否が喧しく論じられたのであるが十年頃から單杖の塊國式が次第にその影を潛めて仕舞つた。近年は國際スキー大會に再度の派遣を行ひ、一九三四年には萬國學生スキー大會に我が學生選手の出場を見、獨逸に次ぐ第二位の成績を獲得して今後益々その隆盛をみんとして居るのである。世界のスキー大勢から謂へば我國のスキー術は漸く南歐の獨逸、スイス、英國の諸國とほゞ同じ程度迄向上したが、北歐三國には比ぶべくもない。

スキーの渡來以來より日尙淺く、むしろその發達振りは世界各國の驚異の的とはなつたが、我國の現状は各派スキー術を大量にとり入れて消化不良の状態にある。

昭和四年暮、ノールウェーより競技スキーの監督として有名なヘルセツト中尉を初めオーレ・コルテルド、ヨーン・スネルスルー、ド二選手の來朝あり、同氏一行は雪國の都市を巡視して熱心にスキー指導に盡して呉れた。

更に又翌年は世界のスキー名手として知られる、ハンネス・シュナイダー氏を我が雪上に迎へ、混沌たる我が國の一般スキー術へ新たな一進路を示して呉れた。シュナイダー氏は彼が未だ十七歳の少年時代の頃よりノールウェーの輕快なスキー術を塊國のスキー術に結び付くべく、日夜苦心の結果、彼自身の信念に基いて新らしく理論的系統立つたアールベルグスキー術を創成したのである。であるから先年來朝したヘルセツト一行のスキー術とは其の根本に於て規を一にして居るのであつた。

吾々はシュナイダー氏の大斜面を横切る猛烈な滑降法と、その安定なホツケ姿勢を眼のあたりに望見して、そこに近代のスポートの均衡美を發見したのである。

シュナイダー氏がノールウェースキー術と塊國スキー術を渾然一つにしてアールベルグスキー術を創成した如く我々も彼等より學び得た總てのスキー術を綜合して、將來より秀れた日本のスキー術を樹立せなければならぬ。

吾々はその任務を負うて益々努力すべきである。

一八 創始者の苦心

杉田 玄白

一 解 題

一 本文

「（岩波）蘭學事始」上巻の巻末から下巻の巻頭にかけて部分を抄出した。（岩波）蘭學事始 昭和五年七月、岩波書店發行

「蘭學事始」は我が國最初の洋學者の一人、杉田玄白が八十三歳（文化十三年）の高齡を以て子孫後世の爲に書き遺した回想録である。回想の事實は、明和八年（二四三二）から安永三年（二四三四）に至るまで、筆者はじめ、中川淳庵・桂川甫周その他有志の士が、前野良澤指導の下に「解體新書」の翻譯に従事した経験並びにその前後に於ける蘭學興隆の状態である。明治二年始めて刊行せられ、二十三年再版せられた。

二 作者

杉田玄白。名は翼、通稱玄白、字は子鳳、九幸・鶴齋と號した。享保十八年（二三九三）若狭國小濱藩（藩主）の藩醫（和蘭醫學）杉田甫仙の子として、江戸の藩邸に生まれた。長じて、幕府の醫官西玄哲に就

いて外科を學び、又宮瀨龍門に従つて經史を受け、研精刻勵して業

大いに進んだ。二十二歳の頃同僚小杉玄適が京都より歸來し、大いに當時蘭西を風靡してゐた古醫方を提唱するのを聞いて、憤然醫學界の舊套を打破すべく志したといふ。寶曆七年（三社）部屋住料として五人扶持を賜はることとなり、家を離れて日本橋に醫業を開いたが、明和四年父の計に遭つて新大橋の藩邸に移居し、偶々和蘭使節が入京したので、その譯官吉雄耕牛等に師事する所があつた。八年三月江戸小塚原刑場に於て刑死した婦人の解剖が行はれるに當り、前野良澤等とこれを見學、悉く所持のオランダ醫書（ダブレアナトミケ）の圖と符合するのを見て愈々オランダ醫學の精妙に服し、同書の翻譯を志して前野良澤等と一社を興し、年を経ること四年、稿を改めること十一回、安永三年八月遂に譯了して「解體新書」四巻を上梓、世人をして始めてオランダ醫學の眞相を知らしめた。後、濱町に醫業を開き、その新術を以て治病に従つたので、門前殆ど市

を成すの況を呈したといふ。晩年蘭語の外科書を得て更にこれを譯出すべく、良澤の助力を得て精勵したが、創痍・瘡瘍の二篇を譯したのみで病を得、門人大槻支澤によつて漸くその成を見た。「瘍醫新書」三十卷がこれである。彼は又漢土の醫書中から外科に係る確言を抄出して「瘍家大成」を編纂した。文化二年(二四六五)六月、享年七十三。

玄白は實に近世に於ける蘭學の開拓者として、我が國西洋醫學の開祖として、不朽の功績を残したものであり、前野良澤と並んで我

二 教材としての研究

一 註解

【創始者】 サウシシヤ 新しい物事をなしはじめる人。新に事をなしはじめる人。

【骨ヶ原に腑分を見たりし翌日】 明和八年(二四三二)三月五日。

明和八年の初春「タブレアナトミケ」の蘭語原本を入手した杉田玄白は、一字をも讀み得ざるまゝに、所掲の人體内景圖を實際の人體と照合したい望に燃えてゐたが、偶々三月三日の夜、翌日千住骨ヶ原に於て罪人の死體の腑分が行はれる由の情報に接し、欣喜雀躍してこれを中川淳庵(名は蘭。玄白と同じく小濱藩の藩醫で、蘭醫學の研究者であつた。天明六年歿。)

が文化史上の大恩人といふべきである。殊に良澤の純學究的努力に對して、彼には實踐的活動があり、兩々相俟つてこの偉業を成し遂げ得たことは、大いに注目に値する。著書には前記諸書の外、「形影夜話」「狂醫之癖」「外科備考」「野叟獨語」等がある。

三 採擇の趣旨

一つの新しい言語の理解と翻譯に全力を傾倒し、我が國に於ける醫學並びに洋學の端を開いた苦心の回想で、文化的教材であり、國民的教材である。

【骨ヶ原】 ヨツカツバラ 「小塚原」に同じ。江戸千住の地名。

【良澤が宅】 江戸築地鐵砲洲の奥平家の中屋敷(藩士の住居)に在つた。現東京市京橋區明石町五十三番地聖路加國際病院の在る地はその趾に當る。

現東京市荒川区南千住町五丁目に屬し、千住大橋から東南淺草區山谷町に通ずる街巷の地に當る。江戸時代こゝに幕府の刑場(本所四向の地)があつて、牢死者の埋葬や刑死者の梟首が行はれ、古くは磔刑・火刑の處刑場ともなり、品川鈴ヶ森(現品川區大井町)の刑場と並んで名高かつた。今その刑場趾(遺跡の地)には元祿二年建立の地藏石像と不動堂とがあり、又、吉田松陰・頼三樹三郎・相馬大作・水戸浪士等、こゝに梟首された名士の墓碑が建てられてゐる。

【腑分】 フツケ 臟腑を分かつ意で、「解剖」に同じ。主として徳川時代に用ゐられた語である。(二八五頁「解剖」參照)

我が國に於ける人體解剖は寶曆四年閏二月山脇尙徳(東洋)が京都で刑屍について行つたのを嚆矢とし、その後明和四、五年に東洋の嗣子玄侃が刑屍を、同七年には荻野元凱・河田信任等が同じく刑屍を解剖し、次いで八年本文の解剖が行はれた。後、寛政五年に尾俊章が、同八年には柚木太淳が、同十年には施藥院三雲がそれ／＼刑屍の解剖を行つて記録を残してゐるが、この當時に至つてはこれ以外にも屢々解剖の事が行はれて、殆ど流行に近かつたやうである。但し、これが醫學の基礎として系統的に行はれるやうになつたのは、明治三年以後である。

一八 創始者の苦心

【福澤諭吉傳】 第一卷中「日本洋學の歴史」に「前野の宅は、築地鐵砲洲の奥平家の中屋敷に在つて、今では丁度築地明石町聖路加病院の建つてゐる所である」とある。

尙、原文のこの直前の記述から見れば、當日良澤の宅に會合したのは、主人良澤と玄白・淳庵との三人だけのやうであるが、後に「最初より會合ありし桂川甫周君云々」の記載があるから、第二回目位からは甫周(名は蘭。幕府の醫官。「蘭語訳撰」も参加したものであらう。その後參會者は次第に増加し、嶺春泰(高橋藩)・島山松圓(庄内藩)・桐山正哲(弘前藩)等もこれに加盟した。

【良澤】 リヤウタク 前野良澤。蘭學者。名は熹、通稱良澤、字は子悦、樂山・蘭化と號した。本姓は谷口氏。享保八年(二三八三)豐前國中津藩(藩主)の醫員の家に生まれ、夙く父母を失つて外舅宮田全澤(藩醫)に養育せられ、その薫陶を受けて吉益東洞(古醫方學の泰西傳)の古醫方を學び、後中津藩に歸つて醫員となつたが、江戸藩邸在動中、一日蘭書を示されて發奮する所があり、明和六年四十七歳にして始めて青木文藏(昆陽)に就いて

蘭語を修めた。且「和蘭文字考」を撰へて蘭語の法を教へたといふ。翌七年藩侯(島津)に従つて中津に歸るに際し、百日の暇を乞うて長崎に遊學、譯官の吉雄・楢林兩氏等に就いて更に蘭語二百餘言を記して歸藩した。翌八年三月江戸小塚原に於て刑屍解剖を見學し、爾來玄白等と共に「タブレアナトミケ」翻譯の大業に従ひ、その牛耳を執つて功最も多きに居た。次いで對譯辭書作成を志し、門を閉ぢ客を謝して刻苦すること數年、「和蘭譯文略」「蘭譯答」「助語參考」「古言考」「點例考」「八種字考」等の書を著して、蘭學の發達に資すること頗る多かつた。藩侯昌鹿は深くその功を認め、彼を「蘭學の化身」と稱してその出仕に緩なるを咎めず、彼も亦これに感じて自ら蘭化と號した。享和三年(二四六三)十月歿、享年八十一。彼は新井白石・青木昆陽に次く蘭學研究の先驅者であつて、門下よりは中川淳庵・桂川甫周・嶺春泰・石川支常・桐山正哲・大槻支澤・宇田川支隨・司馬江漢等多くの優秀なる先覺者を出した。著書には、上記の外、「蘭語隨筆」「思思未通」「管蠡私言」「仁言私説」「彗星考」「輿地圖編」等がある。

【タブレアナトミケ】 Tabulae Anatomicae 解剖圖譜。ドイツ人ヨハン・アダム・クルムス(Johann Adam Kulmus) (西曆一六八九—一七四五)著。

登・者。取、波羅斯・李瀨生都府。蕩多悉杭・醫官。鳩盧模斯。所撰。名曰三答勃密・空納多密蛤。者譯之兵國文。命之曰三翁多列乙鏗工疾硬。打歇冷是也。即解體譜牒之義。因今命之曰三解體新書。とある。

【艦】 ロ 「艦」「櫓」に同じ。和船を漕いで進ませる具で、推進器及び舵の用をなす。(本文の「艦」は誤)

【舵】 カヂ 櫓の水中に備へ、舵柄又は操舵機によつて動かし、これに當る水の抵抗で船の方向をかへる具。

【茫洋】 バウヤウ 「茫洋」とも書く。ひろくとしたさま。ひろくて目のとどかないさま。茫々。渺茫。

【茫】 は、遠い。ひろい。遠くて廣い。はるか。

【洋】 は、廣くて大きい。

【寄るべきなく】 寄るべき所がなく。たよりとするものがなく。

【長崎】 ナガサキ 現長崎市。長崎本線の終點。西彼軒半島と野母崎の分岐點長崎灣に臨み、背後三方に山地を控へてゐる。我が國最古の開港場として、又日本五港の一として讀へられた往年の偉はないが、現在なほ上海・香港・マニラ・大連・朝鮮各港・鹿児島・天草・壹岐・對馬・五島・佐世保等にそれ／＼定期・不定期の航路を有し、又、近年國立公園雲仙の施設と相俟つて、我が國

但しこゝは、これをオランダ人ジェラルズ・ディクテン(Gerardus Dichten)が西曆一七三三年に自國語に譯して「Ontleedkundige Tafelen」と題したものをさす。



解體新書原書扉
(るに本館蔵書)

この書名は、原文(蘭文)には「タール・アナトミア」(Tafel Anatomia)とあるが、「解體新書」の凡例にはこれを「打係、亞那都米」として「亞那止米」譯解體也。打係、亞那都米也。故今題曰「解體新書」と見え、不明の點があるので、本文では原語(蘭文)の「Tabulae Anatomicae」をそのまま音讀して「ダブレ・アナトミケ」とした。尙、「重訂解體新書」(玄白等の「解體新書」の「舊刻解體新書凡例」には「原書和蘭醫。業蠟廬杜斯・日古

有數の國際觀光都市として重視されるに至つた。

元龜元年(一八六二)ポルトガル商船が始めて入港して商賈を請ふに及んで開港し、爾來南蠻船は盛に來航して豊臣秀吉時代には天領となつて地子を免ぜられ、江戸時代に入つて引續き幕府の直轄地(天領)として奉行を置き、外交及び司法事務を掌らしめ、寛永十八年六月以降平戸(現北松浦)のオランダ商館(寛永十八年始めて設けられた)を出島(現長崎市出島町。安政二年に在った)に移し、その間寛永十三年(一七三六)銷國令出づるに及んで、爾後安政の開國に至るまで、我が國唯一の貿易港として海外文化輸入の門戸となり、洋學搖籃の地となつた。尙、長崎は蘭文のものには Lang zakij, Nangasakij, Nangasacque, Nangasacquin 等と綴られ、蘭文書簡に添へた漢譯文には「那芽沙居」「那呀些居」等につてある。

【蘭語】 ランゴ 「和蘭語」の略。オランダに行はれる言語。英語・ドイツ語・デンマルク語・スウェーデン語等と同様、印度ゲルマニヤ語族中のゲルマニヤ語派中低ゲルマニヤ系に屬し、後世フランス語の影響を受けてラテン系の語彙も混入した。現在蘭語が使用されてゐるのはオランダ本國・ベルギー北半・蘭領東印度・蘭領西印度・南アフリカ聯邦等である。

徳川時代に、ポルトガル語・スペイン語等と共に我が國に入

り、今日の一般使用語にも、ガラス・ギヤマン・ブリキ・カンテラ・ランドセル・メス等、和蘭語から来たものが多い。

【章句・語脈の間の事】 章句や語脈に關する色々のこと。語法・文法・修辭上のきまりなどであらう。

【章句】 シャウク 文章の章と句。又は文章の句。

【語脈】 ゴミヤク 語相互の聯絡、即ち主語・述語の關係、諸品詞のかゝり工合等。

【齢も翁などよりは十年の長】

當時、良澤は四十九歳、玄白は三十九歳であつた。

【齢】 ヨハヒ

【翁】 オキナ こゝは 作者自身の謙稱。

【老輩】 ラウハイ 年よつたともがら。老人たち。こゝは單に、老人、の意。

【盟主】 メイシユ 同盟のかしら。同盟者中の牛耳をとるもの。

【盟】 一(一)神に告げて犠牲を殺しその血をすゝつて約束を固く守ること。ちかひをたてること。約束。(二)ちかふ、ちかひを立てる。約束する。

【二十五字】 こゝは、オランダ語の字母をさす。英語と同じく二十六文字であるが、IとJとを共通に綴つたことがあるので二十五

字といつたのである。

【内象】 ナイシャウ 人體の内部のかたち。こゝは、内臓をさす。當時の漢方では、人の内臓を肝・心・脾・肺・腎の五臓(心包を加へて六臓)と、大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱の六腑とに分ち、これを五臓六腑又は略して臟腑といつた。

【仰伏全象】 ギヤウフクゼンシャウ 人體前面と背面との全身形體圖。「解體新書」の原書「Ontleedkundige Tafelen」の第二篇「Van de verdoeling des uiterlyken Ligghams」の末尾に挿入されてある挿圖の中最初のものである。



寫像りよ「書新體解」版年四七一曆西

向、原書には全二十八篇の中、第一篇「Van de Ontleedkundige in't geneest」(解體新書第一卷)を除く外、各篇末にそれ／＼解説該當の挿圖があるが、「解體新書」(原書第二卷)では、その模寫圖を序圖一卷中に一括してある。

【表部外象】 ヘウブグワイシヤウ 表面に現れてゐる人體の外部器官の様子。「内象」に對して單に「外象」ともいつた。

【名處】 ナドコロ (一)姓名と住所。(二)一つの物のうちの各部分の名目。(三)名ある所。名高い土地。めいしよ。こゝは(二)。

【符號】 フガウ あひじるし、記號。

【取りつきやすかるべし】 手がかりが得やすいでせう。容易に端緒を得ることが出来るでせう。

【取りつく】 こゝは、端緒を得る。手がかりを得る。著手する。

【かた／＼】 こゝは、いづれにしても、どのみち、の意。

【解體新書】 カイタイシンショ 全五卷(原書第一卷)。「タブレ・アナトミケ」の蘭譯「Ontleedkundige Tafelen」の翻譯書。但し、完成されたものでは、更に「スリントニス・プランカール・コイナル・バルヘイン・トニユス・カスバ・ファンブル・バルシトス・ミスケル等九家の著述を參照して補綴が加へてある。我が國最初の西洋解剖學翻譯書といはれる。明和三年三月翻譯に著手、一日會して解する所はその夜玄白が翻譯して草稿を立てるといふ風にして漢文で起草し、年を閲すること四年、稿を易へること十一

回、安永三年八月に至つて「解體新書」として刊行した。同志の共譯で、特に良澤・玄白兩人の功が最も大であるが、上木に際し良澤が署名を嫌つたので、杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・桂川甫周・世民聞として公にした。本文四卷、別に吉雄永章(彼は蘭學の長、吉雄は蘭方外科の長、玄白ともこれに從事した)の「刻解體新書序」、クルムス撰・玄白譯の「自序」、「凡例」及び秋田藩の小田野直武が毛筆を以て原書の銅版畫に似せて丹念に模寫しそれを木版にした「解體圖」等を収めた序圖一卷がある。(參考資料三參照)

この書は、單に蘭學普及の契機となつたのみでなく、これによつて斯學が獨立専門の本格的學問になり、かくて人身内象の解剖學に發した蘭方醫學は爾後五六十年の間に内外疾病の治法・藥品方劑のことに至るまで備はるに至つた。後、大槻玄澤は更にクルムスの原書によつて解體新書の校訂に著手し、群書を考索し稿を改めること三回、十年の歳月を閲して寛政十年重訂解體新書十三卷を完成した。殊にその名義篇の如きは翻譯名義の由つて基づく所を明らかにし、その傳譯の功勞頗る多とすべきものがある。原文中、本文不採録の部分に次のやうにある。

一通り譯書出来たれども、其頃は蘭説といふ事少しにても聞「き」及び聞「き」知「れ」る人絶えてなく、世に公にせし後は、漢

り。(二)かきつけ。書籍。(三)書物を數へるに用ゐる語。

【譯註】 ヤクチュウ 解説。註釋。

【譯】 (一)ある國の言語・文章を、同意義の他の國の言語・文章に改めること。又、その改めた言語・文章。翻譯。(二)わけを解く。經義を解釋する。(三)わけ。いはれ。理由。

【註】 本文の語句を取出して説明すること。又、その説明した文句。

【こじつけ】

【こじつく】 不合理なことを無理に道理がある如く言ひ紛らはせる。牽強する。附會する。こゝは、確實な根據なしに強ひて意味を通じさせる、といふほどの意。

【堆く】 ウツタカク 盛りあがつて高く。

【堆起】 タイキ 盛りあがつて高くなること。隆起。

【堆し】

「解體新書」卷二「鼻篇第十一」には、こゝの「堆」に相當すると思はれる語が「隆起」となつてゐる。(前頁「フルヘッド」参照)

【連城の壁】 レンジャウのタマ 支那周代の趙の惠王が秘藏したといふ名玉。「和氏の璧」に同じ。

韓非子、卞和篇によれば、楚人卞和が玉璞を楚山に得て、これ

を楚の厲王に獻じたが、王の玉人はこれを「石なり」と相し、王は怒つて和氏の左足を削つた。武王立つに及び、和氏は復これを獻じたが、再び「石なり」と相せられて右足を削られた。文王立つに及び、和氏が璞を抱いて楚山に哭するを聞き、玉人をしてその璞を理めしめ、果して寶玉を得て「和氏の璧」と名づけたといふ。又、史記、廉頗藺相如列傳によれば、後、趙の惠文王がこの璧を得たが、秦の昭王は十五城を以てこれと代へんことを求めた。趙は、諾すれば欺かれ、拒めば秦兵の到らんことを恐れたが、舍人藺相如が自ら璧を奉じて往かんことを請うたので、これを秦に使せしめた。相如は、秦王が璧を得て城を償ふ意なきを見て、偽つて璧を奪ひ、これを柱に撃つて身と俱に碎けんとした。王は驚いて城を約したが、相如は更に五日の齋戒を求め、從者をして璧を奉じて密かに歸らしめたので、秦王も屈すべからざるを知り、厚く禮して趙に歸らしめたといふ。「連城の壁」はこの相如の傳から起つた名である。

【連城】 多くの城をつらねること。又、その城。

【推して】 スキして おしはかつて。推量して。推察して。

【書留】 カキトメ 書きとめて後に残すこと。又、その書きもの。記録。

【増補】 ソウホ 増し補ふこと。著述などの不備な箇所を後から補足すること。

【シンネン】 zinnen(動) zinの複数。英語の sense, mind, fancy, meaning, sentence 等に當る。

原書第六篇中にこの語が見え、「解體新書」の譯語は「意識」としてある。

【ゆく〜】 こゝは、後には。終には。やがて。おひ〜に。

【響十文字】 クツワジフモンジ 丸の中に十の字を書いた符號。(形が響に似てゐるからいつたのであらう。)

【響】 は、馬の口につける道具で、馬銜(馬の口の中に)・鏡(馬の鬃の間に)・引手(綱を手に通すもの)の三部から成る。(但し響の字義はもと手綱である。)

【爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり】 人間の力は勿論盡くさねばならない、だが盡くした上でその事の成る成らぬは天意の然らしめるところであつて、人間の焦慮のよく左右し得る所でない、の意。「人事を盡くして天命を待つ」の類。

諸葛孔明の語に「謀事在人、成事在天」とある。

【思を勞し】 オモヒをラウシ あれこれと思慮をはたらかせ。種々に考へ苦心して。

【精を研り】 精力をすりへらし。精根を傾け。心身の力を碎いて。
【精】 セイ こゝは、心身の力。勵む力。氣力。根氣。精力。
【研】 は、とぐ。みがく。する。すりみがく。
【わけもなくして】 たやすく。容易に。
【不味者は心】 フマイジヤはココロ 事理に通曉した人になるのは各自の心掛次第である。

【不味】 明らかなこと。心が靈明なこと。

【味】 (一)くらい。夜あけなどのぼつとして暗いのをいふ。

(二)おろか。事理にくらい。

【とやらにて】 とかいふとほり。

【やら】 は「やらん」の略。であらうか。とか。

【事態】 ジタイ 物事のありさま。物事の次第。事情。

【了解】 レウカイ はつきりとよくわかること。明らかに會得すること。よくのみこむこと。氷解。

【章句の疎き所】 挿釋などの爲に、章句がまばらになつてゐて、あまり澤山ない所。

【勞苦】 ラウク 苦しみ心をつかふこと。骨折り。苦勞。辛勞。

【毎春参向の通詞】 毎年春オランダ商館長(カピタン)が江戸参府の際これに隨行した通詞。

オランダ人の江戸参府は「参禮」「拜禮」ともいひ、その意は、通商免許の御禮の爲に江戸に上つて、將軍に拜謁して方物を獻ずるにあつた。東上拜禮を許されたのは慶長十四年七月、毎年参府するやうになつたのは寛永十年以後で(但し寛政二年から五年目録、中頃中止されたこともあつたが嘉永三年まで繼續實行された。)参府の時季は、初は前年の冬長崎を發して翌年正月江戸で拜禮を行ふを例としたが、寛文元年以後は正月長崎を發し四月上旬に拜禮することに改められた。一行は商館長の外、醫師・書記・助役・筆者の五人(後には醫師と書記各二)で、大通詞一人、小通詞二人又は一人が附添つた。江戸滞在の日數は一定しないが、概ね二乃至三週間で、宿所は日本橋本石町長崎屋方であつた。拜禮が済むまではオランダ人の外出は勿論、同行の役人の江戸に自宅を有するものも歸宅を許さず、一般訪問者も差止められたが、拜禮後暇乞の日までは種々の訪問者が旅館に押しかけ、一年一度の好機として専門の質問を試みた。この江戸参府は、江戸はもとより長崎・江戸間の沿道(下關・兵庫間は海路によつた)に於ける日蘭兩國人接觸の唯一の機會であつたのである。

【参向】 サンカウ その方におもむくこと。まゐること。でむくこと。

【通詞】 ツウジ 「通事」とも書く。(一)互に言語を異にしてその意思を通じ得ない人の應接に當り、兩者の間にあつて、雙方の語を譯して告げること。又、その人。通辯。通譯。(二)間に立つて取次ぐこと。こゝは(一)で、オランダ通詞をさす。オランダ通詞は、江戸時代長崎に在つて通譯官と商務官を兼ねたものであつて、オランダ人はこれをトルコ(Turk)と呼んだ。既に平戸時代にあつたが、明暦二年小通詞を置くに及んで前任の通詞を大通詞に進め、享保・延享の頃更に小通詞助・小通詞並・小通詞末席・稽古通詞・内通詞等の階級を設け、次いで元祿八年目付一人を置いてその監督に任じた。その員數は幕末には凡そ百四十人あつた。出島に通詞の會所を設けて、晝夜當番一兩人がこゝに詰めて執務した。尙、當時通詞としては西・吉雄・楡林・本木・志筑等の諸家が著名であつた。

【聞き糺せし事】 質問して明らかにしたこと。問ひたゞしたこと。
 【糺す】 タダす しらべる。督察する。あやまちを擧げて厳しくたゞす。(「糺」は「糾」にも作る。)

【解屍】 カイシ 死體を解剖すること。(次頁「解剖」參照)

【解きて】 トきて 解剖して。

【會業】 クワイゲフ 一緒に會合してする仕事。

【同臭】 ドウシウ 同じ臭味を有すること。傾向を同じくすること。又、そのなかま。同臭味。同類。一味。同志。

せられる。

【各々志す所ありて一樣ならず】

原文中、本文不採録の部分に次のやうにある。

【實驗】 ジッケン (一)廣義には觀察の一種で、「理論」に對し、一定の目的・條件の下に事物の現象を實地に見きはめること。

同盟の人々、毎會右の如く寄(リ)つどひし事かくありしといへども、各々其志す所異なり。是れ實に人の通情なり。先づ第一の盟主とする所の良澤は、奇異の才ゆへ、此學を以て終身の業となし、盡く彼言語に通達し、其力を以て西洋の事體を知り、

(二)「觀察」に對する語。觀察が主として現象を自然のままに注意して經驗するものであるのに對し、實驗はこれに對し故意に人為的變更を加へて求める所の自然現象を實現せしめ、觀察の不備を補ふものである。こゝは(一)。(但し廣義な意味ではない)

彼書籍何にても讀(み)得たきの大望ゆへ、其目的とする所「康熙字典」などの如き「ウヨールデンブック」を解了せんといふ事に深く意を用ひたり。(中略)又中川淳庵は、兼(ね)て物産の學を好める故、何とぞ此業を勧め、海外物産をも知り明らかにせし事を欲せり。

【東西千古の差あること】 東洋と西洋との醫學の間には、その發達の度に、何千年といふほど大きな隔たりがあること。
 【千古】 センゴ (一)おほむかし。太古。(二)とこしへ。永遠。永久。盡未來。萬古。こゝは、長年月、の意。

【解剖】 カイボウ (一)動物の體を解き剖いて、骨・筋・内臓等の位置・組成などを明らかにすること。解體。(二)物事を細かに分けてしらべること。こゝは(一)。

【治療】 チレウ 病をなほすこと。醫療。療治。

解剖の研究材料として主要なものは動物體、殊に人體である。

人體の解剖はその目的に隨つて正常解剖(正常の人體に於ける解剖)・病理解剖(病體の生ずるに於ける解剖)・法醫解剖(犯罪に關する解剖)に區別

【發明ある種】 新しい發明の出で来る基礎。
 【發明】 ハツメイ (一)ひらき明らかにすること。(二)自然力又は自然法則を有効に利用して、社會的價値のある一定の技術的結果を收める手段を新しく案出すること。(三)かしこいこと。こゝは(二)。

【翻譯】 ホンヤク 「翻譯」とも書く。ある國の言語・文章を、同意義の他の國の言語・文章に改めること。修譯。又、その改めた

言語・文章。

【譯述】 ヤクジュツ 翻譯して原文の意を述べ表すこと。翻譯して述作すること。

【板下】 ハンシタ 「版下」とも書く。木版を彫る際に板木に貼つて彫るべき書・畫の下書。この下書は薄い強靱な紙、水引薄美濃紙・雁皮・圖引用紙等に畫がき、裏返しにして板木に貼りつけてそれを彫るのである。墨線の板下と色版の板下とがある。

【江戸】 エド 東京市の舊名。

江戸の地名は古くからあつたが、その漸く開け始めたのは、長祿元年太田持資(道灌)が居城を築いて以來で、しかもなほ村落の集積たるに過ぎなかつた。然るに天正十八年徳川氏がこれに據るに及び、極力水路の治修、道路の開設、土木の施行、士民の移集を圖つた結果、忽ち面目を一新し、次第に發展して、幕府の所在地即ち我が國の政治的中心地として、所謂八百八街の股賑な大都市を現出するに至つた。明治元年東京と改稱、聖駕東幸して新日本の帝都となつた。

【創業】 サウゲフ 大仕事を新にはじめること。事業を起すこと。基礎を立てること。

【いひ古りし】 いひふるした。昔からずつといひなれた。

【解體】 カイタイ 「解剖」に同じ。

【譯名】 ヤクメイ 翻譯して名づけること。又、その名。

【社中】 シヤチュウ (一)やしろのうち。(二)組合仲間。仲間うち。こゝは(一)。

【社】 (一)やしろ。(二)昔、支那で、二十五家を一團とした部落。(三)くみあひ。團體。(四)ある目的又事業を成就する爲にその同志の聯合したもの。(五)「會社」の略。

【蘭學】 ランガク 徳川時代の中葉以降、オランダ語の仲介によつて我が國に傳へられた泰西學術。時代により「蕃學(蠻學)」「洋學」「西學」などともいつた。(參考資料四番照)

足利末期以來行はれた泰西文化の輸入は、徳川初世の鎖國によつて頓挫を來し、泰西の學術は、纔かに長崎の一角に於けるオランダ人との接觸を通じて、命脈を保つに過ぎなかつたが、元祿・寶永の頃漸く勃興の兆があり、正徳中新井白石が抑留中の一ローマ人に就いて海外事情を質し、西洋紀聞・采覽異言を著して將軍家宣に獻するに及び、機運は大いに醸成された。次いで將軍吉宗は實用的意味に於ける泰西學術の優秀さを認め、所謂洋書の禁を解いて宗教書以外の輸入を許し、儒官青木昆陽・醫官野呂元丈をして參府のオランダ使節又はその譯官に就いて

蘭語を學ばしめ、更に長崎に留學せしめたので、斯學發達の端緒はこゝに開かれた。但し吉宗以前の洋書の譯、及び昆陽等の長崎留學に就いては、近時異説がある。 昆陽の「和蘭文字略考」「和蘭語譯」、元丈の「和蘭本草和解」はその先驅

をなすものであり、譯官西・吉雄等の研精も寄與する所鮮少でなかつた。しかしその實質は未だ幼稚の域を免れなかつたが、偶々前野良澤が現れて蘭語の研究に従ひ、つひに杉田玄白等と

「解體新書」の翻譯を大成するに及んで、蘭學(蘭學の名は實にこの時に起つた)研究の道は豁然と開け、大槻玄澤・宇田川玄隨等をはじめこれを紹述するもの相次いで起り、文化・文政・天保の頃には、蘭學の黄金時代が招來せられるに至つた。この蘭國人シーボルトが來朝して多くこの位を養成したことも特筆に値する。

幕府は一時この風潮を憂へて彈壓を加へたけれども、外國勢力の東漸は長く桃源の夢を許さず、安政二年には洋學所(後の蘭館)を江戸九段に設け、次第に自ら率先して新知識の輸入、蘭學者の登用に力めるに至り、一方薩摩はじめ諸藩の蘭學獎勵も相次いで行はれ、かくて蘭學は、幕末・維新の變動に重大な役割を演ずるに至つた。尙、當初の蘭學は専ら醫學方面に於けるものであつたが、漸次各方面にその領野を擴め、又蘭語の外、英語・露語等の研究も盛に行はれるやうになつた。

【首唱】 シュシヤウ まつさきに唱へ出すこと。又、その人。

【通稱】 ツウショウ 普通になへる名。一般に通用する名稱。とほりな。俗稱。

【今時】 コンジ いまどき。いまごろ。いま。當世。當分。

【嚙矢】 カウシ (一)なり響く矢。かぶらや。鳴鏑。(二)はじめ。はじめ。おこり。端緒。(昔支那の戰陣で、戰爭を始める前に鳴鏑を發射する例であつたことからいふ。) こゝは(二)。

「嚙」は、さけび呼ぶ。鳴る。

【是迄二百年來、彼の外科法は傳はり云々】

原文中、本文不採録の部分に次のやうにある。
天正慶長の頃、西洋の人漸々我西鄙に船を渡せしは、陽には交易、陰には欲する所有(り)てなるべし。故に其災起りしを、國初以來甚だ嚴禁なし給へりと見へたり。「中略」但し、其頃の船に乗(り)來りし醫者の傳來を受(け)たる外科の流法は世に残るも有り。これ世に南蠻流とは云ふなり。其前後より阿蘭陀船は御免有(り)て、肥前平戸へ船を寄せぬ。異船御禁止になりし頃も、此國は其黨類には非(ぎ)る次第ありて、引續き渡來を許され給へり。夫より三十三ヶ年目にて、長崎出島の南蠻人を逐ひ拂はれて、其跡へ居を移せしよし。夫よりは年々長崎の津に船を來(た)す事とは成りぬ。これは寛永十八年の事なるよし。

其後、其船に隨從し來れる醫師に、亦彼の外治の療法を傳へし者も多しとなり。是を阿蘭陀流外科とは稱するなり。

オランダ流外科と南蠻流外科とはその術を傳へた西洋人の異なるによつてその名を異にするに過ぎず、前者は後者の後を承けてひとしく西洋の醫方を唱道したものである。南蠻流からは西流・栗崎流・吉田流等の外科を生じ、江戸時代初期に於てオランダ流からは楢林・西・吉雄・桂川・カスバル等の諸流派を生じた。但し當時は、外科とはいつても瘡瘍・金瘡等の單一な治方の範圍を出ないものが多かつた。

〔外科〕 ゲクワ 醫學の一部門。内科に對し、學理に基づいて身體内外の損傷・腫瘍等を治療する。

〔絶えて〕 タえて (一)一向に。全く。すこしも。更に。さつぱり。

(二)とびはなれて。たちまさつて。すぐれて。こゝは(一)。

〔大經〕 タイケイ (一)大きな筋道。大きい法則。(二)禮記・春秋左氏傳の總稱。こゝは(一)。

〔經〕 (一)たて。たていと。(二)緯の對。(三)つね。のり。かはらぬ道理。(四)をさめる。(四)いとむ。

〔大本〕 タイホン 大きなもと。第一のもと。もと。

〔内景〕 ナイケイ 内部の光景。内部のやうす。

3 敘述

〔先づ「タブレットミケ」の書にうち向かひしに、誠に饒鈍なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。〕——百數十年前の人々が蘭書に對した時の狀況を想像すると珍奇な感じさへするが、それを理解しようとしてゐる意氣込みに思ひ到ると感歎を禁じ得ない。しかもそれは單なる一醫書の譯出に止らず、歐米文化移入の端緒を成したことを思ふと、その創始者の意氣と努力の意義は一層深められて來る。

〔圖の初とはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り始むべし〕と定めたり。——鳩首して智慧を絞つてゐる先人達の眞摯さが鮮明な影像となつて讀む者の眼前に現れて來る。著手の手がかりがかくして得られたのである。

〔譬へば、「眉といふものは目の上に生じたる毛なり」といふやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。〕——この引用の一句にも歐米に發達した科學の性格が出てゐる。それと共に一日數人がかりでやつてまだ明確な理解に達し得ない焦慮が推想せられる。

〔日暮るゝ迄考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一

【不用意を以て】 こゝは、思ひがけず。はからずも。

【不用意】 フヨウイ (一)心を用ゐないこと。氣をつけないこと。自然であること。(二)支度しておかないこと。準備を怠ること。油断。

【天意】 テンイ (一)天の心。神の心。造化の心。(二)自然の道理。こゝは(一)。

挿圖「タブレットミケの扉」慶應義塾圖書館所藏「Outlead-kundige Tafelen」(三四年版)より複寫。

挿圖「解體新書」「解體新書」第一頁。富士川游氏藏本より複寫。

二 解釋

1 主題

新しい言語の獲得と翻譯の苦心。

2 構想

- (1) 「タブレットミケ」會讀の企。(初—三三三—三三〇)
- (2) 「タブレットミケ」翻譯の著手。(二二三—三三〇—三三三—三三三)
- (3) 「タブレットミケ」翻譯の苦心・完成。(二三五—三八—三八—三三三)
- (4) この業の意義。(二三八—四—終)

行も解し得ざる程にてありしなり。——辭書・參考書の恩恵を十分に蒙つてゐる現代人には想像もつかない苦心である。

〔又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。〕——「こじつけ考へ合ふ」外はなかつたに違ひない。人間の熱心と努力とは不思議な力を有するものである。未知の言葉の世界を推理によつてとれだけでも開拓出来るといふことは、驚くべき事實である。

〔……然れば此の語は「堆し」と譯しては如何〕といひければ、各、これを聞きて、「甚だ尤なり、「堆し」と譯さば適當すべし」と決定せり。其の時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり。——推理の條件が見出されて來る。やがて譯語の決定に到達する。苦心が大きければ大きいほどその喜もまた深い。「甚だ尤なり」と一致して適譯を得た喜はどんなに大きかつたであらうか。局外者の推想を絶したものがあつたであらう。

〔これらは亦ゆく／＼は解く可き時も出で來ぬべし。先づ符號を附け置くべしとて、丸の中に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「響十文字」と名づけたり。〕——いかに苦心しても、いかにこじつけようとしてもこじつけられない言葉がある。それを未解決のままにしてさきへすむ、しかもそれはいつ

も課せられてゐる問題に外ならぬ。それを示す符號が目に見え、その苦心の跡が歴然と心に浮かぶ。

「爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり」——成敗を天に任かせて我が全力を盡くすのが偉れた人の特色である。この覺悟でなくては出来ない事業であつたにちがひない。

「一日會して解する所は其の夜翻譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方を種々様々に考へ直せし事、四年の間に草稿は十一度認めかへて板下に渡す迄に至り、遂に解新書翻譯の業成就したり。」——大使命を自覺して、まだ苦心の新たな時に草稿

三 備考

一 指導の問題

純然たる近世的文體でもなければ、又歐米的文脈を追つた新文體でもない。文體そのものが既に文化史的位置を標示してゐるといつてよい。生徒にはそれを知識として理解する準備は出来てゐない筈であるが、讀みそのものとして體驗させて置くことが肝要と思はれる。そして多少にかゝはらず、近世的なるものと、明治大正的なるものとの指摘が出来たら、換言すれば、所謂「時代の手形」としての文體が納得出来たら、有意義な學習になるであらう。

を立て、しかもそれを十一回認め直したといふ所に、眞摯さが窺はれる。本當の業はかくしてのみ大成を見るのである。

三 批評

質實な文體で、體驗を如實に書き綴つてゐるのであるが、その後の歐米文化の移入の跡を思ひ合はせ、醫學・醫術の進歩を顧みる時、この一語一句の底に閃く先人の苦心が光輝を放つてくる。日本文化史上忘るべからざる貴重な一記録であることは今更いふまでもない。

解釋に於ては、語義の理解に、譯語の決定に苦心した、その方法を具體的に辿らせることが、國語の學習として肝要である。翻譯の苦心が如何なる點に存するか、しかも新しい外國語の最初の譯出がどれだけ苦心の多いものであるかを知らしめると共に、急がず倦まずその功を積めば不可能にさへ見えることが成就するものであることの確信をも得させなくてはならない。又今日われわれが外國語を修めるに當つて如何にこれ等創始者の恩恵を蒙つてゐるかを如實に理解させることが必要であらう。

構想を明らかにさせた上に、敘述を精しく辿つて、最後に主題を確認させるのが自然的な學習指導の順路であらう。

二 參考資料

(一) 本文に先立つ部分を原文から引用する。

一 此風右の如く成り行けども、西洋の事に通じたりといふ人もなかりしが、只何となく此事遠慮することもなきやうになりたり。蘭書杯所持すること御免といふ事はなけれども、間々所持する人もある風俗に移り來れり。同藩の醫中川淳庵は、本草を厚く好み、和蘭物産の學にも志ありて、田村藍水、同西湖先生杯とも同志にて、每春參向せる阿蘭陀通詞共の方にも往來せり。明和八年かのとの卯の春かと覺えたり、彼客屋へ至りて「ターヘル・アナトミア」と「カスバリユス・アナトミア」といふ身體内景圖説の書二本を取り出し來り、望(む)人あらばゆづるべしといふ者ありとて持(ち)歸り、翁に見せたり。もとより一字もよむ事はならざれども、臟腑、骨節、これまで見聞する所とは大(い)に異にして、これ必ず實驗して圖説したるものと知り、何となく甚だ懇望に思へり。且つ吾家も從來阿蘭陀流の外科と唱ふる身なれば、せめて書篋の中にもそなへ置(き)たきものと思へり。然れども其頃は家甚だ貧しくして、これを求(む)るに力及びがたかりしにより、我藩の太夫岡新左衛門といへる

人の許に持(ち)行き、しかもこの次第なれば此蘭書求め度(し)と告(げ)たり。然れども力の足らざるは是非なしと語りしかば、新左衛門聞き、それは求め(置)きて用立つものか、用立つものならば價は上より下し置かるべき様取計ふべしといへり。其時、翁、それは必ずかうといふ目當連はなけれども、是非ともに用立つものにして、御目に掛くべしと答へり。傍に小倉小左衛門後書野といふ男居たりしが、それは何卒調へ遣さるべし、杉田氏はこれを空(し)くする人にはあらずと助言したり。依(之)、いと心易く願も望の如く調ひ得たり。是れ翁の蘭書手に入りし始めなり。

一 扱、毎、平賀源内などに出會(ひ)し時に語り合(ひ)しは、逐々見聞する所、和蘭實測究理の事共は驚(き)入りし事ばかりなり、若し直に彼國書を和解し見るならば、格別の利益を得る事は必せり、されども是まで其所に志を發する人のなきは口惜(し)き事なり、何とぞ此道を開くの道はあるまじきや、連も江戸杯にては及ばぬ事なり、長崎の通詞に託して讀み分けさせ度(き)事なり、一書にても其業成らば大なる國益とも成るべしと、只其及びがたきを歎息せしは、毎度の事なりき。然れども空しくこれを慨歎するのみにてありぬ。

一 然るに此節不思議に彼國解剖の書手に入りし事なれば、先(づ)

其圖を實物に照し見たきと思ひしに、實に此學開くべきの時至りけるにや、此春其書の手に入りしは、不思議とも妙とも云(は)んか。抑、頃は三月三日の夜と覺へたり。時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より手紙もて知らせしは、明日手醫師何某といへる者、千住骨ヶ原にて腑分いたせるよしなり。御望あらば彼方へ罷り越(さ)れよかしと言(ふ)文をこしたり。兼(ね)て同僚小杉玄適といふもの、其以前京師の山脇東洋先生の門に遊び、彼地に在(り)し時、先生の企にて觀臟の事ありしに、此男に従ひ行(き)て親しく視たるに、古人(の)諸説皆空言にて信じ難き事のみなり。上古は九臟と稱せり、今五臟六腑の目を分ちたるは後人の杜撰なりなどいへる事の話もありし。其時東洋先生「臟志」といふ著書をも出(だ)し給ひたり。翁、其書をも見し上の事なれば、よき折あらば翁も自ら觀臟してよと思ひ居たりし。此時和蘭解剖の書も初(め)て手に入(り)し事なれば、照し視て何れか其實否を試むべしと喜び、一かたならぬ幸の時至れりと彼處へ罷る心にて殊に飛揚せり。扱、斯(か)る幸を得し事を、獨り見るべき事にもあらず、朋友の内にも家業に厚き同志の人へは知らせ遣はし、同じく視て業事の益には相互になしたきものと思ひ置りて、先(づ)同僚中川淳庵を初め、某誰と知らせ遣はせし中に、良澤へも知らせ越したり。扱、良澤は翁よりも

齡十ばかりも長じ、我よりも老輩の事にてありし故、相識にこそあれ、當は往來も稀に、交接うとかりしかど、醫事に志篤きは互ひに知り合(ひ)たる中なれば、此一舉に漏(ら)すべき人にはあらず。先(づ)早く申(し)通じたかと思ひたれども、さし掛(か)りし事、且つ此夜も蘭人滞留の折なれば彼客屋にありけるゆへ、夜分にはなりぬ、俄(か)に知らずべき便りもなし、如何せん存せしが、臨時の思付にて先(づ)手紙調へ、知れる人の許に立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者をやとひ、申(し)遣せしは、明朝しかじかの事あり、望あらば早天に淺草三谷町出口の茶屋まで御越しあるべし、翁も此處まで罷(り)越し待(ち)合(は)すべしと認め、置捨にて歸れと持(た)せ遣(は)しけり。

一 其翌朝とく支度整ひ、彼所に至りしに、良澤参り合ひ、其餘の朋友も皆、參會し、出迎(へ)たり。時に良澤一つの蘭書を懐中より出(だ)し、披き示して曰く、これは是れ「ターヘル・アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時求め得て歸り、家藏せしものなりといふ。これを見れば、即ち翁が此頃手に入りし蘭書と同書同版なり。是れ誠に奇遇なりとて、互ひに手をうちて感ぜり。扱、良澤長崎遊學の中、彼地にて習(ひ)得、開(き)置(き)しとて其書をひらき、これは「ロング」とて肺なり、これは「ハルト」

とて心なり、「マールグ」といふは胃なり、「ミルト」といふは脾なりと指し教へたり。然れども漢説の圖には似るべくもあらざれば、誰も直に見ざる中は心中にいかにかと思ひしことにてありき。

一 これより各々打連(れ)立(ち)て骨ヶ原の設け置(き)し觀臟の場へ至れり。扱、腑分の事は、××の虎松といへるもの、此事に巧者のよしにて、兼(ね)て約し置(き)しよし、此日も其者に刀を下さずべしと定めたるに、その日、其者俄(か)に病氣のよしにて、其祖父なりといふ老屠、齡九十歳なりといへる者、代りとして出(で)たり。健(か)なる老若なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手にかけて、數人を解(き)たりと語りぬ。その日より前述の腑分といへるは、××に任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは腎なりと切り合けしせり。夫を行き視し人々看過して歸り、我々は直に内景を見究めしなどいひしまでの事にてありしとなり。固より臟腑に其名の書〔き〕記してあるものならねば、屠者の指し示すを視て落著せしことにて其頃までのならひなるよしなり。其日も彼老屠が彼れの此れのと指し示し、心、肝、膽、胃の外に其名なきものをさして、名は知らねども、己れ若きより數人を手にかけて解き分けしに、何れの腹内を見ても此處にかやうの物あり、彼處に此物ありと示し見せたり。圖によりて考(ふ)れば、後に分明を得し動血脈の二幹又小腎などに

てありたり。老屠又曰(く)、只今まで腑分の度々其醫師がたに品(を)をさし示したれども、誰一人某は何、此は何となりと疑(は)れ候御方もなかりしといへり。良澤相俱に携(た)り行(き)し和蘭圖に照(ら)し合せ見しに、一として聊か違ふ事なき品(を)なり。古來醫經に説(き)たる所の、肺の六葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大(い)に古説と異なり。官醫岡田養仙老、藤本立泉老などは其ころまで七八度も腑分し給ひし由なれども、皆千古の説と違ひしゆへ、毎度々疑惑して不審開けず。其度々に異狀と見しものを寫し置(か)れ、つら／＼思へば、華夷人物違ありやなど著述せられし書を見たる事もありしは、これが爲なるべし。扱、其日の解剖事終り、とてもものに骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりて、かず／＼見しに、舊説とは相違にして、只和蘭圖に差(さ)へる所なきに、皆驚歎せるのみなり。

其日の刑屍は、五十歳ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし。もと京都生れにて、あだ名を青茶婆と呼(ば)れしものとぞ。

一 歸路は、良澤、淳庵と、翁と、三人同行なり。途中にて語り合(ひ)しは、扱、今日の實驗、一驚(き)入(る)。且(つ)これまで心付(か)ざるは恥(づ)べき事なり。苟(く)も醫の業を以て互(ひ)に主君々へ仕ふる身にして、其術の基本とすべき吾人の形體の眞形を

も知らず、今迄一日と此業を勤め来りしは面目もなき次第なり。何とぞ、此實驗に本づき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、此業を以て天地間に身を立(つ)るの申譯もあるべしと、共に歎息せり。良澤もげに尤(も)千萬、同情の事なりと感ぜぬ。其時、翁、申せしは、何とぞ此「ターフル・アナトミア」の一部、新たに翻譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし、いかにもして通詞等の手をからず、讀み分けたきものなりと語りしに、良澤曰く、予は年來蘭書をよみ出(だ)し度(き)の宿願あれど、これに志を同(じ)うするの良友なし。常(と)これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がた彌(と)これを欲し給はば、我前の年長崎へもゆき、蘭語も少しは記憶し居れり。之れを種として共(よ)み掛(か)るべしやといひけるを聞(き)、それは先づ喜ばしきことなり、同志に力を戮せ給(は)らば、憤然として志を立て、一精出し見申さんと答へたり。良澤これ聞き、悦喜斜(め)ならず。然らば善はいそげといへる俗説もあり、直に明日私宅へ會し給へかし、如何やうにも工夫あるべしと、深く契約して、其日は各(宿)所(と)へ別れ歸りたり。

(二) 原文の由来に關して、「蘭學事始」の再版に載せられた福澤諭吉の序を引用する。

「蘭學事始」の原稿は、素より杉田家に一本を秘藏せしに、安政

唯兵馬の沙汰を聞くのみ。此時に當り、迂老は江戸に住居し、獨り目下の有様を見聞して、我國文運の命脈甚だ覺束なしと思ひ、明治元年のことなり、月日は忘れたり、小川町なる杉田廉卿氏の宅を訪ひ、天下懸然復た文を語る者なし、然るに君が家の「蘭學事始」は我輩學者社會の寶書なり、今是を失ふては後世子孫我洋學の歴史を知るに由なく、且は先人の千辛萬苦して我々後進の爲めにせられたる其偉業鴻恩を空ふするものなり、就ては方今の騒亂中に此書を出版したりと見る者もなかる可しと雖も、一度び木に上するときは保存の道これより安全なるべし、實に心細き時勢なれば、賣弘(め)などは出來ざるものと覺悟して出版然る可し、其費用の如きは迂老が斯道の爲め、又先人へ報恩の爲めに資く可しとて、持参したる數圓金を出し懇談に及びしかば、主人も迂老の志を悦び、いよく上木と決し、其頃は原より活版とてはなく、先づ草稿を校正して版下に廻はし、櫻の版に彫刻することなれば、彼れ是れ手間取り、發兌は翌明治二年正月のことなりき。即ち今の版本「蘭學事始」上下二卷是れなり。爾後不幸にして廉卿氏は世を早ふせられ、版本も世間に多からず。然るに今回は全國醫學會に於て或は其再版ある可しと云ふ。迂老の喜び喩へんに物なし。數千部の再版書を普く天下の有志者に分布するは、即ち「蘭學事始」の萬歳にして、實に先人の功

二年、江戸大地震の火災に焼失して、醫友又門下生の中にも曾て之を謄寫せし者なく、千載の遺憾として唯不幸を歎ずるのみなりしが、舊幕府の末年に神田孝平氏が府下本郷通を散步の折節偶(と)聖堂裏の露店にて最(と)古びたる寫本のあるを認め、手に取りて見れば、紛れもなき「蘭學事始」にして、然かも鶴齋先生の親筆に係り、門人大槻馨水先生に贈りたるものなり。神田氏の雀躍想(ひ)見る可し。直に事の次第を學友同志輩に語り、孰れも皆先を争ふて寫(し)取り、俄(か)に數本の「蘭學事始」を得たる其趣は既に世に亡き人と思ひし朋友の再生に遭ふたるが如し。而して之を再生せしめたる恩人は神田氏にして、我輩の共に永く忘れざる所なり。書中の紀事は字々皆辛苦、就中、明和八年三月五日、蘭化先生の宅にて「ターフル・アナトミア」の書に打向(か)ひ、艦(た)なまき船の大海に乘出(だ)せしが如く茫洋として寄る可きなく、唯あきれにあきれて居たる迄なり云々以下の一段に至りては、我々は之を讀む毎に先人の苦心を察し、其剛勇に驚き其誠意誠心に感じ、感極(ま)りて泣かざるはなし。迂老は故箕作秋坪氏と交際最も深かりしが、當時彼の寫本を得て、兩人對坐、毎度繰返しては之を譯み、右の一段に至れば、共に感涙に咽びて無言に終るの常なりき。斯くて一兩年を過ぎ、世は王政維新の變亂と爲り、都下の學友輩も諸方に散じて、東西南北

勞を日本國中に發揚するのみならず、東洋の一國たる大日本の百數十年前學者社會には既に西洋文明の胚胎するものあり、今日の進歩偶然に非ずとの事實を世界萬國の人に示すに足る可し。内外の士人この書を読(ん)で單に醫學上の一小紀事とする勿れ。明治二十三年四月一日、後學福澤諭吉、謹誌。

(三) 「解體新書」の「自序」の全文と「凡例」の一部とを掲げる。「解體新書」は、國書刊行會本の「文明源流叢書」第二に收められてゐるが、同書にもこの「自序」と「凡例」とは載せてゐない。ここでは、主として藤浪剛一氏所蔵の初刊本に據つたが、訓讀は概ね編輯部に於てこれを施した。

自序

丹都止夫(ト)王學校 大醫學藥醫
窮理學 與(ト)教(ト)亞(ト)單(ト)關(ト)兒(ト)民(ト)思(ト)撰

嘗有(ト)亞(ト)爾(ト)馬(ト)泥(ト)亞(ト)國(ト)人(ト)。所(ト)著(ト)之(ト)解(ト)體(ト)新(ト)書(ト)。皆(ト)用(ト)其(ト)邦(ト)語(ト)。書(ト)肆(ト)携(ト)其(ト)再(ト)刻(ト)者(ト)來(ト)。請(ト)余(ト)改(ト)之(ト)。之(ト)國(ト)語(ト)者(ト)。十(ト)年(ト)於(ト)茲(ト)也(ト)。余(ト)亦(ト)欲(ト)爲(ト)下(ト)學(ト)三(ト)斯(ト)道(ト)者(ト)之(ト)改(ト)焉(ト)。博(ト)求(ト)其(ト)類(ト)書(ト)。未(ト)見(ト)其(ト)說(ト)之(ト)詳(ト)者(ト)。爲(ト)之(ト)費(ト)金(ト)帛(ト)者(ト)。不(ト)爲(ト)謬(ト)焉(ト)。或(ト)就(ト)三(ト)學(ト)校(ト)之(ト)諸(ト)子(ト)。復(ト)無(ト)與(ト)之(ト)者(ト)。於(ト)是(ト)余(ト)退(ト)而(ト)起(ト)業(ト)。以(ト)著(ト)此(ト)小(ト)冊(ト)。蓋(ト)此(ト)書(ト)者(ト)要(ト)便(ト)之(ト)讀(ト)。故(ト)說(ト)三(ト)形(ト)體(ト)內(ト)景(ト)。而(ト)爲(ト)三(ト)席(ト)次(ト)如(ト)左(ト)。一(ト)舉(ト)用(ト)。二(ト)說(ト)三(ト)形(ト)狀(ト)。三(ト)說(ト)三(ト)所(ト)在(ト)。四(ト)說(ト)三(ト)附(ト)屬(ト)者(ト)。五(ト)說(ト)

所屬者。六說三居內者。七說三居外。八說三居內。每條示符以令
易通曉也。別附圖示符者。欲使學者讀之視之以明人身也。
又取異邦解體諸本。旁註之解。其難明者且註問設。保及
正文間示小符者。便相照讀也。夫此書者初說人身之全者。次
說三頭胸腹。及內景與其部分之附屬者。皮者一身無異。故於
頭說焉。二十六七二篇。余所發明。而圖亦新製者也。其他之圖。
間有自製者。即解體而寫真者也。二十二篇。奇機之圖。嘗觀
其屈曲之狀。以今傍圖者。爲是也。既已其圖全成也。正經二年
之久矣。謹說三學之者。庶幾無疾病。僕亦無恙。明哉天。
生。人如三此書之所說。學者明三形體內景者。亦天之德也。

和蘭開國來一千七百三十一年

若狹侍醫 杉田製 謹譯

凡例

一、斯書。譯和蘭人與較亞爾岡兒武思所著打保羅亞那都米者
也。斯方二百年來。召和蘭人。就受三厥醫術者多矣。然僅一二
學其療法。以爲三糊口之資焉。豈至讀三其書。修其業乎哉。蓋
和蘭之國。精三手技術。知巧之所及。無三不致者矣。而速有德
乎四海者。豈爲最焉。唯以三其言語侏離。文字曲釘。作用異當。
不辭也。

而我方之醫。恬不之省者。果何心哉。宜矣其不成三刮骨之功
也。余故於三蘭書之中。特拔是爲翻譯三範初學。章報一定。聰明
以生。過此以往。生死肉骨之妙。庶可得而至焉。嗚乎余業之
及三于斯。實藉三天之寵靈也。豈人力之所能致乎哉。天下之有
心乎斯道者。則我竊自比三郭隗矣。如以是受三四方之譏。所
不辭也。

(中略)

一、凡讀斯書者。宜改三面目也。漢土古今之醫家。說三藏府骨
節者。不爲不不多焉。而其古者間有下窺一斑者焉。雖三漆桶掃
帚。亦可取也。至乎後世玄馬台孫一奎滑伯仁張景岳輩。所論三
焦椎節者。皆相齟齬。唯阿其所好。應度傳會。千古遂不歸一也。
吁幽莽亦太甚矣。夫臟府骨節。其位置有二所。一則以何乎
立。治因何乎施。斯方先輩欲發明之。間有三解剖而視者焉。然
病乎舊染之際。見下臟藏骨與三舊說。左者。則徒以狐疑。殆類三燕人
忘三燕焉。率不能三體分。以歸三滅裂也。又或震然揭三旗鼓。亦
皆不知三解體之法。徒屬三孟浪。豈不悶乎。惜哉世雖有三豪傑士。
汚習或三耳目。未能披三雲霧。而見青天也。故苟非改三面目。
者。則不能入其室也。嗚乎人有能有不能。余之不才。斷斷無
它技。唯獨於三斯業。專精得三以明。之。誠無三平古之人。

一八 創始者の苦心

雖有三善書良法。天下靡不稱焉。我家世傳而業三厥醫也。復
藏其邦書矣。余繼其業。自童甲一習其書。因得窺三其書也。
然素罕三觀之書。至乎其類與難解者。竟無三由三質訪焉。望望焉似
醫師之素相者矣。於是乎幡然別取三漢土古今之醫籍。而讀之。回
復讀味。茲年矣。尋究三其療方論說。則穿鑿附會。牽強踈鹵。欲
晰三之彌暗。欲三之彌謬。無三可三以三諸庸焉。茫茫乎若
郭之學。步者矣。蓋蘭書之所難解者。不三過三十七。而漢說之所
可采者。則不三過三十一。耳。遂又專三精乎家學。而不三問三厥它
也。迄乎近時余之術行。而疾人索三治日盛。重有樂三乎夫二者
也。乃旁求獲三一二知己焉。於是乎稍稍取三其方書。優柔厭厭。相
識相咨。忤惕居諸之際。正得以冰釋理順焉。而后嘗三試諸事之
與三物。則左右取三之能達三其原。一章章乎明。如三觀三火矣。因取三解
體之書。依三其成說。一解剖而視。則無三一所三失焉。臟府發關。骨體
脈絡。始得三識。其位置整列。豈不三愉快乎。以是觀三漢說。則
其前者近三子。而後者不三遠三于非也。唯靈樞中有三解剖而視之語。
則漢人古。必有三其法焉。後人不三得三其傳。徒信三糟粕。而爲三無
稽之言。數千年來竟不三識三眞面目。豈不三哀哉。按解體醫科之要。不
可三不知焉。諸證之所三在。外三此而無三可知焉。蘭人之致三精巧。
亦助三乎斯。故欲三能進三于醫。焉者。非三淵源三于此。則決弗能也。

而其所三權與。要在改三面目也。如與余同三志。從事于斯。則
庶乎得而至也。雖然余不三細三乎文辭。故於三斯書。姑達三其意。而
已。讀者如三有不三解者。迨三余之生。質三訪之。可也。

(四) 板澤武雄氏の「蘭學の發達」(日本書紀)の序説には、江戸時代
に於ける西洋學術の名稱に就いて、南學(西學)・和蘭學(蘭學)・
西洋學(西學)・泰西學(西學)の四つに分かつて説明が加へられてゐ
る。その中、蘭學に關するものを摘録する。

第二の蘭學といふ名辭は、はじめから特殊の意義をもつて發生し
たもので、杉田玄白の「蘭學事始」下巻の首にその由来を物語つて
ゐる。即ち、江戸に於いて前野良澤・杉田玄白・中川淳庵等の諸先
賢が彼の有名な「解體新書」の翻譯を非常な苦心のうちに完成した
のは、明和八年(安永三年)であつたが、その時「社中にて誰いふと
なく、蘭學といへる新名を首唱し、我方蘭州自然と通稱となるにも
至れり、最れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり」といふの
である。卒然と讀み下せば何でもなさうなこの一文に、私は多大
の意義を見出す。從來長崎に於いて發達しつゝあつた西洋學術の研
究は、和蘭通詞を中心としたものであつた。彼等の本職は通譯官兼
商務官であつて、學問は申さば彼等の餘技又は副職であつたのであ
る。未だ専門の學者によつて専門の學問が研究されるといふ本格純

正なものではなかつたのである。之に對して、解體新書の翻譯を契機として江戸に發生した蘭學は、専門の醫學者の手によつて専門の醫學書の翻譯事業が開かれたのであるから、こゝにはじめて我が國の西洋學術の研究が、獨立した本格純正の學問として成立するに至つたと申してよい。即ち醫學より蘭學への推移展開は、單なる名稱の變更ではなかつた。實質的の更新、内容と學的態度の更新、學界に於ける新旗幟の樹立を意味したものであつたと私は解する。腑分といふ舊い術語を排して解體といふ新術語を使用した程の新鮮さをもつた學者の集りが、彼等の新興學術を呼ぶに、長崎方面で呼び慣はされた醫學といふ言葉、表現すべく、彼等の矜持が餘りにも大であつたらうと想像したからとて、決して不當ではあるまい。同じく「蘭學事始」下巻に「此業江戸にて首唱し、二三年も過し頃、年々拜禮に參向する阿蘭陀便にて、長崎にも聞傳へ、蘭學といふ事江戸

にて大に開けしといふこと、通詞家などにては、忌み憎みしよし云云」とあるは事實であつたであらう。これまで西洋學術に關する限り、殆んど獨占的卸問屋の觀があつた通詞家にとりて、江戸における蘭學の首唱は、彼等の株を奪はれたといふ利益問題は別として、この學問上の一大敵國の出現は、彼等の間にセンチションを捲き起したであらうことは想像するに難くない。然し、これありしがために、我が國に於ける西洋學術は、通詞家や好事家の素人學者の手より専門の學者の手にうつされて、その學術の深奥化、普遍化、應用化を促進することとなつたのである。天明三年に成つた大槻玄潭の「蘭學階梯」の例言に「蘭學トハ即チ和蘭ノ學問ト云フコトニテ、阿蘭陀ノ學問ヲスルコトナリ」と解説してゐるによりて、當時の蘭學者の解してゐた蘭學の概念がわからう。玄潭の「六物新志」題言には和蘭學といふ名稱も見える。

一九 二宮尊徳の幼時

富田 高慶

一 解題

一 本文

「岩波報徳記」卷一の「二宮先生幼時艱難事跡の大略」を抄録したものである。(岩波報徳記 昭和八年六月、岩波書店發行)

「報徳記」(全八卷)は、安政三年十月二十日尊徳死去の際、一族門弟が指導者を失つた憂慮から、且は追慕の至情から、傳記編纂を企て、寺門靜軒をして、二宮彌太郎・富田高慶・齋藤高行及び小田又藏の追懷談を筆録せしめたが、徒らに文章流麗で眞に迫るものがないので、富田高慶が自ら筆を執り、一切の客を謝して安政三年十一月二日に稿了したものである。翌年更に野州湯西川の温泉に病を養ひつゝ改刷、その後數寫して傳へられたが、明治十三年十月に至り、舊相馬藩主充胤子によつて淨書、叙覽に供へられ、十六年十二月聖旨によつて宮内省から和装八卷として配布せられ、十八年二月には農商務省から複製頒布せられ、更に同年八月大日本農會に版權が譲られて四六版活字本一卷として販賣、その後久しく絶版であつた

が、昭和二年五月岩波文庫本として發行せられるに至つた。

二 作者

富田高慶。通稱久助。文化十一年(二四七四)生。相馬藩士齋藤嘉隆の次子で、相馬藩財政復興の大志を懷いて江戸に出て、昌平黌に入つたが、病を得て磯野弘道の治療を受けてゐた間に、野州の聖人二宮尊徳の噂を聞き、用度を賣却して路用に代へ、天保十年六月櫻町に至つて入門を請うたが許されず、熊澤蕃山が近江聖人中江藤樹の門に入つた昔を偲んで、隣村の民家に寄寓、夜は兒童に書を教へ晝は尊徳の教導を見學すること、數月にして廢さなかつたので、九月末遂に許されて門弟となつた。爾來、努力勵勉して教を受け、後には門下の隨一として、尊徳の報徳事業を助け、嘉永五年尊徳の女文字を娶つた。櫻町と竝んで報徳仕法成功の雙璧と稱せられる相馬領興復事業は、その盡力に俟つ所多く、弘化元年には、尊徳に遺はされて相馬領宇多郡の仕法開業を監督した。安政三年尊徳の長逝後

は二代尊行を助け、明治四年尊行の歿後更に三代尊親を助けて報徳思想の普及に努め、或は興復社を立て、或は北海道開拓の實をあげなどして、明治十三年正七位に敘せられ、二十三年一月歿した。享年七十七。

著書には「報徳記」「報徳論」等があり、よく尊徳の衣鉢をついで

二 教材としての研究

一 註解

【二宮尊徳】ニノミヤソントク 實名は尊徳。通稱金次郎。天明七年(二四四七)七月、相模國足柄上郡栢山村(現神奈川県栢山町)の農利右衛門の長子に生まれて、赤貧の裡に育ち、十四歳父を、十六歳母を失つて辛酸具さに嘗めた。母の死後(元年)伯父二宮萬兵衛に引取られ、農耕過勞の餘暇糧かに書と親しんだが、三年粟苗を植ゑて米一俵餘を獲、積小致大の天理を體得、翌文化元年萬兵衛方を辭して親戚に寄寓し、三年家に歸つて日夜精勵、遂によく廢家を興復した。この間本家再興を志し、最初の報徳社(報徳會)の法(報徳會の法)的施設を設けた。十年小田原に出で大久保家の老臣服部氏の若黨となり、十二年歸家、十四年服部家の家政整理を委任せられ、平均年收(分度)を定めて家人を督勵、五年にして全負債を完済せしめた。文政元年藩侯大久保忠貞が老中に任せ

その遺風の發揚に力め、世道人心を導く所が多かつた。

三 採擇の趣旨

前課に、日本文化の開拓に於ける功勞者の手記を掲げたのに因んで、本課には、身を以て國民生活の指導に任じた人間尊徳の生ひ立ちを掲げた。賢哲の言行を敘した國民的教材である。

られて藩政一新を圖るに當り、深く尊徳の人物・手腕を認めて擢用を期したが、偶々大久保家の分家旗本宇津氏の所領である下野國櫻町(現栃木縣芳賀郡櫻町)四千石の地が疲弊の極に達したので、尊徳にこれが興復を依頼した。尊徳は過去四千俵餘、現在千俵未滿の貢租收入を平均して約二千俵を分度と定め、自己の餘財に藩の出金を加へて興復資金(理金)となし、荒地を拓き窮民を助け、貧乏を以て貧乏を救ふ方策を立て、文政六年一家を擧げて櫻町に移住、日夜誠意を盡くして貧吏・怠民の妨礙を排し、遂に天保二年に至つて第一期(十年)興復の業を成し、餘米四百餘俵を藩侯に納め得た。のみならず、天保兩度(四年及七年)の大饑饉にも一人の餓卒をも出さなかつたので、八年更に小田原本藩の危急救済の命を蒙り、各地に報徳仕法を施して成績頗る見るべきものがあつた。併し、この間藩侯の死に當り、後老臣の

かくて、尊徳の盛名は既に四近に振るひ、これが教を乞ふもの相次いで起り、關東諸國は勿論、東北・九州に至るまで、一國又は一家に關して報徳仕法の餘澤を蒙るものが頗る多かつた。就中相模國に於ては、尊徳の實を體して仕法(實地に力めた結果、最も良好な成績を収めた)を慕府も亦これが起用を請し、天保十三年召命を發して普請役格に任じ、まづ印旛沼治水視察を命じ、後直領(下關國大生郡・下)の興復に従はしめたが、嘉永六年に至り更に日光神領興復の命を下した。これより先弘化元年、日光へを奉命あり、尊徳は學生の力を任ずること。此後實地に開拓見込を上申すべし。富田方法書(仕法書)六十卷を獻じた。よつて尊徳は、一子彌太郎及び富田高慶以下の門弟を督し、老體病軀を提げて奔命、三十箇年を以て荒地約一千町歩を拓く仕法を立てたが、漸く實施の緒に著くに及んで、安政三年(二五一六)十月、七十歳を以て歿した。その仕法によつて救済を受けた村は六百五箇村に及び、それ等事業の記録、日記・書翰等合計約一萬卷の冊子があり、「二宮尊徳全集」に收められてゐる。明治二十四年特に從四位を追贈された。

【姓】セイ(一)かばね。(二)本來の氏。原・平・藤。(三)名字(苗字)。氏。こゝは(二)。

「姓」はもと上古氏族制度時代に氏族の血統と家格の尊卑を區別する爲に稱せられたもので、臣・連・直・首・造などがあ

一般に官職その他の職業は世襲せられてゐた爲、姓は人々の血族を表すと同時にその政治上・社會上の尊卑貴賤を表したが、大化改新以後、姓と職とは分離して、職號即姓の古義は漸く失はれ、更に天武天皇十三年、姓の等級を改定して眞人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置の八色とするに至つて、全く本來の性質を變じ、次第に氏と姓の混亂を來した。かくて中世の頃から、本來の氏を姓といひ、その分派名稱たる苗字を氏と呼ぶことが行はれたが、當時最も著名であつたのは源・平・藤原・橘の四氏であつたので、後にはこれを四姓と呼び、この意味での姓は四姓に限られるやうになつた。本來この四姓に屬するものは、自らその中の一姓を稱するものが多かつた。そして自己の居住する郷名・庄名等を苗字として用ゐ、これを四姓に對して氏と呼んだ。例へば佐々木高綱は、本來の氏(姓)は源で、江村佐々木に住んで、佐々木を苗字(氏)とした。現在では姓・氏・苗字は混同して區別がない。

【平】タヒラ 四姓の一。平氏に屬する一族の姓。

平氏には、桓武平氏(桓武天皇の御子孫)・仁明平氏(仁明天皇の御子孫)・文德平氏(文德天皇の御子孫)・光孝平氏(光孝天皇の御子孫)等があるが、後世單に平氏といへば、桓武平氏、即ち、特に桓武天皇の皇孫高見王の子高望王が平姓を賜はつて臣下に列したのを始祖とする一族をさすことが多い。平清盛の一族は高望王の直系である。

【名】ナ 實名。姓・氏・苗字の下に添へて、一族中の各個人に限つて稱するもの。

古へは、一般に一つの名のみを有したが、中世以後、士分以上では、子生まれて七日にして名を命じ、これを「幼名」又は「童名」「小字」などと稱し、元服を境として更に名を加へ、これを「名乗」又は「實名」と稱し、名乗の外に別に「通稱」や「字」を用ゐるのを常とした。例へば新井白石は、幼名を瓊、實名を君美、字を濟美、通稱を勘解由といった。尚、「諱」は「忌名」の義で、死者の生前の實名をさす。

【先】セン こゝは、先祖、祖先、の意。

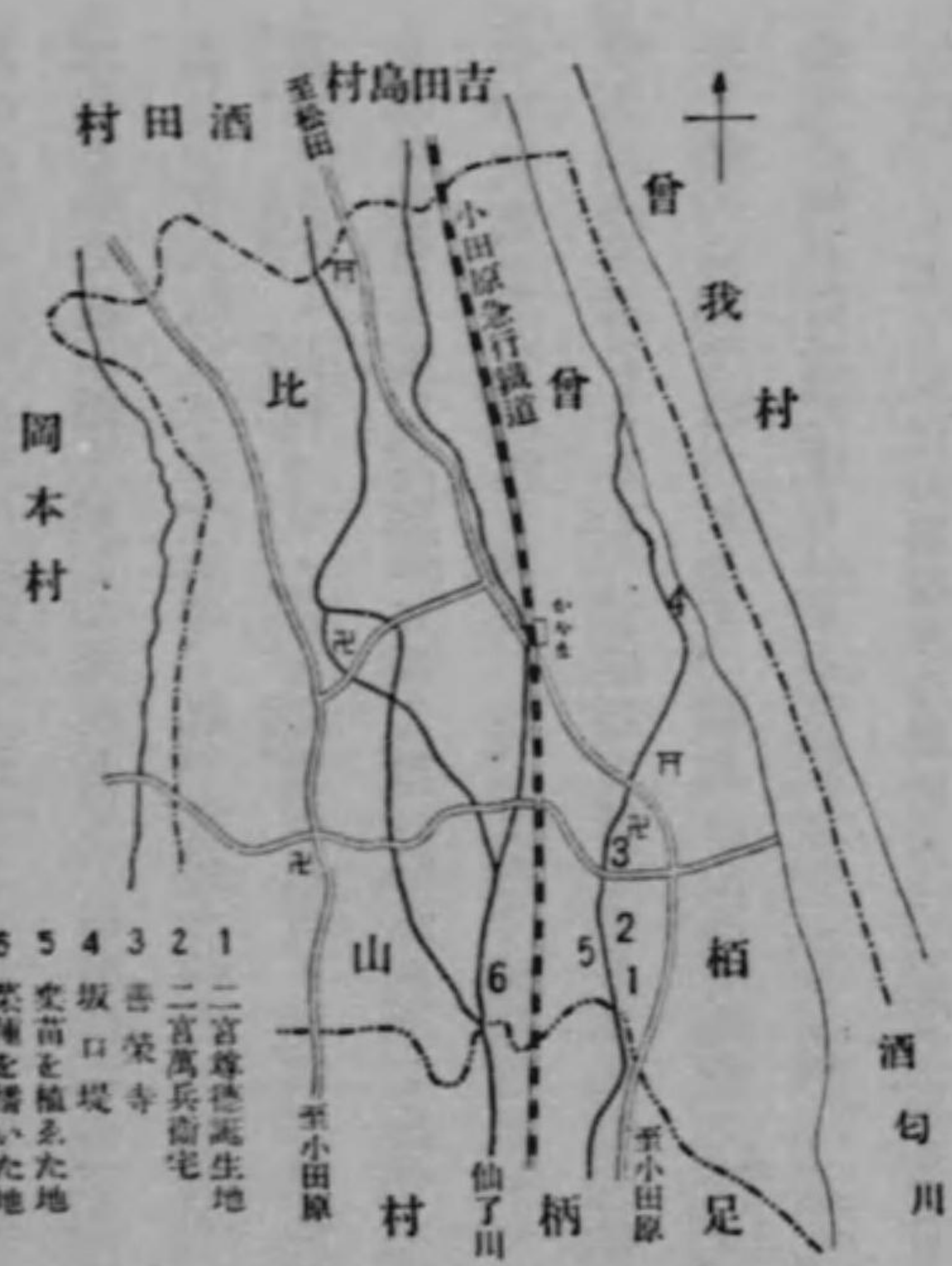
【曾我氏】ソガシ 鎮守府將軍平良文(桓武天皇の子)八世の裔祐家が、相模國曾我庄(現小田原市)に住して曾我大夫と稱したのに始るといふ。祐家の子太郎祐信は即ち曾我兄弟(五郎祐成)の繼父で、兄弟が實父(河津)の仇を復して誅せられて後、頼朝はその志を憫んで曾我庄の實課を免じたと傳へる。祐信の後は實子祐綱が嗣ぎ、子孫相傳へて曾我に住したが、永祿中(後醍醐天皇)後を絶つたといふ。

【氏】ウヂ (一)家の系統に隨つて、他と區別する爲に稱する名。家の名稱。苗字。(二)家の筋目。家柄。こゝは(一)。

維新以前には士分以上の階級のみが姓氏を稱へ、農・工・商に

は一般にこれがなく、特に許された者のみが苗字を稱したが、明治三年太政官布告で平民の苗字を稱へることを許し、更に八年國民は必ず苗字を稱すべきことを定められた。

【相模國栢山村】相模國足柄上郡栢山(又は賀山)村。今は北の曾比村とともに神奈川縣足柄上郡櫻井村の大字となり、更に東栢山・西栢山に分かれてゐる。東海道線小田原驛の北方約八軒、酒匂川の西岸に臨み、所謂酒匂地溝帯(三〇五頁)の中心に當る地點で、古來洪水の害の最も甚だしい所である。



跡遺の徳尊と村井櫻 (る據に究研徳尊宮二の氏郎太信井★佐)

尊徳の生れたるのは東栢山(山道下五ヶ)で、今その誕生地には、記

念碑と小祠とが建てられてあり、その外、善榮寺(三三三)・坂口

堤(善榮寺が少年時代松を植樹した地といはれ、酒匂川)・千兩堤(徳尊が少年時代に大火を避けた所)など、尊徳に所縁ある遺跡が尠くない。

尚、井口丑二著「二宮翁傳」中に左の如き一節がある。

百二十餘年前の栢山は、江戸より行程二十二里。民戸百二十、東西十五町餘、南北十町餘、私に二區に分ち、東栢山西栢山と稱せり。即ち僅々十五町と十町、亞米利加の畠一枚よりも狭き小村なりしなり。地勢、南西足柄山脈と、東北松田川村諸山との間に挟まれ、蜿蜒として其の間を流るゝ酒匂川の谿に在り。眞の山村水郷にして、而も古昔は川の東岸に在りしものが、變流に因つて西岸となりしなれば、即ち一個の川中洲に過ぎざりしなり。其の洪水ある毎に、一村殆んど河碛となるは、亦怪しむに足らず。

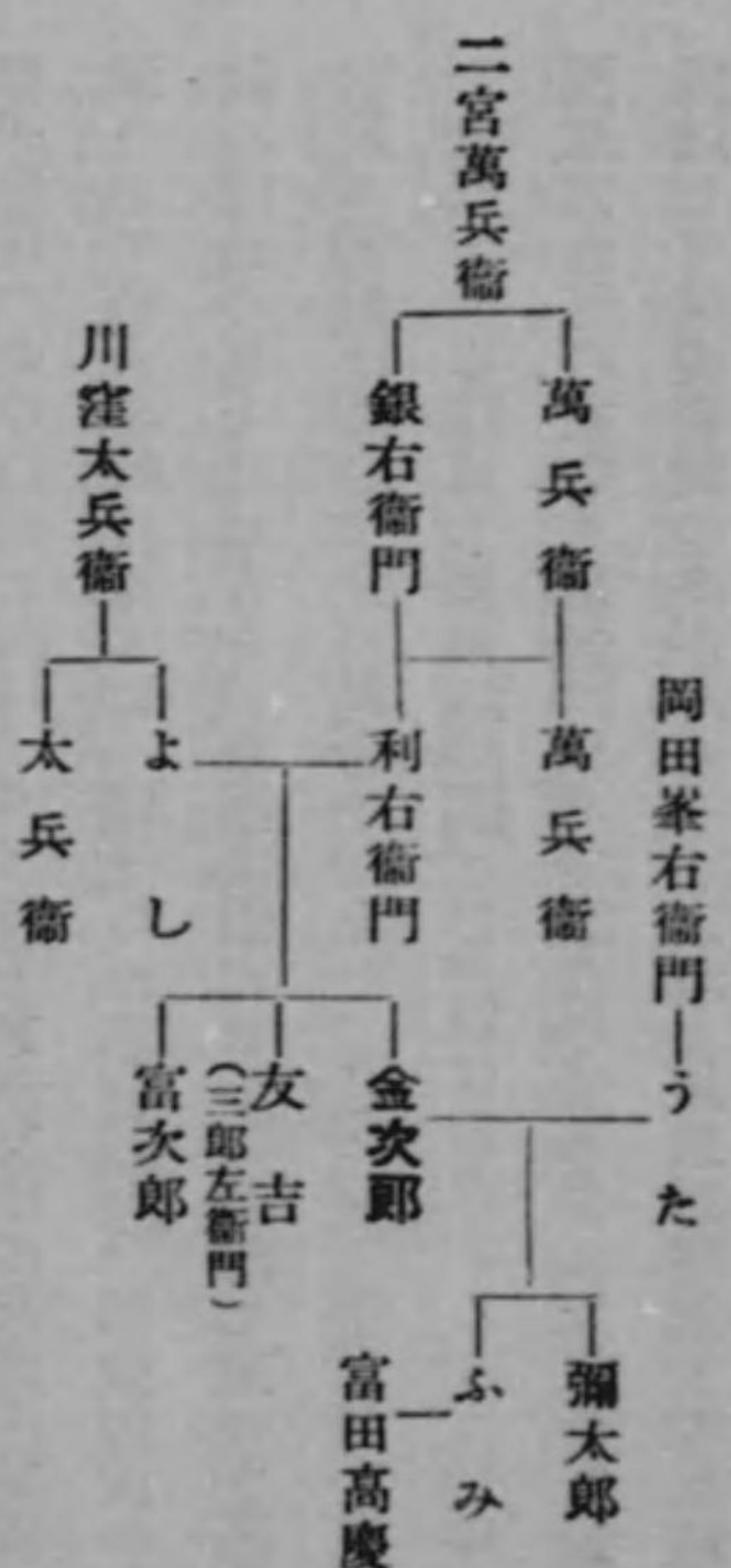
【相模國】サガミノクニ 東海道十五國の一。現神奈川縣の一部の地。

【氏族】シソク こゝは、同一祖先を有するか、又は同一祖先を有すると信ぜられ、且同一の氏を有する血族團體。

【二宮利右衛門】ニノミヤリ(ウ)エモン 尊徳の父。二宮萬兵衛の次男に生まれ、分家の叔父二宮銀右衛門の養子となつた。寛政十

二年九月、四十八歳で歿した。

「報徳記」及び佐々井信太郎撰「新報徳記」によつて二宮家の略系譜を示せば次の如くである。



【曾我別所村】ソガベツシヨムラ 相模國足柄下郡曾我別所村。今は曾我原・曾我岸・曾我谷津と共に足柄下郡下曾我村の大字。

下曾我村は即ち往昔の曾我庄の地で、東北に曾我山を負ひ、曾我兄弟に所縁ある遺跡が多い。上曾我村は足柄上郡に屬し、往昔の大井庄である。

【川窪某の女】カハクボボウのヂヨ 川窪(保に作る)太兵衛の女よし。

夫利右衛門の歿後三子を抱いて辛酸を嘗めること一年餘にして、享和二年四月、三十六歳で歿した。

【銀右衛門】ギン(ウ)エモン 二宮萬兵衛の次男に生まれ、若干の分地を受けて分家獨立、よく自力を以て中農(田圃十)となり、兄萬

兵衛の次男利右衛門を養つて子とした。天明二年十月歿した。

【節儉】 セツケン (一)費用を減じて、つとまやかにすること。物をみだりにつかはないこと。質素に暮すこと。(二)物事をほどほどにしてほしいまゝな振舞をしないこと。こゝは(一)。

【富裕を致せり】 富裕を招いた。裕福になつた。

【富裕】 フユウ 富んで物のゆたかなこと。富有。富饒。

【裕】 (一)衣服がゆつたりしてゐる。(二)轉じて、物がゆたかである。(三)心がひろい。

【世】 ヨ こゝは、家督を相續してその家を治める間。代。

【邑人】 イフジン 村の人。むらびと。里人。

【邑】 (一)むら。多人数の聚り會ふ里。「村邑」(二)知行所。

【封邑】 (三)みやこ。「都邑」

【民】 タミ こゝは、人々、といふほどの意。

【施し】 ホドコシ 恵み與へ。同情して物を與へ。

【賑貸】 シンタイ 無利子で金穀の貸附をすること。貸して利を取らないこと。

【賑】 (一)にぎはふ。(二)富む。繁昌する。(三)めぐむ。ほどこす。

【家産】 カサン 一家の財産。身代。身上。

【積財】 セキザイ 貯めてあつた財産。

【安んじ】 ヤスんじ 満足し。あまんじ。安心し。

【敢へて】 アへて (一)しひて。おしきつて。(二)少しも。一向に。こゝは(二)。

【施貸の報】 セタイのハウ 施したり貸したりしたことに對する返報。

「報」は、むくい。應報。返禮。しかへし。復讐。

【天明七年】 テンメイシチネン 二四四七年。光格天皇の御代。徳川家齊十一代將軍補任はこの年三月。松平定信老中就任は六月。

松平定信の老中就任と共に、多年田沼意次父子の専恣・放漫に禍されてゐた幕政はこゝに一變せられ(十月田沼意次、勤儉尙武の新政が開始されたけれども、金銀改鑄によつて彌縫し來つた幕府財政の困難は依然上下の窮苦を伴ひ、且天明三年以來の奥羽を筆頭とする諸國大饑饉(所謂天明の大饑饉)の餘波は未だ去らず、前年の關東大水害の被害も猶償はれず、この年五月には大阪の飢民が蜂起して諸國騷擾の事があり、一方漸く新思想發達・尊皇論出現の機運が迎へられて、時勢は新法を要求し始めてゐた。

【七月二十三日】 太陽曆に換算すれば、九月四日。

【三郎左衛門】 サブラウザエモン 尊徳の長弟。幼名友吉、後常五

郎。寛政元年八月生。兩親の歿後、享和二年(十三)弟富次郎と共に亡母の實家川窪太兵衛(兄弟の許に引取られて育つたが、文化十二年(二十)歸家し、翌年伯父萬兵衛の本家二宮三郎左衛門(三)の養子となり、後、家を嗣いで三郎左衛門といつた。兄尊徳の感化を受けて私欲・虚言なく、櫻町に於て報徳金の助貸が始つて以來、これを栢山村村民に紹介して、金融を通じ窮乏を救ひ、殖産興業の資を給する事に従つた。明治十五年歿、享年八十八。

【富次郎】 トミジラウ 尊徳の次弟。三歳にして父を、五歳にして母を失ひ、次兄と共に外戚川窪氏に養はれてゐたが、文化四年僅かに九歳にして夭折した。幼より穎悟で、五六歳にして觀音經を暗誦する程であつたから、尊徳は深くその死を痛惜したといふ。

【艱苦】 カンク なやみ苦しむこと。艱難と苦勞。なんぎ。辛苦。

【言語の盡くすべしにあらす】 言葉などで言ひつくせることではない。言葉などではとても述べきれない。

【酒匂川】 サカハガハ 古くは「丸子川」ともいつた。神奈川縣の西部を流れる川。源流を富士山の東麓に發し、箱根火山の北麓を東北に流れて河内川(丹波山地の)と合し(以下を通過)、西方箱根外輪山の裾野と東方海綾地塊の丘陵との間の沖積地即ち所謂酒匂地溝内を網狀の細流をなして南下し、小田原町の東方約三軒の酒匂村で

相模灣に注ぐ。全長約五〇軒。多量の土砂を上流より運んで堆積せしめる結果、廣大なる氾濫原をなし、平素はその間を小流が蛇行するが、一旦豪雨の際には恐るべき洪水を起して沿岸に被害を與へるので、古來堤防工事が行はれた。沿岸の平野は良質の米産地として知られ、これを取巻く丘陵地には柑橘類の栽培が盛に行はれてゐる。

酒匂地溝は、所謂フォッサ・マガナ(三三六頁「富士」の東南端に位し、その延長は相模灣底の海渠に連續する。大正十二年の關東大震災に於ては、最も著しい被害を蒙つた。

【洪水】 コウズキ 降雨・融雪等によつて水が地上に溢れみなぎること。おほみづの出ること。出水。

洪水の原因は種々あるが、我が國の洪水は夏秋の交に襲來する颱風に伴ふ豪雨によるもの(殆ど全国的で規模も大きく、而も襲來季節が大體大で)と、春先から初夏にかけて起る融雪によるもの(東北又は北陸地方の多量に降り積もる雪が大いに融雪することにより大別せられる。)

【大口の堤】 オホクチのツツミ 大口堤。現足柄上郡福澤村班目に在る「文命堤」の古稱。享保十一年田中丘隅が官命を奉じて修築し堤上に禹王の祠文命社を建ててから文命堤と稱せられたが、俗稱としては今も大口堤の名を存してゐる。又、「法華堤」「陀羅尼

堤「丘隅堤」等とも呼ばれる。

【堤】 (一)池・川・海等の水を圍み又はこれに沿ひ、水の溢れないやうに土を築いたもの。どて。堤防。(二)水をためた池。貯水池。(三)土俵。土俵場。こゝは(一)。

【一畝】 イッポ

【畝】 (一)うね。あぜ。田畑。(二)支那で、田地の面積の單位。古へは、歩(歩)の百倍を畝とし、秦以後二四〇歩を畝とした。

(三)我が國で、田地の面積の單位。三〇歩。こゝは(一)。

【石河原】 イシガハラ 砂石の河原。

【河原】 「碛」とも書く。(一)河邊の石原。(二)特に、京都鴨川の河原。こゝは(一)。

【素より】 モトより「固より」とも書く。(一)初から。元來。もとから。(二)いふまでもなく。勿論。こゝは(一)。

【赤貧】 セキヒン 極めて貧乏なこと。何の所有物もないほど貧乏なこと。

「赤」は、何物もない、空しい、から、等の意。

【水害】 スキガイ 洪水によつて引起された橋梁・家屋の流失、宅地・耕地の浸水、人畜の流亡などの被害。

【罹り】 カカリ

【罹る】 よくないことに出あふ。でくわす。遭遇する。

【心力を勞すること幾千萬】 心身を勞役することはかりしれない。

【心力】 シンリョク (一)精神と體力。(二)心のちから。心のはたらき。精神の活動力。思ひのたけ。

【勞す】 ラウス (他動、サ變) (一)ほねをらせる。はたらかせる。わづらはせる。(二)ねぎらふ。慰める。慰問する。

【涕泣】 テイキウ なみだを流して泣くこと。泣涕。涕歎。

【無量】 ムリヤウ 量のはかり知れないほど多いこと。莫大なこと。

【涕】 ナミダ

【某年、父病に罹り、云々】

「新報徳記」によれば、酒匂川の汎濫によつて利右衛門所有の水田約一町歩は殆ど全部礫地となつたので、利右衛門は興復の志を立て、翌寛政四年、成田を質とする約束で債を起し、開墾の事に従ひ、刻苦數年、漸く田圃を舊態に復し得たらしく、八年には伊勢參宮の旅に出たが、恰もその翌年病に罹つたのであるといふ。

【某年】 ソレノトシ(原)

【極貧】 ゴクヒン 「赤貧」に同じ。

【藥餌の料】 ヤクジのレウ 藥代。

【藥餌】 藥と滋養。又は、藥。

【料】 こゝは、代金。代價。

【露ぎて】 ヒサぎて あきなひをして。

【金貳兩】 キンニリヤウ 金貨で二兩。

徳川時代の金貨の單位は兩・分(歩)・朱で、四朱が一分、四分が一兩、兩以上は十進法であつた。兩金貨には大兩(十兩)、小兩(二兩)の二種があり、初はその外に一分金があるのみであつたが、後、二朱金(元銀)・二分金(文銀)・五兩金(天保)等が出た。 徳川時代の金貨は元祿以來屢々改鑄せられ、その都度その質(純金の分)も異なり、且物價の變動も甚だしかつたから、勿論一概にはいへないが、當時(享和十)の通用價値からいへば、金二兩は、今の五十圓位に當つたのではないかと思はれる。

【兩】 (一)量目の名。一銖の二十四倍。一斤の十六分の一。

(二)藥種の量目で、四匁。(三)昔の金貨の單位。

【疾治して】 ヤマヒヂして 病氣がなほつてから。

【治病】 チビヤウ やまひをなほすこと。

【醫師某】 イシボウ 村の醫師村田道仙をさす。

【肩を擧めて】 マユをヒソめて

【肩を擧む】 心中に憂ひ危み、又は他人の忌まはしい行爲に對

して顔をしかめる。

【子】 シ こゝは、同輩に用ゐる對稱代名詞。きみ。

【世に立たんや】

【世に立つ】 ヨにタツ 世間に出て一人前となる。世に出て相當の地位に立つ。立身する。但しこゝは、人並に生活をする、普通人として恥づかしくなく世に處する、といふほどの意。

【實】 ジツ こゝは、まこと。眞實。事實。

【慨然】 シウゼン (一)顔色をかへるさま。(二)うれへるさま。さびしいさま。こゝは(二)。

【飢渴】 キカツ 食に飢ゑ水に渴くこと。飲食物の缺乏すること。

【家田】 カデン 一家の田地。家に代々傳はる田地。

【一旦の義を立て】 つとめて一時の義理を守つて。

【義】 ギ こゝは、正しいすぢみち。人の履行すべき正義。

義理。

【償ひ】

【償ふ】 ヲグノふ (一)還す。もどす。もとにをさめる。(二)借金を返す。(三)財物を出して報いおきなふ。報酬する。(四)財物・勞働等によつて責任又は罪過をまぬがれる。贖ふ。こゝは(一)で、買ひ戻す、といふほどの意。

【肯んぜず】 ガへんぜず、うけがはない。聴きいれない。承諾しない。

【辭する】 ジする

【辭す】 こゝは、辭退する。いなむ。ことわる。

【貧富は車の如し】 貧富は車輪のやうに絶えずまはつてゐるもので、一箇所に停つてゐない、の意。

【安んぞ】 イツクんぞ どうして。何として。いかでか。

【三拜】 サンバイ (一)三度繰返して禮拜すること。(二)佛家で、支那俗禮の再拜にかたどり、しかも身・口・意の三業の敬意を表して三度拜跪すること。但し印度にはこの法がないといふ。こゝは(一)で、單に、幾度となく丁寧に禮をすること。

【半金】 ハンキン 全金額の半分。

【義言】 ギゲン 正しい言葉。人情の義になつた言葉。

【兩手を舞して】 リヤウテをブして 欣喜雀躍して。こをどりして。

【慈言】 ジゲン なさけのこもつた言葉。慈悲深い言葉。

【鬼神】 キジン (一)かみ。おにがみ。神明。(二)ばけもの。へんげ。こゝは(一)。

【鬼】は、陰の神。「神」は、陽の神。

【誠精】 セイセイ 「精誠」に同じ。まじりけのないまごころ。精

心。誠意。

【命】 メイ こゝは、うん。めぐりあはせ。天命。運命。

【慟哭】 ドウコク 大いに聲をあげて泣くこと。痛歎し號泣すること。慟泣。

【慟】は、悲しむ。なげく。度に過ぎて悲しみ歎く。

【哭】は、大聲に泣く。號泣する。

【三子を養育するに云々】

時に、長子金次郎(三郎)十四歳、次子友吉(三郎)十一歳、末子富次郎三歳。

【如何様にも】 イカヤウにも いかなるさまにも。どのやうにしても。

【養ひ送げん】 ヤシナヒトげん 育てあげよう。養育しとげよう。

【送ぐ】 こゝは、なしはたす。なしをへる。成就する。

【携へ】 タツサへ

【携ふ】 こゝは、引きつれて行く。伴なつて行く。

【縁者某】 西栢山の奥津甚左衛門をさす。

【縁者】 エンジャ みうちの者。縁つゞきの人。親類。

【託】 タク (一)たのみ。依託。依頼。委任。(二)かこつけ。ことよせ。いひまへ。(三)ことづけ。こゝは(一)。

【凌がんとす】

【凌ぐ】 シノぐ (一)押し分けて進む。かき分けて通る。強ひて通る。(二)たわませる。しなまがらせる。(三)侮る。侮り

犯す。なみする。(四)辛抱してすこす。堪へ忍ぶ。こらへる。こゝは(四)。

【徹夜】 テツヤ 夜どほし。夜あかし。よもすがら。徹宵。通宵。

【沾す】 ウルホす ぬらす。しめらす。

【潜々】 サンサン (一)雨の降るさま。はらく。 (二)涙のながれるさま。さめく。こゝは(一)。

【案ずるに】 考へてみるのに。

【赤子】 アカゴ

【某】 ソレガシ こゝは、自稱代名詞。

【しか】 然 その如く。そのやう。さやうに。然。

【子】 ネ 子の刻。昔の眞夜九つ時。現在の午前零時頃。

徳川時代は、一般には、夜明から日暮まで及び日暮から夜明までを、夫々六ツ・五ツ・四ツ・九ツ・八ツ・七ツの六辰刻に分ち、辰刻毎に「時の鐘」を打つた。又辰刻の十二支名も併用せられ、眞夜九ツを子の刻とした。辰刻の長さは最初は一定したが、寛政暦以後は、日出・日没の時刻の移動に伴ひ、四季

により晝夜によつて異なつた。(卷三、一一頁「未の時」參照)

【夜半】 ヤハン よなか。まよなか。夜中。よは。

【往返】 ワウヘン ゆきかへり。ゆきき。往來。往復。

【袖を拂つて】 袖をふりはなつて。引きとめるのをふりきつて。

【旨趣】 シシユ (一)事のわけ。むね。趣旨。(二)心の中のおもひ。かんがへ。こゝは(一)。

【雞鳴】 ケイメイ (一)雞の鳴くこと。又、その聲。(二)昔時、丑の時(今の午前二時)の異稱。(一番雞の鳴く頃であるところからいふ)。(三)あけた。早朝。早旦。こゝは(三)。

【柴】 シバ 山野に生ずる小さい雜木。そだ。しばき。

【心を盡くして】 心を傾けきつて。あるかぎりの心力を注いで。専心になつて。

【探窮】 サイシン たきぎを採ること。たきぎひろひ。

【大學】 ダイガク 經書。支那の上古に於ける大學教育の要領を述べたもので、儒教の根本精神である修己治人の大法が條理整然と記されてゐる。もと中庸と共に「禮記」中の一編であつたが、唐

の韓愈、宋の二程子等がこれに著眼し、南宋の朱子以後、論語・孟子・中庸と共に四書の一として、大いに天下に行はれるに至つた。著者は、漢の賈逵は子思とし、朱子は曾子としてゐるが、何

れとも断定し難い。要するに戰國時代に於ける孔門子弟の作であらう。内容は、まづ明明徳・止至善・親民の三綱領を述べ、次いで格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下の修養の八條目を説いてゐる。

我が國に於ては、高倉天皇の侍讀清原頼業が子弟に教授し、朱子學の渡來と共に經典として尊ばれ、徳川時代の初期に至つて愈々盛に行はれた。現在傳はるものに古本即ち「禮記」中にあるものと、新本即ち朱子の改補したものがあつてあり、古學派・陽明學派は古本により、朱子學派は新本によつてゐる。

【誦して】 ショウして

【誦す】 (一)聲を立ててよむ。讀誦する。ずんずる。(二)うたふ。こゝは(一)。

【聖賢の學】 セイケンノガク 聖人・賢人の遺した學。四書・五經などの學問。(二)六頁「聖人」參照)

【追路】 ツキロ 路をあるきながら。

【狂兒】 キャウジ 氣の狂つたこども。

【目する】 モクする

【目す】 (一)みる。みなす。(二)目で知らせる。目くばせする。

こゝは(一)。

【小田原】 ヲダハラ 相模國足柄下郡の大城市。現足柄下郡小田原町。箱根火山の東麓に位し、相模灣に臨んで早川河口を挟む要衝の地を占め、足利時代以來小田原城を中心に發達した城下町で、東海道的重要宿驛として伊豆の三島(現伊豆市三島町)と共に箱根峠にかゝる東西の關門をなした。維新後は一時稍衰へたが、箱根・熱海を控へての海水浴場として次第に復活、昭和九年東海道本線の一驛となるに及び更に繁榮を増しつゝある。又、小田原城址はじめ名所古蹟が多い。尊徳を祀る報徳二宮神社は、驛の南方約八六〇米、小田原城址の南端に在り、明治二十七年の創建である。

本文當時の小田原は大久保氏十一萬三千餘石の城下で、城主は加賀守忠貞であつた。忠貞は文政元年中となり、五年尊徳を田野上り攻撃した明君であつたが、天保八年歿した。

小田原城の起原は詳でないが、明應四年伊勢宗瑞(北條早雲)が城主大森氏を追落して以來五代の間、北條氏はこれを本據として關東に雄飛し、城下は繁榮を極めるに至つた。天正十八年北條氏が滅び、徳川氏が關東を支配するに及び、大久保忠世をこれに置き、その子忠隣改易後はしばらく城主を置かず、寛永中稻葉氏をこれに封じたが、貞享中再び大久保氏(忠朝)をその主たらしめ、以後子孫相次いで維新に至つた。

【富嶽】 フガク 富士山。

【動もすれば】 ヤヤもすれば ともすれば。どうかすると。何彼につけて。よく。

【田面】 タヅラ 田のおもて。

【毀つ】 コボつ 打ちくづす。やぶる。こわす。

【川除け堤】 カハヨケヅツミ 河水の氾濫を防ぎ止める堤。

【土功】 ドコウ 水や土を治める工事。堤防・道路などの如き土地に關する工事。土木工事。

【役】 エキ (一)人民を公の用に使ふこと。そだち。公役。夫役。賦役。(二)いくさ。戰爭。こゝは(一)。

【天を仰ぎ】 こゝは、いたく歎くさま。

【成人】 セイジン (一)成年又は丁年(男は二十歳、女は十六歳)となつた者。又はそれ以上の人。おとな。(二)幼年者がおひたつてゆくこと。生長すること。こゝは(二)。

【思へらく】 考へるのに。思ふのに。思ふには。

【孤】 コ (一)みなしご。父のない幼者。(二)連のないこと。ひとり。單獨。(三)助のないこと。身方のないこと。こゝは(一)。

【憐恕】 レンジョ あはれんでとがめないこと。あはれみおもひやること。

【恕】 (一)おもひやる。又、その心。同情心。(二)おほめにみ

る。ゆるす。

【詮なし】 センなし 詮方ない。甲斐がない。しるしがたい。つまらない。

【詮】 (一)事理の歸著。結局。(二)詮議。選擇。(三)なすべき方法。すべ。せんかた。(四)かひ。しるし。ききめ。

【寸志】 スンシ (一)いさゝかばかりの志。寸意。寸情。微衷。(二)わづかの志をあらはしたまでの進物。心ばかりの贈物。こゝは(二)。

は(二)。

【答へん】 報いませう。報じませう。

【常】 ツネ こゝは、よのつね。なみ／＼。ひととほり。普通。

【役夫】 エキフ 人足。人夫。

【孳々】 シシ 「孜孜」に同じ。勤めて倦まないさま。勤めはげむさま。汲々。乾々。

【孳】 (一)子を持つ。(二)ふえる。動植物が蕃殖する。(三)

「孜孜」に同じ。つとめる。又、つとめはげむさま。

【右に出づ】 上に出る。優る。勝れる。

もと支那で、座席を右が貴いとしたことに基づく。

【飯泉村觀世音】 イヒヅミムラクワンゼオン 飯泉山勝福寺。相模

國足柄下郡飯泉村(現足柄下郡飯泉村)に在る眞言宗の寺で、本尊は十一面

觀世音菩薩。俗に飯泉觀音と呼ばれ、坂東三十三觀音の第五番札所となつてゐる。天平寶字中、弓削道鏡が朝廷より唐國渡來の十
一面觀世音を賜はり、その食封相模國の高家伴郷(現足柄下郡府中町千代の邊)の地
に大伽藍を建て奉安、天平神護元年これを弓削寺と命名したの
に始り、天長七年、靈夢の示現と梶原(法華の)の教示によつて、
現在の地に移されたと傳へられてゐる。初は飯泉寺とも弓削寺と
もいひ、永延二年坂東の札所と定まつたが、應永二十五年、稱光
天皇の勅を奉じて勝福寺と改めた。明治以後は、國府津山醫王院
寶金剛寺(現足柄下郡國府津町)の末寺となつてゐる。

飯泉村は酒匂川と菊川との中間に當り、今、成田・桑原と共に
豊川村の大字である。

【觀世音】 (一〇頁「觀音」參照)

【堂下】 ダウカ 堂の下。

【堂】 (一)賓客に接し、又、禮樂を行ふ所。表座敷。表御殿。
大廣間。母屋。寢殿。(二)神佛を祀る建物。(三)衆人の集會す
る建物。(四)棟の高い家屋。こゝは(一)。

【念ずる】 ネンずる

【念ず】 (一)心中に祈る。願事を唱へる。(二)おもふ。(三)堪
へ忍ぶ。こらへる。こゝは(一)。

【忽然】 コツゼン にはかなさま。すみやかなさま。たちまち。は
からず。突然。忽焉。忽爾。

【行脚】 アンギヤ (一)禪僧の修行の爲に名師・善友を尋ねて諸方
を遍歴すること。(二)徒歩で諸方を遊歴すること。こゝは(一)。

【讀經】 ドキヤウ (一〇八頁參照)

【微妙】 ビメウ 奥深くて精妙なこと。たへなること。みめう。
支妙。

【深理】 シンリ 深遠な道理。

【廣大】 クワウダイ ひろく大きい。又、そのこと。

【一聞了然として】 一度聞いただけで意味が明らかにわかつて。

【了然】 レウゼン あきらかなさま。判然。了々。

【意中】 イチュウ (一)心の中。心中。(二)心の中に思ふこと。こ
こは(一)。

【誦經】 ジュキヤウ 佛語。法華五種法師行の一。經文を暗誦する
こと。

【畢る】 ヲハル

【觀音經】 クワンオンギヤウ 「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品」の
別稱。又單に「普門品」ともいふ。法華經八卷二十八品のうちの
第二十五品で、釋尊が無盡意菩薩の問に答へて、觀世音菩薩がよ

く衆生の諸難を救ひ、自在に三十三身を現して法を説くこと、及
びその名號を稱へる功德の甚大であることを説示せられたもの。
一品獨立して世に行はれ、支那・朝鮮・我が國等に於て、盛に讀
誦・書寫せられた。

【心に徹する】 心に深くしみとほる。

【徹す】 テツス とほる。つらぬく。こたへる。

【應へて】 コタへて

【吳音】 ゴオン 漢字音の一。支那の南方、吳の地方から傳來した
字音。古く「對馬音」ともいひ、平安朝時代には「正音」(漢音)
に對して「和音」ともいつた。最も古く我が國に傳來した字音で、
支那と直接交通しない前に、朝鮮から支那南方の音を傳へたもの
らしい。佛經は吳音で讀むのが普通であり、漢語も、古くから日
本語の中に用ゐられて日本化したものには吳音が多い。

因みに、漢字音には、普通、吳音・漢音・唐音の三種あつて、
同じ字に三種の違つた讀み方のあることがある。例へば、「行」
は、吳音ギヤウ、漢音カウ、唐音アン。「下」は吳音ゲ、漢音
カ、唐音ア等の如きである。尙、外に支那音(今日の)がある。

【國音】 コクオン (一)一國人の固有の音聲。(二)我が國語のよみ
ゑら。【字音】の對。こゝは(一)。

【轉讀】 テンドク (一)經典を讀誦すること。(二)字句を略して經
文を讀むこと、即ち大部の經文の初・中・後の數行又は題目と品
名とのみを讀んで經本を轉廻すること。展轉して讀むこと。(「眞
讀」の對。こゝは(一)。

【錢二百】 ゼニヒヤク 錢貨二百文。

徳川時代に實際日用の買物や勞銀に使はれた通貨は概ね錢貨
(銅貨又は銀貨)で、主として四文錢と一文錢とであつた。最初は金一
兩が錢四貫文(四千字)といふのが法定相場であつたが、後次第
に亂れ、寛政・文化頃には一兩が錢六七貫(六七千文)位になつて
ゐたらしい。本文は寛政十四歳の時
とあるから寶曆十三年。假りに兩六貫相場だとすれば、
錢二百は一兩の三十分の一で、一兩が今の二十五圓位に通用し
たものと假定すれば、まづ今の八九十錢にも當るであらうか。

【呈せん】 テイセン

【呈す】 (一)さし出す。示す。(二)「贈る」の敬語。まゐらせる。
進上する。(三)あらはす。表示する。こゝは(二)。

【胸中】 キョウチュウ (一)胸のうち。胸。胸裡。(二)心。おもひ。
こゝは(二)。

【豁然】 クワツゼン こゝは、疑又は迷の俄に解け開くさま。

【善榮寺】 ゼンエイジ 如意山善榮寺。栢山村東栢山にある曹洞宗

の寺。源義仲の妾巴(尼)が、義仲及び和田義盛一族の冥福を祈る爲、栢山村枯松の地に建てたのに由来すると傳へられる。巴は源義盛の妾に産まれ、源義盛の死後、一子無き(明比三郎)を生んだが、建保元年(1199)栢田一帯が北條氏に奪取されるに及び、無常を願じて尼となり、當寺を創建したといふ。當初は律宗、後臨濟宗となり、屢々酒匂川の氾濫に遭つた結果、全く湮没してゐるが、天文二十三年北條氏康の室瑞溪院が歸依の僧宗忻を請うて現在の地にこれを再興し、爾來曹洞宗と改められた。普通には宗忻を祖とする。現在には中郡石雲寺の末寺。寺内には義仲及び巴の墓、瑞溪院の墓、二宮尊徳の墓(遺蹟・遺蹟)等がある。

【謁して】 エツして まみえて。謁見して。

【功德】 クドク 佛語。「功能が福德となる」義。善行を積んだ結果、身に満ちて来る福利。

【理】 リ こゝは、不變の法則。物事のすぢみち。道理。ことわり。

【説解】 セツカイ とときあかすこと。説明・解釋。

【流水の如し】 リウスキのゴトシ 水の流れのやうによどみがない。

【耳順】 ジジュン 六十歳の異稱。

論語、爲政篇に「子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」とあるのに基づく。

【菩薩】 ボサツ 佛語。梵語「菩提薩埵」(Bodhisattva)の略。「大

道心衆生」「大覺有情」等と譯し、又「高士」「大士」等と譯する。菩提(覺)を求める有情又は衆生の意で、利他主義をその特徴とし、佛になることを志求して努力しつゝ、常に衆生濟度に盡くす者をいひ、佛に次ぐ位である。

【再來】 サイライ 再び來ること。再びこの世に生まれ出ること。再生。うまれかはり。

【野僧】 ヤソウ (一)田舎の僧。(二)僧の謙語。拙僧。こゝは(二)。

【衆生】 シュジャウ 佛語。梵語「薩埵」(Sattva)の舊譯。新譯は

「有情」。個體的生命を有するもの、即ち動物類をいふ。個體的・我見的存在で、覺者たる「佛」に對して「迷へるもの」である。佛教では、この境界を脱せしめる爲に無我の教理を説く。

「衆生」の字義については多くの説があつて或は衆人共に生ずる義であるとし、或は衆多の法が假りに和合して生ずる故にいふとなし、或は衆多の生死を経る故の名であるとする。

【濟度】 サイド 佛語。「拯濟度脫」の意。衆生の苦患を救つて彼岸即ち成佛解脱の境にわたすこと。煩惱を脱して安樂の地にに至らせること。すくひわたすこと。

【固辭】 コジ かく辭退すること。

【靈】 レイ (一)たましひ。(二)なきたま。幽靈。(三)神。鬼神。

(四)不思議にたふといこと。(五)かうくしくたふといこと。神聖。(六)威光。こゝは(一)。

【出家】 シュツケ 佛語。(一)家を出て専心に道を修すること。在家利欲の生活を出離して、僧としての淨行を修めること。(二)僧侶の通稱。こゝは(一)。

【佛意】 ブツイ 佛の御意。ほとけの御心。佛心。

【了知】 レウチ さとり知ること。會得すること。

二 解釋

1 主題

貧窮と苦艱の中に指かれた國民生活の指導者二宮尊徳先生の生ひ立ち。

2 構想

- (1) 貧しい先生の生家。(初一四〇ノ七)
- (2) 恩義に厚い先生の父。(二四〇ノ八—二四二ノ九)
- (3) 慈愛の濃かな先生の母。(二四二ノ一〇—二四五ノ四)
- (4) 酒匂川の堤防工事に精勵した幼時の先生。(二四五ノ五—二四六ノ二二)
- (5) 觀音經を聽いて、その深理に打たれた幼時の先生。(二四七ノ一—終)

3 敘述

〔父利右衛門の世に至り、邑人皆之を善人と稱す。民の求に應じ、或は施し、或は賑貸し、數年にして家産を減じ、積財悉く散じ、貧賤既に極まる。然りと雖も、貧苦に安んじ、敢へて昔日施貸の報を思はず。此の時に當つて先生生まる。〕——先生の父利右衛門の性格と先生誕生當時の家運とが鮮明に浮かんて來る。多くの偉人と等しく物に乏しく、徳に豊かな境界に先生は呱呱の聲を上げられたのである。

〔素より赤貧、加ふるに此の水害に罹り、艱難彌々迫り、三子を養ふに心力を勞すること幾千萬、先生終身、言此の事に及べば、必ず涕泣して、父母の大恩無量なることを云ふ。聞く者皆之が爲に涕を流せり。〕——文字の底に動いてゐる先生の父母の艱難と、終生忘れることの出来ない先生の感銘の眞實さを讀みとらなくてはならない。言簡であるが先生に親昵した作者の感慨を通じてよく先生のその心懐が記述せられてゐる。人間尊徳の眞面目をこゝに讀まなくてはならない。「聞く者皆之が爲に涕を流せり」といふ一句は、先生の實感の深さを傳へて剩す所がない。

〔貧富は時にして免れ難しと雖も、田地は祖先の田地なり。〕——祖先から受繼いだ田地を大事に思ふ心は農家に於て特に切實な

のがある。

〔是に於て利右衛門大いに感じ、三拜して其の言に隨ひ、強ひて其の半金を以て謝とし、其の半金を持ちて歸る。先生、父病後の歩行を案じ、其の歸路の遅きを憂ひ、門に出でて之を待つ。利右衛門、醫の義言を悦び、兩手を舞して歩行す。〕——この醫、この父、この子。實に美しい靈の戯曲である。わけても父の悦を敘して「兩手を舞して歩行す」といふ一句はその情景を盡くしてゐる。この父を持つた子は幸な子といふべきである。

〔母先生に言つて曰く、「汝と三郎左衛門とは、我、如何様にも養ひ遂げん。末子までは力に及ばず。三子共に養はん」とせば、皆共に飢ゑんのみ」と。〕——困窮の狀が目に見えるやうである。夫に死なれ、後に三子をかゝへた母の悲壯な心根をつく／＼思はせるものがある。

〔然るに、母寝ねて徹夜寐ぬることあたはず。毎夜流涕枕を沾す。〕

——覺悟して縁者に託したことではあるが、赤子を離した慈母の情は眞に堪へがたいものがあつたに違ひない。

〔母曰く、「末子を縁家に託せしより、我が乳張り、痛苦の爲に寐ぬることあたはず。數日を経ば、此の憂なからん。汝、勞することなかれ」と。言終らざるに、涕清々たり。〕——慈母の眞情が一

言一句に溢れてゐる。しかも「數日を経ば、此の憂なからん」といふ悲壯な覺悟で堪へぬかうとしてゐるのである。

〔母の曰く、「汝、幼若、猶末弟を養はん」と云ふ、夜半の往來、何を以て厭はんや」と、袖を拂つて隣村の縁家に到り、旨趣を告げて末子を抱き家に歸り、母子四人、共に悦ぶこと限りなし。〕——いかに先生の母らしい眞情である。本當に生きる道を發見した悦である。この母をもつた子も亦幸であるといはねばならぬ。先生の如きは、この世に於て眞に恵まれた一人であるといふことが出來よう。先生の道德的な心熱はかゝる事實に於て早くも點火せられたのであつた。

〔追路、高音に之を誦讀するが故に、人々怪しみ、狂兒を以て之を目するものあり。〕——身に迫る艱苦は、この母の爲、この二弟の爲と思へば何の痛苦でもない。しかも聖賢の學に讀み入つては、その片言隻句にも世の机上の學者の窺ひ知ることの出來ない慰勵を覺えたであらう。高音の誦讀も、狂兒として怪しまれる態度も無理はない。その高朗の心事、まことに欽羨に堪へないものがある。

〔小田原酒匂川は富嶽の下より流出し、數十里を経、小田原に至りて海に達す。急流激波、洪水毎に砂石を流し、堤防を破り、動も

すれば田面を推し流し、民家を毀つに至る。〕——自然の脅威を挿入してその前に從順に働く邑民の生活を彷彿させ、先生が幼時の非凡な道德的性向を躍如たらしめてゐる。

〔又家に歸りて思へらく、人我が孤にして貧なるを憐愍し、一人の役に當つといへども、我が心に於て何ぞ安んずることを得んや。徒らに力の不足を憂ふるも詮なし。他の勞を以て之を補はずんばある可からずと。〕——この自己を知ることの敏であることと、又積極的實踐的な良心の發動には驚かされる。しかもそれが僅かに十二歳の少年であることを思ふと、先生の恵まれたものの尊さに低頭せざるを得ない。

〔役夫休すれども休まず、終日孳々として勤む。此の故に、幼年なりと雖も、土石を運ぶこと却つて衆人の右に出づ。人皆之を感ず。〕——一心の力は驚くべきものである。先生の眞實に生きようとする強大な意志力は幼時既に人を動かすものがあつたのである。

〔先生十四歳の時、隣村飯泉村觀世音に參拜し、堂下に坐して念ずることあり。忽然として行脚の僧來り、堂前に坐して讀經す。其の聲微妙、其の經深理廣大、一聞了然として意中歡喜に堪へず。〕——先生の生涯にとつて極めて重要な一契機をなす體驗であつた

らうと思はれる。「一聞了然として意中歡喜に堪へず」といふ、先生の衷に熟し來つたものが、こゝに突如として照破せられたのである。その歡喜の情はどんなに深いものであつたらうか。

〔先生、懷中を探り、錢二百を奉じて曰く、「願はくは寸志を呈せん。今一たび誦讀し給へ」と。僧、其の志を感じ、轉讀、以前の如し。讀み畢つて去る。〕——深く感動した先生の態度、又行脚僧の淡たる面目、共にあり／＼と描き出されてゐる。そこには時・處・位を絶した深い因縁が感じられる。

〔……予は祖先の家を起し、其の靈を安んぜんとす。志す所出家にあらずと云ひて去る。〕——この話の結末に過ぎないが、しかし既に先生の全生涯に互る信念の披瀝がある。

三 批評

先生の歿後その高義を慕ひ、その尊い體驗を規範とすべく、弟子の作者が一切の客を謝して書き上げたものであるだけに、普通の傳記と異なつて、烈々讀者に迫るものがある。救世濟民の實踐に生涯を捧げた一つの人格は輝いてゐる。その光輝がこの作者の筆端にも動いてゐる。讀者の眼光も亦これを照徹しなくてはならないであらう。巻頭的一篇である爲に、生ひ立ちの事蹟が既に先生の人格的世界を擔つたものとして敘述せられてゐる。

三 備 考

一 指導の問題

二宮尊徳の生涯はこの學年の生徒にとつては大部分既知の事實であるが、報徳記の原文にそれを讀み、先生に親炙した門下の感激の披露に直接してその魂に觸れさせるところに、本課の新しい任務がある。

こゝに敘せられてゐる先生の父母は、いかにも父らしい父であり、母らしい母である。そして先生も亦、いかにも子らしい子であるといへばそれで盡きてゐるとも考へられるが、しかしその典型的な當然が實踐せられ、體現せられてゐる點に於て、先生の存在が光輝を放つてゐる。のみならず、その當然の底に、極めて目立たない事實として、當然以上なものが閃きを見せてゐる所に、更に讀者を低頭せしめるものがある。

讀みに於ては、その時代特有な文體に習熟させるまで讀みぬかせ、解釋に於ては、語句の底に潜んでゐる感激に觸れさせるまで理解力を徹しさせなくてはならない課である。若しもそこに至らなかつたならば、既に概念としては聞きあきてゐるほどの事蹟を、唯難解な文字として反復させられたに過ぎないといふ感銘を残すに止る

かも計りがたい。

その爲には、何よりもまづ、主題と構想とが把握せられた上に、敘述の一事一言が、作者の深い感動の表示として享受せられ、その一事一言の基底たる尊徳その人の人格的世界が渾然として浮かび上つて來なくてはならないであらう。さういふ批評に徹した立場から讀みと解釋とが指導せられなくてはならないであらう。

二 參考資料

(一) 原文のうち、本文第一四六頁第一二行「人皆之を感ず」の次に省略せられた部分を引用する。

于時享和二年戊辰先生年十六母疾に罹り日々に病なり。先生大に之を歎き天に祈り地に祈り、心力を盡して其治を求め日夜帶を解ず其側を離れず看病手を盡せり、然れども其驗あらずして病こと十有餘日にして死す。先生慟哭悲痛殆身を傷んとするが如し。家財既に盡き田地も亦悉く他の有となる残れるもの徒に空屋而已、二弟を撫して悲泣爲す所を知らず。親族議して曰三男子幼にして養育のものなし、此儘家に在らば何を以て其飢渴を凌ん、親族に託して後年を待には如かずと。近親萬兵衛なるもの先生を家に招き之を養ひ、弟

三郎左衛門と末子とは曾我別所村川窪某これを養ふ。

又、本文の結末に續いて左の省略がある。

二宮先生已に孤となり縁者萬兵衛の爲めに養はる時に年十六歳、萬兵衛なるもの性甚吝にして慈愛の心薄し故に先生の艱苦極れり。或時先生終日萬兵衛の家業を勤め夜に入り寝ずして夜學す。萬兵衛大に怒り罵て曰我汝を養ふに多分の雜費あり、汝幼若の働きを以て何ぞ之を補ふに足らん、今又之を思はずして夜學の爲に燈油を費す事恩を知らざるもの也。汝家もなく田圃もなし人の扶助を得て以て命を繋ぐ身の學問して何の用を爲す速に之を止めよと激怒すること甚し。先生泣て過れりと云て之を謝す、天を仰ぎ歎じて曰我不幸にして父母を喪ひ幼にして獨立することあたはず、他人の家に養はれ日を送るといへども筆道文學を心懸ずんば一生文盲の人となり父祖傳來の家を興すこと難かるべし、我自力を以て學ぶ時は其怒りに觸ること無る可しと、是に於て川邊無毛の地を起し油菜を蒔其實七八升を得たり。大に悦びこれを市に賣ぎ燈油を求め以て夜學す。萬兵衛又罵て曰汝自力の油を求め夜學すれば我が雜費には關せずといへども、汝學びて何の用をかなすや無益の事をなさんより深夜に至るまで繩をなひ我が家事を補ふ可しと。是に於て先生夜に入れば必ず繩をなひ庭を織り夜更人寝るに及びて毎夜竊に燈火を點じ衣を以て

一九 二宮尊徳の幼時

之を覆ひ他に燈光の漏れざるやうになし筆學讀書雜鳴に及て止む、晝は山に登り薪を樵り柴を刈り田に往て耕耘し、又酒匂川堤普請の役に出て力を盡し賃銀を得れば里正に至り之を託し、其數壹貫文に充れば之を持し村内寡婦年老い身に便りなき極貧のもの其他貧困のもの共へ、或は二百銅三百銅づつ之を分ち與へ暫時の苦を補ひ遣し聊我身の用とせず此を以て艱苦中の樂となせり。

某年出水の爲に用水堀流失し堀筋變化し古堀不用の地となるものあり。休日に之を開墾し邑民の棄苗を拾ひ集て植付しに幸にして壹苞餘の實のりを得たり。喜びて曰凡そ小を積て大を致すは自然の道なり、是を以て父祖の家を興し祖先の靈を安んじんと必せりと、僅僅たる一苞を種として勤勞し増倍の道を設け年を経に及て許多の數に滿つ、是に於て數年養育の恩を謝し家に歸り家業を興さんことを請ふ。萬兵衛悦て其意に任す。然して僅に虚屋を存すと雖も數年無住の故を以て大破に及び蔓草軒を蔽へり。先生獨り草を拂ひ破損を補理し、獨居して日夜家業を勵み力を盡して有餘を生じ其田圃を償ふ。此の如く萬苦を盡て廢家漸煙を擧るに至れり。

(二) 二宮尊徳の教を「前記二宮翁夜話」から摘録する。

翁曰、大事をなさんと欲せば、小さな事を、怠らず勤むべし、小積りて大となればなり、凡小人の常、大なる事を欲して、小さな

る事を怠り、出来難き事を受ひて、出来易き事を勤めず、夫故、終に大なる事をなす事あたはず、夫大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり、譬ば百萬石の米と雖も、粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其業は一畝づゝの功にあり、千里の道も一歩づゝ歩みて至る、山を作るも一ト箕もの土よりなる事を明かに辨へて、勵精小なる事を勤めば、大なる事必なるべし、小なる事を忽にする者、大なる事は必出来ぬものなり。

翁曰、一言を聞ても人の勤惰は分る者なり、東京は水さへ錢が出ると云は、懶惰者なり、水を賣ても錢が取れるといふは勉強人なり、夜は未だ九時なるに十時だと云者は、寢たがる奴なり、未だ九時前なりと云は、勉強心のある奴なり、すべての事、下に目を付け、下に比較する者は、必下り向の懶惰者なり、たとへば碁を打て遊ぶは酒を飲よりよろし、酒を呑むは博奕よりよろしと云が如し、上に目を付け上に比較する者は、必上り向なり、古語に、一言以て知とし一言以て不知とすとあり、うべなるかな。

翁曰、聖人も聖人ならむとて、聖人になりたるにはあらず、日々夜々天理に随ひ人道を盡して行ふを、他より稱して聖人といひしな

も決して酔ひたる顔を見たることなしといふ、蓋し英雄の特色を制して晏如たりしなり。夕食は特に悠々と長く、その間に門下生を教訓し又これと問答し、斯くすること二三時間にして終ることあり。按ずるに斯くては大凡十一時頃にもなりたらん、稍々永きに失したるが如しと雖も、興復事業に日も亦足らざる身にして家族門生と樂むは此の時を措きてあらず、一時半齋の安靜省慮は斯の如き間に得らるゝなり。

就眠時間は頗る少し。夕食後間もなく一睡を試み一二時間にして眼覺むるや、或は書類を閲覽す、令嬢文子の成長後は之をして讀ましめ、然る後熟睡するを例とせり。是亦頗る奇なるが如しと雖も、一國一村一家の興亡に關する大事件に至りては、輕々に斷じ難きこと多し、故に精神の明瞭なる時に於て、慮熟するを以て最良の時機となす、先生早朝の仕事多きを以て斯かる時機を選ばれたるもの實に尋常人の想像し得ざる所ならん。夜中は仲間二人をして隔番に擊柝警邏せしめ、邸内には燈火を滅して唯先生の室のみ點火しありし

り、寤寐も一心不亂に、親に仕へ人を憐み、國の爲に盡せしのみ、然るを他より其徳を稱して、聖人といへるなり、諺に聖人々々といふは、誰が事と思ひしにわが隣の丘が事かといへる事あり、誠にさる事なり、我昔鳩ヶ谷驛を過ぎし時、同驛にて不士講に名高き、三志と云者あれば尋しに、三志といひては誰もしるものなし、能々問尋しかば、夫は横町の手習師匠の庄兵衛が事なるべし、といひし事ありき、是におなじ。

(三) 佐々井信太郎撰「新報徳記」の「面影の巻」中から、尊徳の日常生活に關する條を採録する。

一日中の先生の行事は常人と異なるもの少からず。早起は先生の最も努められし所。由來勤勉者は早起の人であり、大凡毎朝一番雞又は二番雞に起き、直に手水を使ひ、汲み置きの水を浴び、行燈の前にて冷飯に醬ひしと香物位を喫し、草鞋脚絆にて村内を一巡し終りて所務を辨じ、或は工事を督するを例とす、若し巡村の必要なときは諸帳簿の檢閲をなし、決して晏起の異例あることなし。晝食は温き飯に汁、又は煮豆と香物にして、辨當の時は握飯に梅干位なり。

晚餐は團樂の中になされたり。大凡點燈後二時間位を過ぎたる頃より門下生と共に一室にて喫す、温き汁に平と香物位なり。一日、廿八日、
には一同に
御膳あり先生の酒量は三升と噂せらるゝも二合を度とす、家族の人

といふ、扱て斯くて一番雞又二番雞に起きたりとすれば、結局熟睡の時間は四五時間を出でず、これ畢竟先生の天性精力の絶倫なりしによるものなり。

(四) 報徳記以外の尊徳に關する文献中の主なるものを掲げる。

- 福住正兄 二宮翁夜話
- 同 報徳富國捷徑
- 二宮尊親 報徳分度論
- 井口丑二 二宮翁傳
- 同 報徳溯源
- 岡田良一郎 報徳富國論
- 齋藤高行 報徳外記
- 留岡幸助 二宮翁と諸家
- 同 二宮翁と其風化
- 佐々井信太郎 新報徳記
- 同 二宮尊徳研究

二〇 西郷の一言

一 解題

一 本文

「水川清話」續編から採録した。(水川清話續編 三十一年十一月、鐵華書院發行)

「水川清話」は正・續・續編の三部から成り、勝海舟の談話を吉本襄の輯録したもので、序文に「余、しばしば翁に親炙して、諄々たる其の高教を聴き、啓發せしもの少からず。乃ち餘韻の耳底に残れるを録して、『水川清話』と題し、附するに翁の逸事と詩歌とを以てし、世の翁を欽仰する人士に分つと云爾」とある如く、直接の筆録ではなく、随つて多少の潤色は施されてあるであらうが、やはり語録としての體裁が保たれてゐる。内容は主として、西郷隆盛・大久保利通・横井小楠・佐久間象山・藤田東湖等その他多く維新前後の主要人物と勝との交渉が率直に物語られてゐる。

最初の刊行は明治三十年十一月で、次いで三十一年五月續編が、同十一月續編が刊行せられた。

二 作者

勝海舟。本名は安房と稱し、維新後更に安房と改めた。海舟はその房守に倣されて安房と稱し、維新後更に安房と改めた。海舟はその號。文政六年(二四八三)一月、小普請旗本勝左衛門太郎惟貞(初名小は勝郎。男谷氏の出で)の子として江戸本所龜澤町に生まれた。初め島田虎之助(虎)の塾に入つて劍を學び心膽を練つたが、後洋學に志し、弘化中筑前藩士永井助吉(春)に就いて蘭書を學び、又泰西の兵學を修め、苦學・刻勵、嘉永の頃家塾を開くに至つた。嘉永六年米艦渡來後、老中阿部正弘が人材起用に努めるに及び、安政二年藩書反露勤務を命ぜられ、次いで海軍傳習生として長崎に留學、航海實習の業を積むこと前後五年に亙つた。六年歸府して軍艦操練所教師方頭取となり、次いで米國航海を命ぜられ、軍艦奉行並木村圖書(津守)と成薩丸に搭乘して、遣米使節一行(正使阿部正弘)の坐乗する米艦ポーハタン號と共に、七年(三月)正月品川出帆、二月桑港に著し、在米

一箇月にして歸航の途に就き、五月品川へ歸著、その壯舉は内外を驚かせた。爾來世潮の急迫と共に漸く幕閣に重んぜられ、諸役(幕閣の要職)を歴て、文久二年軍艦奉行並に上げられ、三年將軍家茂を幕艦に奉じて攝海を巡視、又紀州に於ける砲臺築造、神戸に於ける海軍操練所の設置等に盡瘁し、三年再び將軍を幕艦に奉じて上洛、元治元年軍艦奉行となつて安房守に任じ、次いで公武幹

旋の命を受けて上坂、この間神戸に海軍塾を開いて阪本龍馬はじめ幾多の俊才を養成し、又廣く天下の士と交つて敬重を受けた。てはじめは幕閣と通つたものが、これが爲却つて幕府の忌避を蒙つて下野、慶

應二年再び軍艦奉行を命ぜられ、第二次長州征伐を收拾して休戦に至らしめたけれども、爲に再び幕閣に容れられずして閑地に就いた。然るに四年正月鳥羽伏見の戦に敗れて將軍慶喜が東歸するに及び、海軍奉行並に登庸、次いで陸軍總裁に任ぜられ幕閣の中心に立つに至つた。乃ち彼は、外國の干渉と國民の慘苦を慮つて當時の滔滔たる主戦論を排し、絶えず暗殺の危険に襲はれながら、一身を挺して幕臣の鎮撫に當ると共に朝廷との折衝に力め、遂に四年三月單身西郷と會見して江戸攻撃の軍を停めしめ、四月平和裡に江戸城を開いて、よく百萬の府民を救ひ、又徳川の祭祀を保つた、明治二年外務大丞、次いで兵部大丞の任命を受けたがいづれも即日辭して出

でず、五年海軍大輔、六年參議兼海軍卿となつたが、これ亦久しからずして辭し、八年の議官も直ちにやめ、二十一年樞密顧問官に任ぜられたのを唯一の官職として野に晩年を送つた。しかし朝廷では深くその功を嘉され、二十年伯爵を授け從三位に叙し、死に當つて正二位に進められた。三十二年一月歿、享年七十七。

海舟は、明治維新の功臣として、我が海軍の恩人として、又幕末の先覺者として、史上に大きな影を落してゐるばかりでなく、その風格と識見とは、彼をして明治時代に於ける偉大なる野の存在たらしめ、當時の志を負ふ青壯年は争つて水川の書屋を訪れた。彼は又、學才に裕に文筆をよくし、「開國起源」「吹塵録」「陸軍歴史」「海軍歴史」「府城沿革」「追寶一話」「海舟日記」「牆の茨の記」等、維新前後の軍事財政に關する貴重著述を残し、すべて「海舟全集」(全十)に收められてゐる。又、その語録といふべきものに「水川清話」の外、巖本善治編「海舟餘波」(後「海舟遺稿」)がある。

吉本襄は、土佐の人。鐵齋と號した。陽明學者で、「水川清話」の編著によつて江湖に名を知られた。明治三十二年帝國黨(佐々友房・元田實の保守)の結黨に當つて評議員に列し、又明治三十五六年の頃「陽明學」なる雑誌を刊行したが、晩年病んで振るはず、その終を詳にし

ない。明治の末年頃五十歳内外で歿したやうである。

三 採擇の趣旨

國民の經濟生活に對する指導者であつた二宮尊徳の生ひ立ちを敘

した課の後を承け、本課には我が國史上一大時期を劃した明治維新の際に於ける功臣の逸事を敘した篇を掲げた。賢哲の言行を敘した國民的教材である。

二 教材としての研究

一 註解

【西郷】 サイガウ 西郷隆盛。幼名は小吉、初名は隆永、通稱吉之助、南洲と號した。文政十年(二四八七)十二月薩摩藩士西郷吉兵衛の長子として、薩摩國鹿兒島城下加治屋町(現鹿兒島市)に生まれ、弘化元年(一八)郡方書役として出仕したが、嘉永四年島津齊彬が藩主となり、安政元年始めて江戸に參觀するに當り、中小姓に拔擢せられて出府、その途次齊彬に知られ、特に庭方役として知遇を蒙り、爾來齊彬の意を受けて國事に奔走、次第に勳皇志士の間
に重きをなした。安政五年齊彬の死に次いで幕府の彈壓、藩の忌避を蒙り、遂に勳皇僧月照と相抱いて海に投ずるに至つたが、救はれてひとり蘇生し、藩命により薩南の大島に潛居せしめられること四年、文久二年赦免せられて藩父久光東上の爲京都に先發した。が、事を以て久光の不興を蒙り、更に薩南諸島の徳之島に遠流、次いで沖永良部島に移され、幽居二年に及んだ。元治元年特

赦、直ちに上京を命ぜられて軍賦役を拜し、七月禁闕を守つて長州兵と戦ひ(所請始末)、更に第一次長州征伐に善處して砲火に至らしめなかつた。慶應二年長州の木戸孝允等と結んで薩長聯携の宿志を遂げ、爾來、岩倉(興)・大久保(利)・木戸等と共に著々討幕の計を定め、慶應三年十月徳川慶喜の大政奉還より、四年正月鳥羽伏見の戦に至るまで、皇政復古の大業は殆ど彼を中心に行はれた。二月大總督有栖川宮熾仁親王の參謀として東下、四月江戸城を收め、次いで彰義隊を鎮め、更に北越に出征、十月(明治元年)奥羽平定と共に、朝仕を辭して鹿兒島に退き、二年五月函館遠征後も、國に在つて専ら藩政に參じたが、三年勅使を以て召され、四年上京、木戸孝允と共に參議に任ぜられ、廢藩置縣をはじめ、兵制の改革、宮廷の肅清、警察の創設等、維新初政の諸大業に參畫、陸軍大將近衛都督兼參議に任ぜられた。六年六月征韓の論起り、自ら韓國に問罪使たらんことを請うて廟議の内定を見たが、九月岩

倉遣歐大使一行が歐米より歸朝するに及び、廟議一變して中止となつたので、十月職を抛つて歸郷、私學校を起して子弟の薫育に携はること四年、十年二月遂に子弟に擁せられて率兵東上、熊本城を圍んで敗れ、九月鹿兒島に歸つて城山に戦死した。享年五十一。明治二十二年罪を赦して正三位を追贈、三十五年嗣子に侯爵を授けられた。(參考資料一參照)

【官軍が品川まで押寄せて来て、云々】

慶應四年(九月明治)二月、有栖川宮熾仁親王を征東大總督に仰ぎ、西郷隆盛を參謀として東海道を下つた官軍は、まづ駿府に本營を置き、その先鋒は箱根を越えて池上本門寺に陣した。西郷も三月十二日池上に到り、十三日には、十五日を以て江戸總攻撃を行ふべき令を諸道の先鋒隊に傳へたが、この日勝から面會を求め書狀に接したので、直ちに芝高輪の薩摩藩邸に於て勝と對面、翌日改めて芝田町の薩邸で談判すべきことを約した。翌十四日、恰も京都に於て五箇條御誓文を宣せられた當日、勝はまづ田町に赴いて高輪の西郷に來會を求め、西郷は諾答を與へるとともに、僕熊吉一人を從へて藩邸の下から小舟を漕がせ、かくして兩雄の劇的な談判が行はれることとなつたのである。

前日の會見は單なる準備的のものであつたが、(參考資料一・二參照) 此れ本文ではこれに關れなかつたのであらう。

【官軍】 クワングン 天皇の命に従ふ軍。朝廷の御身方の軍。政府方の軍勢。皇軍。官兵。(「賊軍」の對)

【品川】 シナガハ 武藏國荏原郡品川。舊東京府荏原郡品川町。今は、大崎・大井兩町と共に、東京市品川区の一部をなしてゐる。江戸時代は四宿(千住・品川・板橋・新宿)の一で、東海道五十三次の第一驛として江戸の南の門戸をなし、又東面して海灣(品川灣)に臨み、海陸交通の衝に當つてゐた。町の中央部を目黒川が流れてその南北に臺地が連なり、往時は北品川・南品川・步行新宿の三宿に分かれて街道に沿ふ海岸に宿場町が發達し、背後は一面の耕地であつた。東海寺・御殿山・海晏寺・妙國寺・品川神社その他、名所史蹟が多い。

【江戸城】 エドジャウ 武藏國豐島郡江戸に在つた徳川氏累代の居城。今は皇居。

長祿元年鎌倉管領上杉定正の重臣太田資長(道灌)が始めてこれを築いて居城としたが、文明十八年定正が資長を相模に謀殺するに及び、曾我豊後守を城代としてこれに居らしめた。永正二年定正の子朝長が川越城を逐はれてこれに據つたが、その子朝興の時北條氏綱の爲に攻められて走り、爾來多少の變遷はあつたけれども、天正五年以來全く北條氏の有に歸した。天正十八

年北條氏滅亡後、徳川家康が關東に封ぜられてこれを居城とし、爾來屢々修築を重ねて、三代家光の寛永中に至りその規模が完備するに至つた。その後火災に罹ること五回(寛永十六年・明徳文久三年)、その都度修築が加へられて幕末に及んだが、慶應四年(九月明治)四月朝廷に收められ、十月明治天皇の御東幸と共に、皇居と定めて東京城と稱し給うた。六年炎上、後工を起して二十一年竣工、爾來宮城と改稱すべき旨達せられた。

【わづか一本の手紙によつて、云々】

「海舟日記」(三巻)には、「此時參謀品川に到れるの説あり、敢て一書を密て云く」として、西郷の江戸著と同時に勝からこれへ送つた手紙が掲げられてゐる。こゝでは恐らくこれをさしてゐるのであらう。この手紙によつて直接行はれたのは、高輪に於ける準備的會見であるけれども、翌日の田町に於ける正式談判も亦、この手紙の趣旨に基づいて行はれたことは、海舟日記からも想像するに難くない。(勝は當日も東京よりこの手紙(海舟)を見の際勝から西郷へ先著の旨を報じた書簡は、今傳はつてゐないやうであるが、これに對する西郷の答書は、大西郷全集中に收められてゐる。(次頁「承知したと返事」をよこして、云々)參照) 尙田町會

【芝田町の薩摩屋敷】 芝田町の海濱にあつた薩摩藩の藏屋敷(徳川時代)

徳川時代、江戸等に設けて來てをさす。現東京市芝區本芝四丁目の邊にあつた。今同所にある地味工所本芝分工場内が、西郷・勝會見の遺跡とされてゐる。

幕末に於ける薩摩藩の藩邸としては、芝の三田に本邸(上屋敷)があり、同じく高輪に別邸があり、田町に藏屋敷があつたが、三田の本邸は前年(慶應三年)十二月の焼打に焼失したので(參照)、當時は高輪の屋敷が本邸同様になつてゐたものらしい。

「薩摩藩」は、徳川時代、薩摩國(現鹿兒島)七十七萬八千石(初は七十三萬石)の藩地で、代々島津家の治所であつた。島津氏は源頼朝の時薩摩・大隅・日向の守護に補せられた忠久を始祖とし、戰國の頃義久が立つて九州に覇を稱へたが、後豊臣秀吉に降つて、義久は薩摩、弟義弘は大隅及び日向の一部を領した。關ヶ原の役義弘が西軍に與して物議を醸したが許されて本領を安堵し、爾來西國の雄藩として重きをなし、松平の稱を許されて鹿兒島城に治した。幕末英主齊彬が出て當代一の人物と稱せられ、その後は弟久光の子忠義が襲いで、久光の後見、西郷・大久保等の輔佐の下に、維新の主動勢力となつた。(本文の當時を薩摩藩主は忠義で、久光が實権を握つてゐた。) 〔芝〕シバ 江戸府内の、新橋以南品川までの稱。ほど現東京市芝區の地に當り、東方一帯は東京灣に面し海岸から急に丘陵が起伏してゐる。古くは主としてその海濱の一部(後の本芝)をさ

し、「柴」柴浦「柴濱」などと稱したが、江戸開府後次第に

境域を廣め、背後の金杉・三田・飯倉方面、南西の白金・高輪方面、及び北の愛宕山方面までも含めて芝と稱するに至り、専ら寺社地・武家地として知られ、現在でも社寺が極めて多い。愛宕山・増上寺・徳川家廟・泉岳寺・東漸寺・高輪大木戸趾その他名所史蹟に富んでゐる。

〔田町〕 タマチ 三田臺の東麓海岸、本芝と高輪との中間に當る町名。現在の田町は一丁目から九丁目まで分かれてゐるが、必ずしも往時の町域と同一ではない。

【のそく】 靜かにゆるやかに行動するさま。のつそりく。

【談判】 ダンバン ある事件の始末又は取極めに就いて互に話し合ふこと。かけあふこと。交渉。

【骨だつた】 骨が折れた。苦勞だつた。

〔骨〕 ホネ こゝは、取扱の勞苦又は困難、骨折り、の意。

【形勢】 ケイセイ ありさま。なりゆき。いきほひ。情勢。情態。

【板橋】 イタバシ 武蔵國豐島郡板橋。舊東京府北豐島郡板橋。現東京市板橋區板橋町。江戸四宿の一で、中仙道口の首驛をなし、川越街道の分岐點であつた。昔はその西の上板橋(現板橋區)に對して下板橋とも呼ばれた。

【伊地知】 イヂチ 伊地知正治。初め龍右衛門といひ、舊薩摩藩士

で、西郷とは竹馬の盟友の一人であつた。(西郷の竹馬の友としては、普通平・有村俊賢(後の海軍少将)・吉井半助(後の大久保一蔵(後の利通)・長沼友實)及び伊地知龍右衛門等の名があげられる。) 文政十一年(二四八八)生。夙く

から西郷等と國事に奔走し、慶應四年正月の鳥羽伏見の戰には總監軍として薩兵二千を率ゐて奮戦、次いで東山道先鋒總督岩倉具定の下に、板垣退助と共に參謀となつて東下し、途中板垣と道を分かつて上州に入り、更に武州に進んで募兵と戦ひ、西郷・勝會見當時は、板橋に屯して十五日の總進軍を待つてゐた。江戸開城後は、更に奥羽に出征して軍功多く、明治二年永世祿丁石を賜はり、四年中議官、五年大議官、七年議長、八年一等侍講等に任じ、十年修史館總裁、十二年宮内省御用掛拜命、十七年伯爵を授けられ、十九年宮中顧問官となつた。同年五月歿、享年五十九。

【乗りこむ】 (一)乗物に乗つたまゝ、内に入り込む。(二)舟・車などに乗り入る。又大勢と共に乗る。乗り組む。(三)組をなす者がある場處に繰込む。又、某地で事をなさうとする者が、始めてその地に到る。こゝは(三)。

【眼をつけた】 目星をつけた。眼をとめた。著目した。

【承知したと返事をよこして、云々】

「大西郷全集」第二卷によれば、この時の返事は左の如きもの

であつた。

尊翰拜誦仕候。陳は唯今田町迄御來駕被_レ成下_二候段爲_三御知_一被_レ下早速罷出候様可_レ仕候間、何卒御待合被_レ下度、此旨御受迄如_レ此御座候。頓首。

三月十四日

西郷吉之助

勝 様

【羽織袴】 ハオリハカマ (一)羽織と袴。(二)羽織を著、袴を穿いた和服の禮装。(三)かしまつた風姿。こゝは(二)。

【薩摩風の引切下駄】 サラマフウのヒツキリゲダ 杉材の臺の幅が廣く、表をつけず白い太緒をすげた男子用駒下駄。「駒下駄」は一つ一つの低い下駄。「薩摩下駄」といつて、明治年間書生間に流行した。

【熊次郎】 クマジラウ 永田熊吉(熊次郎とあ)。西郷家代々の従僕で、青年西郷が庭方役を命ぜられた時は、京都に赴いて造園の修業をなし、爾來常に西郷に隨從して忠勤を勵み、隨つて當時の名士の間に名物男として知られてゐた。西南の役の直前、事を以て西郷の不興を蒙つたが、役起るや西郷の一子菊次郎に從つて従軍、自らも負傷しつゝ同じく負傷せる菊次郎を看護して鹿兒島に歸つた。役後東京に出て西郷の弟從道に仕へ、専ら庭師として餘生を送り、明治三十二年六十餘歳で歿した。

【忠僕】 チュウボク 忠義な下男。
【一大事】 イチダイシ (一)一つの大切な事件。容易ならぬ事柄。(二)佛語。實相開顯の大事業。眞理實現の大事業。こゝは(一)。
【疑念】 ギネン うたがふ心。うたがひあやしむ心。疑心。
【一身にかけて】 命をなげ出して。生死を顧みないで。命を賭して。命がけで。

【生靈】 セイレイ 「生黎」とも書く。生物の靈長。人民。人類。生民。萬民。

【徳川氏】 トクガハシ もと松平氏と稱し、世々三河國松平郷の豪族であつたが、後新田義季(上野國新田郡新田(徳川)の後裔である親氏が養はれて家を襲ぎ、これを松平氏中興の祖とする。以上は、家康當による家傳で、眞偽はもとより保し難い。)親氏より三代目の信光、その子親忠の時は家門大いに繁榮して多くの支流松平を生じたが、親忠の子信忠は庸愚で士心振るはず、その子清康は驕勇であつたが家臣に弑せられ、次代廣忠の時は今川氏の附庸となつた。然るに廣忠の子家康は、三河から起つて駿・遠・甲・信を略し、天正十八年以來關東八州を領して武蔵に江戸城を經營し、遂に天下を統一して征夷大將軍を拜し、幕府を江戸に開いてその子孫(家康・家光・家継・家綱・家宣・家茂・家重)は永く武門の棟梁となつた。その徳川氏を稱したのは、家

康以來である。徳川氏の稱を許されたのは、本家の外に三家(紀伊・尾張・水戸)三

し、別に外稱の稱十家(前田・島津・毛利・柳田)し、別に外稱の稱十家(前田・島津・毛利・柳田)に附られ、その他の尾張・支那はすべて松平氏を稱する。 明治元年十五代將軍慶喜

が大政を奉還して幽居して後、朝廷では田安家の家達かして家を襲がしめられ、十七年華族に列して公爵を授けられた。尙、慶喜も亦別に一家を爲して三十六年特に公爵を授けられた。

徳川家の處分は明治維新初頭の大問題であつて、幾多の紆餘曲折を経た。鳥羽伏見の戦後、慶喜が江戸に歸つて退隱の歎願書を上つた當時西郷から大久保に與へた手紙には「ぜひ切腹までに参り申さず候ては相濟まず」とあるが、愈々王師が駿府まで下り、山岡鐵太郎が歎願の爲罷り越した時西郷より與へた條件は「慶喜儀謹慎恭順の廉を以て備前藩へ御預け仰付けらるべきこと」であつた。然るに、西郷・勝會見の結果、形勢は著しく緩和せられ、幕府の歎願通り、慶喜は水戸表に於て謹慎することを許され、明治元年四月水戸に移つた。そこで西郷は、一日も早く徳川氏處分を決定して舊幕臣の安堵を齎すべく會議を開いたが、議容易に決せず、漸く彰義隊平定後(五月)に於て、田安龜之助(龜)を以て相繼者となし、駿河府中の城主として七十萬石を下賜せらるゝ旨仰出された。

【滅亡】 メツバウ ほろびうせること。ほろびること。つぶれるこ

と。亡滅。滅没。

【貴様】 キサマ 同輩・目下のものに對して用ゐる對稱代名詞。(もとは敬稱として用ゐられた。)

【自家撞著】 ジカドウチャク もと禪家の語。同一人の文章・言論・行爲などが、前後互に矛盾してつじつまの合はないこと。禪杖類聚、看經門に「南堂靜云、須彌山高、不見頂、大海水深、不見底、競土場、無處尋、回頭撞著自家底」とある。

【撞著】 (一)つきあたること。ぶつかること。(二)前後の一致しないこと。つじつまが合はないこと。矛盾。

【言行不一致】 ゲンカウフィツチ 言葉と行爲が一致しないこと。自分で自分のいつた通りを行はないこと。

【兇徒】 キョウト (一)わるものななま。惡漢。惡徒。惡黨。(二)兇行者。(三)暴動・騷擾などをなす目的で、集合・團結するもの。暴徒。こゝは(三)。

【兇】 (一)「凶」に通ずる。悪い。(二)わるもの。惡人。
【屯集】 トンシフ たむろすること。人が多く寄りあつまること。「屯」(一)たむろ。人の多くあつまる所。軍兵があつまり守る場所。(二)たむろする。多數あつまる。

【恭順】 キョウジュン つゝしんで命令に従ふこと。すなほにかし

こまつてゐること。

【實】 ジツ こゝは、事實、實質、の意。

【破裂】 ハレツ こゝは、雙方の意見が合はずに談判がやぶれること。相談のまとまらないこと。喧嘩別れ。

【野暮】 ヤボ 世情に通じないこと。人情を解しないこと。趣味の洗練せられないこと。風流心のないこと。又、その人。

【大局】 タイキョク 圍碁の盤面の大體の形勢。轉じて、事局の大勢。事物の全體に關する状態。大體の物事のなりゆき。

「局」は、雙六・將棋・圍碁等の盤。轉じて、事件の一段落。一くぎり。

【達觀】 タツクワン 世の形勢などに、廣く大きく見通しをつけること。一局部に偏しないでひろく觀察すること。わだかまりのない心で觀察すること。

【果斷】 タツダン 思ひ切つて事を行ふこと。決行の意志の強いこと。決斷力がすぐれ實行力の強いこと。

【桐野】 キリノ 桐野利秋。通稱信作、中村半次郎と稱した。舊藩摩藩士で、天保九年(二四九四)十二月生。文久二年藩主島津久光に従つて京都に上り、尹宮邸の衛士となり、爾來西郷の意を受けて國事に奔走、強劍・剽悍を以て鳴つた。明治元年鳥羽伏見の戰

には先鋒隊を指揮して勇戦案に抽きんで、次いで西郷幕下の先鋒として東征に従ひ、彰義隊の亂にも黒門口に闘つて武名をあげた。後、軍監として奥羽に出征して若松城の攻圍に従ひ、凱旋後賞典祿二百石を下賜、二年鹿兒島常備隊の大隊長となつた。四年、朝廷が薩・長・土三藩の兵を徴して親兵を組織せられるに當り、藩兵を率ゐて上京、陸軍少將に任せられ、五年熊本鎮臺司令官、六年陸軍裁判所長となつたが、征韓の議が破れるに及んで西郷と共に辭職・歸郷、十年率兵東上の際には、初め四番大隊長、後總指揮長となつて薩軍を指揮したが、九月鹿兒島岩崎谷に戰死した。享年四十。西郷幕下の第一人として常にこれに従ひ、西郷のお傍去らずと稱せられた。後賊名を除かれ正五位を追贈せられた。

【豪傑】 ガウケツ 智勇の人に勝れてゐること。又、その人。

【うかゞつて】

「うかゞふ」 窺ふ (一)ひそかにみる。のぞく。様子を見る。

(二)ひそかに機會を待つ。(三)ひそかに得ようと望む。ねらふ。こゝは(一)。

【ひし／＼】 犇々 (一)きびしく壓されて鳴る音。みし／＼。(二)物のすきなく集るさま。すきまもなくびたりと寄りついてゐるさま。(三)手きびしくゆるみのないさま。少しも忌憚・猶豫・容赦

等のないさま。びし／＼。こゝは(二)。

【つめかけて】

「つめかける」 詰掛ける (一)間近く迫り寄る。(二)多勢で押しよせる。こゝは(一)。

【殺氣立つて】 サツキダつて あら／＼しい様子がみなぎつて。凄い氣分がいちじるしくあらはれて。

【殺氣】 (一)草木を枯落させる寒冷の氣。(二)殺伐な氣。あらあらしい様子。物凄しい様子。

【泰然】 タイゼン たしかでゆるがないさま。落著いて、物事に動じないさま。どつしり。自若。從容。

【恭しく】 ウヤウヤしく つゝしんで。

【捧げ銃】 ササげツツ 執銃の時に行為敬禮法。右手で木杖を握り、左手は照尺の下部に添へて前面直視不動又は目迎・目送の姿勢を執ること。天皇・皇族・軍旗に對する敬禮及び拜神の爲には著剣してこれを行ふ。

【敬禮】 ケイレイ (一)敬意を表して禮を行ふこと。又、その禮。

(二)うやまふこと。尊敬。こゝは(一)。

【決著】 ケツチャク きまりのつくこと。かたのつくこと。落著。

【決定次第にて】 ケツテイシダイにて 事のきまりやうで。事の決

定し方一つによつて。

【足下】 ソクカ 同輩を尊敬していふ對稱代名詞。(直接)その人をさすのを避け、足下にある侍者・執事と呼んで取次を請ふ謙辭。(こゝも)きみ。御邊。貴殿。

【銃先にかゞつて】 銃の丸にあつて。銃でうたれて。

【銃先】 ツツサキ 銃砲の筒の端。筒口。巢口。銃頭。

【言ひ捨てて】 イヒスめて いひつ放しにして。言つたまゝ返答を待たないで。

【幕府】 バクフ (一)將軍の居所。將軍の本營。柳營。將軍は軍にあつて幕中に事を行ふ所から出た語であるといふ。 (二)近衛府の唐名。又、近衛大將の異稱。(三)源頼朝以後、將軍(征夷大將)が政務を行ふ所。朝廷に對する武家の政府。

【幕府】 又、將軍の異稱。こゝは(三)で、徳川氏の政府をさす。支那では古く將軍の營所を幕府といひ、我が國でもこれに倣つて、主として武官の府である左・右近衛府を幕府といひ、轉じてその長官である左・右近衛大將を幕府又は幕下といつた。源頼朝は建久元年上洛して右近衛大將に任せられたので右幕下と呼ばれ、二年鎌倉に政所・侍所・問注所を置き、實際上武家政府としての幕府を開いたが、それが正式に幕府と呼ばれるやうになつたのは、三年七月征夷大將軍に任せられてからで、爾來

頼家・實朝以下八代の鎌倉政府は何れも幕府と稱せられ、次いで足利氏もこの稱を襲つて、その政府は室町幕府と呼ばれた。

寛元三年八月、義隆が所領北朝から征夷大將軍に任ぜられて京都室町に政廳を置いたのに始る。その後、織田・豊臣二氏は、

同じく武家政治を行つたけれども、征夷大將軍でなかつた爲に幕府の稱は用ゐられなかつたが、慶長五年以來徳川家康が天下の實權を握り、八年二月征夷大將軍となるに及び、再びこの稱が行はれて、その政府は江戸幕府と呼ばれるに至つた。

【重臣】 デュウシン 身分の重い臣。重職にある臣下。高祿の臣。國家に大切な臣。

勝はこの年(西暦)正月將軍東歸後、陸軍總裁・若年寄を命ぜられたが、若年寄は直ちに辭し、二月京師に使すべき内命があると共に陸軍總裁をも辭して、軍事取扱を命ぜられてゐた。

【座を正して】 ザをタダして きちんと正しく坐つて。端坐して。

【威光】 キクワウ 犯し難い權威のかゞやき。畏れ敬ふべき勢。

【敗軍の將】 ハイグンのシャウ (一)戦争に敗れた軍勢を率ゐてゐる大將。敗將。(二)事業に失敗した主人公。こゝは(一)。

【膽量】 タンリヤウ 膽力度量。度量。膽玉。

【天空海闊】 テンクウカイクワツ 「海闊天空」ともいふ。天の遮るものないやうに、又海のひろくとしてゐるやうに、胸中に

何等のわだかまりもなく、度量の廣大なさまにいふ。

古今詩話に「海闊從魚躍、天空任魚飛」とある。

【見識ふる】 見識あるやうに見せかける。見識を装ふ。尊大にかまへる。威儀をつくらふ。見識張る。

【見識】 ケンシキ (一)みこみ。意見。識見。(二)主義。節操。

(三)人に下らない意氣。自重の態度。氣位。氣品。品位。こゝは(三)。

【ふる】 (後尾) 名詞に添へてこれを動詞化し、故意にそのさまをよそほふ、そのふりをする、らしくする、の意を表す。

二 解釋

1 主題

江戸百萬の生靈の生命と財産とを保ち、三百年の文化の滅亡を免れしめた大西郷の一言。

2 構想

- (1) 頼むは西郷たゞ一人。(初一五〇七セ)
- (2) 談判に於ける西郷の一言。(二五〇ノ八一五二ノ五)
- (3) 談判前後に於ける官軍の形勢と泰然たる西郷の態度。(二五二ノ六一五三ノ六)
- (4) 海舟に對する西郷の禮讓。(二五三ノ七一セ)

3 敘述

「官軍が品川まで押寄せて来て、今にも江戸城へ攻め入らうといふ際に、西郷はおれが出したわづか一本の手紙によつて、芝田町の薩摩屋敷まで、のそ／＼談判にやつて来た。」——當時の切迫した形勢下に於ける二豪傑の眞面目が現れてゐる。海舟の感激が西郷の風手まで生かしてゐる所に興味がある。

「官軍に西郷がゐなかつたら、話とはとも纏らなかつたらう。」——幕臣に勝舟がゐなかつたら、官軍に西郷がゐなかつたら、その後日本の運命はどうなつてゐたか。さう思ふと、海舟の西郷に對する感激の眞實さに打たれざるを得ない。

「たゞ西郷一人に眼をつけた。」——英雄英雄を知る。この信頼に解決の鍵は秘められてゐたのである。

「當日おれは羽織袴で馬に乗り、従者を一人連れればかりで、薩摩屋敷へ出かけた。……西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引切下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、云々。」——二豪當日の身装を敘してゐる用意が注目せられる。

羽織袴の海舟と、古洋服の西郷との對談が目前に浮かんで来る。

「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします。」——徳川慶喜は既に寛永寺に入つて恭順を表してゐた

けれども、佐幕派の大名や旗本には慶喜の恭順を喜ばぬ者があつて、議論沸騰し、薩長の行動に對する憤激が大小の事件を捲き起してゐた。朝廷は大總督有栖川宮、參謀西郷隆盛をしてこれが討

伐に向かはしめられた。英・佛の軍艦は近海に屯して、互に朝幕兩軍に對する援助を辭せない形勢にあつた。一步事を誤れば、國をあげて戦亂の巷と化し、或は英・佛の兵力が國土内に動くやうな場合がないとはいへない。然るに多くは目前の感情に支配せられてこの大勢を憂へる者は極めて少い。駿府に在つて、海舟の使者山岡鐵舟に會し、海舟の手紙を見て考慮を廻らしてゐた隆盛には、熟慮が成つてゐたのであらう。この力強い一諾が海舟の立場を生かし、國內統一の礎石となつたことはいふまでもない。特に理窟ぬきな、吐て行く西郷の風格が現れてゐて感慨が深い。

「西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出来、又徳川氏も滅亡を免れたのだ。」——西郷の一言は實に江戸百萬の生靈の生命と財産とを保ち、徳川氏の滅亡を免れしめたのみではなく、江戸三百年の文化を危地に救ひ、公武合體の實を完成して、新日本の發展を基礎づけたものといつてよい。しかもこの一言をいはしめた海舟の苦心努力も亦偉大である。

「その大局を達観して、しかも果斷に當んでゐたには、實に感心し

た。——達観と果敢なくして出来る案でないに違ひない。眼前一時の感情に支配せられてゐる人々の間に立つて、徳川氏の末路を誤らしめなかつた海舟と、官軍の行動を全國民的な立場に置いて誤らなかつた西郷との連絡は、永く後代に感謝せられるべきであらう。

〔西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないもののやうに、談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つた。〕——周囲の動亂に處して動かない大西郷の襟度がこの一章句の上にも躍動してゐる。

〔おれは自分の胸を指して、兵隊に向かつて、「いづれ明日中には何とか決着致すであらう。決定次第にて、或は足下等の銃先にかかつて死ぬることもあらうから、よく／＼この胸を見覚えておかれよ」と言ひ捨てて、西郷に暇乞をして歸つた。〕——その場の光景が眼に見えると共に、海舟の覺悟が強く肯かれる。それと共に西郷と海舟との風格のちがひも見えて面白い。

三 備 考

一 指導の問題

一通りの讀みが出來た上に、當時の形勢を想起させる必要があ

知識を明らかにした上に、眞の讀みを讀ませることによつて學習の基礎は完成したといへる。

だが、猶その發展としての解釋的操作によつて、體系的な知識に達しさせる最後の學習が指導せられなくてはならないことはいふまでもない。しかし基礎の確立が十分であればあるだけ、この最後の操作は簡単に完結する筈である。随つてかういふ類の文に對して、解釋的操作に長い時間と多くの指導的助言を要する如きは基礎的學習の不十分な證左であつて、その學習指導は失敗を示すものといつてよい。基礎の確立を十分ならしめた上に、仕上は山を下る如き安易さに於てなされなくてはならないであらう。特に、海舟の如き達人の言葉は、讀めば讀むほど、その陰影が見えて來て、熟語の意義が自知せられるものである。くだけた行文の中に含まれてゐるさういふ深さを把握させ、自識させるに適當した教材である。

國民教育の上に於て、史上に傑出した人物に觸れさせることが肝要な一面であることはいふまでもないが、國語科としては、さういふ人物の概観的な傳記よりも、具體的な言行の敘説なり描寫なりの方が適切である。さうでなくては、國語の學習が單なる素材的知識の獲得に止つて、表現理解の本義が果されない。さういふ趣意に於て、かういふ教材は、素材的事實の抽象に走つてしまはないで、あ

〔この時、殊に感心したのは、西郷がおれに對して幕府の重臣たる禮を失はず、談判の時にも、始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光で敗軍の將を輕蔑するといふやうな風を見せなかつた事である。〕——幕府最後の軍事總裁の地位にあつた海舟である。その海舟が徳川氏の將來を思へば思ふほど、恭順の實をあげなくてはならない苦衷が洞察せられない者に、命をかけた一語も出來なければ、この禮讓もあり得る筈がない。海舟の立場に對する理解と同情なくして、あの果敢もあり得ないのである。

三 批評

語られる事件が事件であり、人物が人物である上に、又語る人が語る人である。行文・措辭の巧拙などに關はつてゐられないほどの關心が一篇の主題の上にかげられる。

この一篇の上に傳へられてゐる西郷は、切れこみの深い彫刻を見るやうなその肖像と共に、その端的な一言一行がいかに陰影が深い。偉丈夫らしい偉丈夫の風采が躍如としてゐる。

そしてその形勢中の代表的人物をもあげさせる要がある。その爲には若干の補説もしなくてはならないであらう。さうした歴史的

くまで表現に即して徹しさせる指導が肝要である。

二 參考資料

(一) 本文の理解に資する爲に、大政奉還前後の事情と江戸城明渡しに至る経路とを要約する。

嘉永六年の米難渡來を開幕とする皇政復古の運動は、慶應二年正月の西郷・木戸の會見によつて一轉回を見た。元治元年會津と共に長州を討つた薩摩は、こゝに長州と聯携して討幕運動の主體となり、嘗て佐幕派の巨頭として朝廷を逐はれた岩倉具視は、今や討幕派の盟主として登場した。慶應二年八月、將軍家茂が長州再征の連敗裡に大阪城に歿し、十二月慶喜が後を襲つた當時は、公武合體論が猶朝廷を風靡したけれども、同月孝明天皇崩御、翌三年正月明治天皇が大統を嗣がせ給ひ、廣範圍の大赦が行はれるに及び、形勢は漸く一變の光を示した。西郷・大久保等は、この機に乗じて一舉に大業を達成すべく、内には岩倉等を通じて朝廷の改革を計り、外には薩・長等諸藩の兵力による討幕方略を講ずると共に、又英國と結んで佛國の幕府援助を牽制、著々として準備を整へた。

かねて親幕的皇政復古論者として、天下の情勢の討幕に赴くことを受へた土佐藩主山内豊信(豊信)は、家臣後藤象二郎の言を用ゐて九月慶喜に大政奉還の斷行を建議、慶喜も深く慮る所があつて、十月

十四日遂に奉還の儀を請ひ奉つた。蓋し幕府等は、慶應中心の新政府と列強國の
を期す。が、當時既に討幕計畫は全く熟し、恰も同日、薩・長兩藩
に對して討幕の密勅が下つてゐた。そして朝廷では、翌十五日直ち
にこれを御裁許になつたので、二十四日慶喜は更に將軍職をも辭し
て二條城に後命を待つたが、討幕派は更に解兵・納地を迫るべく、
西郷・大久保は密勅を奉じて歸國、長州・安藝兩藩と共に出兵に著
手し、十一月には三藩の兵が相前後して畿内に入つた。

かくて慶應三年十二月九日皇政復古の大號令は遂に煥發せられ、
總裁(有栖川宮)・議定・參與の新政府設置、長藩主赦免、親幕公卿の
停朝、會津・桑名の禁門警衛解除等が決定されると共に、同夜宮中
の小御所に於て徳川氏處分の御前會議が開かれ、親王・公卿の外、
徳川慶勝(五)・松平慶永(四)・山内豊信(三)・島津忠義(二)・淺野長勳
(安)の五藩主及びその重臣(各)が列席した。席上山内宮堂は慶喜及
び會・桑兩藩主の參政を要め、討幕派の策動を難じて激論したが、
説行はれずして退席、結局、尾・越二侯をして慶喜に退官納地を諭
さしめることとなつて、討幕派は完全に勝を制した。習日二侯を二
條城に迎へた幕臣の憤懣は、長州兵の入京及び禁門警衛を聞くに及
んで愈々その極に達し、慶喜も鎮撫を断念して大阪城に退いてしま
つた。次いで慶喜から奏文が出る。政府ではその下阪を詰る。三條

實美以下五卿が歸洛する。不安の裡にこの年は暮れたが、恰も暮の
二十七日、江戸の薩摩藩邸が幕兵に焼打せられる事件が起つたのを
動機に、大阪城の幕臣等は遂に率兵入京を決した。當時三田の藩邸に保護
件を期した結果、この事

慶應四年(九月明治)元且、幕府は薩藩の罪を鳴らした奏狀を上り、
二日老中松平正質總監の下に、麾下及び會津・桑名・大垣諸藩の兵
約一萬五千を、鳥羽・伏見の兩街道から京都に進發せしめた。西郷
はかねて方略を定め、薩・長兩藩の兵約四千に土州兵若干を加へて
兩街道に配してゐたので、三日午後には早くも先鋒の衝突が行はれ
た。朝廷では直ちに兩議の結果これを朝敵と認められ、仁和寺宮嘉
彰親王が征東大將軍として東寺の本營に御出陣。四・五兩日に互つ
て壯烈な激戦が續けられ、數に優る幕軍は屢々官軍を苦戦に陥れた
けれども、西郷が大將軍官を擁して錦旗を陣頭に進めるに及び、官
軍の士氣は遂に敵を壓した。幕軍は猶淀に據つて挽回を期したが、
淀城主(新選組)が官軍に降つた爲、總敗軍となつて大阪に退却、六日
官軍は淀に本陣を進めた。しかし西郷は幕軍が猶大阪城に據つて持
久之策に出るのを懼れ、密かに英國公使パークスに説いて慶喜に忠
告を致さしめた結果、慶喜は急に意を決し、會・桑兩侯と共に城を
脱して兵庫に下り、幕艦に乗じて江戸に歸つたので、全軍もやむな

く城を捨てて東歸し、仁和寺大將軍宮は十一日大阪入城、次いで京
都に凱旋せられた。乃ち朝廷では、改めて七總督(東郷・内閣・外務・陸軍・海軍・司法・文部)
より成る太政官政府を設置、西郷・大久保・木戸等がその實權を握
り、二月三日親征の勅と共に、愈々二月中旬を期して、徳川追討の
軍(總督・長以下十三)が下されることとなつた。

- 征討軍總督——有栖川宮熾仁親王 參謀——西郷隆盛
- 東海道先鋒總督——橋本實梁 副總督——柳原前光
- 參謀——木梨精一郎・海江田信義
- 東山道先鋒總督——岩倉具定 副總督——岩倉具經
- 參謀——伊地知正治・板垣退助
- 北陸道先鋒總督——高倉永祐 副總督——四條隆平
- 參謀——黒田清隆・品川彌二郎

一方、正月十三日を以て東歸した慶喜は、上野寛永寺に謹慎して
恭順謝罪の表を上り、靜寛院宮(前皇太子に降嫁され)・天璋院夫人(出で十三
代將軍家)・輪王寺宮(寛永寺兩主。後の
定の室)・輪王寺宮(北白川宮。久親王)等よりも朝廷へ哀訴があり、越前の
松平慶永(一)等も百方救解に努めたが、皇政復古の徹底を期する西
郷等は、新政權の將來を慮つて妥協を肯んぜなかつた。こゝに於て
幕臣等の憤激は頓に募り、主戦論は愈々上下に沸騰するに至つた
が、この時急に用ゐられて陸軍總裁となつた勝安房(一)は、主とし

て外國(薩摩藩)の干渉を慮る國家的・大乗的見地から、斷然非戦論
を唱へて慰撫に努め、慶喜も亦、勝に全權を委ねて恭順を續けた。

二月二十二日、官軍の總參謀西郷は有栖川總督宮を奉じて京都を
發し、三月三日静岡に著して駿府城を大本營に充て、その先鋒は次
第に江戸に近づいた。恰も幕臣山岡鐵太郎(一)が勝を訪れ、駿府に
使して將軍家の苦衷を訴へたいと申し出たので、勝はこれに西郷宛
の書面を託し、且薩人益満休之助(薩藩藩士の参謀)を同道せしめた。山
岡は九日駿府に達して西郷に面會し、七箇條より成る處分案の提示
を受けて東歸したが、同時に西郷は豫定を早めて駿府を發向、十二
日池上本門寺まで參謀部及び先鋒部隊を進め、處分案に對する回答
を待ちつゝ、十五日を以て總進撃の令を三道の軍に下した。これよ
り先、東山道の官軍は二手に分かれ、一は板垣退助が軍を督し信州
より甲州を経て新宿に到着、一は伊地知正治これを率して上州より
武州に進み板橋に屯集してゐた。果然十三日に至り、勝から書面を
以て會見を求めたので、西郷は直ちに藩邸に於てこれと面接、翌日
改めて田町の藏屋敷に再會して、取敢へず翌日の進撃を中止し、直
ちに駿府を経て京都に上つた。勝・西郷會見の十四日は、御前會議に於て、朝廷
天璋院ら五事を宣讀し始り、當日であった。朝廷
では協議の上、慶喜の死一等を減じて水戸に幽居せしめること、及

び江戸城收受の件を決定されたので、西郷はこれを齎して再び駿府を経て江戸に下著、かくて慶應四年四月四日、勅使橋本實業・柳原前光の兩卿は西郷及び海江田・木梨兩參謀を従へて江戸城に入り、徳川家代表田安慶親との間に收城の式が行はれたのである。

(二) 田町の談判に至るまでの勝・西郷間の折衝、及び談判の内容に就いて、「海舟日記」の一節を採録する。

○五日(三月五日)

旗本山岡鐵太郎に逢ふ、一見其爲人に感ず、同人申旨あり、益滿生を同伴して、駿府へ行き、參謀西郷氏へ談せむと云、我れ是を良とし、言上を経て、其事を執せしむ、西郷氏へ一書を寄す。

無偏無黨、王道堂々矣、今

官軍過郡府といへども、君臣謹而恭順之道を守るは、我徳川氏之士民といへとも、

皇國之一民成るを以てのゆへなり、且

皇國當今之形勢、昔時に異なり、兄弟將にせめけども、其侮を防ぐの時成るを知らばなり、雖レ然郡府四方八達、士民數萬來往して、不教之民我が主の意を解せず、或は此大變に乗じて、不韜を計るの徒、鎮撫盡力、餘力を残さずといへども、終に其甲斐無く、今日無事といへ共、明日之變、誠に難計小臣鎮撫力殆ど盡き、

手を下だすの道無く、空敷飛彈之下に憤死を決する而已、然れども後宮之尊位、一朝此不測之變に到らば、頑民無頼之徒、何等之大變、牆内に可レ發哉、日夜焦慮す、恭順之道、從レ是破るといへども、如何せむ、其統御之道無きを、唯軍門參謀諸君、能レ其情實を詳にし、其條理を正されんことを、且百年之公評を以て、泉下に期すにあり而已、嗚呼痛哉、上下道隔る皇國之存亡を以て心とする者なく、小臣悲歎して、訴へざるを不レ得る所なり、其御所置之如きは、敢て陳ずる所にあらず、正ならば、皇國之大幸、一點不正之御舉あらば、皇國之瓦解、亂臣賊子之名目、千載之下消ゆる所ならむ歟、小臣推參して、其情實を哀訴せんとすれ共、士民沸湯、鼎の如く、半日も去る能はず、唯愁苦して、鎮撫を事とす、將たして其勢するも亦功なきを知る、然とも其志不達は天也、到于此際、何を疑を存せん哉、誠恐謹言。

三月六日

勝安房

參謀軍門下

○九日

○十日

此頃官兵神奈川を越して、六郷邊に望む、頗る殺氣凛々たり、兵卒等揚言して、○○切るべし、社稷可レ立と云、是を聞く者、怒氣盛にして、雙眼血を滴き涕泣して奮戦せむとする者、殊に多し、君上號令嚴重にして、日夜其怒心を宥められ、少も御憤之色なし、臣下是を恨み是を憤る、我輩を暗殺せむと云者亦多し、是 君上之御恭順は、我が建言する所、専ら敵に降る意なり、君辱時は、臣死之常道を失す、先其首を切て軍神を祭らむと云に到る。

山岡氏東歸、駿府にて西郷氏へ面談。君上之御意を達し、且總督府之御内書、御所置之箇條書を乞ふて歸れり、嗚呼、山岡氏沈勇にして、其識高く、能く、君上之英意を演説して殘す所なし、尤以て敬服するに堪たり、其御書付は

一慶喜儀謹懐恭順之廉を以て、備前藩へ御預可レ被ニ 仰付一事、

一城明渡可レ申事、

一軍艦不レ殘可ニ相渡一事、

一軍器一字可ニ相渡一事、

一城内住居之家臣、向島へ移り、慣可ニ罷在一事、

一慶喜妄舉を助け候面々、嚴重に取調、謝罪之道、屹度可ニ相立一事、

一玉石共に碎く之御趣意更無之に付、鎮定之道相立、若舉舉致

候者有レ之手に餘り候は、官軍を以て可ニ相鎮一事、

右之餘々實效急達相立候は、徳川氏家名之儀者、寛典之 御處置、可レ被ニ 仰付一候事、

此程より、法親王并一橋殿、參政服部筑前、河津伊豆等、駿府或は箱根へ御出張、御款顧之事ありしか、各一つも御採用とも聞へず、獨り山岡氏行くに當て、

總督府に達し、參謀等此御書付を渡せり、歸府後、諸官驚懼して、またいふ所なし、官兵八日に府下に通る、大久保一翁、川勝備後、淺野美作、向山華人輩諸官に謀りて、御書付に附きて、款顧する所あり、是を以て參謀に達すへき旨なりしかとも、我をもふ所あり、官兵府城に近逼し、諸士必死を極むるにあらされは、上意をして達せしむること能はず、また官兵も我が動靜を察知せず、一舉其通不道を試み、成否を天に任せんにはしかずと云て、軽く動かす、竊に開けることあり、官兵當十五日江城侵撃と云、三道之兵必死を極め進めは、後ろ其市街を燒きて、退去之念をたしめ、城地に向て、必死を期せしむと、若今我が款顧する處を不レ聞、猶其失策を舉て進まんとは、城地灰燼、無幸の死數百萬終に其過がれしむるを知らず、彼此舉舉を以て、我に對せむには、我もまた彼か進むに先きんし、市街を燒きて、其進軍を妨げ、一戰焦土を期せずんは有へか

らす、此意此策を設けて、逢對誠意に出づるにあらざれば、恐らくは貫徹爲しかたからむ歟、愚不肖是に任て一點疑を存せず、若百萬之生靈を救ふにあらざれば、我先是を殺さんと、斷然決心して以て其策を回す。

○十三日

高輪薩州之藩邸に出張、西郷吉之助へ面談す、後宮之御退退、一朝不測之變を生せば、如何そ其御無事を保たしめ奉らん哉、此事易きを似て、其實は甚難し、君等熟慮して、其策を定められむには、我が輩もまた宜敷焦思して、其當否を量らむ歟、戦と不戦と、興と廢とに到りて、今日迷る處にあらざ、乞ふ明日を以て決せむとすと云。

大西郷全集第二卷所載、慶應四年三月十四日附、西郷の書(三二八頁全照)の解説中には、海舟日記の一部が抄出されてゐるが、その十三日の條の末尾には「編者曰く、恐らくは原本此處に、明日會見の場所は田町藩邸の事と云ふ意味の文字ありしを印刷に附するまでの間に削り去られしものならん。若し然らずとせば、次の十四日の條に、「同所に」とあるは誤である。刊本の海舟日記は原本そのまゝでは無い様であるから多分抄出したものであらう」と註してある。

○十四日

同所に出張、西郷に面會す、諸有司之歎願書を渡す。

第一ヶ條

隱居之上、水戸表へ愼罷在様仕度事。

第二ヶ條

城明渡之儀は、手續取計候上、即日田安へ御預け相成候様、仕度候事。

第三ヶ條、第四ヶ條

軍艦軍器之儀は、不殘取收め置、追而寛典之御所置被 仰付候節、相當之員數相殘し、其餘は御引渡申上候様仕度事。

第五ヶ條

城内住居之家臣共、城外へ引移、愼罷在候様仕度事。

第六ヶ條

○〇妄舉を助け候者共之儀は、格別之御憐憫を以て、御寛典に被一成下二命に拘り候様之儀無レ之様仕度事。

但萬石以上之儀は、本文御寛典之廉にて、朝裁を以被 仰付候様仕度候事。

第七ヶ條

士民鎮定之儀者、精々行届候様可仕、萬一暴舉いたし候者有レ之、手に餘り候は、其節改而相願可レ申候間、官軍を以、御鎮壓被レ下候様仕度事。

右之通屹度爲三取計可レ申、尤寛典御處置之次第、前以相伺候へば、士民鎮壓之都合にも相成候儀に付、右の邊御亮察被三成下、御寛典之

御處置之趣、爲三心得一何置度候事。

此時參謀品川へ到れるの説あり、敢て一書を寄て云く。

しかし予は愛に來りて面談す所を出し之 昨年已來、上下公平一致之旨あれども各其中に小私あり、終に當日之變に及ぶ者は、

皇國人物乏敷に因る、就中伏見の一舉、一二の藩士を目して失錯あるは我尤恥る所、堂々たる天下、終に同胞相噴、何そ其陋なる哉、我輩悲諫、一死を以て報すへきも、既に其失前日にあり。今日何之面目あつて、口を開かむ、然といへとも、不日にして、一戰數萬生靈を損せんとす、其戰名節條理之正敷にあらず、各私憤を抱藏して、丈夫之爲へき所にあらす、吾人は是を知れとも、官軍を以て、是に應せずんは、無辜之死益多く、生靈之塗炭益長からん歟、軍門實に皇國に忠する志あらは、宜敷其條理と情實を詳にし、後一戦を試み、我輩もまた能く其正不正を顧み、敢て諷に輕舉すへからず、嗚呼、我主家滅亡に當て、一之名節大條理を持し、從容死に就く者無きは、千載の遺憾にして、海外之一笑を引く而已、我輩是を知れとも、力支ゆる能はず、共に魚肉せらるゝ者は、深怨銘肝、日夜焦思し、殆と憤死せんとす、憐れ其心理を詳察あらは、軍門に臨て、一言を談せむ、幸に熟考せられは、公私之大

幸、死後猶生るが如くならむ、謹言。

辰三月

參謀軍門

我西郷に申て云、大政返上之上は、我か江城下は、皇國之首府なり、且徳川氏數百萬之祿地を保つ所以のものは、幕府之入費に充てむか爲めなり、此二は、宜敷大政と共に其御處置如何を伺ふへきなるへし、況んや外國交際之事興りしより、其談する所、獨徳川氏の爲にあらず、皇國の通信にして、我か私にあらず、印度支那の覆轍、顧みさらむ哉、今日天下の首府に在て、我か家の興廢を憂て一戦し、我か國民を殺さむことは、寡君決而爲さる所、唯希ふ所、御所置公平至當を仰かは、上天に恥る所なく、朝威はより興起し、皇國化育の正敷を見て、響應瞬間に全國に及び、海外是を聞て、國信一洗、和信益固からむ、是の意我が寡君獨り憂て、臣輩の不解の所なりと云々。西郷申て云く、我壺人今日是等を決する不能、乞ふ明日出立、督府へ言上すへし、亦明日侵撃の令あれどもといつて、左右之隊長に令し、從容として別れ去る。亦彼が傑出果決を見るに足れり、嗚呼伏見之一舉、我過激にして、事を速やかにし、天下人心之向背を察せず、一戰塗地、天下洶々として不定、薩藩一二之小臣上、天子を挟み、列藩に令して、

出師迅速、猛虎之群羊を驅るに類せり、何ぞ其奸雄成る哉。

(三) 元治元年九月十一日、西郷は同藩士吉井友實及び越前藩士青山貞と共に、勝を大阪の旅亭に訪問、初對面を遂げたが、當時彼が如何に勝の人物・議論に敬服したかは、同月十六日大久保一藏(後の)に宛てた書簡中に次の一節があるのを見てもわかる。

勝氏江初而面會仕候處實ニ驚入候人物ニ而最初は打叩賦(つら)ニ而差越候處頓と頭を下申候とれ丈け智略の有やら知れぬ鹽梅に見受申候先英雄肌合之人ニ而佐久間より事の出來候儀は一層も越候(はん)半學問と見識におひては佐久間拔群之事ニ御座候得共現事ニ臨候ては此勝先生とひとくほれ申候○攝海江異人相廻候時之策を相尋候處如

何ニも明策御座候只今異人之情態ニおひても幕吏を輕侮いたし居候間幕吏之談判ニ而ハ逆も難受いづれ此節明賢之諸侯四五人も御會盟ニ相成異艦を可打破之兵力を以横濱並長崎之兩港を開攝海之處ハ筋を立て談判に相成屹と條約を被結候ハ、皇國之恥ニ不相成様成立異人ハ却而條理ニ服し此末天下之大政も相立國是相定候期可有御座との義論に而實ニ感服之次第ニ御座候彌左様之向ニ成立候ハ、明賢侯之御出揃迄ハ受合て異人ハ引留置との説ニ御座候(大西郷全集第一卷收載寫眞版に據る)尙、勝も亦、一見西郷の怖るべき大人物なることを知り、歸來推賞して措かず(大西郷全集第一卷收載寫眞版に據る)、兩雄の肝膽は既にこの時に於て相照らした。

二二天

西郷 隆 盛

一 解 題

一 本文

「南洲翁遺訓」を抄録したものである。
「南洲翁遺訓」は、明治二十三年舊庄内藩士三矢藤太郎の編輯・發行にかゝり、隆盛が自ら編者等舊庄内藩士數十名に口授した訓話四十三項及び「翁ノ岸良某ニ與フル手翰ノ寫」を集めたもので、副島種臣の序文がある。南洲の遺訓としては、外に、二十九年舊佐賀藩士片淵琢の上梓にかゝるものがあり、その後この二本を典據とした數種の遺訓が行はれてゐるが、その間字句の異同が尠くない。

二 作者

西郷隆盛。幼名は小吉。初名は隆永、通稱吉之助、南洲と號した。

二 教材としての研究

一 註 解

【天】 テン こゝは、支那哲學思想上の觀念に於ける天で、人間の

二二天

文政十年(二四八七)十二月薩摩藩士西郷吉兵衛の長子として、薩摩國鹿兒島城下加治屋町(鹿兒島市)に生まれ、皇政復古の大業に參じて偉功ををさめ、明治四年參謀となり、次いで陸軍大將近衛都督に任ぜられたが、十年二月西南の役を起し、九月城山に戦死した。享年五十一。(三二四頁「西郷」參照)

三 採擇の趣旨

前課は海舟によつて傳へられた南洲であつたが、本課は南洲自身の言葉によつて傳へられる南洲である。それを通して南洲の爲人に觸れさせると共に、訓言・格言に對する理解の仕方を學習せしめようとして本課を設けた。賢哲の言葉を掲げた國民的教材である。

最後の據り所として考へられ、更にそれが單に宗教的に寄り纏るべき對象としてでなく、一點の非曲もなく常に嚴な正しい範を垂

三四三

れ、人を導き諭す原則の本源として考へられてゐるものをさすと見るべきであらう。

支那哲學思想に於ける天には、主として下の如き二つの觀念がある。(一)天地萬物の主宰者即ち造物主としての天で、天を單に形態的に見ず、これを人格化し、吾人の心意作用に見るが如き意志・目的を有する最高主宰者とするにあり、古來支那に於て政治・道徳・宗教等の根柢をなす思想である。(二)嚴肅な自然の原則、不變不易な當然の法則をいふもので、儒教に於ける天の觀念は主としてこれである。

【道】ミチ こゝは、人の履み行ふべき道理。道義。人道。

【天地自然のもの】 天地の間に行はれる天然のままのもの。

【天を敬する】 天を敬ふ。天に對して謹みおそれる。

宗教的對象として隨順するといふよりも、嚴肅にして犯し難い道徳の本源として仰ぎ敬ふので、飽くまで自己を正しうして天の意志に忠順ならんことをつとめる意である。

【講學】 カウガク 學問を研究すること。

【愛人】 アイジン こゝは、自己以外の總べての人を愛すること。

他人の幸福・利益を常に祈ること。

【克己】 コクキ 己に克つこと。みづから私慾を制すること。目的

又は理想の觀念によつて生活を統御する意志力。制欲。
「克」は、勝つ。心を抑制する。

【終始する】 常にさうする。徹頭徹尾さうする。一貫する。

【終始】 シュウシ (一)終と始。(二)始から終まで。始終。

(三)始から終まで關係を共にすること。

【自ら愛する】 おのれ一人の利益・幸福を圖る。自分をいたはり大事にする。

【創起】 サウキ はじめて物事を起すこと。最初にはじめること。

【己を慎み】 オノレをツツシム 身勝手ではなく、道理にかなふやうに身を持し。

【恐懼】 キョウク (一)おそれること。おそれおのゝくこと。おそれかしこむこと。(二)候文の書簡の末尾に用ゐる敬語。(三)昔

時、官吏の職務懈怠その他過失に對して科せられた制裁。出仕を停められ、籠居・謹慎を命ぜられた。こゝは(一)。

【懼】 (一)おそれる。おのゝく。わなゝく。(二)戒め慎む。

【戒慎】 カイシン いましめつゝしむこと。用心をし氣をつけること。

【驕矜】 ケウキョウ おごりほこること。たかぶりおごること。

「驕」は、おごる。ゐがる。たかぶる。我儘をふるまふ。

「矜」は、ほこる。自ら尊大にする。

【負み】 タノミ たのみにおもつて。

【睹す聞かざる所に戒慎すべきものなり】 目に見、耳に聞き及ばない所に於て能く戒め慎むべきである。獨を慎むべきである。

獨を慎むことは、佛敎や道敎でも重んぜられるが、殊に儒敎では修養上の根本的な工夫として重要視される。

大學に「所謂其ノ意ヲ誠ニストハ、自ラ欺クコト毋キ也。惡臭ヲ惡ムガ如ク、好色ヲ好ムガ如シ。此レヲ之自ラ謙スト謂フ。

故ニ君子ハ必ズ其ノ獨ヲ慎ム也」又「小人間居シテ不善ヲ爲スコト、至ラザル所無シ。君子ヲ見テ後厭然トシテ其ノ不善ヲ拵ヒテ、其ノ善ヲ著ス。人ノ己ヲ視ルコト、其ノ肺肝ヲ見ルガ如ク然リ。則チ何ゾ益アラン。此ヲ中ニ誠アレバ、外ニ形ハルト

謂フ。故ニ君子ハ必ズ其ノ獨ヲ慎ム也」とあり、中庸にも「天命之ヲ性ト謂ヒ、性ニ率フ之ヲ道ト謂ヒ、道ヲ修ムル之ヲ教ト

謂フ。道トハ須臾モ離ル可ラザル也。離ル可キハ道ニ非ザル也。是ノ故ニ君子ハ其ノ諸ザル所ニ戒慎シ、其ノ聞カザル所ニ

恐懼ス。隠レタルヨリ見ハル、ハ莫ク、微レタルヨリ顯カナルハ莫シ。故ニ君子ハ其ノ獨ヲ慎ム也」とある。

尙、宋の朱子、明の王陽明等も慎獨を重んじ、殊に明末の劉宗

周は、獨は間居・幽處の意でなく、一念萌起し、他人未だ知らずして獨り知る所を意味し、一念の一度動くのを慎むことを以て、慎獨の主眼とした。

【睹る】 ミル 「見る」に同じ。

【人を相手にせず、天を相手にせよ】 自分の行爲の對象を人としな

いで天とせよ。行爲の動機を決定するに當つては、世の毀譽褒貶

に顧みず、ひたすら己の誠を盡くして天道に従ふを念とせよ。

【己を盡くし】 己の誠のあらん限りをこめ。自分の持つてゐる力の

あるだけを出し。精一杯をつくし。

【尋ぬべし】 タヅぬべし

【尋ぬ】 こゝは、考へわけける。かんがへる。

【正道】 セイダウ 人のふむべき正しいみち。正義の道。正當な道

理。公道。

【蹈み】 フミ

【蹈む】 こゝは、行ふ。ふみ行ふ。守つて行ふ。履行する。

【至誠】 シセイ 純一でいさゝかの虚偽・譎詐のない心。極めて眞

實な心。

殊に儒敎に於て人間道徳の標準として重要視され、「中庸」に

於ては、人道の根元と考へるのみでなく、更に一步を進めて字

宙の原理として説かれてゐる。即ち、自然界は眞實性を以て貫ぬかれ、嚴然たる因果の理法によつて支配され、その動きに毫末も虚偽・誤謬がない。人類の間に於ても同様であるべきものが、動もすれば虚偽・謊詐が行はれ、正しい因果關係が行はれてゐない。そこで自然界に行はれてゐると同様の眞實性を實現することが人の道であるとするのである。

中庸第二十章に「誠ハ天ノ道也。之ヲ誠ニスルハ人ノ道也。誠ハ勉メズシテ中リ、思ハズシテ得、從容トシテ道ニ中ルハ聖人也。之ヲ誠ニスル者ハ、善ヲ擇ビテ固ク之ヲ執ル者也」とある。

【推し】 オシ 尊び崇め。推尊し。

【詐謀】 サボウ いつはりのはかりごと。だますてだて。

【作略】 サクリヤク はかりごと。たばかり。かけひき。計略。

【時宜次第】 ジギシダイ その時／＼に都合のよいやうに。

【時宜】 (一)時のよろしきになふこと。時勢に適すること。

(二)ほどよいころあひ。よいしほ。

【傾ひ】 ワヅラヒ (一)わづらふこと。苦しむこと。(二)心配。苦

勞。面倒。(三)やまひ。いたづき。こゝは(二)。

【敗るゝものぞ】

【敗る】 ヤブる こゝは、事が亂れ崩れる。成りそこなふ。成

り立たない。失敗する。

【迂遠】 ウエン (一)まはりどほいこと。直ちに用をなさないこと。實用に適さないこと。世事にうといこと。迂疎。迂闊。(二)道路の曲つてゐるとほいこと。こゝは(一)。

【迂】 は、とほい。路がまはりどほい。實際に向かない。適切でない。うとい。

【天下舉つて】 天下の人がこと／＼く。世間の人が全部。

【擧る】 コゾる (自動) こと／＼くそろふ。残らず集る。

【毀る】 ソシる 人のことを悪くいふ。悪口して他の徳を害ふ。非難する。けなす。

【始末に困る人】 處置に困る人。取扱ひに困る人。

【始末】 シマツ (一)始と終。始終。首尾。(二)事の顛末。わけがら。(三)始終を整へること。しめく／＼り。處理。處置。

(四)浪費せぬこと。儉約。

【修業】 シユゲフ 業を修めること。學び習ふこと。稽古。

【驕慢】 ケウマン 心驕つて、獨り自ら誇ること。おごつて人をあなどること。たかぶること。

【取締はん】 トリツクロはん

【取締ふ】 (一)つくるふ。手入をする。修復する。(二)過失を

掩つて取成す。彌縫する。(三)整へ装ふ。著飾る。體裁をつくる。修飾する。こゝは(二)。

【唱ふる】 トナふる

【唱ふ】 (一)聲を高く又は長くして呼ぶ。(二)よむ。誦する。

うたふ。(三)力を籠め、又は衆人に先んじていふ。主張する。

唱道する。こゝは(三)。

【機會】 キクワイ 事をなすに恰度適當な時機。その場のめぐりあはせ。をり。はずみ。しほ。

原文中「翁ノ岸良某ニ與フル手翰ノ寫」に次のやうにある。

事ノ上ニテ機會ト唱ルモノニアリ僥倖ノ機會アリ又設ケ起ス機會アリ大丈夫徒ニ僥倖ヲ頼マムヤ大事ニ臨テハ是非機會ハ引起サスンハアルヘカラス豪傑ノナシタル事ヲ見ルヘシ設ケ起シタル機會モ跡ヨリ見レハ僥倖ノヤウニ見ユ氣ヲ付味フヘシ。

【僥倖】 ゲウカウ 理由なくして幸にあふこと。思ひがけない幸。こぼれざいはひ。まぐれざいはひ。

【僥】 は、利を求める。幸を願ふ。

【倖】 は、さいはひ。こぼれざいはひ。分に非ずして得る幸福。

【理を盡くして行ひ、勢を審にして動く】 道理をきはめ盡くして行動し、形勢を明細に察して行動する。

り立たない。失敗する。

【迂遠】 ウエン (一)まはりどほいこと。直ちに用をなさないこと。實用に適さないこと。世事にうといこと。迂疎。迂闊。(二)道路の曲つてゐるとほいこと。こゝは(一)。

【迂】 は、とほい。路がまはりどほい。實際に向かない。適切でない。うとい。

【天下舉つて】 天下の人がこと／＼く。世間の人が全部。

【擧る】 コゾる (自動) こと／＼くそろふ。残らず集る。

【毀る】 ソシる 人のことを悪くいふ。悪口して他の徳を害ふ。非難する。けなす。

【始末に困る人】 處置に困る人。取扱ひに困る人。

【始末】 シマツ (一)始と終。始終。首尾。(二)事の顛末。わけがら。(三)始終を整へること。しめく／＼り。處理。處置。

(四)浪費せぬこと。儉約。

【修業】 シユゲフ 業を修めること。學び習ふこと。稽古。

【驕慢】 ケウマン 心驕つて、獨り自ら誇ること。おごつて人をあなどること。たかぶること。

【取締はん】 トリツクロはん

【取締ふ】 (一)つくるふ。手入をする。修復する。(二)過失を

原文中「翁ノ岸良某ニ與フル手翰ノ寫」に次のやうにある。

事ノ上ハ理ト勢トノ二ツ必アルヘシ歴史ノ上ニテハ能見分ツヘケレ共現事ニカ、リテハ甚見分ケカタシ理勢ハ離レサルモノナレハ能々心ヲ用フヘシ譬ヘハ賊アリテ討ツヘキ罪アルハ其理ナレハナリ規模術略吾胸中ニ定リテ是ヲ發スルニ千何ニ座而圓石ヲ轉スルカ如ク勇決ナル處ハ其勢ヒトイフヘシ事ニ關カルモノハ理勢ヲ知ラスンハアルヘカラス只勢ノミヲ知テ事ヲ爲スモノハ必術ニ陷ルヘシ又理計ヲ見テ爲スモノハ事ニ塞ヒ到來シテユキ迫ルヘシイツレ當理而後進進勢而後動モノニアラスンハ理勢ヲ知ルモノト云フヘカラス。

【勢】 イキホヒ こゝは、なりゆき。様子。形勢。

【審にす】 ツマビラカにす くはしく明らめ知る。

【誠心】 セイシン まことの心。偽なき心。まごころ。

【はずみ】 (一)はずむこと。はねかへること。(二)勢づくこと。調子づくこと。(三)よい機會。よいしほ。こゝは(三)。

【乗じて】 ジョウじて つけいつて。つけこんで。かこつけて。

挿圖「西郷南洲筆蹟」「南洲翁遺墨集」より複寫。原筆は酒井伯爵家所藏紙本。

二 解釋

〔道は天地自然のものにして、云々〕——道は天地自然のものであることを大前提とし、その天は人にも我にも一視同仁であることを小前提として、道を行ふものなる人は我を愛する心を以て人を愛すべきであると結論してゐるもので、高い信念と、精しい洞察に導かれた生きた人生智である。

〔道は天地自然の道なる故、云々〕——道は自己に存せず、天地自然に存するといふことを大前提として、克己を勧め、自愛を戒めるのが主眼である。證として、古今の人物が、事業に有終の美を缺くのは、多く自愛の念を生ずる爲であるとなし、克己をすゝめ、知外の非を戒めてゐるのは、人間性の機微を穿つた訓言である。

〔人を相手にせず、天を相手にせよ。〕——正道の實踐を可能にし、克己の徹底を期するにはこの根柢が肝要である。「天を相手にせよ」の一句は、天を實感し、天を體驗してゐる人であつて始めていひ得るいひぶりである。どこかに、偉れた人に共通の運命ともいふべき靈の孤高が響き出でゐることは否み難い。それだけに、南洲その人の爲人を如實に示してゐる遺訓の一つである。

〔事大小となく、云々〕——正道の定義をいつてゐるのではない。正道を實踐せよといつてゐるのである。一事の詐謀、一旦の策略は

目前の利があつても結局の敗因であり、正道の實踐實行は目前は迂返のやうでも成功の捷徑であるといつて、その實踐に就かしめようとする所に主眼がある。言葉は平凡なやうであるが、そこに南洲の人物が髣髴せられて感銘が深い。

〔道を行ふ者は、云々〕——正道の實踐によつて達せられる自信の境地をいつたものである。これ亦南洲その人を示した訓言の一つであらう。

〔何程制度・方法を論ずるとも、云々〕——制度や方法は末、人こそ根本であることを道破して餘すところがない。わけても、それを單なる社會批判に終らしめず、自己の心懸に持ち來してゐる眞摯さに南洲その人を感銘させられる。

〔命もいらす、名もいらす、云々〕——金を欲しくない人は金で左右することが出来ない。官位や名を欲しくない人は官位や名で動かすわけにはゆかぬ。命を欲しくない人があつたら、誘惑も脅迫も無力に歸する。何とかしようとする立場からいへば始末に困る人に違ひない。しかしこの程の人でなくては艱難を共にしてもしがひがない。國家の大事を計つても計りがひがない。「始末に困る人」といふ碎けたいひぶりに南洲その人の風手がよく現れてゐて、なつかしまれる。金を欲し、官位を欲し、名を欲し、命を欲

するのは要するに自愛である。自愛を捨て、己に克つて始めて正道が實現するといふ、南洲の人間觀の披瀝であるが、これ亦南洲その人の註釋のやうで、感銘の深い訓言の一つである。

〔己を愛するは、云々〕——克己を勧め、自愛を戒めて、正道の實踐を期した南洲の、よく／＼自愛の兆を見徹した時の訓言である。

〔過を改むるには、云々〕——改過の要は直ちに一步踏み出づること、後悔ではないとしてゐる所に、體驗底の智慧らしい的確さが感じられる。「直ちに一步踏み出づべし」の一句、誠に徹してゐて味が深い。

〔世人の唱ふる機會とは、云々〕——眞の機會は、僥倖や時のはずみ

三 備考

一 指導の問題

前課を承けることによつて本課の學習は自然に導き入れられるであらう。人間として傑出してゐた南洲の、生涯に互る體驗の結晶としての遺訓であるだけに、一讀直ちに理解せられるといふ如き章は一つもない。靜かに、内省し、思索しつゝ讀み味はふことによつて、少しづつ理解の端緒が得られるであらう。中には一讀直ちに心眼を射る如き種類の表現もあるに違ひないけれど、さういふ章は一層集

に乗ることではなく、理と勢とを察し、不斷の誠實があつて始めて存立するものであるといふのであつて、すべてを正道の實踐によつて貫ぬかうとしてゐる意志の確立が窺はれる。

三 批評

どの一つをとつても、その背景には南洲その人の人物が存在し、どの一言を味はつても、南洲の爲人が響き出でゐる。南洲はその事蹟として遺り、その傳として傳へられてゐると共に、又この遺訓の上に全幅の表現を得て生き存してゐる。殊に古今を通じて變らない眞理が、南洲らしい語感を伴なつて個性的表現を得てゐる所に盡きない意味深さが感じられる。

中した反復讀誦によつて、眞實の理解を發展させなくてはならぬ。かういふ課こそ、暗誦教材として最適なもの例であらう。少くも、各生徒の會心の章を數章暗誦させることなど効果の多い方法ではないかと思はれる。

解釋に於ては、その成立に於て、各章獨立した訓言であることはいふまでもない。随つて、和歌・俳句教材のその如く、一章々々別々に解釋してゆくのが自然である。しかしながら、同一人の訓言

であるから、思想的根柢に一致があり、人格的背景に共通性が存立することも亦當然でなければならぬ。各章が理解せられた後には、さういふ共通性に著眼し、相互關聯を考へることも、理解を精しくする一助になるであらう。

さうして思想的歸一點が天に對する誠であり、人格的背景が己を捨てて他を生かす生き方であることを知らしめ、それを語句の響や句によつて會得することが訓言學習に於ける肝要な點であらう。

尙、南洲の人物について、わけてもこの格言の背景を成し、地盤を成してゐる如き事實については出来る限り精しく紹介することが指導の上に有効と思はれる。この點は前課に俟つ所が蓋し少くないであらう。

二 參考資料

(一) 原文中、本文不採録の部分から、參考となるべき條を摘録する。

- 一 正道ヲ蹈ミ國ヲ以テ斃ル、ノ精神無クハ外國交際ハ全カル可カラス彼ノ強大ニ畏縮シ圓滑ヲ主トシテ曲ケテ彼ノ意ニ順從スル時ハ輕侮ヲ招キ好親却テ破レ終ニ彼ノ制ヲ受ルニ至ラン
- 一 談國事ニ及ヒシ時慨然トシテ申サレケルハ國ノ凌辱セラル、ニ當リテハ縱令國ヲ以テ斃ル、共正道ヲ踐ミ義ヲ盡スハ政府ノ本務也

レ無キゾ夫レモ同シニテ平生道ヲ蹈ミ居ル者ニ非レハ事ニ臨ミテ策ハ出來ヌモノ也予先年出陣ノ日兵士ニ向ヒ我ガ備ヘノ整不整ヲ唯味方ノ目ヲ以テ見ズ敵ノ心ニ成リテ一ツ衝テ見ヨ夫レハ第一ノ備ゾト申セシトゾ

一作略ハ平日致サヌモノゾ作略ヲ以テヤリタル事ハ其述ヲ見レハ善カラサルコト判然ニシテ必シタリ之レ有ル也唯戰ニ臨ミテ作略無クハアルヘカラス併シ平日作略ヲ用レハ戰ニ臨ミテ作略ハ出來ヌモノゾ孔明ハ平日作略ヲ致サヌエアノ通り奇計ヲ行ハレタルゾ予嘗テ東京ヲ引キシ時弟ヘ向ヒ是迄少シモ作略ヲヤリタル事有ラヌエ跡ハ聊カ濁ルマジ夫レ丈ケハ見レト申セシトゾ

(二) 横山健堂著「大西郷」から、「大西郷の青年時代」の一部を抄出する。

大西郷は、郡方書記を勤めし中に、彼が參禪及び陽明學を修めたるは、彼が將來に於ける人格大成の上に、非常の影響を有するものならずんばあらず。

大久保は彼が參禪したるを評して、傲世の氣質を養ひ得たるものにして、却つて彼の爲に惜むといへり。然れども吾輩を以て見れば彼が參禪し、陽明學を修めたるは、いよ／＼彼をして恬憚自在、事物に頓著せず、事に當つて、決斷すること、颯々として刀を揮つて

然ルニ平日金穀理財ノ事ヲ議スルヲ聞ケハ如何ナル英雄豪傑カト見ユレ共血ノ出ル事ニ臨メハ頭ヲ一處ニ集メ唯目前ノ苟安ヲ謀ルノミ戰ノ一字ヲ恐レ政府ノ本務ヲ墜シナハ商法支配所ト申スモノニテ更ニ政府ニハ非サル也

一 古ヨリ君臣共ニ己レヲ足レリトスル世ニ治功ノ上リタルハアラス自分ヲ足レリトセサルヨリ下々ノ言モ聽キ入ル、モノ也己レヲ足レリトスレハ人己レノ非ヲ言ヘハ忽チ怒ルユエ賢人君子ハ之ヲ助ケヌナリ

一 道ヲ行フ者ハ固ヨリ困厄ニ逢フモノナレハ如何ナル艱難ノ地ニ立ツトモ事ノ成否身ノ死生杯ニ少シモ關係セヌモノ也事ニハ上手下手有リ物ニハ出來ル人出來サル人有ルヨリ自然心ヲ動ス人モ有レ共人ハ道ヲ行フモノユエ道ヲ蹈ムニハ上手下手モ無ク出來サル人モ無シ故ニ只管道ヲ行ヒ道ヲ樂ミ若シ艱難ニ逢フテ之ヲ凌ント

ナラバ彌々道ヲ行ヒ道ヲ樂ム可シ予壯年ヨリ艱難ニ云フ艱難ニ罹リシユエ今ハドンナ事ニ出會フ共動搖ハズスマジ夫レタケハ仕合セナリ

一 平日道ヲ蹈マサル人ハ事ニ臨テ狼狽シ處分ノ出來ヌモノ也譬ヘハ近隣ニ出火有ランニ平生處分有ル者ハ動搖セヌシテ取仕抹モ能ク出來ルナリ平日處分無キ者ハ唯狼狽シテ中々取仕抹トコロニハ之

菜根を切るが如くならしめたるものにして、彼の大を致さしめたるには、與つて力少からず。其の弊處も自から伴ふものあるは、已むを得ざるなり。

鍛冶屋町に、伊東茂右衛門といへる陽明學者ありて、また識見の士なり。彼は、此の人に就いて大久保、海江田信義等と共に、陽明學を學びたりといふ。

彼は何程の陽明學を修得せるやは詳かならず。傳習錄、及び佐藤一齋の言志錄などを愛讀したるが如し。言志錄は、日本の陽明學者の著述としては、大鹽平八郎の洗心洞劄記と共に、推して傑作となすべし。彼が此の書に傾倒したるは、自から言志錄を抄録して批評を加へたるを見て知るべし。

大西郷が陽明學に於ける智識は、必ずしも多からず。英雄は、唯だ一句を聞いて、一卷を讀破するを要せず。北條早雲が孫子に於けるが如し。大西郷の陽明學に於けるも亦た固より涉獵を事とするの學究的なるに非ず。彼は、傳習錄一卷、直ちに知行合一の眞面目を會得したるなり。

時に、鹿兒島の禪僧に、無參和尚あり。梅の屋と號す。禪學深遠に、法器も亦た宏大にして、毅然たる偉丈夫なり。此の人、又た勤王の精神に富み、慷慨、時事を憂ひ其の名、一時に著はる。吉井友

實の叔父にして、初め城西、興正寺の住職を勤め、後禪昌寺の住職に榮進す。禪昌寺は島津公の菩提所なり。

大西郷は、吉井及び税所篤等と無參の門を叩きて、禪學を研究し、精神修養の功を積めり。僧月照嘗て、彼を評して、西郷の禪學は、精細深遠ならざるも、能く眞味を悟得せりといへり。

大西郷が死生の上に脱出し、險夷、其の胸中に凝滞せず、窮に處して安然たる如きも、亦た彼が陽明學と參禪との修養に得るところ多しとすべし。

(三) 本課及び前課の參考として、勝海舟の西郷の人物觀を、「水川清話」中から引用する。

おれは、今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやつた位だが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、及ばぬと思つた事が屢々あつた。おれは尙に思つたのサ。横井は、自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思つたのサ。

その後、西郷と面會したら、その意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だつたけれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して

西郷ではあるまいかと、また尙に恐れたよ。

そこで、おれは幕府の閣老に向つて、天下にこの二人があるから、その行末に注意なされと進言して置いた所が、その後、閣老はおれに、その方の眼鏡も大分間違つた、横井は何かの申分で蟄居を申付けられ、また西郷は、漸く御用人の職であつて、家老などいふ重き身分でないから、兎ても何事も出来まいといつた。けれどもおれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、最早それ迄だと心配して居たに、果して西郷は出て来たワイ。

おれが初めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられる爲めに、おれが召されて京都に入る途中に、大坂の旅宿であつた。その時、西郷は御留守居格だつたが、袴の紋の附いた黒縮緬の羽織を着て、中々立派な風采だつた。

西郷は、兵庫開港延期のことを、餘程重大の問題だと思つて、隨分心配して居た様だつたが、頼りにおれにその所置法を聞かせよといふワイ。そこで、おれがいふには、まだ確には知れぬが、この度の御召しは、多分談判委員を仰付けられる爲めだらう。併し小生は、別段この談判を難件とは思はない。小生がもし談判委員となつたら、まづ外國の全權に、君等は、山城なる 天皇を知つて居るか尋ねる、すると彼等は、必ず知つて居ると答へるだらう、そこで、

然らば、その 天皇の叡慮を安んじ奉る爲めに、暫く延期してくれと頼むサ。そして一方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後その他 の大名を集め、その意見を探つて 陛下に奏聞し、更に國論を決するばかりサ。と、斯ういつた。それから彼れの間ふに任せて、おれは幕府今日の事情を一切談じて聞かせた。彼がいふには、兎角幕府は薩摩を惡んで、漫りに猜疑の眼を以て、禍心を包藏するやうに思ふには困るといふから、おれは、それは幕府のつまらない小役人どもの事だ。幕府にも人物があらふから、そんな事は打ちやつて措きたまへ。かやうの事に掛念したり、憤激したりするのは、貴藩の爲めに決してよくないといつたら、彼も承知したといつたツケ。

坂本龍馬が、曾ておれに、先生屢々西郷の人物を賞せられるから、拙者も行て會つて来るにより、添書をくれといつたから、早速書いてやつたが、その後、坂本が薩摩からかへつて来て云ふには、成程西郷といふ奴は、わからぬ奴だ。少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も中々鑑識のある奴だ。

西郷に及ぶことの出来ないのは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一音を信じて、たつた一人で、江戸城に乘込む。おれだ

つて事に處して、多少の權謀を用ひないこともないが、たゞこの西郷の至誠は、おれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して、小樽淺略を事とするのは、却てこの人の爲めに、賜を見すかされるばかりだと思つて、おれも至誠を以て之に應じたから、江戸城受渡しも、あの通り立談の間に済んだのサ。

西郷は、今云ふ通り實に漠然たる男だつたが、大久保は、之に反して實に毅然として居た。官軍が江戸城にはいつてから、市中の取締りが甚だ面倒になつて来た。これは幕府は倒れたが、新政が未だ布かれぬから、恰度無政府の姿になつたのサ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局をおれの肩に投げ掛けておいて、行つてしまつた。どうか宜しくお頼み申します、後の處置は、勝さんが何とかなさるだらうといつて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる『だらう』にはおれも閉口した、實に閉口した。これが若し大久保なら、これはかく、あれはかく、とそれ／＼談判して置くだらうに、さりとはいふ餘り漠然ではないか。併し考へて見ると、西郷と大久保との優劣は、こゝにあるのだ。西郷の天分が極めて高い所以は、實にこゝにあるのだ。

二二 廚子王

森 鷗 外

一 解 題

一 本文

「鷗外全集」(全三十)第五卷所収の「山椒大夫」十四分節のうち、第十一・十二分節及び第十三分節の初部分の採録である。(鷗外全集第五卷 昭和十二年十月、岩波書店發行)

「山椒大夫」は大正四年一月雑誌「中央公論」に發表せられた短篇で、傳説山莊大夫及び説経淨瑠璃「さんせう太夫」等に取材したものである。大正七年創作集「高瀬舟」の中に收められ、鷗外全集「鷗外全集」(全三十)では第四卷に收められてゐる。

二 作者

森鷗外。本名は林太郎。文久二年一月島根縣鹿足郡津和野町槇堀に生まれた。家は累世藩主龜井侯の典醫で、五歳から漢學を、九歳から蘭學を學んだ。明治五年(十一)父に従つて上京し、翌年第一大學區醫學學校(現年東京醫大)に入學(年齢不足の爲、萬延元年生まれとして假りに二年を地して入學を許されたといふ)、十年同校が東京大學醫學部となると共に、豫科から本科に進み、十四年二十

歳で卒業。陸軍軍醫副(中尉)に任ぜられて軍醫生活に入った。十七年ドイツに留學、ライプチヒ大學に入り、在留四年、英・佛を歴遊して二十一年歸朝。二十四年醫學博士の學位を得、二十六年一等軍醫正に任じて軍醫學校長となつた。日清・日露の兩役には軍醫として出征、四十年軍醫總監(中將)に任命せられ、陸軍省醫務局長となり、四十二年には文學博士の學位をも授けられた。大正五年願に依り豫備役仰付けられ、翌年帝室博物館總長兼圖書頭となり、後また帝國美術院長・臨時國語調査會長を兼ねた。十一年七月、東京市本郷區駒込千駄木町の自邸に歿した。享年六十一。

文學的の活動はドイツより歸朝後で、明治二十一年七月雑誌「國民之友」夏季附録に譯詩集「於母影」を發表、十月雑誌「しがらみ草紙」を創刊してこれに據り、翻譯に紹介に評論に、殆ど超人的精力を以て活躍した。「水沫集」「月草」はその記念である。二十三年「國民之友」誌上に處女作「舞姫」を發表、續いて「うたかたの記」

「文づかひ」を出して一躍文壇の巨擘となつた。日露戰役出征後は、一時沈黙状態にあつたが、四十二年再び勇姿を文壇に現し、自然主義全盛の時流をよそに、独自の藝術境を闊歩すると共に、泰西文藝の紹介に努め、晩年には歴史小説又は考證史傳方面にも筆を執つた。多才多能・博學宏識、常に文壇の指導者・先覺者として重きをなした。主な著作としては上記の外、翻譯に「即興詩人」「黄金杯」「寂しき人々」「ファウスト」「戀愛三昧」「マクベス」「蛙」等、創作集に「涓滴」「意地」「走馬燈」「分身」「天保物語」「かのやうに」

「堺事件」「雁」「塵泥」「高瀬舟」「山房札記」等、評論隨筆集に「ファウスト考」「妄人妄語」、詩歌集に「うた日記」「沙羅の木」、史傳に「遊江抽齋傳」「伊澤蘭軒傳」「北條霞亭傳」等があり、醫學上の述作と共に「鷗外全集」に收められてゐる。

三 採擇の趣旨

その精神に於て前課のそれと一脈相通する短篇の一節を掲げ、永く國民的傳論的であつた傳説的人物に新生命を與へた作品を學ばせようとする。文藝的教材であり、國民的教材である。

二 教材としての研究

一 註 解

【廚子王】 ヅシワウ 陸奥豫平正氏の子。この時十三歳。諸書に、「津志王(丸)」「津子王(丸)」「津鹽(丸)」「對志王(丸)」「對王(丸)」等、種々の文字が用ゐられてゐる。

便宜の爲原文の梗概を記せば次の如くである。

國守の違格に連坐して筑紫に左遷せられた陸奥豫平正氏の子安壽・廚子王の二人は、母及び女中姥竹と共に父を慕つて筑紫に下る途中、越後國今津附近で山椒大夫といふ悪者に欺かれ、直

江の浦につれ出されて、海上で人買船に賣渡される。しかも母と姥竹は佐渡の二郎に、安壽・廚子王の二人は宮崎の三郎にといふやうに、母子離別の憂き目を見る。女中は途中入水し、母は佐渡で婢となつて粟の鳥追ひとなり、安壽・廚子王の二人は丹波由良港なる山椒大夫の邸に賣られ、奴婢としてさまざまの苦患に逢ふ。一夜頼に烙印せられた夢を見て、守本尊の地藏様を拜んでから、安壽は物に憑かれたやうな状態になり、翌春姉弟共に柴刈に出たのを機會に、廚子王を逃走させ、安壽は入水した。逃走した廚子王は一旦國分寺に匿れて山椒大夫からの討

手を免れ、曇猛律師の保護によつて、京に上り、清水寺に参籠中、守本尊のことから關白師實に見出され、正道と名告り、秋の除日には丹後守に任せられた。これより先、關白師實から、正氏の謫所へは赦免状を持つた使が立てられたけれども、正氏は既に亡き後であつた。正道はまづ丹後一國で人の賣買を禁じて山椒大夫の奴婢を解放させ、曇猛律師を僧都に任じ、安壽入水の跡に尼寺を建てた後、自ら佐渡に渡つて母を尋ね、盲目になつてゐた母にめぐりあひ、守本尊の力でその目を開いた。

【あくる朝、二人の子供は云々】

山椒大夫の邸に買はれて來てから安壽は「垣衣」、廚子王は「萱草」といふ名を與へられ、日に姉は三荷の潮を汲み、弟は三荷の柴を刈ることを與へられた仕事として、濱邊と山とに各一の身を案じながら辛い仕事をしなければならなかつた。冬の間は自分達の爲に特別に作られた三の木戸の小屋の中で、姉は絲を紡ぎ弟は藁を打つて暮したが、春になつて愈々明日からは再び外の仕事が始るといふ日、見廻りに來た山椒大夫の息子二郎に、安壽は突然弟と同じ柴刈をさせてくれと頼んだ。二郎もその熱心な頼みに動かされて、この邸ではだれにどんな仕事をさせるかといふことは父が自らきめることではあるが、受け合つ

てとりなしてやらうと歸つて行く。しばらくして奴頭が籠と鎌とを持つて安壽の願がきかれたことを知らせるが、その代り、柴刈をするなら大童にして山へやれといふ三郎の發言で、お前の髪を貰はなければならぬといふ。安壽は何の恐もなく項を伸ばして長い髪を鎌で切つて貰つた。そのあくる朝である。

【木戸】 キド (一) 欄に設けた門。(二) 城の門。(三) 通路に設けた門。(四) 芝居・見世物などの見物人の出入口。こゝは(一)。

原文中、本文不採録の部分に、山椒大夫の邸には、一の木戸・二の木戸・三の木戸があつたとある。

【山椒大夫】 サンセウダイフ 丹後國由良の長者。「山莊太夫」(柳田)、「山莊太夫」(加佐)、「三庄太夫」(加佐)、「三折太夫」(柳田)、「山折太夫」(柳田)、「三莊太夫」(山折)等種々の文字が用ゐられ、和漢三才圖會などには「山椒太夫」とある。

柳田國男氏の「山莊太夫考」によれば、往昔土佐その他各地に山莊・山所・算所・産所と稱せられる一階級の人民が住んでをり、一種の陰陽師の類であつて、卜占・祈禱を表儀とすると共に、或は祝言を唱へ或は歌舞を奏して合力を受けつゝ諸國を渡り歩いたが、山莊太夫物語は、最初これ等の山莊の太夫(伎藝者)が謠ひつたへた結果、いつしかそれが話の主人公の

名となつたのではないかといふ。そして同氏は、この物語は、長者屋敷傳説の一に屬する長者没落の物語(身分移動を以て)に、沈淪した王孫の立身話を配し、更に鳥追・早乙女の農村傳説を加味して脚色されたものであらうと考證されてゐる。

【廚子王は姉の心を付りかねて】

山椒大夫の邸に買はれて來てから間もなく、二人とも同じ類に「烙印」をせられた、恐しい夢(三昧)を見てから、安壽の様子は一變した。顔は引締つた表情になり、眉根には皺が寄り、目は輝いていつも遠い所を見てゐる。そして物を言はない。今まで父母のことを語り合ふのを唯一の慰としてゐた弟とすらくろく話もしないやうになつた。昨日、見廻りに來た二郎に、弟と一緒に山の仕事をさせてくれと頼んだことも、無論廚子王には無斷であつたし、後で尋ねても理由を話さなかつた。廚子王には全く姉の心が不可解であり、そしてそのことがいつも彼の心を寂しくしてゐた。

【付りかねて】 ハカリかねて 推察することが出来ないで。付度し得ないで。

【奴頭】 ヤッコガシラ 使用人の頭分。下男頭。こゝは、山椒大夫の奴頭をさす。

原文中、本文不採録の部分に「この男は山椒大夫一家のもの言附を、神の託宣を聴くやうに聴く。そこで随分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の困え苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たりはしない」とある。

【奴】 こゝは、追ひ使はれる身分の賤しい者。しもべ。下男。奴僕。

【詞を設けて】 コトバをマウけて いろ／＼に詞を考へて。

【あからさま】 こゝは、あらは。あきらか。明白。

【禿】 カムロ 「かぶろ」の轉。(一)頭に毛髪のないこと。はげあたま。(二)山に樹木のないこと。はげやま。(三)幼童などが髪を短く切りそろへて結ばぬこと。童髪。(四)遊女の使ふ幼女。かぶろ。こゝは(一)。

【頭】 ツムリ

【安壽】 アンジュ 廚子王の姉。この時十五歳。

津輕の岩木山神社(一名白澤寺。現高森市中)に絡まる傳説に據れば、岩木判官正氏の娘あんじゆの前が飛來明神と顯れて岩木山を開いたと傳へ、和漢三才圖會にも、岩木山權現は安壽を祀るが故に丹後の人の登山を許さぬ旨が記されてゐる。

【毫光のさすやうな喜】 眞理と一體になつてゐるやうな喜。利欲や

享樂の喜でない、淨らかに透徹した、輝き渡るやうな喜。

【毫光】 ガウクワウ・ゴクワウ(原) 佛の眉間の白毫から發する光で、佛の智慧を表す。

【白毫】は、「白毫相」ともいひ、佛三十二相の一。佛の兩眉の間にある清淨・柔軟な白い毛。内外映徹白瑠璃の如く、右に旋つて宛轉し、常に光を放つ。初生の時長さ五尺、成道の時は一丈五尺といふ。佛像には額に珠玉を鏤めて、この相を表す。

【毫】は、毛。細毛。

【額に漙へて】 ヒタヒにタタへて 額のあたりに満たして。額のあたりに一ぱい現して。

【赫かして】 カガヤかして

【沼】 ヌマ 湖に似て、水が浅く、泥が深く、多くは沈水性の沿岸植物が全體に繁茂してゐるものをいふ。

【汀】 ミギハ 水と陸との接する所。水際。なぎさ。

【枯葦】 カレアシ 枯れた葦。

【葦】は、「蘆」とも書く。音が「悪し」に通ずるのを嫌つて「よし」ともいふ。禾本科、よし屬の多年生草本。水邊に自生し、地下莖は長く横走する。莖は直生・剛強で竹に似た節を具へ、高さは一・五米内外。葉は披針形・鋭尖頭で、全形は「すす

き」に似、秋日、莖頂に大きい穂を出して圓錐花序をなす無數の灰白色の小花を著ける。別名「はまをぎ」。

【黄ばんだ】 黄色になつた。黄色がかつた。

【ばむ】 (掃尾) ある語に添へてこれを動詞化し、その様子のほめき現れ、又、その様子を帯びてゐる意を表す。

【岩壁】 イハカベ(原) 壁の如く聳え立つた岩。けはしくきりたつた岩。

【うねつた】 まがりくねつた。

【うねる】 高く低く、或は右に左に曲り廻る。うねくる。

【風化】 フウクツ (一)教育・政治などの力によつて、人の風儀をよく移すこと。風教。(二)地表又はその近くの岩石が、寒暖による膨脹・收縮、又滲入した水の氷結、植物の根の成長により漸次的に分解し破壊されること。空氣・炭酸瓦斯・水の化學作用、微生物により岩石の組成が變化される化學作用、或は自然にその結晶構造が變化して他の鑛石に變ること、等に總べて適用される語。(三)「風解」に同じ。結晶水を含む結晶又は水化物が、空氣中で水分を失つて粉末になる現象。こゝは(二)。

【とかく】 こゝは、ヤムもすれば。ともすれば。

【受け應へ】 ウケコタヘ(原) 他から問を受けてそれに答へること。

言をかけられて返辭すること。挨拶、受返答。應對。應答。

【とぎれて】

【とぎれる】 跡切れる (一)あしあとがたえる。ゆききが絶える。(二)中絶する。とだえる。とまる。こゝは(二)。

【駐めた】 トドめた

【駐】は、とどまる。車馬がたちどまる。物事が途中で停止する。ある一定の所にとどまる。滞在する。

【訝りながら】 イブカリながら

【訝る】 いぶかしく思ふ。不審に思ふ。あやしみ疑ふ。

【雜木林】 ザフキバヤシ 色々の木のまじつた林。

【外山】 トヤマ 端の山。はやま。ふもとやま。

【石浦】 イシウラ 丹後國加佐郡石浦。今、由良と共に京都府加佐郡由良村の大字となり、更に上石浦・下石浦に分かれてゐる。由良川河口の西岸(の西)に當り、由良ヶ嶽(一名丹後富士)の麓に位置する。山椒大夫の屋敷はこの地にあつたと言ひ傳へられ、傳説的遺跡の存するものがある。(文項参照)

【由良の港】 エラのミナト 由良川即ち大雲川(文項)が日本海(海田)に注ぐ所。その河口の西岸は由良(佐野由良村)、東岸は神崎(神崎村)で、由良から栗田(栗田村)に至る沿海は所謂「由良の門」(由良の戸)

の勝として知られてゐる。尙、現在では、鐵道宮津線(山本)が舞鶴から北走して神崎の海岸に出で、鐵橋によつて由良川の河口を渡り、丹後田原驛を経て栗田・宮津方面に向かつてゐる。

丹後風土記(寛政十三年)の「由良港」の條に「宮津より二里卅町在、民家三百餘軒はかりの處、此處は山椒大夫舊跡、安壽姫の古跡もあり、由良の内石浦と云也、石の水船と云もあり、由良村に山椒大夫塚と云あり、上に一丈七尺廻りの大松樹を植る、又山椒大夫か子三郎と云者の墓といへるもあり」とある。

由良の港として最も著名なのは、淡路島の東南端(現兵庫縣)にある紀淡海峡の港で、古事記の仁徳天皇御製などに見える「由良の門」は、その沖合(由良海峡)をさすのであるが、新古今集卷十一にある名高い曾禰好忠の戀歌「由良のとをわたる舟人かぢをたえ行方も知らぬ戀のみちかな」の「由良の門」は、丹後郡のそれであらうといはれてゐる。好忠は曾禰好忠の孫と云はれた。

【大雲川】 オホクモガハ・オクモガハ 「由良川」の別稱。「昔無瀬川」「福知川」などともいふ。源を丹波高原(現京都府)に發して大野川・和知川などといひ、高屋川その他と合流して西走、綾部(現京都府)附近に入つて由良川の名をなし、福知山(天田郡)附近で竹田川と合して北流、更に牧川その他の諸流を入れ、北東に轉じて、宮

津海と舞鶴海との中間(西田)に於て日本海に注ぐ。上流は奔湍岩を噴む景勝を形づくつてゐるが、下流の海に注ぐあたりは洋々たる大河の相をなしてゐる。中流附近では古來屢増水氾濫して害をなしたので、今福知山に著名な大堤防が造築されてゐる。舟運は河口から福知山に至る間に行はれ、運輸・灌漑に資すると共に、また漁利に富み、殊に鮎を以て名高い。

【辿つて】 タドつて こゝは、傳つて、沿つて、の意。

【川向かひ】 カハムカヒ 川を隔てて向かひ合つた彼方の岸。かはごし。かはむかふ。對岸。

【中山】 ナカヤマ 丹後國加佐郡中山。今、丸田・下東・三日市・上東・水間・八戸地・八田・和江と共に、京都府加佐郡八雲村の大字である。由良川の東岸(由良の南)にあり、戰國時代に一色氏の據つた中山城のあつた所である。(三六四頁「中山の國分寺」参照)

丹後風土記に「此地に古へ國分寺有し處と云。和江村中山由良此町の出離れに舟渡し有大河也河幅二百五十間はかり也」とあるが、對岸の和江にも國分寺址なるものがあつて明らかでない。

【都】 ミヤコ (一)帝王の宮殿の在る所。(二)人家の多くある繁華の土地。都邑。(「田舎」の對。) こゝは(一)で、京都をさす。

【筑紫】 ツクシ 古くは「竺志」「竹斯」などとも書いた。(一)九

州島(筑前・筑後・豊前・豊後・肥前)及びその屬島(豊前・豊後)の總稱。即ち、往昔の西海道(又は西國)、今の九州地方(大分・宮崎・鹿児島)をいふ。筑紫島とも呼ばれた。(二)筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後六國の地(今、福岡・佐賀・長門・山口)の總稱。(即ち、昔九州を三州筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後と分した時の三州三後に當る。)(三)筑前・筑後の二國、即ち兩筑の地(今、福岡の西大)の稱。(四)筑前の地(今、福岡の北)、特に筑前の太宰府をさす。府は筑前國都太宰府村(現福岡縣筑前郡水城村に置かれた役所、西海道九國・二島を管領し、筑前・筑後・筑前・筑後・筑前・筑後・筑前・筑後・筑前・筑後を管領し、筑前・筑後・筑前・筑後・筑前・筑後・筑前・筑後を管領した。)こゝは(四)。

原文中、本文不採録の部分に、厨子王の詞として「父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つた切り、歸らぬさうでございます」とあり、又その少し先に關白師實の詞として「永保の初に、國守の遠格に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏云々」とある。安樂寺は太宰府の府外、今の太宰府神社の所(現筑紫郡太宰府町)にあつて、菅原道真を葬つた寺であつた。

【佐渡】 サド 北陸道七國の一。現新潟縣に屬する島國。

日本海の東部、新潟市の西方沖合(島の西側の兩津津から)に位し、面積約八六九方軒、周廻約二二一軒。北部高地(大佐渡)と南部高地(小佐渡)との間に國中平野と稱する中部低地があり、東から兩津灣、西から眞野灣が灣入して狭くくびれてゐる。産業は農業を主として米・麥・蔬菜等を産し、又所謂佐渡牛の放牧が行

はれ、水産業も盛である。又、古來相川の金山を以て名高い。

主なる都邑は相川町・兩津町・小木町等。この島は既に上代より著れ、徳川時代には天領(幕府直)とせられ、明治以後は種々變遷があつたが二十九年以來新潟縣の管轄に入つた。又、古來遠流地として名高く、順徳上皇を始め奉り、日野資朝・日蓮等、著名な流人の遺跡に富んでゐる。

【おおか様】 諸傳説いづれも御臺・北の方等とあつて、その名を傳へない。

【岩代】 イハシロ 東山道十三國の一。現福島縣の一部の地。古昔は奥州を分かつて陸奥・石城(岩城)・石背の三國とし、岩城は後の磐城國(即ち、主として福島縣の東半部)、石背は後の岩代國(即ち、同縣の西半部)の地を占めたが、奈良朝頃から岩城も石背も陸奥國に包含せられた。(磐城・岩代兩國の出来たのは明治以後である。)山椒大夫物語では、姉弟の父正氏は館を信夫郡(即ち、古昔の石背の代名詞)に有して陸奥を領したことになつてゐる。

しかし、姉弟に關する遺跡や口碑は却つて津輕(即ち、同縣の東部)に傳はり、岩木山神社と安壽姫との關係以外にも、丹後の人が津輕の海に入ると波が荒れる等といふ言ひ傳へがある。(その由来は不明である。)

【運が開ける】 運命がよい方に向かふ。

【運】 ウン 人の身にめぐり來る善惡の象。まはりあはせ。し

あはせ。天命。天運。運命。因縁。

【逃げ延びて】

「逃げ延びる」ニゲノビる 遠く逃げおほせる。逃げ去つて遂にまぬがれる。おちのびる。

【おとう様】 陸奥掾平正氏。諸傳説には、岩城判官正氏(即ち、平正氏)とあり、陸奥の國主としてゐる。

掾は國司に於ける判官(三等官)であるが、當時の國守は概ね遙授の官で、實際には掾が民政を執ることが多かつた。

【身の上】 ミのウヘ (一)己が一身に關係する事。己が身の境遇。

(二)一生の運命。こゝは(一)。

【標子】 「餉筒」とも書く。古へ、餉(かた)を入れて携へた容器。辨當箱の類で、かぶせ蓋があつた。和名抄に「標子、加禮比計、今按俗所謂破子は、破子讀三和利古、標子中有障之器也」とある。

「餉」は、「乾飯」の略。(一)干した飯。ほしいひ。ほしいひ。(二)昔、旅行などする時に携へた飯。辨當。

「筒」は、食物を入れる器。

【烙印をせられた、恐しい夢】

山椒大夫の所に買はれて來て間もない頃のある夜、安壽と厨子王とは、父母に逢ひたさの餘りの、逃亡の手段についての夢の

やうな話を、見廻りに来た山椒大夫の息子三郎に立聞かれて、逃亡の企をしたものには烙印をするのがこの邸の掟であるとおどかされた。そしてその夜、山椒大夫の前に引据ゑられて、炭火で眞赤に焼けた火筋で額に十文字の烙印を捺されたが、守本尊の地藏様の靈験によつて創は痕もなく癒えたといふ夢を、二人とも同じ時に同じに見たのである。

【烙印】 金屬で作られ、火中に熱して物に捺す印。又、これを用ゐて捺した痕。やきはん。

【婢】 ハシタメ 召使ひの女。しもをんな。下女。みづしめ。女中。下婢。

【六荷】 ロクカ
【荷】 一人の荷ふべき分量の荷物を數へるに用ゐる語。

【物に憑かれたやうに】 何か靈的なものにのりうつられたやうに。

【物】 こゝは、形は見えないが不思議な作用をなすもの、即ち神佛・病魔・妖鬼等の類をいふ。

【悪く】 ツク。よる。かゝる。のりうつる。

【聴く賢しく】 サトクサカしく 心の働が敏活で賢く。
【聴い】 (一)覺ることがはい。さかしい。かしこい。聰明である。(二)するどい。たけい。いちはやい。

【賢しい】 (一)才智がある。かしこい。(二)勝れてゐる。まさつてゐる。(三)さかしらである。ごさかしい。

【守本尊】 マモリホンゾン 身の守として信仰する佛。守佛。まもりぼん

【これは大事なお守だが、云々】
四人が山岡太夫の爲に直江の海上につれ出されて母と姥竹は佐渡の二郎に、安壽と廚子王は宮崎の三郎に賣り渡され、船が南と北に漕ぎわかれる時、母が舷に手をかけて伸び上り遠ざかつてゆく安壽。廚子王の船に向かつて叫んだ言葉として、原文中、本文不採録の部分に「もう爲方が無い。これが別だよ。安壽は守本尊の地藏様を大切におし、廚子王はお父様の下さつた護刀を大切におし、どうぞ二人が離れぬやうに」とある。

【お守】 おマモリ 守袋・守札等の如く、災厄・病患を防ぎ、又福徳延命の加護を受ける爲、身に帯び或は門戸に張るもの。

【地藏様】 チザウサマ
原文には、安壽が守本尊として持つてゐた地藏様は、百濟國から渡つたもので、嘗て高見王が持佛にしてお出でなされた放光地藏菩薩の金像であるとしてある。

【地藏】 梵語 Kṛtiārdha の譯語。釋迦如來の付囑をうけ、二佛の中間(釋迦如來後、未來佛たる無佛の出世まで)無佛の世界に住し、六道の衆生を濟

ひ盡くさぬ限り自ら成佛しないことを誓願とする、大乘慈悲の徹底を示す菩薩。地藏が民衆信仰の對象となつたのは、支那では六朝以降、我が國では平安朝以降らしく、鎌倉時代に入つて殊に盛になり、觀音と共に通俗信仰の主なるものとなつた。

【守刀】 マモリガタナ 護身用の小刀。婦女などが懐中に携へて不慮の變に備へるもの。衣服にかゝらないやう普通鞘の鑑かたを丸くし

てある。まもりわきざし。懐劍。

【討手が掛ります】 討手が攻めて來ます。討手が襲つて來ます。

【討手】 ウツテ 「うちて」の音便。敵・賊軍又は罪人を追捕する者。捕手。

【上手】 カミテ こゝは、上かみの方。上流。

【和江】 ワエ 丹後國加佐郡和江。現京都府加佐郡八雲村和江。由良川の西岸(由良の南、約五里)にあつて、東岸の中山と相對する。

【加佐郡誌】京都府教育會 加佐郡誌には、和江の條に「茲に國分寺の址と稱へる所があるが廢類して當時の狀を僅に想ふばかりで、村上天皇天曆十年九月祝融の災に罹つて、鳥有に歸したのであると傳へられてゐる。三庄太夫の傳説中に白河天皇永保の頃津鹽丸が避難所であると思へたのは此處である。けれども之は火災後百廿年餘りを経過してゐる。故に當時はなほ幾分昔日の面影があ

つたものと見なければならぬか」とあり(同郡誌所載の「山庄太夫」傳説にも和江の國分寺に置かれたとされ、「丹後名所案内」(文化社)の「山庄太夫」の條にも「和江村國分寺」とし、且最後に「和江村國分寺は及大破今礎石斗り残り」とある。(三六〇頁「中山」參照)

【首尾好く】 都合よく。具合よく。よい工合に。

【首尾】 シュビ (一)首と尾。(二)初と終。終始。(三)物事のなりゆき。結果。都合。(四)工夫。計畫。

【向う河岸】 ムカウガシ 向側に當る河岸。むかうざし。

【河岸】 カシ (一)河の岸。通じて、湖の岸にもいふ。(二)河岸に立つ市場。「魚河岸」(三)事をなすべき場所。「河岸をかへる」こゝは(一)。

【坊さん】
【坊】 こゝは、僧侶の住居の意から轉じて、僧侶、の意。

【運だめし】 幸運か不運かを試みること。又、その行爲。

【暗示】 アンシ・アンジ 或觀念又は心象が、意識的に努力した結果でなく、不知不識の間に惹起され、殆ど自動的に實行に現れる如き場合、その過程又は刺激をいふ。

【腕】 「腕」とも書く。古へ、水・酒などを盛るに用ゐた器。もひ。

【門出】 カドデ 我が家の門を出でて、旅或は戦などに行くこと。

旅立。出立。

【飲み干した】底の乾くほど飲みつくした。少しも残さずに飲んだ。のみからした。

【街道】カイダウ 國中の往來を通じ宿驛などのあつた大道。今の國道・縣道等がこれに當る。「道中」「往還」ともいふ。又、單に大きな道のことにもいふ。

古くは海濱を通ずる公路を海道といつたが、東海道が最も重要な道路となつてから、一般に公路を海道といひ、次いで街道の字を當てるやうになつた。

【午】ヒル まひる。日中。正午。午の刻。

【樵る】コる 木を伐る。きこる。伐採する。

【見咎める】ミトガめる (一)見て怪しむ。見て気がつく。(二)見て非難し又は詰責する。こゝは(一)。

【同胞】ハラカラ(奥) 同腹の兄弟姉妹。

【薬履】ワラゲツ 薬で作つたはきもの。

【中山の國分寺】(三六〇頁「中山」参照)

丹後國の國分寺としては、一般に現京都府與謝郡府中村國分にある小堂(今成相寺に依歸する)がその遺址として知られてゐるが、それと

中山又は和江の國分寺との關係は明らかでない。「加佐郡誌」

には、和江の國分寺を述べた末尾に「舊記に丹後の國分寺(金光明寺)は與謝郡府中村字國分に建築せられたものであるのに見れば和江の所謂國分寺は國分尼寺(法華寺)であらうか。或は往時焼失等の場合には他の定額寺等を以つて國分寺代とせられた實例もある事だからそれ等の後身でもあらふか、今俄かに之を斷ずる資料はない」とある。

【國分寺】コクブンジ・コクブジ 聖武天皇の勅願により、國毎に設置せられた國立の僧寺及び尼寺。即ち聖武天皇は、その深甚な佛教御信仰に基づく政教一致の佛教國家建設の御理想を實現せられんが爲に、天平十三年三月(一説、天平十四年二月)、國毎に僧・尼の二寺を建て、僧寺を金光明四天王護國寺、尼寺を法華滅罪寺と名づけ、金光明最勝王經(この經が國土に流通すれば、四天王が悉く來つてその國土を守護するといふ)の功德によつて、天下泰平・國家安寧を致さしめんことを詔せられた。この僧寺を國分僧寺又は單に國分寺、尼寺を國分尼寺又は法華寺と稱する。各寺には、それ／＼金光明最勝王經及び妙法蓮華經各十部を納め、金堂には丈六の釋迦像を安置し、また別に七重塔一基を造り、天皇御親寫に擬した金字金光明最勝王經一部を塔毎に安置せしめられた。そして、國毎に國師を設けて國司と共に寺務を監督せしめられたことになつた。

しかし諸國に於ける實際の造營は容易に進捗せず、百方促進の策を講ぜられたに拘らず、漸く寶龜元年頃に至つては完備を見たものの如くである。しかも、その完備を見た時には既に頽廢に傾いたものも尠くない有様で、その盛時は意外に短かつたらしい。尙、國分寺創設の詔後まもなく、奈良に東大寺及び法華寺の建立があり、前者を總國分寺、後者を總國分尼寺として、それ／＼國分僧寺及び國分尼寺の總攝たらしめられた。

【三門】サンモン 「山門」に同じ。(四三頁「山門」参照)

【松明】タイマツ 「たきまつ」(燒松)の音便。乾いた小竹又は葦を束ね、周りに松脂を挿んで造り、又は松の脂の多い部分を割き束ねて造り、火を點じて、暗夜を照らすに用ゐるもの。松火。

【火影】ホカゲ (一)火の影。火のひかり。(二)燈火の光で出来る物の影。燈火の光にうつる影。こゝは(一)。

【白柄の薙刀】シラツカのナギナタ 柄の白い薙刀。

【薙刀】「長刀」とも書く。幅の廣い反つた長い刃に長い柄をつけた武器。太刀から變化したもので、鎌倉時代頃に最も盛に用ゐられたが、桃山時代頃から槍等に壓せられてやゝ廢れ、後には専ら婦人の武器となつた。その中刃の特に長大なものを大長刀、比較的短いものを小長刀と稱したが、その寸法の限界は

必ずしも一定せず、鎌倉時代頃には二尺九寸位以上を大長刀と稱したらしいが、南北朝頃になると三尺以上のものでも小長刀と呼ばれ、四尺以上位のを大長刀と稱したらしい。

【手挟んだ】タバサんだ 手に挟み持つた。腋にかゝへ持つた。

【三郎】サブラウ 山椒大夫の第三子。この時三十歳。

原文によれば、山椒大夫にはもと三人の男子があつたが、太郎は十九年前に家を出たきり未だに行方不明。二郎と三郎が家にゐるが、二郎の慈悲のある性格に對して三郎は殘忍酷薄で、安壽・厨子王の姉弟にも、何かと不利な仕打をする。

【族】うぢ 身うちの人。血縁の人。みより。やから。親族。

【本堂】ホンダウ 寺院の一部で、本尊を安置する堂宇の俗稱。法相・華嚴・眞言の諸宗では金堂といひ、禪宗では佛殿といひ、天台宗では中堂といふ。

【石疊】イシダタミ 「礎」とも書く。石造の敷疊。地上に方形の平坦な石を縦横密接に敷き並べた所。唐石敷(かみいし)。いしじき。しきいし。今も多く禪寺の門・支關などに見る。

【手のもの】その手に屬する者。自ら率ゐる者。隊のもの。配下のもの。手下。部下。

【境内】ケイダイ (一)さかひのうち。しきりのうち。(二)「境外」の

對。(一)社寺の敷地の内。こゝは(二)。

【僧俗】 ソウゾク 僧侶と俗人と。縮素。道俗。

【簇つて】 ムラガつて 密集して。

【内陣】 ナイチン (一)神社の本殿の最奥の間で、靈代を安置する所。(二)佛殿の内の、本尊を安置する一區劃。普通結界を以て外陣と區別し、中央の奥に須彌壇を設けて本尊を安置し、その前方は法要を行ふ道場で、この内には參拜者を入れないのを原則とする。こゝは(二)。

【庫裡】 クリ 「庫」は物を貯へる府藏、「裡」は「裏」で、屋裏の義。寺院の廚房(炊事)をいふ。但し、近時は佛殿等に對して、僧房・廚房の併稱とする。

【僧侶】 ソウリョ (一)出家して佛門に歸し、互に和合して修道する人々の團體。(二)後には出家人の意に用ゐる、一個人にもいふ。こゝは(二)。

【侶】 は、ともがら。徒。

【住持】 チュウヂ 「世に安住して法を保持する義」で、一寺の主僧をいふ。住職。

【曇猛律師】

廚子王をかくまつてくれたのは、和漢三才圖會には唯「庵主」

とあり、説經淨瑠璃「さんせう太夫」には「ひじり」とあり、竹田出雲の「三莊太夫五人嬢」には「圓海阿闍梨」としてあつて、性格も曇猛律師とは著しく異なつてゐる。曇猛の名は、恐らくその性格と共に作者の創造であらう。

【律師】 リツシ (一)徳望高き持律の僧。(二)僧官の一。僧都に次ぐもの。正・權に分かれ、五位に準ずる。こゝは(二)。

【ひっそり】 (一)鎮まつて静かなさま。静かにもさびしいさま。(二)「ひそか」に同じ。ひそかに事をなすさま。しのびやかに。こつそり。こゝは(一)。

【足踏】 アシフミ (一)足で地を踏むこと。足拍子をとること。あしどり。(二)體操で、行進を止めて一定の場所にとどまり、なほ左・右兩足で交互に地を踏む動作。こゝは(一)。

【偏衫】 ヘンサン 三衣の下に、左肩を覆ふに用ゐた僧祇支「僧祇支」とは覆ふと譯すと右肩を覆ふに用ゐた覆肩衣「覆肩衣」とは覆ふと譯すとが北魏に至り縫ひ合はせて一つにせられたもので、初は襟のない襦袢のやうなものであつたが、後、襟を附けるに至つた。上半身を覆ふものである。我が國へは佛敎渡來當時既に傳はつた。今日の直裾(所屬ころも)はこれに更に襟を附け、以下に覆ふの形ひ合はせられたもの。

【威儀】 キギ (一)禮の細かな法則。曲禮。(二)威あつて、容儀の則るべき状態。行儀正しい態度。おごそかな立居振舞。坐作進退。

こゝは(一)。

【繕はず】 ツクロはず 整へないで。正さないで。

【繕ふ】 (一)補ひつくる。なほし修める。修復する。修繕する。(二)とよのへ粧ふ。整へ直す。修飾する。きどる。(三)とりなす。言ひつくる。彌縫する。(四)療治する。療養する。

【常燈明】 ジャウトウミヤウ 神佛の前に、晝夜の區別なく絶えず點しておく燈明。常燈。長明燈。續明燈。無盡燈。

【燈明】 神・佛に奉る燈火をいふ。六種供養の一で、佛の智波羅蜜を標する。あかし。みあかし。みあかり。おひかり。

【階】 ハシ(原)・キザハシ 昇降の爲に設けた階段。だん。かいだん。きだはし。

【岩疊】 ガンデフ 「岩乘」「岩丈」「頑丈」とも書く。(一)馬の駿逸で健強なこと。(二)人又は物の頗る堅固なこと。こゝは(二)。

【廉張つた】 カドバつた かどだつた。かくばつた。四角ばつた。【揺らめく】 ユラめく ゆらくと動く。ゆらく。ゆらく。動揺する。

【下人】 ゲニン 下々の者。身分低い者。下部。僕隸。

【當山】 タウザン (一)この山。(二)この寺。當寺。(寺は山號を有する故にいふ。)こゝは(二)。

【夜陰】 ヤイン 夜の暗い時。夜分。夜間。闇夜。

【劔戟】 ケンゲキ (一)つるぎとほこ。いくさ道具。武器。戎器。(二)たゝかひ。戰爭。こゝは(一)。

【公の叛逆人】 お上に對する謀反人。「戰」は、ほこ。兩傍に枝の出でゐる兵器。

【公】 オホヤケ こゝは、朝廷。政府。

【叛逆人】 お上にそむきさからふ人。むほんにん。「叛逆」は「反逆」に同じ。君主にそむくこと。むほん。

【詮議】 センギ (一)評議して理を明らかにすること。詮索して議すること。(二)犯罪のとりしらべ。又、罪人の搜索。こゝは(二)。「詮」は、つぶさに事理を説きあかす。又、その言葉。眞理。

【勅願の寺院】 チョクガンジンのジキン 天皇の御發願によつて創建又は供養せられた寺。勅願寺。御願寺。

勅願によつて草創せられた寺は、國費を以て建立せられた寺院と同じく官寺に屬するものであるが、創立後特殊の事情によつて勅願寺に列せられたものもまた準官寺である。但し勅願寺の稱呼は往古にはなく、單に御願によつて建立せられる旨が傳へられるのみであつたが、武家時代その祈願所と區別する必要を生じた頃から勅願寺の稱呼が用ゐられるに至つたやうである。

しかし實質的に見れば、法隆寺・四天王寺・藥師寺・大安寺・東大寺及び諸國の國分寺等皆これに屬するもので、平安朝時代以後に於ては、秋篠寺・延曆寺・檀林寺・嘉祥寺・貞觀寺・元慶寺・淨福寺・仁和寺・圓融寺・六勝寺（法興寺・興隆寺・興聖寺・興福寺）・蓮華王院等は著名である。また既成の寺院に對し、皇子の安産を祈らしめ、或は聖體の安穩を祈願せしむる爲に一時的の勅願寺と定められた寺が、その寺に於てこの名譽を永久に傳へようとして勅願寺と稱してゐるものも多い。明治四年勅願寺の制は廢止されたが、この名稱のみは保持することを許されてゐる。

【勅額】 チョクガク 天皇御宸筆の額面。又、勅賜の額面。宮殿・樓門等の正面の楣上に掲げ、その形は縦長のものが多い。

勅額には年紀・落款のないのを例とする。故に御宸筆と傳へられて何天皇の御筆か詳でないものもあり、又勅額といひながら、三位以上の代筆のものもある。東大寺の「金光明四天王護國之寺」の題は聖武天皇の御宸筆で、勅額の最古のものとして、花園天皇は額字の名字として知られたまひ、京都長福寺及び妙心寺、鎌倉圓覺寺等へ賜はつたものは殊に名高い。近代に於ては御陽成天皇は最も能書の御筆を遺され、高野山興山寺の勅額はその御宸筆にかゝるものである。

【宸翰金字の經文】 シンカンコンジのキヤウモン 天皇が御自ら金泥で書かせられた經文。（三六四頁「國分寺」參照）

【宸翰】 天皇のお書きになつた文書。天皇の御直筆。宸筆。勅筆。

【宸】 (一)のき。(二)奥深い室。(三)後世帝王の居所の專稱。轉じて、天子の事に冠する語。「宸慮」「宸襟」

【金字】 金泥（金粉を膠水に溶かしたものを）で書いた文字。又、金色の文字。金文字。きんじ。

【經文】 佛教の經典に載せた文章。又、その經典。

【狼藉】 ラウゼキ (一)道具などの、とりちらしてあること。(二)亂暴。暴行。こゝは(二)。

【國守】 クニノカミ（原） 國司即ち地方政治の爲に諸國に置かれた職員の長官。

國司の制度は大化の改新以後、支那のそれに倣つて整備せられ、大寶令に至つて完備した。即ち、諸國を大・上・中・下の四等級に分ち、大國には守・介・大掾・少掾・大目・少目、上國には守・介・掾・目、中國には守・掾・目、下國には守・目を置き、戸籍・教育・産業・警察・裁判・貢舉・顯彰・租稅・

徭役・兵事・交通・社寺等のことを職掌せしめ、守をしてこれを統べしめ、任期は六年（後四）であつた。（その外、奥羽の如き諸國にあつては別表を記し、九州の如き諸國は國防・外交、國內に在する諸國は國守等の事も兼つた。）が、その制は間もなく崩れて員外の官が現れ、實務に當らずして名義と俸祿のみを収めるものを生じ、且制度の不備から私利を營むものが多く、奈良朝時代以後、屢々巡察使・觀察使等をして監督せしめたが、殆ど肅正し難かつた。そして後には概ね遙授となつて守・介は任地に赴かず、下吏又は代官を以て國務に當らしめると共に、買官・重任等の風

が一般に行はれたが、やがて權門の私領（莊園）が年毎に増加して、國司の管轄地及び權限は漸次縮少し、鎌倉幕府が全國に守護・地頭を置くに及んで、遂に全く有名無實の官となり、室町時代にはその制が全く崩壞した。（本文の當時の國守は、遙授の官であつた。ついで、その權限はますます狭かつた。）原文中、本文不採録の部分に「その年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに、掾を置いて治めさせるのである」とある。

【檢校の責を問はれる】 檢校としての責任を問ひとがめられる。

國司は國分寺を監督し、その佛事を檢校した。國分寺設置の詔勅に「國司等宜恒加檢校」とある。

【檢校】 ケンゲウ (一)物事を點檢・勘校すること。しらべ料

すこと。又、その職。(二)僧尼を監督する職。後に、神社及び寺院の一切の事務を總管する職。熊野・八幡・春日・高野山・金峰山・東大寺等に置く。(三)昔時、盲人の最上級の官名。(四)中世以降、國衙の留守所又は莊園の吏員。こゝは(一)。

【責】 セメ こゝは、責任。責務。

【問ふ】 こゝは、なじりたゞす。とりしらべる。吟味する。

【總本山】 ソウホンザン 本山の一種。祖師の廟所がある意味で、又「祖廟」ともいふ。但し、こゝは、東大寺が總國分寺である意味でいつたのである。

【本山】 一宗又は一派の根本道場。「末寺」「末山」の對。

これに總本山・大本山・准大本山・本山・別格本山・准別格大本山等の稱があるが、各宗各派これを併置するとは限らない。

【東大寺】 トウダイジ 奈良市雜司町に在る華嚴宗の大本山。天下總國分寺。八宗兼學道場で南都七大寺又十五大寺の一。「金光明四天王護國寺」「金光明寺」「東寺」「大華嚴寺」などの別名がある。本尊は金銅の毘盧舍那佛（俗稱奈良の大佛）で、鎮護國家の道場として聖武天皇の勅願によつて創立せられ、孝謙天皇の天平勝寶三年に始めて成り、四年開眼の供養あり、寺院の壯大古今に絶した。その後治承四年及び永祿十年の二回兵火に罹り、二度目は

遂に大佛殿(金堂)の修復を見ず、廢墟のまま雨露に曝されること百四十年、元祿・寶永中に至つて漸く復興した。現在の大佛殿はこれに明治以後更に大修理を加へたもので、世界最大の木造建築と稱せられる。大佛も佛像として、堂宇及び佛像の國寶に指定せられたものが多く、就中法華堂(三月堂)は、天平當時の遺構として、その安置佛と共に最も重んぜられてゐる。

【沙汰】 サタ こゝは、官府の指令。命令。

【引取られた】

【引取る】 ヒキトる こゝは、退き去る。引き退く。まかる。

【齒咬み】 ハガミ 「齒軋」に同じ。(一)齒と齒とをかみ合はせて、きり／＼と音をたてること。はぎり。(二)怒り、又は悔しさの甚だしい時、齒をかみ合はせて、音を立てること。はぎり。切齒。こゝは(一)。

【踏みこむ】 (一)踏んで深入りする。踏んでおちこむ。(二)案内なく入りこむ。強ひてふみいる。ふんこむ。(三)力を入れて足を前に踏み出す。(四)何事かに力を入れてかゝはる。こゝは(二)。

【小わつばちやらう】 小わつばであらう。

【小わつば】 小童 「こわらは」の音便。年少の者又は未熟ものなどを見さげていふ語。

「わつば」(一)童子を罵り呼ぶ語。又、童子自身の卑稱。(二)強暴な者を罵つていふ語。(三)童子の無理・我儘をいふこと。わんぱく。

【親爺】 オヤヂ (一)他人に對して自分の父をいふ語。(二)老人。老爺。翁。(三)親方。親分。こゝは(二)。

【鐘樓守】 シネロウモリ 鐘樓の番人。鐘撞き男。

【鐘樓】 シネロウ・ショウロウ・スロウ 梵鐘即ち大鐘を懸ける樓で、七堂の一。「鐘堂」「鐘臺」「鐘樓堂」等とも稱し、俗に「鐘撞堂」又は「釣鐘堂」といふ。支那に至つて始めてその制を見たものの如く、單層のものと同層のものがある。

【築泥】 ツイヂ 「ついひぢ」の約。「築地」とも書く。柱を立て、板を中心とし、泥土で塗り固め、屋根を瓦で葺いた垣。古くは、泥土を築き固めた今の土手のやうな垣。ついぢべい。ついがき。ついがい。

【かよい】 弱々しい。かほそい。ひはづである。

【か】は、動詞・形容詞等に冠して、語調を調へる語。

【行つたぢやらう】 行つたらう。

【ぢやらう】 「ぢやらう」の約。

【取つて返した】 後へ引きかへした。後へもどつて來た。

「取つて」は、他の動詞と複合してその意味を強める。

【入水】 ジュスキ 自ら水に入つて死ぬこと。みなげ。投身。

本文では安壽は弟を逃がした後自ら入水してゐるが、和漢三才圖會や説經淨瑠璃の「さんせう太夫」では、弟の行方を問うて責め殺されてをり、又、「加佐郡誌」の傳説では、逃げる途中飢ゑて死ぬことになつてゐる。

【田邊】 タナベ 丹後國加佐郡田邊郷。今の京都府加佐郡舞鶴町を中心し、舞鶴灣の西南岸に沿つた地の稱であつたらしい。今、舞鶴町の東偏に田邊城址がある。田邊郷は、室町時代に一色氏・山名氏がこれに據り、後長岡(舞川)藩がこれを守り、徳川時代には初め京極氏、後野氏の領であつた。

【盥】 タラヒ(テアラヒの約) (一)水又は湯を入れて、手・顔などを洗ふに用ゐる浅い器。てうづだらひ。(二)湯水を盛つて洗濯等の用に供する浅い桶。こゝは(二)。

【受糧器】 ジュリヤウキ 「鉢」のこと。

【鉢】は、梵語「鉢多羅」(Pātra)の略。普通には「應量器」(法に食料の量とち、人の供養を受くべき者の用ゐる食器)と譯す。重要な僧具の一の類とも、又別の分類に應じて食ふ食料の量ともいふ)と譯す。重要な僧具の一で、色は黒・赤・青、大いさは大は三升を、小は五合を受けるを如法とした。鐵鉢・瓦鉢・石鉢等があり、石鉢は佛にかぎり、

比丘は瓦鉢又は鐵鉢を用ゐることを許されたが、多くは鐵鉢を用ゐた。但し我が國の禪林では多く木鉢を用ゐる。

【錫杖】 シヤクヂヤウ 梵語「隲栗羅」(Tinkara)の譯語。又「有聲杖」「聲杖」「智杖」「德杖」「金錫」等と譯し、單に「杖」とも稱する。比丘十八物の一。上部は錫、中部は木、下部は牙又は角から成り、頭部は塔婆の形に象どり、數箇の鐺を掛け、地に引く時に錫が音を立てる。顯教では乞食の時、家人の覺醒又は善惡驅除の具とし、密教では、五大所成の法界塔婆として、地藏尊・觀世音の三昧耶形とする。

【刺りこくつて】 くり／＼に刺つて。すつかりきれいに刺つて。

【こくる】 主に他の動詞の下に添へて用ゐ、烈しい動作を與へる、にじる、とばす、ちらす、等の意を表す。

【三衣】 (サンネと發音) 佛語。僧伽梨(兼無著衣と譯し大衆が稱して袈裟・説多羅僧(上衣と譯し、安陀會(中衣と譯し、僧伽梨)の三をいふ。いづれも數多の薄片を縫綴した長方形のもので、後には袈裟と稱するに至つた。

初め佛制の僧服はこの三衣のみで(但し、後には身軀の露出を厭、餘衣を著へないことを單三衣と稱し十二頭陀行の一とされたが、佛教が北方に傳へられると共に、保温の爲に下に他の衣服を著用